

るが妥當であらう(木村正辭氏萬葉集訓義辯證、契沖、萬葉代匠記總釋、古類文學部一、五三三―五三五)

**ばんか 挽歌 (輓歌)**

萬葉集歌題の一種「柩を挽く時の歌」の意で、死別の悲しみを表した歌を云ふ(萬葉に殯宮歌とあるものもこの中だ)古今集以下の「哀傷歌」の前身で支那の薤露行、英のエレヂーと同質のものである。

**はながく 藩學**

徳川時代各藩に設けた學問所をいふ。大抵は幕府の昌平學に則つて之を地方化した學風で、謂はゞ徳川時代の高等學校又は高等専門學校とも謂ふべきである。

會津の日新館・米澤の興讓館・佐賀の弘道館・和歌山の學習館・萩の明倫館・名古屋の明倫堂・熊本の時習館・鹿兒島の造士館・金澤の明倫堂・水戸の弘道館等はその中有名なものである(古類文學部二、一一八三―一二九一)

**はんかんじん 半閑人**

ちくれい「角田竹冷」を見よ。

**はんかんふ 藩翰譜** 十三卷二十冊

新井白石が將軍徳川家宣の命を受け、元祿十四年(二三六一)七月から同十月までに著したもので、書名は

將軍から賜はつたものである。關ヶ原の役後即ち慶長五年(二二六〇)から延寶八年(二三四〇)まで八十年間、知行一萬石以上の三百三十七諸侯の傳記・沿革・逸話を集録したもので、簡潔明確なる和漢混淆文を以て綴られてある。これより前「本朝武林傳」といふ書物があつたが本書はそれを骨子として成つたものだといふ(國刊一期本新井白石全集第一冊)

**ばんくわわかしふ 晩花和歌集** 二卷

下河邊長流の歌集をその歿後親交の契沖が整理して貞享三年(二三四六)に出したものである。

**ばんけい 大槻磐溪** 二四六一―二五三八、享和元―明治一一、七十八歳

和元―明治一一、七十八歳  
仙臺の人、名は清崇、字は士廣、又平次と稱し江戸に出て昌平學に入り名聲をあげ嘉永年間早く西洋の砲術を學んで藩の士となり、開港論を主張した。又文を松崎慊堂に詩を梁川星巖に學んで兩方共堪能であつた。その著に孟子約解・古經文視・寧靜閣詩文集・奇文欣賞・三體詩絕句解などがあるが最も廣く世間に行はれたのは刪修近古史談四冊である。二子如電・文彦は今も健在、共に碩學として世に名をなしてゐる。

**はんごほふ 反語法**

嘲弄諷刺の爲め語句と眞意を反對にして而かもその語句を聞けば眞意が推測される修辭法。

例「世の中に人の来る程うるさきはなしとはいふもののお前ではなし」

**ばんざん 熊澤蕃山** 二二七九―二三五一、元和五―元祿四、七、二七、七十三歳

近世の儒者として有名な人。名は伯繼通稱を次郎八(又助右衛門)了介と稱し、息遊軒・蕃山等の號がある。京都生れで備前岡山侯に仕へ、五年にして退き冷く良師を求めて中江藤樹の在るを聞き、近江桐原に假寓してその教を乞ひ、陽明學を修め、政治經濟の術に就きても得る所あり。歸來再び岡山侯(芳烈公)に仕へて祿三千石を食み、貧民を救ひ、教育を起し(岡山は藩學の中でも有名なものになつた)佛寺を滅じ淫祠を毀つ等政績著しきものあり、後に又辭して京都に歸り、晩年諸方を遍歴して播磨明石侯の知遇を得、同藩侯が封を下總に移されるやうになつて彼も亦同地に移つた。

その著約二十種多くは經義の解である。

大學小解・中庸小解・論語小解・孟子小解・孝經小解・易經小解・大學或問・女子訓或問・孝經外傳或問・集義和

書・集義外書。

源氏外傳(國刊六期正三十幅一)紫女物語・夜會記・宇佐問答・葵祭辯論・神道大義・二十四孝評・何物語・はなむけ草・三輪物語。

右の中國文と交渉の多いのは集義和書・外書の二種で解題・考證の補ひになる。源氏外傳(國文註釋全書一五)は稍儒教に偏した解釋だが又有益の文字である。戯曲の(朝顔日記)の扮本「露のひね間」も彼の作だと謂はれてゐる。又その味は「蕃山先生和歌」と題して廿叢六にあり、萩原裕氏編鹿鳴園叢書第一集には巨勢直幹の蕃山實録がある。

**はんじ 近松半二** 二三八五―二四四三、享保一〇―天明三、二、四、五十九歳

近世浪華の戯曲作者。儒家穂積以貫(もと播磨の人、伊東東涯の門人)の子で、少壯放蕩にして屢々遊里に遊ぶ。中年竹田出雲について戯曲作者となり寶曆十二年頃よりは毎作喝采を受け、推されて竹本座の座附作者となつた。何故に近松を名のつたか。その父は近松と親交あり、近松の作品に註して「浪花みやげ」を著した。彼も亦近松に私淑してゐた。お貞に近松遺愛の硯を持つてゐた等の理由からであらう。一代の作五十

餘篇、多くは他との合作である。之を大近松や出雲に比べれば文章の才到底彼等に及ばずと雖も、意匠構想の複雑にして、且つ奇抜、舞臺上の効果をあぐる點に至つては裕に彼等を凌駕するものがある。主なる作品は新版歌祭文・妹香山婦女庭訓・太平記忠臣講釋・近江源氏先陣館・關取千兩幟・奥州安達原・本朝二十四孝・伊賀越道中双六・京羽二重娘氣質・傾城阿波の鳴門・由良湊千軒長者・役行者大峯櫻（續帝文一四、近松半二淨瑠璃集參照）

**ぼんしやうてい 萬象亭** 二四一四―二四六八、寶曆四―文化五、一二、四、五十五歳

父は桂川甫三、兄は甫周、幕府の侍醫であつた。彼れ名は中良、字は虞臣、通稱は萬藏、狂名を竹杖爲輕と云ひ、桂林・森羅亭萬象・天竺老人・二世風來山人・源平藤橘などの別號がある。その學和漢蘭に涉り、才は戯作・狂歌・翻譯・戯曲の多方面に亘る。性淡泊にして名利に拘らず、終生無妻にして兄の家に寄食し、滑稽飄逸を以て人を笑はし、我も笑つて生涯を送つた。作品三十餘篇、黄表紙作者としては天明の喜三二・蓬萊山人・唐來三和等と互に筆鋒を争うた。夫從以來記・相州小田原相談・華手本唐人藏・田舎芝居・嘘無誠一卷等が

名高い。狂歌作者としては狂歌堂眞顔などとその味を上下した。假譽畫見立狂言の著がある。翻譯若くは和蘭文化紹介の著には紅毛雜話・蠻語箋註・萬國新註等の書がある（これ等の著によりその師平賀鳩溪は自分の森羅亭の號を彼に譲つた）當時田沼意次政柄を執り、私意を以て兄甫周を黜けた。甫周これより意を官に絶ち、家居して蘭書の翻譯に専念したが弟たる彼も亦大に與つてその業を補けたといふ。戯曲の作者名を源平藤橘と云ひ「お半長右衛門」などの作がある。

**ぼんすゐ 土井晚翠** 明治四、一〇、二三―

仙臺の富豪土井七郎兵衛氏の長男で、三十年東大英文科卒業後中途海外遊學の外は始終二高に教鞭をとり、専門の英文學の方では、カーライルの「衣裳哲學」などの譯があるのだが、頗る詩才に長じ明治廿年代の末に「天地有情」を出して以來藤村と相並んで詩壇の双星かのやうに謳はれた。その詩は男性的・隱想的・理智的な雄大な漢文直譯調で表したもので、今日から觀ては單に歴史的價値があるだけだが當時多くの學生に愛唱せられ、ついで出した曉鐘・東海遊子吟・天馬の道なども相當の愛讀を受けた。唯其人順境に生き未だ人生苦の奥庭に徹しない爲に體験の稀薄にして

感味の空虚なる嫌があると謂はれるが、明治の詩史を説くには逸してはならない名家である（晩翠詩集）

**はんせつ 反切**

漢字音讀の法をいふ。或漢字の音を指示するに他の漢字二字の音の首尾を以てするもので吾々が漢字典でよく見るものである。

例 何（胡歌ノ切カ）信（巨乙ノ切キツ）

惜（思積ノ切セキ、息約ノ切サク）

**はんたらからう 半陶稿** 六卷

五山、相國寺の僧周興の詩文集。

**ヒの部**

**ひえだあれ 稗田阿禮** 一三〇八一？、大化

四一？

天鈿女命の裔で、猿女君の一族である（弘仁私記。序註、齋部式家牒）天武の朝に仕へ、強記絶倫なるより天皇御親ら我が國史を口授せさせられた。文武の朝には舍人となり元明の朝、和銅四年から五年にかけて、彼の記憶せる國史を太安麻呂に語り、それを整理記録したのが古事記であつて、阿禮の名はこの古事記と共に

永久に残ることであらう。安麻呂が古事記の序に謂つて居るのでは、

時有<sup>ニ</sup>舍人<sup>一</sup>姓<sup>ハ</sup>稗田<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>阿禮<sup>ハ</sup>年<sup>ハ</sup>是<sup>レ</sup>廿八<sup>ハ</sup>爲<sup>レ</sup>人<sup>ト</sup>聰<sup>ニ</sup>明<sup>ニ</sup>度<sup>レ</sup>目<sup>ニ</sup>誦<sup>レ</sup>口<sup>ニ</sup>拂<sup>レ</sup>耳<sup>ニ</sup>勒<sup>レ</sup>心<sup>ニ</sup>即<sup>ニ</sup>勅<sup>ニ</sup>語<sup>ニ</sup>阿禮<sup>一</sup>令<sup>レ</sup>誦<sup>ニ</sup>習<sup>ニ</sup>帝<sup>ニ</sup>皇<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>繼<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>先<sup>ニ</sup>代<sup>ニ</sup>舊<sup>ニ</sup>辭<sup>一</sup>

とある。それから推して彼が異常な理解力と記憶力の所有者であつたこと、彼が誦習したのは帝皇の日繼（帝紀）と舊辭（本辭・舊辭・先代舊辭）とで恐らくは皇室に歴存してゐたものを授かつたのでそれを明文律にするには幾多の整調を要したものであらうと云ふことなどである。

大和國添上郡平和村大字稗田は猿女君が代々の居住地で祖神鈿女命を祭つた賣田神社もあるから、多分阿禮の實家の所在地であつたらうとのことである。

**ひがく 美學**

美の本質と種類とを闡明するもの、哲學の一分科。

**ひかくぶんがく 比較文學**

各國文學の起源・本質・種類・變遷等について比較對照して研究すること。我邦では高安月郊氏の東西比較評論がこの種に一畝を入れた趣がある。

**ひかくぶんがくし 比較文學史**

文學史の一分科で、世界各国文學の變遷につき比較對照しつゝ、その異同關係等を研究するもの。佛のフレデリク、ローリエ氏の比較文學史(大日本文明協會譯)はこの方面の一研究である。

ひかくしんわがく 比較神話學

各國の神話につきその異同・關係・特質等を科學的(考證學的)に考察する學問で我邦に於ても百合若とユリシス(希臘神話)など一部論述せられたものはあるが、組織的體系的の研究は餘り發達してゐない。高木敏雄氏の比較神話學が唯一貴重な研究と謂つてよろしからう。國文學では記紀萬葉など上代文學研究上是非顧みるべき一側面である。

ひかくぶんぽがく 比較文法學

各國各人種間に發達せる文法につき對照的に研究するもの。我邦では徳川時代から明治にかけて外來文化と共に和蘭・英・佛・漢などとの對照文法が行はれた。

ひげき 悲劇

悲哀の情を主想として構成せられた劇をいひ喜劇に對する語として用ひられる。「主人公あり、時勢・境遇・運命に對して叛逆兒として起つ。それより生ずる諸葛藤の展開、主人公は敗北して死に墮る」これがその一般

過程である。

例、シエクスピヤーのロミオ、エンド、ザユリエット。我邦の心中物。

ひげをこい ひげ男

幸田露伴作の歴史小説。武田氏の臣笠井大六郎高英は高坂彈正が手に従ひて多年海津に在つたのが、此節叔父肥後と共に勝頼の下についた。去る程に戰國羣雄割據の形勢日々變りて一時は中原の鹿天晴其手に落つと見れた武田氏も、信玄一度墮してより若年の勝頼倭姦の誤臣に頼り長阪釣閑、跡部大炊なんどの輩無闇に時めき馬場・山縣等老臣の言を容れず、心あるものは物に主家の前途を案じて居た。此より先奥平信昌は甲斐に怨を抱いて長篠の城に背いたので勝頼は自ら一萬五千に將として之を攻めた。長篠危しとの報は夙くも家康信長の耳に達しこは一大事と彼も亦大軍をすぐつて援けに來た。武田方は老臣等が勸める隠れ遊びの秘法さへ用ゐたら必ず勝つたものを、長坂跡部が淺薄にも織田方の佐久間信盛の返り忠ならぬ返り忠に裏切られて危険極まる自兵戰を決行した。されば武田の猛將勇卒最早我等が運命も明日を限り云ひ合はせ、とある清井田の村里流る、清水是幸の水盃と言葉涼しく汲み

らかに底まで透きて見せにけり藻がくれ遊ぶ小鯉兒めを小苔躑る小鯉兒めを田の畔そひの小流れに……

すは今こそと翡翠の没るが如き捷業に、捉らんとすればついと逃ぐ、追へば又候ついと逃ぐ。くるく〜と追ひまはせば、ついで〜のついと逃ぐ。こは口惜やと手を退きて少時見つむる水の面、波しづまれば頓てまた武者振りを見よかしに海老殼洞の鏝被て髻の薙刀ひらめかす奴、そこにもひよるり、こゝにもひよるり、ひよるりひよる〜ひよる〜、人を顧るか人に誇るか、高く出たる眼をむいていきほひ示す上睨み……

かはす面々は内藤・山縣・馬場・土屋・眞田昌輝・笠井高利・川窪備後・小山田盛高。折から後の樹蔭に男泣きするものあり。鬚は漆の如く顔は棗の如く滂沱たる落涙と共に嗚咽して止まず。仔細を問へば「お歴々の諸氏今の體を見れば明日愈々討死の覺悟と見てとつたるが武田家にして諸君を亡はゞ忽に覆滅するより外なし。諸君若し眞の忠義を心がけ給はゞ願くは明日の討死を思ひ止まつて永く〜主家を御守りあれかし」と誠心面にあははれて切諫したので、道理の至極に責められて一同暫しは黙々としてゐたが馬場信房親しく大六をかき抱き「貴公の仰せ極めて理ありと雖、そは畢竟春秋に富ませられる御身等のことで、吾々老武者は足節の立つ今の中に御奉行せれば機を失する患がある……去るにても此後主家の御行末よきに頼みまするぞ」とあはれ一期の訣れ――

武田に此悲壯が演ぜられると同時に、敵にも幾多の挿話があつた。家康が臣酒井忠次若年ながら機を見る神の如く、謀計不思議にも信長の考と一致したので、信長機嫌斜ならず盃をとつて之に賜ひ、彼が得意の撈鯉兒を舞はせた。

音もせてゆる〜と行く水に射す春の日かげのやは

郎を托した、蓋富永が手は比較的安んじたから、  
 「孫太夫頼む、可憐若者死急ぎする、私の初陣其方の  
 隊に属して功名は慾の沙汰、たゞ場數一つ懸けさせ  
 て呉れ、死急ぎする勝つ戦ちや死なせいで貞春が子  
 ぞ、頼む(一一二頁)」

と。旌旗東西に交り喊聲雷を欺き、其戦の光景の物凄さは實に形容の詞も無い程であつたが、結局甲斐方の負けとなつて昨日水盃した忠臣勇士多くは討死した、大六の叔父肥後は勝頼の馬が起たなくなつたので、其騎を薦め自らは踏み止まつて君の後追ふ敵軍を喰ひ止めてゐたが、とある清水を手に掬ひホツと思づく折しもあれ、鋭くも突き入る笹穂の鎗先心得たりと此方も老巧大身の鎗を手早く執つて手練と手練の烈しき戦ひ、併肥後は老いたり、疲れたり、あはや此一つきに倒されんかと思ふ一刹那、岩をも裂くべき獅子吼一聲、大太刀サツと閃かせば血煙りげつと立つて「やあ叔父貴」と大六、それから又もや昨日の忠告を繰返したが叔父は却て叱り飛ばして「おれは滅多に死に損ひはせぬから貴様うっかり生損ひをせぬやうにせよ」と言ひ放つた「よろしい美事生きてお目にかかせう」と互ひに勇ましく訣れたが、此勇士不幸にして捕虜となり酒井

忠次預けの身となつた。

宗春討死と聞いて姉玉枝・富永・酒井の歎き云はん方なく、何かして其仇をさがして討ちとらうと日夜苦心してゐる中、或日の物語に大六自ら宗春を討取つた旨を告げ、宗春の勇ましい最期と我身が敵を討たうとする刀がそれで折角助けようと思ひながらつひ無慘にも斬つた云ふことまで(此處の大六と宗春とは平家物語の熊谷と敦盛とによく似てゐることはしく告げた。一旦は「憎し」と思つて劍をとつて迫つた玉枝も富永も勇ましい男らしい告白さ「もう斯う申す上はごうせ召される命、今日存分に仇となつて討たれてもさら／＼手向ひは致さぬ」と綺麗に出たので怨みはさらりさ解けたのみならず、忠次は家康の意を諒して「是非味方になつてくれよ」と懇に勧めたが、頑として應じない「今にも甲斐に兵起ると聞いたら一番がけに此處をぬけて、又もや戦場で貴公等とお目にかゝる考だ」と公言してゐた。が果せる哉其後勝頼高天神の後詰した時、彼は番卒數多を傷つけて其麾下に馳せたといふ(菊判一八六頁、廿九年十二月十五日、博文館)

ひこ 肥後 ?

肥後守定成の女、一に常陸ともいひ京極關白師房公家

の女房をつとめ、又皇后宮にも奉仕した。歌をよくし金葉集以後の勅撰集及び堀河百首・堀河院艶書合等に採られ別に「肥後集」といふもある。

ひこさんごんげんちかひのすけだち 彦

山権現誓助劍

天明六年(二四四六)十月大阪竹本千太郎座上演、作者は梅野下風・近松保藏。

「長州藩の武藝師範吉岡一味齋は八重垣流の達人で、御前試合に同役微塵流の京極内匠を打ち負かした。その遺恨から内匠は一味齋を闇討にした。あとに二人娘があつて姉お園は豊前彦山の麓なる毛谷村六助と許婚の仲、妹お雪は他に嫁いで一子彌三松を産んで居たが、この災厄によつて姉妹同道敵討の旅に出てゐる中、お雪は又もや敵にかへり討にせられ、一子彌三松の行方さへもわからなくなつた。内匠は微塵彈正と變名して小倉城下に來て見ると「武術一藝に達したものは五百石で召抱へる」さの高札、それには八重垣流の達人毛谷村六助との試合に勝たなければならぬ。彈正は卑怯にも六助と内交渉して「親孝行の爲めに是非とも祿にありつかねばならぬのだから」さ偽つて六助に買けて貰ひ、その肩間を割つて意氣揚々として召し抱

へられることになつた。

六助の家には一人の棄兒を拾つて大切に育て、あつた。それが偶然にも彌三松で門口に乾した着物を、通りかゝつたお園(虚無僧に身をやつした)が見つけたのがそも／＼で嬉しき邂逅となり、やがて六助の助太刀で小倉城下で内匠を討つたといふ(有明堂文庫、淨瑠璃名作集)

ひこばえ 比古婆衣 舊刊四卷 新刊十六卷

伴信友の隨筆、國文・國語・歴史・故實に關する短文を集めてある。弘化四年(二五〇七)信近が跋をして嘉永五年(二五二二)に出版したのはその始めの四巻だけ、日本紀考・日本紀年曆考・仁倍魚の事・月日の蝕を「はへ」といふ事の四項を集録して居るが、その後存採叢書八三―八八には十六卷全部を収録した。

ひこひめしき 孫姬式

和歌の八病・長歌の式等を記した書。和歌四式の一つ。(「和歌四式」をも見よ)

ひさおゆ 荒木田久老 二四〇六一―二四六四、延

享三―文化元、八、一四、五十九歳  
 近世、伊勢の國學者で縣門萬葉派歌人としての一異彩である。父は伊勢外宮の祠官、養父は内宮の權禰宜、

彼も亦養父の後を嗣いで權禰宜となり従四位下に叙せられた。家號を五十槻園と謂ひ、古典の研究に熱注して而かも必ずしも師匠先輩の説に拘泥せず、人となり豪放闊達常に青樓に入つて酒池内林の快を貪る。萬葉考視の落葉・日本記歌解・祝詞考校訂・續日本後記歌解・祝詞考追考・竹取物語之解等訓詁の書多く今も世に行はれてゐる。家集を五十槻園集と云ふ。その詠凡て萬葉風に彼れ獨特の氣概をこめたものである。

初春の初日かよふ神國の神のみかげをあふげもろく

崩え出づる野邊のにひ草にこやかにふめる春日と成にけるかも

うら／＼に日は照らせれど足引のさかげの櫻いまだふふめり

戸隠の山にいほりて朝戸出の眞袖に拂ふ天のしら雲

天地の神もうづのへわれなくば誰か説かむよあたら古語

彼はまた古體の長歌にもすぐれてゐた(安永八年九月神嘗會の御占に仕へまつりて詠んだものなど)

ひさくりげ 膝栗毛

「東海道中膝栗毛」を見よ。

ひざし 瓢

芭蕉七部集の一、芭蕉やその弟子の俳諧を元祿三年(二三五〇)に集めたもの。

ひざん 川上眉山 (烟波山人黛子) 明治

二、三、五—明治四一、六、一五、四十歳

大阪の人、後、東京に移る。名は亮、二十二年東大法科に入り、一年にして文科に轉じ、卒業間際に退學した。硯友社中殊に能文を以て稱せられ、字練句素眞に彫琢の美を極めたが、思想上の悩みを抱いてゐたものさ思しく二兒を遺して自宅に自刃した。黄菊白菊・うらおもて・絳聲・ふところ日記・二重帯(始め「魁魁」と題したもの)等約百二十篇の小説を遺した。

ひじがく 美辭學

「修辭學」を見よ。

ひしやもんだう 毘沙門堂

きやうくくけ「京極家」を見よ。

ひじゆつ 美術

美學上から觀て美と觀すべき人工美、若くはその人工美を創作する技術をいふ。日月星辰も美であるがそれは自然美であるから美術とは謂はない。繪畫・彫刻・音

樂・建築・文學(以上を通常五大藝術といふ)劇(又之を

綜合藝術といふ)舞踊などの實用的裝飾的分子の無い

ものが眞の美術である。

ひせうねんろく 美少年錄

「近世説美少年錄」を見よ。

ひせんふどき 肥前風土記

古風土記の一つで年代は出雲風土記と略々同時と觀られて居る。荒木田久老の校合によつて世に流布するやうになつた(日本古典全集第一輯古風土記集下卷)

ひだのたくみものがたり 飛騨内匠物語

五卷

石川雅望文化五年(二四六八)作の雅文小説(帝文三三)

ひでたふ 藤原秀能 一八四四—一九〇〇、元

暦元—仁治元、五、五十七歳

河内守秀宗の子、十六歳和歌を以て愛せられて後鳥羽上皇の北面の武士となり、屢々歌才をたゞへられた。(新古今集の撰にも與つた)承久の役には所々の戦に軍功技藝であつたが上皇御前流後、彼は出家して如願と號した。

夕月夜しほみらくらし難波江の蘆の若葉を越ゆ

るしらなみ

と據に彼の詠は新古今集の代表的なものが多い。

ひとし 源等 一五四〇—一六一一、元慶四—天

曆五、七十二歳

希の子、醍醐・村上の朝に仕へて従三位參議に至る。歌は後撰集に三首採られて居る。

ひとまる 柿本人麿?

生國は大和(一に近江とも石見とも云ふ)持統・文武の朝に仕へ、地位は大舍人か國司階級位の微々たるものらしかつたが、歌は在世中から在朝諸臣に喧傳せられた。閑歴が曲折に富んでゐる上に多情多感で、人事の喜怒哀樂を痛感して之を長歌に表現したことが彼獨得の歌境で萬葉歌人としては赤人と共に第一流の大家と稱せられ、後世歌の聖として否な神として齋き祭られるやうにさへなつた(玉津島・住吉人丸を和歌三神と謂ふ)その詠は萬葉の一、二、四、九、及び古今以後の各集に散見し、別に短歌ばかりを集めた「贈正一位人麿卿集一卷」(群類二三四、九、一四三—一五九)柿本集上下二卷(歌仙歌集卷一、續國三九七—四〇三)がある。彼の歌の特徴は一、古史古傳説を取材せるものに富むこと。此は夢多き傳説多き大和を生國にせる彼と

してはさもあるべき事と思はれる「近江の荒れたる都を悲しめる長歌」の如きは天地開闢の昔から層々叙し去り叙し來つて現代の荒廢に及ぶ、正にこの種の好代表である。第二には人事を歌つたものが多いことである。殊に多いのは哀傷と悲戀とである。草壁皇子・高市皇子・明日香皇女と多くの皇子や皇女の薨去を哀しみ、行きすりの旅の兒の死屍にすら涙をそそいだ。彼は當時の凡ての男子がさうであつた如く妻若くは思ひ女を三人か四人は持つて居たものらしく、それ等の人人との生別、死別の眷戀の情を歌つたものには、彼が悲戀の體驗者たりしを示して餘りある。次いで多いのは行幸供奉の囑目や行路の感懐であつた。蛙なくつて吉野の行幸にも眞土の山越に行く紀路の出でましにも彼は御供にたつて味を捧げてゐる。又諸國の國廳の下官として、しらぬひの筑紫のはてに租調を徴し、さよなみや大津の宮の夏草のしげみが中を徘徊願望し、ものふの八十字治川の早き瀬を眺めなどもした。第三には短歌よりも長歌に秀で、ゐた。前述人事詩の多くは長歌である。篇數から謂へば短歌の方が多からうけれども彼の特徴は確かに長歌にある（この點に於ても萬葉集の歌風をよく代表してゐる）第四雄大莊嚴

の詩致に富むことである。國史と傳説とを背景にして對語・半對語を以て堂々と調べ來るところ、自づと祝詞に近い莊嚴さ雄大さを備へてゐる。  
 （人麻呂のことは早く法橋顯昭の研究があり、眞淵の萬葉考にも考證してあるが、武田祐吉氏上代國文學の研究一二八―一三四には鑑賞的に美しく述べられてあり、久松潜一氏萬葉集の新研究七九―一三八には以上の二つの長所を併せたやうな記事がある。關谷可克彌氏人麿考と云ふのも、東陽堂から出て居る）又歌集には金子元臣氏の撰柿本人麿歌集（明治書院）があり、國華一八六號一二九には古畫の柿本人麿像がある。好古類纂第六編には卷頭に人麿像が掲げられ一七―二六に佐伯利麿氏の「柿本人麿朝臣の像」と題する解説がある）

**ひなやりうほ** 雛屋立圃  
 りうほ「野々口立圃」を見よ。

**ひばいせんく** 飛梅千句  
 ごくさんせんく「獨吟千句」を見よ。

**ひはのだいなごん**  
 もろうじ「藤原師氏」を見よ。

**ひひやう** 批評

文藝論の一分科で作品の本質・價值・長所・缺點・類作との比較、時代思潮や作者の生の履歴との交渉などを理論的に判斷するもの。

**びぶん** 美文

實用を離れ専ら美辭麗句をならぶ事につとめた文章をいふ（美文といふは嚴密な科語ではない。醜文の對でない事は勿論、若し實用文の對ならば凡ての文學作品は皆美文と謂ふべき筈だが事實はさうなつてゐない）

**びめい** 小川未明 明治一五、四、七、一

越後高田の人、早大出身中特異の藝術境を辿つた人で、處女作「漂浪女兒」以來文壇に知られたが、明治時代にばさほど認められず、大正期に入つて新理想主義やプロレタリア文學の勃興につれて急に高揚され、社會主義文學・労働文學の中、老大家たるの觀がある。惑星・闇・物言はぬ顔・底の社會へなどは初期の作で、黒い河・夜の群・彼方の行くへなどは近頃の一作種である。尙又新童話の創作にも高級な唯美的な處があつて「小さな草と太陽」の著が出て居る。最近では隨筆にも佳いがある。

**ひめう** 山田美妙 明治元―四三、一〇、二四、四十三歳

南部藩士吉雄氏の息で名は武太郎、三田の英學塾から大學豫備門に入り、中途廢學して紅葉等と硯友社を組織し、中途別れて雑誌「都の花」を編輯し、國民之友誌上に「胡蝶」の一篇を出して創作の才を認められ、爾來新太平記・猿面冠者・教師三味・可憐狂・やたら稿等多くの小説を作つたがその後田澤稻舟女史との戀愛事件にからまり、又辭書の編纂に苦心したが、晩年は振はなかつた。言文一致の文體は右の胡蝶などから始まつたもので、この點に於て文章史上永久に名を残すべき人である（名家小説文庫、美妙叢書）

**びめうさい** 美妙齋

びめう「山田美妙」を見よ。

**ひやうきよ** 淺野馮虛

英文學の造詣深く、ゴールドスマスのワイカー物語、アービックのスケッチブック、ザッケンスのクリスマス、カロールなどの譯は殊に名高く、又戸澤姑射と合譯した沙翁物も博く讀まれた（其後丹波綾部の大本教本部に入り宗教運動に奔走するやうになつたといふ）

**ひやうするわかしふ** 萍水和歌集 二十卷一冊

下河邊長流が紅葉果塵集の續撰として心敬・宗祇・弄花老人頃までの諸家の咏一千首を春・夏・秋・冬・戀・雜に

分類した私撰集である。尙ながら「下河邊長流」を見よ。

ひやうそく 平仄

支那詩學の基礎になる音の區別で、凡ての漢字をその發音によつて平上去入の四聲に別け、その内の上去入の屬する音を仄聲といひ、この平仄の音排列に種々の規定を設けて絶句・律・排律などの詩體を定める。

ひやくしゆ 百首

ひやくしゆのうた「百首歌」を見よ。

ひやくしゆのうた 百首歌

歌の數を百首と限つた歌會又は歌集で堀河院御時兩度百首などがその早いものであらう。普通部立及び各部歌數を春二〇・夏一〇・秋二〇・冬一〇・戀二〇・雜二〇とする(堀河太郎百首は春二〇・夏一五・秋二〇・冬一五戀一〇・雜二〇)

例、永久四年百首・久安六年御百首・正治二年第二度百首和歌・内裏名所百首(建保三)・弘長百首・丹後守爲忠朝臣家百首・全權頭爲忠朝臣家百首・俊成卿文治六年五社百首等(古類文學部一、六六〇—六六五)

ひやくにんいつしゆ 百人一首

鎌倉初期中院入道蓮性が選んで、藤原定家に頼んで小倉の山莊に於ける唐紙の色紙に押毫をして貰つたも

の。天智天皇から順徳院まで一人に一首宛を探る。後世歌がるたにして入口に膾炙してあるし、他の百人一首もの、備とも見られる(國華三〇一號三二九、三四一、狩野探幽小倉百一首帖)

ひやくはつちやうき 百八町記 五册

寛文四年如備子作了意加筆として板行、神備道三教その歸趣を一にすべきを説いたもので、力點は佛教に立脚して儒者の佛教攻撃を攻撃するにあるらしい。毎章一字下げて加へてある。私見は了意の加筆である。

ひやくるん 百韻

句數の百ある連歌又は俳諧をいふ。之を懷紙に書くには、

第一枚	八	裏
第二枚	一四	一四
第三枚	一四	一四
第四枚	一四	八

とする。

ひゆほふ 譬喩法

文を明瞭ならしめ且つ詞態に活氣を帯びしめる爲めの修辭法で、之に色々の種類がある。

一、直喩法 の如く……に似たり……如を用ひてたとへの字面にあらはなものと

紅葉の如き手を合せ

落花雪に似たり

さげえなすあらぶるものども

二、隱喩法 譬喩を字面にあらはさずに譬喩する法

天鷲絨の感情と鋼鐵の意志

春風を以て人に接し秋霜を以て我を待つ

(文章の上手な人とはつまりこの二つの譬喩を巧みに運用する人をいふといつても過言ではない程この二法は多くの場合に用ひられる)

三、提喩法 その一部を提げて全體をたとへる法

春雨や物語り行く簑と笠

涼風やあちら向いたる亂れ髪

四、換喩法 記號と實物・隨伴物と本物・持主と持物・原因と結果・原料と作物とをとり換へて譬喩する法

吉田通れば二階から招くしかも鹿の子の振袖が  
アレ赤毛布が通つてゐる

近松をよむ  
丹青の器は古今に長じ

五、諷喩法 字面とは別種の他義を寓して而かも一見その作意の不明なもの、諷刺の場合に使ふ(つまりこの節の岡本一平氏の漫畫を語句で行つたやうなもの)

鼠とる猫のうしろに犬の居てれらふものこそれらはれにけり

(佛説の「白路の線」の如きも好諷喩である)

六、引喩法 古人や他人の語句を引用して文を裝飾するもの

太液の芙蓉 未央の柳もけに通ひたりし形を唐め

いたる粧はうるはしうこそありけめ

七、聲喩法 事物の音調を借りて修飾とする法

ついでりさせてふきりくすなく

蟋蟀の葢(平家物語福原落)

八、字喩法 字形や字義の關係によりて聯想内容を豊かにして文にをかしみと活氣とを與へる法

燒語屋の看板に(八里)とあるは「もう一里で九里」

(粟)といふ程うまい諸「十三里」とあるは「九里(粟)より四里(より)うまい」の意

松といふ字を分解すればきみ(公)とぼく(木)とのさしむかひ

九、詞喩法（秀句法のこと）  
一〇、類喩（縁語法のこと）

ひらがな 平假名

王朝初期頃に確定した字體で、漢字の草書體を略筆して作つたもの。世に空海の作といふが確かではない。これは我が邦人が漢字を日本化する技巧の發達の最高度を示すもので、この文字が出来たので、表現が容易になり王朝文學の勃興を見ることが出来たのである（古類文學部一、二八—四二）

ひらがなせいするき 逆櫓松 矢箆梅 ひらがな盛

衰記

元文四年（二三九九）四月十一日竹本座上演。作者は三好松洛・淺田可啓・竹田小出雲。

「旭將軍粟津の合戦に討死後奥方山吹御前は一子駒若女中お筆、父鎌田隼人と共に落人となつたが、大津の八丁のはたごに泊つてゐる時義經方の捕手が襲うて、どさくさ紛れに合宿の攝州福島の船頭權四郎が孫の穂松と駒若と取り違へ、本當の駒若は無事福島にかくまはれてゐるが、穂松の駒若は又もや追手がつかつて次ぎ／＼討死し、山吹御前もお筆が追手をばらして居る間に敵手にかゝりとど似せ若君をも敵手にわたしてし

まつた。死んだ兒の戒名を書いた晒布を持つて福島へ訪れて行つて、本當の若君と交換しようとするお筆の苦衷—しかしこれも意外にうまく行つた。といふのは穂松の父松右衛門といふのは誰あらう、義仲が四天王の隨一たる樋口次郎兼光が逆櫓を覺えて梶原にとり入るかりの名とわかり尙も駒若を大切にかしづく。一方梶原源太景季は鎌倉一のみやび男、こしもと千鳥（お筆の妹）と戀仲となり、宇治川先陣の失敗で家からは勘當、何が一つの功を立て、歸還を許されよう……それには近く催さるゝ源平生田の戦に若くはない。とは思つたが肝腎の鎧——頼朝公から拜領の——は三百兩にて入質して居る。それを千鳥が心配して遊女に身を沈め「梅が枝」と名のつて居つたが庭先なる手水鉢を「無間鐘」と見立て、金の出るまで女の一念、これで打たうと柄杓をあげると二階から小判がバラ／＼三百兩、これはと驚けば實は源太の母延壽が母心の慈悲からあとをつけて来たのである。けれども千鳥と源太とは今では互に敵同士、このまゝでは濟まされぬとあつて延壽は自害、やがて鎧をうけ出して生田の東門の戦に、箆の梅の風流合戦に、美事名譽を恢復し歸參を許された。

さて福島の松右衛門陰謀露顯について梶原の捕手がやつて来るが、何しろ一人當千の勇士とて誰の手にも負へぬ。折節島山が来て、理非を説いて「駒若君は必ず大切に育てるからこゝは一番吾々の顔を立て、くれよ」といふので「情けに刀向ふ刃はなし、日本一の剛の樋口の次郎兼光只今島山殿の繩にかゝらうぞ」と後へ手をまはす「イヤ／＼貴殿如き名譽の勇士某などの繩沙汰は借上至極、六十餘州を知るしめず鎌倉殿の威光を以つて重忠御執りなし申さうぞ」と縛る。この劇から分派して所作事に發展したものに「無間の鐘」と「源太」とがある（帝文四七、八六五—九五—）

ひろえ 越智廣江 ?

奈良朝の人元正天皇の御代その學を以て賞せられた。刑部卿兼文章博士に任ぜられた。その詩は懷風藻に出て居る。

ひろかた 屋代弘賢 二四一八—二五〇一、實

曆八一—天保一二、五、一八、八十四歳

江戸の人、代々幕府に仕へた。彼れ初めの名は詮賢、通稱太郎、後「詮文」ともいひ輪池とも號した。塙檢校の門に入り、博聞多識頗るその師に似て居つた。所有の

典籍一萬卷、晩年書庫三棟を建て、之を藏した。彼は又森尹祥について書を習ひ、日下部七之助・青木半藏と森の三筆といつて並び稱せられた。その著には古今要覽一千卷の大部あり、他は主に故實考證の書に係る。

古今會要・加津美考・和歌入門相見之記・梅檀瑞像考・參攷伊勢物語・鳩之集・有卦無卦・道之幸・高野大師書訣註・道成寺考・琉球狀・通覽花檀抄・不忍池筆抄・武家名目抄・古文孝經附錄・輪池叢考・輪池雜錄・歸田の意。

ひろこ 片山廣子

竹柏園門下女流歌人の才媛で、その歌と美文とは雜誌「心の花」や竹柏園集に多く出て居る。

ひろたり 中島廣足（弘足） 二四五二—二

五二四、寛政四、三、五—文久四、正、二一、七十三歳（國書解題には「文久四年甲子（二五二四）正月廿一日五十一歳にて歿せり」とある）

徳川時代末期の國語學者且つ歌人。熊本藩に仕へ、名は春臣、通稱は太郎、蛙齋・樞園・黄口・田翁などの號がある。本居太平の門人で、長崎に出て弟子を教へ、（又大阪の人中島元道その他有志の切望により、北濱二丁目滞留して教授すること五年、名聲大にあがり



又繪畫に巧みなところからついて揮毫を乞ふものも多  
くあつた。晩年藩主の命により歸熊して學事を以て仕  
へた。その著頗る多く國學者傳記集成舉ぐるころ五  
十種、二百三卷、殊に樞園文集三卷・東海日記二卷・  
相良日記一卷・筑紫日記一卷・瓊浦集二卷・樞園集・しの  
すだれ三卷（續歌學全書八）・樞園長歌集二卷などが有  
名である。彼の歌は一柳千古を師としたもので風格高  
雅亦一家の體をなしてゐた。

あはれにも崩え出づる草の緑かな春きたりとも  
知らぬすみかに

浪のおとは下に騒ぎて明くる夜の霧靜かなる木  
曾の山川

又瓊浦集中文政六年九月阿蘭陀の詩を國風に譯したも  
のが出てゐるのは恐らく本邦譯詩の前驅であらうとい  
ふ（佐々木信綱氏近世和歌史二五四―二五九・國學者  
傳記集成一四一〇―一四一二）

**ひろつな** 佐々木弘綱 二四九二―二五五一、  
天保三―明治二四、六、二四、六十歳

伊勢の人、家號を竹柏園と云ひ足代弘訓・井上文雄を  
師として和歌を學んだ。彼が國文學史上の功績は、  
一、歌學歌道の普及

二、國文學の普及

の二點にある。一については日本歌學全書を校訂纂輯  
し、古事記歌傳言解・古今集傳言解・萬葉集傳言解・百  
人一首傳言解・日本紀歌傳言解・三十六歌仙傳言解・歌  
詞遠鏡等を著し、二については、  
更科日記・徒然草・伊勢物語の各傳言解・源語童諭・標註  
枕草紙讀本・雅言小解・假字格使覽等を著した。

**ひろなり** 齋部首廣成？

先祖は天太玉命の孫天富命で、宿禰の稱を賜はつて世  
世神祇官に職を奉じて祭祀を司つた家で、大同二年（一  
四六七）古語拾遺を著して奉つた。位は大同年十一月  
大嘗祭の事畢へて後、その賞によつて從五位下に叙  
せられたとあり、年齢は古語拾遺の中に、  
愚臣廣成 朽邁之齡 既逾<sup>エ</sup>八十<sup>ニ</sup> 犬馬之戀  
且暮彌切<sup>ナリ</sup>  
と謂つて居る。

**ひろなり** 葛井廣成（白猪史）？

連姓で、奈良朝の文學者で、歌は萬葉卷六に漢文は經  
國集に漢詩は懷風藻に出てゐる。懷風藻は詩を年代順  
に排列してあつて彼のが最後になつてゐる處からこの  
集の撰者を以て廣成に擬する説もある（藤村作氏國文

學史總說五二）

**ひろなり** 平群廣成 ？―一四一三？―天平  
勝寶五、

奈良朝の學者、平群木菟の裔である。從四位上武藏守  
に任ぜられ、天平五年に遣唐使多治比廣成について渡  
唐し、同六年歸朝の中途難船して崑崙國に着き賊の剽  
掠に遇つたが、やつとのことで唐に再び入り、阿部仲磨  
のとりなしで唐帝に乞ひ道を渤海に取つて歸朝した。

**ひろには** 安部廣庭 ？―一三九二、？―

天平四、二、  
萬葉歌人、父を安部御主人と云ひ、薨年は不明だが懷  
風藻に「七十二」など見えて居るから少くともそれ以上  
の年齢であらう。

元明、和銅元、一一、伊豫守

同 四、四、正五位上

同 六、正、從四位下

元正、靈龜元、五、宮内卿

養老二、正、從四位上

同 五、六、正四位下左大辨

同 六、二、參議朝政

同 六、三、知和泉河内事

聖武、神龜元、七、石川夫人薨去につき喪事監護

拜命

同 四、一〇、中納言

と歴進して晩年の肩書は、中納言從三位兼催造宮長官  
知和泉河内等國事とある。

歌は萬葉三、八に詩は懷風藻に二首ある。

**ひろのり** 足代弘訓<sup>あしろ</sup> 二四四五―二五一七、天  
明五―寛政四、七十三歳

徳川時代末期の歌人且つ和學者、伊勢神宮の權禰宜で  
代々正四位下に叙せられて居たのを、彼に至つて特に  
正四位に叙せられ前代未聞の榮典とせられた。彼の師  
匠は本居太平と同春庭であつたが、京都に行つては竹  
屋光棟の門に入り、江戸に遊んでは塙の門に入り又諸  
名士と往來して見聞を廣めた。

彼は當時の學者が妄りに獨斷の自説を主張するのを却  
け「余は識見なきを以て識見とす」と謂ひ、述べて作ら  
ずの趣があつた。隨て彼は一個の考證學者として重ん  
ぜらるゝやうになつた。又類纂の學にたけ天保中六國  
史人名部類を三條實萬卿を通じて天覽に備へ、時の帝  
（仁孝）から御硯を賜はつた。日本逸史人名部類・三  
代實錄人名部類・同義解部類・萬葉集類語・同類句等の

著がある。  
 彼は又歌の才があつて嘗て景樹が伊勢に下つた時弘訓に會つて「學者にもこんなすぐれた歌人があるか」と驚いたといふ逸話がある。家集を「海士の囀」と云ひ又、寛居長短歌集（續歌九）足代弘訓翁家集（佐々木信綱氏編）などもある。

世の中は八重山吹の花心實なきことのみ遊びつ  
 つ  
 夕暮にふるうす雪の心地しておぼろ月夜に散る  
 櫻かな  
 袖にちる若葉の露に野の宮の竹の下道涼しかり  
 けり  
 鳴きて立つ鳴の羽音に驚きて浮きたる魚の皆し  
 づみけり  
 網引する聲遠からず聞えつ、松原ごしに海も見  
 えけり  
 明けぬるか千木の片そぎ見えそめて杉の梢に烏  
 なくなり  
 事しあらば火にも水にも入りなむと思ふものか  
 ら身は老いに鬼  
 彼は又長歌・今様歌をも詠み試みた。その著約四十種、

編輯する處千有餘卷に達すと謂ふ。

**ひろみ** 橘廣相（廣覽 朝綾 橘贈納言）  
 一四九七—一五五〇、承和四—寛平二、五十四歳  
 平安朝初期の學者で、橘諸兄五世の孫に當る。清和・陽成・光孝の三朝に歴仕し右衛門督・東宮學士・文章博士・左大辨等に任ぜられ、その詩文は本朝文粹・文華秀麗集等に出、その著に朝官當唐名略抄一卷あり、その他に藏人式一卷橘氏文集の著があつたといふが今傳はらない。

**ひろみち** 萩原廣道 二四七三—二五二三、文  
 化一〇—文久三、五十一歳

幕末の國文學者で、備前岡山に生れ、浪華に出て大國隆正の門に入り、初は藤原小平太濱雄と稱し、後に鹿左衛門と改む。柿園・蒜園・霞沼・出石居・鹿鳴草舎等の別號がある。  
 彼の學力を觀るに足るものは源氏物語評釋である。これは當時篠原竹陰・緒方洪庵・中玉樹等と春日寛平の宅に會して源氏物語を講じ、その時の筆記を纏めたもので、花宴まで進行した時、彼は中風症に罹り遺憾ながら中絶した。  
 その他先皇の大道を論じたものに本學提綱があり、經

濟論に玉匣補註と云ふがあり、異邦の語を譯する用意を説いたものに西戒音譯字論あり、註釋の書に住吉物語松風抄あり、文集を蒜園文集と云ふ。

**ひろゆき** 加藤弘之

但馬の人、法學博士で文學博士、明治文化の先覺として有益な著を出した。尙「人權新説」を見よ（加藤弘之講演全集、丸善發行）

**ひん** 上田敏（柳村） 明治六—大正五、七、九、  
 四十三歳

靜岡縣の人、三十年東大英文科を出、東京高師教授、歐洲留學、京都帝大教授といふ略歴で四十三年文學博士を授けられた。青年の時已に「文學界」の同人として活動し（藤村の春に氏を小説化した處がある）その後英文學の造詣頗る深く、丸善に一冊しか着かない原書でも逸早く手に入れて讀むのは氏だと評せられた。その文藝上の主義はノイアルな人となりと我が王朝文學の造詣と相俟つて、古典主義に傾き詩を第一義の文藝としたが、時生憎に自然主義が勃興し小説中心の傾向が強くてその爲め不利益の地位に立つたが、その譏義に鑑賞を高揚した點は今日からみれば却て時世の先驅をしたものと思はれる。現代の藝術・文藝論集・海潮音・牧

羊神などの著があり、後の二種は今「上田敏詩集」に收められて居る。

**フの部**

**ふうえう** 小栗風葉 明治八、二、三—大正一五、  
 一、五十二歳

尾張半田の人、本名小栗磯夫、富豪小栗家の躰養子、（夫人は女流文學家加藤壽子）となり、始め家業（藥種商）に關係のある藥學校に入つたが、天性の嗜好は已むに止まれず、遂に中途にして尾崎紅葉の門に入り、龜甲鶴・片魚くぼ・寝白粉・戀慕ながし・曇下地・戀ざめ等により、門下の秀才として喧傳せられたが、その後家事にかまけて郷里に引籠み多く通俗小説に筆をとつた。一代の作約百八十種、その作風は凄艶の官能描寫にたけて中には自然主義作品に近いものもあるが、矢張り硯友社張の延長と觀た方がよい。眞山青果はその門人である。又氏は多趣味の人で裏千家茶道、琴、古流尺八等をもよくした。加ふるに才氣汪溢した人であつた（小栗風葉集二冊）

**ふうえうわかしふ** 風葉和歌集 二十卷、内

十九、廿、缺本  
 南朝三葉集の一つで古今の物語中の歌一千三百八十首を四季・神祇・釋教・離別・羈旅・哀傷・賀・戀・雜等凡て勅撰歌集の部立の體裁に並べ、作者の名の上にその出典物語名をもあげたもので、撰者は誰ともわからぬ。物語歌集の先蹤として注意すべき書である。

現存最古のものは元祿三年庚午中冬露睡子の奥書があるし巻末に一枝軒野村尙房(梅月堂宣門の門下)の跋がついて漢文で「或説云風葉和歌集者、南朝之御時、於吉野山皇居、所撰著之物語和歌而、三葉集之一也……然序中奉國母仰千餘歌二十卷、文永八年進獻之云、併南朝之撰、可知之撰者誰人乎不可尋之者也……寶永四年丁亥冬十月に云つて居る。文永八年は龜山天皇の御即位第十三年目(一九三二)で、それならば無論南朝時代の物ではないが、是についてはまだ考證の餘地があらう(國刊一期續々群一四、丹叢一三〇壬子帙一) **ふうがわかしふ 風雅和歌集** 二十卷

花園院の御自撰で序の日附は貞和二年(二〇〇六)十一月九日、寄人として御手傳ひ申したのは前大納言公藤、藤原爲基同爲秀三人で淨書はお家流の元祖尊圓法親王(伏見院第六の皇子、青蓮院の第十七世)序は始

め兼好とその兄慈通とに假名眞名と命ぜられたのを兄弟二人で二序を書くのはおほけなしと辭退したので二條良基が代作したといふ。  
 この書歌數二千二百十首、院の御抱負は當時の歌壇が師範兩家の専有物のやうになり、歌風もだん／＼下つて眞のみやびの趣旨に遠ざかりつゝあるを歎き、今一度古今の中世穩健に復古しようといふにあつたものでそのことは明らかに兩序に述べられてゐる。で當時の第一流とも云はれる藤原諸家はとやかくと批評したけれども我が和歌史上特に注意すべき集である。左にその數首をあげる。

餘寒の心を 永福 門院  
 朝あらしは外山の竹にふきあれて山の霞も春寒きころ  
 題しらす 法橋 顯昭  
 こまとめてすぎぞやられぬ清見がたちりしく花や波のせきもり  
 夏御歌に 後伏見院御製  
 小山田やさなへの末に風みえてゆくてすゞしき杉の下道  
 院に三十首歌めされし時秋來を

西恩寺内大臣女

あきのあめにしなれて落る桐の葉はおとするに  
 しもさびしかりける

九月十三夜つく島へ参りけるに備後のともといふところにて海邊の月といふことをよめる  
 あたらよの月を獨りぞながめつるおはぬいそに浪まくらして

(國歌大觀四九一—五三三)  
**ふうぞくもんぜん 風俗文選** 十卷  
 森川許六の俳文の選集で、芭蕉以下二十八人の文百餘篇を辭賦説解等二十一類に分けて居る。寶永二年(二

三六五)の自序がある。外に作者の略傳や、李由・支考等の序もついて居る(俳文五に入り、單行本として今古堂よりも發行)

**ふうらいさんじん 風來山人**  
 げんない「平賀源内」を見よ。

**ふうらいろくろくぶしふ 風來六々部集**  
 風來山人事平賀源内の左の戯文六種を合編したもの。

放屁論・痿陰隱逸傳・天狗懶懶鑑定問答・里のをたまき評・菩提樹の辨・飛んだ噂の評。

**ふうりうぐんばいうちは 風流軍配團扇**

江島屋其磧作の浮世草子。

**ふうりうさいかいすずり 風流西海硯**  
 江島屋其磧作の浮世草子。

**ふうりうしだらけんてん 風流志道軒傳**  
 五卷

平賀源内の作「深井淺之進」といふ侍風來仙に遭ひ、天狗の羽團扇を得て大人國小人國と諸國を廻り、歸つて淺草に來るといふ筋で、和想兵衛・夢想兵衛諸國巡りの趣向の濫觴かともいはれて居る。モデルは作者の私淑せる講釋師に事實志道軒といふ者があつて、作品中の深井はつまりこの志道軒を描いたものである(志道軒は當時淺草に居り、源内は之に私淑するの餘り一時自ら志道軒門人悟道軒といつた位である)

(藤岡作太郎氏近世小説史三五六—三五七、四〇二、  
 珍名著文庫第九編卷頭饗庭篁村氏の文)

**ふうりうだいぜん 風流大全**  
 江島屋其磧作の浮世草子。

**ふうりうななこまち 風流七小町**  
 江島屋其磧作の浮世草子。

**ふうりうぶつ 風流佛**  
 幸田露伴作の小説で、殊に氏の特徴を發揮して有名な

もの、始めに洒落半分の序文あり、中に一枚挿繪あり  
珠運發足の處楊湖筆。

氏が佛學と藝術至上的見解と戀愛觀とを纏ひませた作  
「珠運」はもと京都の生まれで佛師を志し、此頃の西  
洋風の彫刻の輸入に向を張つて天晴れ古美術の爲に一  
道の氣焔をあげんものと二十一歳の春一向專念の誓を  
嵯峨の釋迦に立て、刻苦三年師匠も此迄其技倆をめ  
でたので家財凡てを金にかへ、奈良鎌倉日光と主なる  
佛跡を見學しようとして飄然都を出た。

こゝは信州木曾の里、而も眞冬の肌寒く孑然として唯  
一人宿の一室に欠呻せる折柄、スルリと襖をあけて梅  
桃櫻の花漬を賣りに來た少女がある。其優麗清楚正に  
是深山の花の精かとばかり美しい。

少女名を「お辰」と云ひ、京で一頃名高かつた「室香」と  
云ふ藝妓と維新の志士「梅岡某」との間に出來た一粒種  
である。梅岡は戊辰の役に官軍について奥州に降つた  
きり消息絶え、室香は貞操を守つて音曲指南をして渡  
世をして居た。室香の弟に「ぶんなげの七」と諱名せら  
れる者があつて、風采は立派だが根性はれぢけ、大工  
職ではあるが京では誰も相手にしないと云ふところから近江  
美濃飛騨と段々地方稼ぎをしてとど此里に流れて來、

須原長者の隠居所の普請をする中、その家の一人娘お  
吉と馴れ合ひ、その養子に入り込んで新婚旅行と云  
ふ格で京都へやつて來た。お吉は大層人馴つこい親切  
な性質であつたから室香は我子を此に托しやがてあへ  
なく散つてしまつた。七藏は段々地金を出して酒は呑  
む賭博はする。とうとう長者の家をたき賣つてしま  
つた。お吉はそれを氣にやんで病死。一人お辰が取殘  
されて殘酷な叔父にさいなまれて物憂い年月を過して  
ゐるのである。

珠運はお辰の身の上を聞くに連れて不意で堪らず、折  
から七藏が彼女を百圓で賣らうとしてゐるのを自分で  
その金を旅費から出してお辰を助け、宿(龜屋)の亭主  
の取持で結婚しようとする前日になつて岩沼子爵家か  
ら田原宋作と云ふのがやつて來て、金は出すからお辰  
様はこちらへ引取らせて下さいと云ふ。今の岩沼子爵  
は昔の梅岡某で即お辰の實父である。事情已むを得ぬ  
と云ふので、珠運は快くお辰を渡して金は受取らず奈  
良へも行かず、一室に閉ぢ籠つてお辰をモデルの吉祥  
天女を刻んだ。

「耳に世界の音も無腹に饑をも補はず、自然と不惜身  
命の大勇猛には無礙無所畏切屑拂ふ熱き息吹き掛け吹

込む一念の誠を注ぐ眼の光り凄まじきまで凝り詰むれ  
ば、爰に假相の花衣幻翳空華解脱して深入無際成就一  
切莊嚴端麗あり難き實相美妙の風流佛仰ぎて珠運よろ  
くと幾足うしろへ後退りドツカと坐して飛び散りし  
花を捻りつ微笑せる(九〇—九一)

折柄「珠運様々々々」とやさ聲、珠運自身の氣の迷ひ  
で自身刻んだ吉祥天女がお辰そつくりに見え、以前の  
如く密語喃々を感じた「戀には必ず感應ありて一念の  
誠御心に協ひ、珠運は己が歸依佛の來迎に辱くも拯ひ  
とられてお辰と共に手を携へ肩を駢へ優々と雲の上  
に」行つた(一一四)と云ふ(新著百種第五號四六判一  
一七頁、廿二年九月廿三日、神田區南乗物町三番地吉  
岡哲太郎)

ふうりうれんりのこひ 風流連理戀

江島屋其積作の浮世草子。

ふかく 立羽不角 二三二二—二四一三、寛文  
二—寶曆三、七二一、九十二歳

元、江戸の一書肆であつたが、後有名な俳匠になつた。  
(本姓山崎、立羽はその氏)通稱定之助、虛無齋、松月  
堂南々舍等の號がある。俳を不卜に學び「化鳥體」とい  
ふ一派を唱へ大に行はれ、門下千人を計ふるに至り自

らも千翁と號した。享保中俳諧によつて法眼に叙せら  
れた。その著は、

村雀・友音鶴・清鐘・同續・正風江戸菅笠・柁の葛・正風  
集・糊飯笥・廣海原・笠の蠅・有磯海・木曾柁・母恩集・  
二葉松・信順行・一騎打・七十五版鏡・百人一句・南々舍  
隨筆。彼は又書畫をもよくしその揮毫は當時の縉紳に  
珍重せられた。

ふかやぶ 清原深養父？

延喜前後の歌人、清少納言の先祖、地位は従五位下、内  
藏大允、中古三十六歌仙の一人で、その歌は古今(一  
七)後撰(五)以下諸集に散見してゐる。

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲の何處に月  
宿るらむ

ふくこがく 復古學

程朱理學の説は孔孟儒教の眞義に非ずとし、四書五經  
その他の聖經賢傳により直ちに儒教の本質に觸れよと  
の説で、徳川時代木下順庵(二二八一—二三五八)によ  
つて創唱せられた(古類文學部二、七八八—七九二)

ふくないきぐわい 福内鬼外

げんない「平賀源内」を見よ。

ふくろのさうし 袋草紙 四卷

藤原清輔の歌學書・和歌會・題目書様・撰集故實等和歌についての故實や歌人の逸話等二十一箇條をあげて居る。王朝から鎌倉初期にかけて澤山ある歌學の書中作者の最もたしかなものと言はれてゐる(續群四六〇、一六ノ下、七六一―八六四、歌學文庫三)之を抜抄したものゝを清輔雜談集といふ。

**ふくわうゑんゐん** 普光園院  
よしざね「藤原良實」を見よ。

**ぶくん** 武訓  
貝原益軒十訓の一つ(益軒全集第三卷)

**ふさうしふ** 扶桑集  
醍醐・村上の兩朝頃の人々の漢詩を集めたもので、撰者未詳、時代も不明、完本も傳はらない。群書類従一

二六(六、五八四―六〇八)に七、九の二巻だけ入れてある。  
**ふさうしふえうしふ** 扶桑拾葉集 三十卷  
徳川光圀の編、平安朝以來の和文の序・跋・日記・物語・紀行・賀文・悼辭・贈答の文など一百餘人の作三百篇を編輯したものである。

卷首に元祿二年(二三四九)兵部卿幸仁親王の序、本書奏進の表、總目錄、作者系圖等を掲げてある。

(明治卅一年縮冊の四冊本あり)  
**ぶしうえどうたあはせ** 武州江戸歌合  
一卷

太田道灌が文明六年(二一三四)六月十七日主催の歌合、尙だうくわん「太田道灌」を見よ。

**ふじぎやうじや** 富士行者  
かうかうかかく「角田浩々歌客」を見よ。

**ふじのや** 不盡廼舍  
あきか「中村秋香」を見よ。

**ふしみてんわう** 伏見天皇 一九二五―一九七七、文永二、四―文保元、九、三、五十三歳

御諱は照仁、法名素融、後深草帝第二の皇子、御母は左大臣實雄の女、第九十二代の帝で、畫に巧にして和歌に秀でさせられて居つた。この御代に爲兼に仰せて撰ばせられたのを玉葉和歌集と云ふ。この集中には御製が七十首内外入つて居る。その他新後撰(一八)風雅(六八)の諸集にも採られてある。  
惜しむべく悲しむべきは世の中に過ぎて又來ぬ  
月日なりけり

**ふしもの** 賦物  
連歌や俳諧の場合に名所・物語・景物・調度の名を味み

込むについての規定をいふ。要するに和歌の「物名」の趣味を連俳にとり入れたものだが、餘り繁瑣なる言語の遊戲に墮し、終に連俳には廢つて發句だけに咏まれるやうになつた。

例「四宮河原」を賦物として、  
契りしのみやかはらざらむ 爲 氏

賦物についての主な規定、

一、上賦 「何山」と様に題するもの、即ち山の上に出と結合して一熟語をなすべき賦物を案出すべきもの(遠山・春山・松山・音羽山など)

二、下賦 「山何」と様に題するもの、即ち山の下に山と結合して一熟語をなすべき賦物を案出すべきもの(山路・山邊・山田・山里・山守・山人など)

三、一字露顯 同音を異義にとるもの、日を火に根を音に……

四、二字反音 二音の語を上下反對にとるもの夏を綱

五、三字中畧 菖蒲を雨とするの類

六、一字重轉 一音を二音に延ばすもの詩を「シシ」矢を「ヤヤ」など

七、除篇 鱒を雪、松を公など  
八、除冠 灰を火

九、加冠 舜を舜

其他三字上略・三字下略・四字上略・四字下略等  
(岩本梓石二氏 増訂新撰俳諧辭典 四五五、中下段)

**ぶしやうのえうじ** 武將の幼時  
資料

一、家康印地打、見物のことは  
甲陽軍鑑二ノ一

二、頼宣のことは  
藩翰譜 徳川實記

翁草六九、三六

三、信綱雀の子をとることは  
藩翰譜二ノ二八、内藤恥叟氏 少年日本文庫、第五編、松平豆州言行録

**ふせいけいぶんがく** 不整形文學  
「遊動文學」を見よ。

**ふぞくうた** 風俗歌

奈良朝の末から平安朝の初めにかけて流行した民謡で、歌態は神樂歌や催馬樂と同じく短歌をもとにした離し句調のものでその曲の定まつたのはこの兩者より少し後れてゐたらしい。現存の風俗歌は二十五曲・二十六首ある(曲といつても節まはしではない)

乎津久波・小由流木・玉垂・鴛鴦・之太乃浦・君乎置  
 天・越方・小車・陸奥・甲斐・常陸二首・筑波山・月  
 面・大島・奈末不利・荒田・安津末知・菅牟良・知々波々・  
 我門・伊勢人・加比加彌・奈利高之・八乎止女・彼乃  
 行。

その中常陸、陸奥、甲斐、相模などが名高いし、近畿地方から出たと思しいものは僅に一首あるだけのことから推して東歌と略同一地方から出たものと推せられる。訛言を多く入れたこと素朴率直な戀の表現や東國人一帯の地方色とも謂ふべき激越な調へなどその特徴も相似てゐる。

**ぶそん 谷口蕪村** 二三七六一二四四三、享保元—天明三、二、二四、六十八歳

天明の俳壇に曉臺の美濃派、蓼太の雪門、白雄、關更の伊勢派など互に割據せる中に一際高く正風を以て獅子吼するものは蕪村の江戸派である。蕪村初めの名は長庚、後に寅と改む。字は春星、號は三葉・東成・四明・紫狐庵・夜半亭など云ひ、攝州東成郡天王寺在なる毛馬村に生れ、後丹後與謝郡に移り住んで與謝蕪村と云ふ(蕪村は天王寺蕪青の出る村の意。或人の説には與謝は荒蕪の地であつたから蕪村と號し

たと、併し通常は出生地を以て號したと謂はれてゐる) 廿二歳の時江戸に行き早野巴人について俳句を學ぶ。巴人は雪中庵の弟子でいつも「師の句法に拘泥すな」と説いた(昔を今の序)「新花摘」居ること五年にして巴人は逝き彼は師名を襲いで三世夜半亭と稱した。門戸日毎に増して、月居・月溪・召波・凡圭・凡董・維駒等の名俳何れも彼の教を受けて名を成した。彼の終焉も靜かに神々しいものであつた「から檜葉」にその記事がある。辭世三句は、

冬鶯むかし王維が垣根哉  
 うぐひすや何ごそつかす藪の霜

しら梅に明る夜ばかりとなりけり

彼は方に衰へつ、ある正風を中興して、再び風雅の大遣に反し、否なより以上に俳句の純文學的地歩を高めた。その長所は句作にあつて句論にあらず、門戸を張り強ひて異を唱へて自ら高う標致するが如きは彼の採らざる所であつた。けれどもその作句の態度から歸納すると、

- 一、俗氣を去ること、先づ讀書によつて俳眼を高め、市井の俗氣を去つてあくを抜け。
- 二、門戸開放 俳諧に門戸なし、只是れ俳諧門とい

ふを以て門とす(春泥集序)

三、古人を友として近人の態に倣ふな。其角・嵐雪・素堂・鬼貫をえらび、日々この四老に會すべし

(同上)五子の風韻を知らざるものには、ともに俳諧をかたるべからず。こゝに五子さいふものは其角・嵐雪・素堂・去來・鬼貫なり。

- 四、以上を基礎として自然と人生とに接觸せよ。林園・山水・酌酒・談笑・行くとして俳囊を肥やすの材たらざるなし。
- 五、作句の態度は自然にして不用意を貴ぶ。人工斧鑿の句はよろしからず。
- 六、俳諧の極致は、前に古人なく、後に來者なく。一人自らイむの境に至つて俳道の修業はその極に達する。

尙彼が俳句の一特色は畫趣に富んでゐることである。蕪村の俳畫は今も愛好者の垂涎を誘ふものだが、彼はこの繪心して作つた句が少くない。蕪村研究の第一人者とも謂ふべきは故正岡子規であるから、今その著「俳人蕪村」によつてその句例を拔萃する。

- 一、積極的美 五月雨や大家を前に家二軒
- 二、客觀的美 釣鐘にとまりて眠る胡蝶かな

三、人事的美 御手打の夫婦なりしを更衣

四、理想的美 瀧口に燈を呼ぶ聲や春の雨

五、複雜的美 雨後の月誰そや夜ぶりの脛白き

六、精細的美 夏川をこす嬉しさよ手に草履

七、漢語調 指南軍を胡地に引き去るかすみ哉

八、古語調 おろしおく笈にならふる夏野哉

九、俗語調 出る杭を打たうとしたりや柳かな

一〇、變化多き句法 醉を壓す石上に詩を題すべく

一一、變化多き句調 若葉して水白く麥黄ばみたり又「春風馬堤曲」と云ふ一篇は、俳句と詩句とを聯接した連作の一新體を爲し珍らしい詩形として名高い。

彼には作句があつて主張は少なかつたので遺稿と云ふ風のものも至つて乏しい。今彼を研究するには蕪村全集(俳文一二)俳人蕪村・蕪村句集講義(内藤鳴雪外數氏)などによるがよい。

**ぶだうあふみはつけい 武道近江八景**

江島屋其磧作の浮世草子。

**ぶだうでんらいき 武道傳來記 八冊**

井原西鶴貞享四年(二三四七)の作。浮世草子中好色本より一轉して武家物に筆を染めた時のもので、中古武道に關するものを集め。序に、

和朝兵揃の中に爲朝のくろがれの弓、武藏坊が長刀、朝比奈が力瘤、景清が眼玉、これらは見ぬ世の事、中古武道の忠義、諸國に高名の敵討其のはたらき聞き傳へて筆の林詞の山心の海靜にお松久かたの雲に喜びの舞鶴是を集めぬ。

といふ。

ふたばてい 長谷川二葉亭(四迷) 文久

二、一〇—明治四、二、五、四十八歳

尾張の人、名は辰之助、四年五月外國語學校露語科に入り、爾來露語は最も深く研究したが佛英清の各國語をも修めた。二十二年八月から官途についたが三十五年五月辭職三十七年春大朝の聘に應じ、その文藝欄に筆を執つた。四十一年六月朝日特派員として露都に行つて極度の神經衰弱に罹り歸朝の途次印度洋上途に不歸の客となつた。氏の文學史上の功績は二十年七月都の花誌上に出した「浮雲」によつて坪内博士の小説神髓の理論を實地に示したかのやうに明治の新小説を逸早く創作し、其面影(三十九年十月)平凡(四十年十月)によつて復々小説界を刺衝したと、ツルゲーネフ・ゴリ・ゴリキ・ガルシン・アンドレーエフ等ロシア作家の名篇をあつた幼雅な翻譯文學の時代に最も消化し

た譯し方によつて紹介したことである。氏の抱負は政治經世の方面にあつたが、氏の實歴は文學史上に名をなした譯である(二葉亭全集四冊、坪内逍遙・内田魯庵二氏、二葉亭四迷)

ふたはらおび 二腹帯

「心中二腹帯」を見よ。

ふちあん 不知庵

るあん「内田魯庵」を見よ。

ふぢかはのき 藤河の記

室町期の學者一條兼良、應仁の亂をさけて奈良に幽栖し、その頃美濃藤河のわたりへ旅をした往還の次第を綴つた紀行。その冒頭

胡蝶の夢の中に百年の樂を貧り、蝸牛の角の上に二國の諍を論ず、よしといひあしさいひたゞ假初の事ぞかし

とある様に、全篇和漢混淆文である(群三三六、一一、一一五六—一一六七)

ぶつそくせきのうた 佛足跡の歌

奈良朝天平・勝實年中・文室真人淨三(智努王故茨田夫人)の冥福を祈る爲め石面に釋迦の足跡を刻み、大和添下郡砂薬師寺境内に安置し、三十八字歌二十一首を刻

みつけた之を佛足跡歌といふ。佛説によると釋迦は三十二の妙相を具へ、足下には千幅輪・穀網・魚鱗・金剛杵・梵王頂・象齒相等の不可思議な變相を有し、之を拜むものは千劫極重の罪障を消滅する功德があるとせられて居つた。

歌は萬葉假名で記され五七五七七に今一つ最後の七の反覆のやうな七音の句を添へたもので、上代の歌謠に似ず近代的な音律である。

みあとつくる石の響はあめに至り土さへゆすれ

父母が爲め諸人の爲め

三十あまりふたちのかたぢやそくささそだれる

人のふみしあと所稀にもあるかも

よき人のまさめに見けむ御迹すらを我は得見す

て岩にえりつくたまにえりつく

このみあとやよろづひかりを放ち出しもろく

救ひわたしたまはな救ひたまはな

いこなるやひとにませか岩の上を土とふみな

しあとのころらむたふとくもあるか

ますらの進み先だちふめるあとを見つゝしの

ばむたゞにあふまでにまさにあふまでに

ますらのふみおけるあとはいはの上は今もの

これり見つゝしのへと永くしのへと

この御迹をたづねもとめてよき人のあます國に

は我もまゐてむもろくをあて

釋迦の御迹岩にうつしおきいやまひて後の佛に

譲りまつらむ捧げ申さむ

これの世は移り去るともこととはにさのこりあ

ませ後の世の爲め又の世の爲め

ますらのみあと(以下磨滅)

さきはひの厚きともからまゐたりてまさめにみ

けむあとのともしさを嬉しくもあるか

をぢなきや我に劣れる人を多みわたさむ爲めと

うつしまつれりつかへまつれり

釋迦の御迹いはにうつしおきゆきめぐりうやま

ひまつり我世は終へむ此世は終へむ

くすりしはつれのもあれどまらひとの今のくす

りしたふとかりけりめたしかりけり

このみあとをまはりまへればあとぬしの玉のよ

そほひおもゆるかもみることもあるか

おほみあとを見にくる人の往にし方千代の罪さ

へ亡ぶさぞいふのぞくとぞきく

人の身は得がたくあればのりのたのよすがとな

れりつとめもろく進めもろく

よつの蛇五つものもの集れるきたなき身をばいとひすつべし放れすつべし

雷の光の如きこれの身は死にの大君つねにたぐへりおつべからずや

○都○○○○○○○○○比多留比○乃多爾くすりしもとむよきひもとむまきむが爲めに

(尚、この歌を彫つた石碑の盤石高さ一尺一寸餘、平面縦二尺五寸横三尺二寸五分、足跡長一尺五寸七分廣五寸三分、堅石高さ六尺餘、廣一尺五寸厚さ二寸とある。又第二の歌は拾遺集に、

山階寺にある佛跡にかき付侍る

三十あまりの二のすがたをそなへたるむかしの人のふめるあとそこれ 光明 皇后

とあるのを手がかりにこの第二の歌を光明皇后の御製としこの佛跡碑はもと山階寺(興福寺)にあつたものをこゝに移し建てたものだといふ説もある)

(大和志料上四六五―四七二、國史大辭典その部、木崎愛吉氏日本金石史、山川正信氏佛足跡の和歌集解)

**ぶつそらい 物徂徠**  
そらい「荻生徂徠」を見よ。

**ふてのさが 筆のさが**

江戸派の橋千蔭・村田春海の二人が香川景樹の味十首をとり出して酷評したもので、當時の歌壇に於ける江戸派・桂園派論争の有様を見るによい本。

**ふとき 大根太木 ?**

天明頃の江戸の狂歌師で、通稱を山田半兵衛と云ひ辻番受負を業とし傍ら狂歌を作つて楽しんだ。

**ふとき 風土記**

元明天皇和銅六年五月甲子制して諸國郡郷名はなるべく美名をつけ、且つその地方の天産農産、草木禽獸魚虫、土地の肥瘠、山川原野の名稱のいはれ、古老の言ひ傳へ等をも併せ記して奉れよと仰せられた。これによつて献進したものが即ち風土記であるが、その當時奉つたもので現存するものは常陸・出雲・豊後・肥前・播磨の五風土記だけで爾餘何々風土記と稱するものはすつと後のものであるから、區別する爲めに上述五ヶ國のを古風土記ともいふ(延長三年十二月十四日の太政官符にも風土記を徵す記事があり(朝野群載)坊間流布のものに「惣國風土記」と題するものもある(これは駿河の淺間神社の神官某の偽作だといふ)いはゞ一種の郷土誌とも名勝地誌とも謂ふべきもので、奈良朝散

文の「影を見るに絶好の資料となつて居る(日本古典全集第一輯古風土記集二冊及び故栗田寛博士の著によるが便利である)

**ふところすずり 懷硯 五冊**

井原西鶴、貞享四年(二三四七)の雜作で諸種の珍事異譚を記す。

**ふとん 蒲團 十一回**

田山花袋四十年の作で、自然主義小説の代表作として有名なもの。内容は「竹中時雄といふ已に一家を爲し子供も三人あり年も三十五六歳といふ中年の男が、未見の女弟子で非常に彼を崇拜してゐる地方の素封家の令嬢横山芳子の切望を入れて我が家に寄寓させ、創作指導をしてゐる中に、彼は次第にこの若くて美しい芳子に對して性欲的な戀愛を覺え、それをあるまじきことと自制自克する處に非常な苦痛を感じ、それを感づいた妻は品位を墮さぬ様にと抑へ、つひ世間普通の女房のやうに嫉妬がましい口をきく。と實は芳子には神戸女學院在學中已に「田中」といふ愛人があつて、その關係は上京後益々濃厚になつてゐることがわかり、時雄は表面師匠として怒ると共に内面中年の戀の敗殘者としての餘憤を込めて立腹し、國許の親を呼んでつれ

て歸らせ、芳子が去つたあとでその室に入つて、「抽斗を明けて見た、古い油の染みたりボンが其の中に捨て、あつた。時雄はそれを取つて匂ひを嗅いだ。暫くして立上つて袂を明けて見た。大きな柳行李が三箇の細引で送るばかりに絡げてあつて、其向うに芳子が常に用ひて居た蒲團――崩黄唐草の敷蒲團と綿の厚く入つた同じ模様の夜着とが重ねられてあつた。時雄はそれを引出した女のなつかしい油の匂と汗のほひとが言ひも知らず時雄の胸をときめかした。夜着の襟の天鷲絨の際立つて汚れて居るのに、顔を押付けて心のゆくばかりなつかしい女の匂ひを嗅いだ」

といふ「蒲團」といふ題もこれから來たもので、この作は自然主義の長所も短所も最もよく表れた作として是非一讀を要すといふ(作者をよく知らぬ余は自叙傳小説としては少し誇張味があるやうに想はれ、落想の如きは平面描寫といふよりも寧ろ極端な官能描寫で、長田幹彦・谷崎潤一郎兩氏の作品にでもありさうである。師弟の關係が戀愛關係と錯綜する題材は倉田百三氏の脚本「處女の死」にもあるが、内容は大ちがひでそこに作者個性の相違を認めると共に、自然主義と新理想主義の相違も認められる)(花袋全集第一編、五二一―



六〇七)

ふひと 史

一、もと職名としておかれたもの、ふみひき「書人」の義で履仲天皇の御代諸國の言事の記録を司らしめる爲めにこの職をおかれた。

二、後、姓の一種となつたが、矢張この姓の人は文章に關係ある職に居つた。史姓の人は神別には全く無く皇別には垂水史・田邊史・御立史の三種あるのみ。他は凡て蕃別である。即ちその種類は次の通りである。

鳥岐・朝明・沙田・楊胡・竹志・己改・道祖・大里・武丘・亮・眞城・楊公・高御丘・豊津・八戸

ふひと 藤原不比等(史、淡海公、文忠公)

一三一九—一三八〇、齊明七—養老四、六十二歳

藤原鎌足の第二子、文武の朝には律十卷令十卷の撰に與り、元正の朝には太政大臣に任ぜられた。その詩は懷風藻に五首出て居る。

ふほくわかせう 夫木和歌抄 三十六卷

室町初期の人、藤原姓、藤田長清の撰。中古の歌撰集に洩れた歌を四季・戀・雜と部立して編輯し、扶桑云云の靈夢の告げによりその字をさいて「夫木」と書名をつけたといふ。王朝文學の解釋上まゝ、この抄に原歌を

見出すものあり、近頃國刊本一期が行はれて居る。同會編の索引もある。關係書には、

- 僧西順 夫木集拔書 二卷
- ? 夫木抄類句 三十卷
- ? 夫木抄類標 五卷
- ? 夫木類葉抄 十二卷

などがある。

ふみもち 大伴書持 ?—一四〇六、?—

天平一八、

旅人の子、家持の弟、歌は萬葉の三、八、一七に出てゐる。傳記未詳。家持が越中守在任中天死、佐保山に火葬、十七卷に家持哀傷の歌がその自註に「斯人爲<sub>レ</sub>性好<sub>ニ</sub>愛花草花樹<sub>ニ</sub>多植<sub>ニ</sub>於寢院之庭<sub>ニ</sub>云々」とある。

ふゆつぐ 藤原冬嗣(閑院大臣) 一四三五

—一四八六、寶龜六—天長三、五十二歳

王朝初期の政治家にして且つ學者、右大臣内膳の子で桓武・平城・嵯峨・淳和の歴朝に仕へ左大臣に至り、薨後文徳天皇の御代太政大臣を贈られた。淳和天皇の朝には意見三條を奉り、嵯峨天皇の御代には勅を奉じて日本後記二十卷・内裏式三卷・弘仁格式等を主撰した。彼の歌は後撰集に、詩は凌雲集・文華秀麗集・經國集等に

入つて居る。

ふゆのひ 冬の日

貞享元年(二三四四)芭蕉及び門下の俳諧を集めたもので、七部集の一である(俳諧註釋集上)

ふるかはもくあみ 古河黙阿彌

しんしち「河竹新七(二世)」を見よ。

ふるのなかみち 古の中道

小澤蘆庵が歌論書。塵ひぢ・苜かび・惑問の三書を併せて云ふ。

ふるまろ 鹽屋古麿 ?

奈良朝の學者、元正の時には律令の刪定に與かり明法博士を授けられ、聖武天皇天平十二年(一四〇〇)藤原廣嗣叛亂のことに連座して配流せられたが間なく赦されて歸京大學頭任ぜられた。生歿の年未詳。詩は一首宴長屋王宅と題したのが懷風藻にある。

ふるまろ 紀古麿 ?

懷風藻の漢詩人で「望<sub>レ</sub>雪一首」と云ふ七言詩の前に正五位上紀朝臣古麻呂、年五十九とある。

ふるみち 小野古道 ?

江戸の入通稱謙益、初め醫を業としたが中途にして明を失し、専ら鍼術按摩を業としたが常に詩歌文章を好

み、賀茂眞淵が江戸に出た時卒先してその門に入つた。小野古道歌集一卷がある。

ぶんかう 馬場文耕 ?—二四一八、?—寶曆

八、一一、二五

近世、江戸の講談師にして雜著家、生れは伊豫で、本名は中井文右衛門(又、左司馬)江戸松島町に住んで講談を以て渡世してゐたが、時事に熱心で、事ある毎に之を手記し、己れの感想を加へて冊とし之を貸本屋に賣る。其文往々誹謗に渉るものがあつた。殊に「平假名森の掣」と題する小冊子は當時有名なる金森家の騷動を記し幕府が依怙の處置を攻撃したもので、彼は之を講談の寄席で聽衆に籤引で頒ち、はては一冊三百文に賣つてゐたのを幕府の偵吏がそのことを知つて彼を捕へ、嚴重に詰問したが、之にも屈せず益々時事を批評したから、遂に町内引廻しの上、淺草で獄門に處せられた。その著十數種、江戸著聞集・歌俳百人選・愚痴拾遺物語・盲千明一論等は其中で有名なるものである。

ぶんかうだら 文耕堂 ?

近世、浪華の戯曲作者、松田和吉のこと。老近松に踵いて起ち、筋立頓作の高才を以て稱せられた。一代の作二十餘篇、多くは他との合作である。處女作は正徳

三年正月の「河内國姥火」だがそれから久しく劇作なし、或はこの間老近松の助手となつて作劇の稽古をして居たものかと謂はれてゐる。次は享保七年九月「佛御前扇車」を近松の添削の下に出した。續帝國文庫第七編「文耕堂淨瑠璃集」に收むる作品は左の十四篇である。

- 一、正徳三年 河内國姥火
  - 二、享保七年 佛御前扇車
  - 三、同十五年 三浦大輔紅梅のおもつら
  - 四、同 信州姥捨山
  - 五、同十六年 鬼一法眼三略卷
  - 六、同 須磨都源平躑躅
  - 七、同十八年 車還合戦樓
  - 八、同十九年 應神天皇八百旗
  - 九、同廿一年 敵討襤褸錦
  - 一〇、文久三年 行平磯馴松
  - 一一、同 五年 今川本領猫間館
  - 一二、同 將門冠合戦
  - 一三、文久六年 伊豆院宣源氏鏡
  - 一四、文久十二年 敵討御未太鼓
- しかし彼の傑作と謂はれるのは御所櫻堀川夜討・鬼一

法眼三略卷・壇浦兜軍記・ひらがな盛衰記の四篇である

**ぶながく 文學**

審美的情緒、情操を技巧的な文字の方便によつて表現したもの云ふ。これは嚴密な意味での文學即ち純文學をさしていつたものだが、通常國文學と稱するものはかうした第一義的な純文學以外更に第二義的な準文學程度の作品をもこめ、人によつては苟くも文字によつて表現したものならば皆文學だといふ。これはあまりに廣義に失する。たとへば山東京傳がその著作の中に自家賣藥の廣告をしたが、その廣告文など今日街頭でザラに見られるピラヤ招牌の語句に見られるものとかはりはない。又宗祇法師見教訓や寛文の假名草紙や益軒の十訓や心學道話などはもと童蒙教訓の爲めに書いたものだが之を準文學程度に見るのが普通になつてゐる。處で、萬葉・古今以後の長歌・短歌乃至その他の韻文や源氏物語・枕草子といった風のもの之を教訓の爲めとか何とか云ふ譯でなく、作品それ自身の爲めに作られその想は確かに美感を盛つてあり、その文章は技巧のさえを示してゐるから之を純文學と謂つてよろしからう。文學の本質を詳細に論究するのは文學概論の任務である(鹽井正男氏文學研究・坪内銳雄氏文學研

究法・夏目漱石氏文學論・松浦一氏文學の本質・横山有策氏文學概論・本間久雄氏文學概論等)

**ぶながくかい 文學界**

雜誌、明治廿六年に創刊され北村透谷を中心に、島崎藤村・馬場孤蝶・星野天知・戸川秋骨・戸川殘花・平田禿木などが同人で、後には上田柳村も加はり、田山花袋も接近した。その傾向はロマンチックアイデアリズム(理想的傳奇主義)を根柢とし、眞面目に人生を考へ、新生命を把握しようとして苦悶する點は理知的だが、著しくセンチメンタルで、憧憬に生きる點は、主情的で眞面目で深刻で遊戯氣分のないところは後の人生派に近く、この三點に於て當來の新興文學を豫感せしめるものがあつた。

**ぶながくし 文學史**

文學の起原沿革を内面的に考察する學問、即ち文化史の一分科である。正確なる文献を豊富に蒐集し、透徹せる文學史眼を以て一國文學を一個の人格的實在と視、その生命の伸び來し已往の眞實を把握して如實に表明することが文學史家の最も望むべきところであるが、斯種方法的見解は最近に眼ざめたこととて、まだ之に該當するやうな立派な文學史はどこにも出てゐないと謂

つてよろしからう。

文學史中、我邦のみのそれを考究するものを日本文學史又は國文學史といひ、各國毎に支那文學史・英文學史・獨逸文學史……などがあるし、世界全體を對象にすれば世界文學史といふ(嚴密にいへば之にも内外二面の意味があつて、外面的な世界文學史は年次に繋けて關係聯絡の構ひなく太古より現代に及ぼすもので、内面的な世界文學史は世界全體を一國家の如く看做し、各時代の主流を中心に、漸次現代諸國に及ぶものないふ。實際はその又中間程度のものもあらう)

國文學史の中横に、時代を劃すれば上代文學史・中古文學史・近古・近世・現代各文學史があるし、縦に作品の種類によつて分けると小説史・戯曲史・詩史などがある(これについては拙著國文學史提綱附錄國文學史研究法に述べておいたので今は省略する)

**ぶながくひひやう 文學批評**

文學作品の本質と價値とを正當公平に評價し、作家に對しては將來の作に參考する所あらしめ、讀者に對しては正當にして高雅なる批評眼鑑賞眼養成に裨益あらしめることといふ。一般、姉妹藝術と同様、文學批評にも左の數種があ

る。

- 一、印象批評 無理由無前提に、自己の直覺によつて得た印象によつて下す批評
- 二、鑑賞批評 作者の作意に同情し作品の長所美點を高揚するもの
- 三、解釋批評 作品の文詞の意味や思想を訓詁的に釋明するもの
- 四、比較批評 作品を解剖分析して之を類似の他作品と比較對照し、之に適當の位置席次を決定するもの
- 五、歴史批評 その作品を作つた作者の個人生活その國民生活並びにその時代の大勢を闡明するもの

**ぶんきやう 花笠文京** 二四四五—二五二〇、

天明五—萬延元、三、七十六歳

實名は東條來甫、通稱を花笠魯介といひ、後代作屋大伴、魯鈍翁半空など號す。父は醫師、兄琴峯は儒者、彼は初め柴井町に書林を経營し、後日本橋室町に移り鶴屋南北に弟子入し、或年俳優尾上梅幸に從て浪花に到り、文章の代作を渡世とし（その頃代作屋大作といふ）江戸へ歸つてからも重に代作を業とした。その著は小

説・戯曲・雜著に屬するもので、縮織博多小女郎・玉藻前化粧姿見・代作文庫・幫間訓・料理通・淨瑠璃紀原考・歌舞伎雜誌等約三十種内外ある。

**ぶんくわしうれいしふ 文華秀麗集** 三卷

藤原冬嗣が嵯峨天皇の勅を奉じて弘仁八年（八一七）に撰進した漢詩集で、編輯に與つた人々は仲雄王・菅原清公・勇山連文繼・滋野貞主・桑原公腹赤などである。

- 一、現存作家のみ廿六人の作百四十八篇を集めた事
- 二、作者の階級によつて次第を立てず遊覽・宴集・餞別と様に類集したこと
- 三、今上（嵯峨天皇）の御製、皇太弟（淳和天皇）の同製の外は、良安世（良岑安世）野岑守（小野岑守）と様に支那風の作者名にしたこと
- 四、始めて女流の詩（姫大伴氏）をのせたこと

などがその特徴である（群、一二四、六、四九〇—五一三、日本古典全集第一輯）

**ぶんくん 文訓**

貝原益軒十訓の一つ（益軒全集卷三）

**ぶんげいけふくわい 文藝協會**

明治三十九年、坪内逍遙の主唱にかゝる劇研究の結社で、島村抱月・土井春曙・東儀鐵笛・水口薇陽等多くの

斯界熱心の人々が集まり、當來の國民劇につき理論と實際との兩方面について研究試演公演をつづけた。桐一葉・ヴェニス商人・ハムレット・新曲浦島等は明治期に演ぜられて褒貶共に反響の多いものであつたが大正の初めに解散した。

**ぶんけんがく 文献學**

文献によつて原始時代の人民の生活體様を明らかにする學問、つまり考證學の資料の局限せられたもの。即ち資料となるものは其國の上古の言語・文學・技術・歴史・宗教等の文献である。英のフヒロロギイ“Philology”に當る。

**ぶんごぶとぎ 豊後風土記**

- 一、大概出雲風土記と同じ頃のもの 平田篤胤
- 二、郷もあり里もあり古へざまのものに非ず 狩谷掖齋 每條千金
- 三、偽書なり 田能村竹田

などの諸説もあるが、要するに古風土記の一つとして貴むべき文献である（群四九五、一七、一一二四—一一二九、日本古典全集第一輯、古風土記集下卷）

**ぶつさん 村上佛山** 二四七〇—二五三九、文

化七—明治一二、九、二七、七十歳

豊前稗田村の人、名は剛、字は大有、通稱を喜左衛門といひ、始め筑前の龜井昭陽に學び、後京都に遊學して普く諸名流と交際し、大に詩藝を肥やしたが足疾を病んで起居不如意なので郷に歸り、帷を垂れて諸生を教へ終生身郷村を出なかつたが郷村の一邸一壑悉くその詩材に入り、秀吟少からず、人稗田を呼んで詩人村といふ。彼れ平生最も白蘇二集を愛讀し、又一稿成る毎にこれを机上に置いて毎日暮之に向つて再拜したといふ。佛山文集・佛山堂詩鈔・佛山堂詠史絶句鈔等の著がある。

**ぶんしやうさうし 文正草子**

常陸國の鹽商文正、鹿島明神に祈つて得た美しい女兒二人部に召されて一人は皇子（三位中將）の妃となり、一人は時の帝の女御となり、文正は宰相から大納言にまで進みその妻も二位殿とあがめられ、

「高きところに塔をたて大河に舟をうかめ小河に橋をかけ善根敷をつくし給ふいづれもく御いのち百歳にあまるまで保ち給ふ」

さいふ次第を綴る。お伽草紙の一種（校日本文學大系第十九卷）

**ぶんせんし 文泉子**

よもた、坂本四太を見よ。

**ぶんたい 文體**

文章の體様をいふ。分類礎の異なるにつれて種々なる文體がある。

- 一、國 國文・漢文・英文・佛文等
- 二、時 古代文・中古文・近古文・近世文・現代文
- 三、用語 文語文・口語文(常體・敬體)書簡文
- 四、形式 散文・律語(短歌・長歌・旋頭歌・催馬樂・神樂歌・今様・俳句・新體詩等)
- 五、用語や修辭の技巧 擬古文・普通文・漢文直譯文・歐文直譯文
- 六、用途 詔勅文・上奏文・廣告文・美文・日記文・隨筆文・報告文等
- 七、性 男子の文體・女子の文體
- 八、作家特殊の手法や技巧 華麗體・道勁體・素樸體等  
西鶴體・馬琴張等(拙著<sup>綜</sup>日本文法講話五  
一五―五二四)

**ぶんたいがく 文體學**

文體の種類法則等を研究する學問。

**ぶんちゆうくわう 文忠公**

ふひと「藤原不比等」を見よ。

**ぶんぼふ 文法**

一國の聲音・言語・文字・文章等につき科學的に系統立てたもの即ち文典のこと。

**ぶんぶにだうまんこくどほし 文武二道**

萬石通

天明中、明誠堂喜三二傑作の黄表紙で畫は行曆(歌曆門人)「頼朝公が畠山重忠に仰せて太平日を経て諸士文弱に流るゝを戒めらるゝにより、重忠は色々工夫して諸士の剛體をためし、逐一上進することを面白く作つたもの」(續帝三四・黄表紙百種四六五―四七四)

**ぶんめいいつとうき 文明一統記**

一條兼良が九代將軍義尙の依頼によつて治世處世の要訣を、

- 一、八幡大菩薩に御祈念あるべき事
  - 二、孝行を先とし給ふべき事
  - 三、正直をたつとぶべき事
  - 四、慈悲をもつばらにし給ふべき事
  - 五、藝能をたしなみたまふべき事
  - 六、政道を御心にかけるべき事
- として説いたもの(群四七六、一七、一八四―一八

九)

**ぶんめいとらせんし 文明東漸史 二卷**

藤田茂吉十七年九月の著、内篇は十九章天文以後天保末まで、即ち鎖國時代に於ける西洋文明の我國に輸入せられた経過を明らかにし、外篇は副史として渡邊華山・高野長英二氏の天保年間に於ける蘭學上の苦心と功績と當時の西洋文明輸入に關係ある二人の論文述作とを集め、著者としては寧ろ外篇に力點をおいて居る(明治名著集一九〇―二六三、但内篇だけ)

**への部**

**へんきよく 平曲**

平家物語の本文を琵琶に合せて語るもので、その起源は平家物語そのものと同じく不明であるが當道要集には性佛が日吉の社に參籠して左の示驗を蒙つて作曲したとある。

汝が榮種の二葉より學ぶ處の圓實頓悟五時八教の中に於て伽陀・稱名・引聲・和讃等亦我朝に於ては祝詞・神樂・風俗・催馬樂・詩歌・發聲の呂律を以て口説・拾ヒ・三重・初重・中音・中ユリ・サシ聲・折聲・甲ノ聲・

胸ノ聲・一ノ聲・二ノ聲・歌・祝詞・讀物・右十五の調子を以て音をうつし節をつくべし

この記事通りでないにしても平曲作譜者の心用意が在來諸種の音曲の攝取統整にあつたことが察せられる。生佛以後門人城一が之をつぎ城一の門人が二人あつて城元(文保二年歿)の方が八坂流、如一の方が一方流と稱した。吉野朝時代には有名な明石檢校があつたし、太平記鹽谷高貞讒死の處に眞都と覺一と相語りで源三位頼政が菖蒲の前を賜はる處を語つた有様を次のやうに寫してある。

眞都三重の甲を上げれば覺一初重の二に收めて歌ひすましたりければ師直も枕をおしのけ耳をそばだて聞く

殊に應永、永享の頃は椿一、城竹の兩檢校が出て平曲の最盛時を出現した。

(平曲者の階級は檢校・勾當・座頭の三つに分れてゐる。平家一部十二卷を百九十・百九十四・百九十七又は二百の各齣に分け、五句物・炎上物・揃物・讀物・灌頂五句・小秘事・大秘事などに大別して傳授したといふ。

平曲は始めどんな節であつたかよくわからぬ。今日世にある平家正節は皆徳川時代に出たものである。往年

鳥村抱月氏が自作の「佛御前」を藝術座に上場する必要上、平曲をとるとして京都で唯一人傳へてゐるお婆さんに就いて聞き取つたことがある。その節は國定讀本の「笠置落」の曲そつくりであつたと云はれた(高野辰之博士日本歌謡史・山田孝雄氏平家物語につきての研究)

へいけものがたり 平家物語 十二卷

鎌倉時代に出た軍記物語で、平清盛を中心として平家の榮枯盛衰を叙し、醜するに源氏の浮沈興亡を以てし宮家と公家と武家との戀愛・恩愛・藝術・宗教・神秘・縁起・教訓等をからませ流暢華麗の文を以て朗誦に適するやうに綴つたもの、軍記物語中第一の傑作と稱せられる。源平二氏は藤原氏に取つて代つた二名族で武士といふ新興階級の中心となり政治・經濟・文化の各方面の代表者となつてゐたから、それを取材し表現して成功した平家物語はとりも直さず當期の代表作である。作者は未詳であるが左の各説がある。

- 一、信濃前司行長 (徒然草)
- 二、葉室時長 (尊卑文脉・醍醐雜抄)
- 三、爲長 (臥雲日件録)
- 四、文事平大納言時忠 武事悪七兵衛景清 三位爲長

物語などはない處を見るとこれ等は後人の増補になるもので當初の原本は建久頃から承久の亂前に出てゐたのではないかともいふ(高木武氏・尾上八郎氏)

その文章は文調の緊縮してゐること、武語・佛語・漢語・俗語・雅語の折衷體なること、音便の増加してゐること、七五調が基調になつて大體朗誦に適してゐること、又事實琵琶に合せて語られもしたこと、素朴無技巧なること、目ざましい武者振りを思ひ切つた誇大法で寫したこと、取材着想が一體に詩趣に富んでゐること(殊に舊古典趣味に生きる人々を寫した小督・後徳大寺・忠度・敦盛等の節)人情描寫の緻密なること、無常迅速の人生觀照の文なること、實力本位の世相の記録なること、義理の爲めに人情を犠牲にした悲劇の叙事詩なること、回顧の感傷にも富むことなどが殊に著しい特徴であらう。

この書は又非常に異本が多くて、三卷・六卷・十二卷・二十四卷・四十八卷と各種の卷數の本があつて、約三十餘種に別れてゐるが、大別すると二種で、灌頂の卷を立てたものと立てないで同卷の内容を他本文中に挿んだものとである。そして一方琵琶の方に明石檢校覺一の一方流と八坂檢校城立の八坂流とが併立してゐるの

拮捨し玄惠法印剪裁して一書とした、その前後相共に評論するもの三十四人(臥雲日件録)

- 五、原文始め播州に在つたのを性佛が作曲して語りものとした(臥雲日件録)
- 六、桂大納言 (坊間の説)
- 七、六人の合作 (平家勘文、天地根元歴代圖)
- 八、信濃前司行長が原作を藤原時長・吉田資經等によつて増補せられた(山田孝雄氏・尾上八郎氏、日本古典全集解題)

坊間流布の俗説は採るに足らぬが他は相當に根據のあるものではあるがまだ考究の餘地があるやうである。年代についても寂蓮と範光との歌をまちがはす位だから、これ等入々の時代よりは大方後で、その點からも考慮を要するとも云ひ(松本愛重先生)文覺隱岐流謫の處に後鳥羽院の播遷を暗示する詞があるから承久亂後の作だとも謂ひ、源中納言の青侍の夢に、嚴島明神(平氏)・八幡大菩薩(源氏)・春日明神(藤原氏)とつぎつぎ節刀の受けわたしのある處は源氏三代の將軍の後に藤原頼經の將軍就任の前兆を示したのだから、この書は建長四年親王將軍の出現以前の作であらうともいひ(菅茶山筆のすさび)原本の一種八坂本には前記の夢

をみると、どうもこの種々なる異本の出來た原因は之を語る琵琶法師の流派の別にあるらしい。

明治以後公刊の本諸書は、

- 一、日文本
- 二、國文大觀本
- 三、國民文庫、八坂本古本
- 四、國刊長門本
- 五、梅澤和軒氏評釋、萩野檢校正節本
- 六、山田孝雄、高木武兩氏、校定平家物語、覺一本別本
- 七、通俗日本全史 盛衰記古本
- 八、日本古典全集 嵯峨本

- 評論として價值あるものは、
- 山田孝雄氏 平家物語語法の研究
- 五十嵐力氏 平家物語につきての新研究
- 尾上八郎氏 校定平家物語大系第十四卷解題
- 日本古典全集第一輯 平家物語解題
- 註釋としての善本は、
- 今泉定介氏 平家物語講義
- 内海弘藏氏 平家物語評釋

へいじやうてんわう 平城天皇 一四三四―

一四八四、寶龜五—天長元、七、七、五十一歳  
 第五十一代に當らせられ、桓武天皇の皇長子、御母は  
 贈太政大臣良繼女藤原乙牟漏、天皇長ぜさせられて聰  
 敏にして玄鑑宏達博く文書を綜べて又よく詞藻に長ぜ  
 られた御在位四年官制を改め、殊に中務宮内二省の官  
 制を簡潔にして父帝の御遺志を御實施になつた。惜し  
 むらくは寵妃藥子仲成の野心に關聯して南都の塵を蒙  
 らせられた。けれども天皇は元々奈良の愛好者であら  
 せられた。それも單なる愛好ではなく唐朝心醉の王朝  
 文化に嫌厭たるものあり奈良文化そのものに共鳴せら  
 れた——根柢ある奈良愛好者であらせられた。

ふるさととなりし奈良の都にも色は變らず花  
 さきけり  
 たつた川紅葉亂れて流るめりわたらばにしき中  
 やたえなん

などは古今集左註のいふが如く帝の御製ととりた。  
 その他の御製もこの古今集並に續後拾遺集に散見して  
 居る。又詩をもよくせられ凌雲經國二集に出てゐる。

へいしよくたん 秉燭譚 五卷

伊藤長胤享保十四年(二三八九)三月盡日の自序があつ  
 て刊行は寶曆十三年(二四二三)である。父仁齋の舊話

中古今の雜考に係るもの百九十一條を和漢混淆文に綴  
 つたもの。

へいちものがたり 平治物語 三卷

著者未詳、一説には葉室時長の作だといふが確かでな  
 い。平治の亂を寫した軍記物語・水戸彰考館本の参考  
 平治物語(國書刊行會第四期本)は五異本を對校し、  
 三十九種の參考資料を照合した善本である。註釋に  
 は左の二書、及び近頃各叢書の一部として入つて居  
 る。

内藤恥叟・平井頼吉 訂平治物語講義  
 今泉定介 平治物語講義

(國華六三、六九、七一の諸號保元平治合戦圖屏風一二  
 六號卷頭一、一八〇號二、三一八一號五、傳住吉慶恩筆  
 平治物語繪卷)

へいべゑ 富永平兵衛 ?

近世、延寶時代、京師の狂言作者で彌五右衛門と並び  
 稱せられた。演劇顔見世の役者付きに、狂言作者と記  
 するはこの平兵衛に始まるといふ。

へうじゆんご 標準語

國語統一の要求からその國に於ける模式的の語として  
 定められた言語をいふ。我國も明治以後國語問題の擡

頭と共に種々論議せられ、今日に於ては略々中央政府  
 の所在地即ち東京に於ける教養階級の語を以て標準語  
 とし、國定教科書などもそれを目標に語彙をあつめて  
 編まれて居る(保科孝一氏國語學精義)

へきぎよくしふ 碧玉集 六卷

室町期の歌人冷泉政爲の家集で、部立は四季・戀・雜と  
 なつて居る。柏玉集・雪玉集と共に三玉集と云つて當  
 時斯界にもてはやされた。尙ままた「冷泉政爲」を見  
 よ。

へきんどうら 河東碧梧桐 明治六、二、二六一

伊豫の人、名は兼五郎、號はその音をもちつたもの。  
 幼時已に父靜溪、兄黃塔等の俳句の感化を受け二十四  
 年上京後は同郷の先輩子規に教へられ、二高を中途退  
 學して専ら俳句に努め、二十八年子規略血後は代つて  
 「日本」の俳句の選をなし、子規の歿後「俳句は自然を寫  
 生する以上もつと深味のある趣味を發揮せればなら  
 ん。師の句は廣く我句は深い」と唱へて詞律と内容律  
 の合致を目標に「新傾向句」を主張し雜誌「海紅」を  
 機關として門流今も榮えて居る。大の旅行家で大谷句  
 佛上人の援助や自身六朝風の抑毫によつて得た報酬で  
 日本全國を踏破し、洋行も一度した。日本アルプス登

山流行の備を作つたのも氏である。日本俳句抄・三千  
 里・續三千里等の著や、雜誌に寄せた論稿創作は少く  
 ない(池田常太郎氏日本俳諧史五八五—五九四・中塚  
 一碧樓氏、海紅句集)

赤い椿白い椿と落ちにけり  
 上京や友禪洗ふ春の水

元日の屏風隠れに化粧かな  
 親を離れた君を無造作に迎へて火鉢

鳴が北へ北へ飛ぶ水尾の冬の旭

べつり 別離

若山牧水が廿歳(廿八年)から廿五歳(四十三年)頃まで  
 の詠歌一千首を選び集めたもの。著者はこの一集を以  
 て長へに己が青春と別離するといふので書名としたら  
 しい。

海の聲断えむとしてはまた起る地に人は生れま  
 た人を生む

大河よ無限に走れ秋の日の照る國ばら海に入  
 るなかれ

麓野の國にすまへる萬人を軒に立たせて阿蘇荒  
 る、かな

海なつかし君等みどりのこのそこにともに来ず

やといふに似て風ぐ  
琴弾くか春ゆくほどにもの言はぬくせつきそめ  
し夕ぐれの人

石井柏亭氏の装幀で巻頭に著者最近の小照がある(菊  
判半載三四二頁、明治四十三年四月十日、東雲堂書店)

### へめてん 變目傳

廣津柳浪、明治廿六年十二月作の小説。梗概は  
神田淡路町の洋酒卸小賣店埼玉屋の主人「傳吉」は母  
一人子一人の暮らしに小僧を一人おいて小規模に律義  
に堅氣に商ひ大事と稼いでゐる。年は今年で廿七、惜  
しいことには小人で醜男で、ゆきは六寸五分丈は三尺  
一寸人々呼んで侏儒と云ひ、又蜘蛛男とも云ふ。其變目  
傳と云はれるのは「顔は丸顔にして口元に愛嬌あれど  
も左の後背より頬へ掛け湯傷の痕ひつゝ、りになりて、  
後背を斜に斜に釣寄せ、右の半面に比ぶれば、別人なる  
が如く見ゆ。此にぞ變目傳の綽號は附けられける(三  
五〇)」とある。けれども老母は又ない杖柱と頼んで何  
でもよい嫁をと物色してゐる。處が傳吉にも人並の戀  
心は目覺めて彼は取引先の猿樂町仁壽堂と云ふ藥種屋  
の娘「お濱」に想をかけてゐる。「年齢は十六七にて此邊  
にて女親に羨まる、評判娘、容姿おしなべて十人並に

勝れ、兩親ともに早く別れて兄の手に成人たれば、兄  
も心を用ひて飾らせ白粉こそ濃からね花羞かしく粧り  
たり(三四五)」と云ふ年頃の美人で、傳吉などにも心  
よく愛想を云ふものだから彼は此を無上に悦んでゐ  
る。其上その手代がはりの主人の従弟の定二郎が  
擲擲半分に「お濱さんは傳吉様に大分思召がある」な  
ご様に嬉しがらせのひやかしをする。初めは戲談から  
出たことが彼には益々眞劍となり「それぢや仲立を頼  
む」と眞劍に出た。定二郎は元來放蕩無頼で主人の従兄  
に始終嗜められてゐるやうな人間だから、それを戲談  
半分に引受けてお濱が言ひもしもしいことを色々  
作りだして傳吉のことをこんな言つたとか「傳  
吉さんの許へ嫁けなけりや女に生まれた甲斐がないと言  
つてるの」と途方もないことを言ふが、戀に目の無い  
傳吉は之を眞に受けて愈々有頂天になる。「お安くない  
御奉公おごらなくちや可けない」とせがまれて、其爲  
には料理屋へも行けばその爲には吉原へも行つた。成  
らぬ中から二圓三圓の融通もした。其揚句には折角汗  
水たらし作つた二百圓近かり貯蓄も夢の間に消失  
せ、問屋へ不義理の借も出来たる上、辛苦經營せし家  
さへも抵當に入れ、其返済期限も早や數日の間に迫つ

た(三五八)傳吉心も心ならず、伊勢屋の番頭常藏が  
懇意なのでそつと其融通を頼むと「しつかりした保證  
人があるなら借さう」と云ふ。それには仁壽堂の主人  
勝之助がよからうと云ふので、定二郎にそのことを頼  
んで貰ふことにした。常藏は仁壽堂で調印の上で渡さ  
うと云ふので金を胴巻に入れて持つて来てゐるが出さ  
うとしない。一方債権者はピツツケく埼玉屋へ催促  
に行く。傳吉が居ないものだから老母は分らぬながら  
に一人で氣を揉んでゐる。窮した極はあるまじき心を  
起し、彼の常藏を小亭へ呼んで酒でもり潰し、更に吉原  
の馴染の樓に誘ひ出し其歸るさを太郎稻荷と北吉原と  
の間人氣のない田圃の中で手拭で締め殺した。殺した  
以後の彼が良心の苛責と當面の制裁に對する恐怖とは  
十七・十八の二節殊に四一三頁から四一五頁にこまか  
に記されてある。とど横濱へ逐電してさる遊女屋へあ  
がつてゐるところを捕へられた。定二郎も茲に至つて  
心から悔いた。主人勝之助に向つて「傳さんか此様事  
になつたのも原因はと云へば悉皆私から起つたのです。  
私が可い加減なことを云はなければ……私が傳さんを  
罪人にしたのも同様です(四三九)勝之助もお濱(も  
う此時は婚約済)も傳吉の罪を憫れに思つたと同時に

あの一徹物の執心に無氣味をさへ感じるものだから、  
せめてもの心やりに定二郎をしてお濱の名で半紙幾帖  
かを差入れてやり、一人の老母は仁壽堂へ引とつて世  
話をしてやつた(柳浪叢書三四三―四四一)

### へんせう 僧正遍昭 一四七五―一五五〇、弘 仁六―寛平二、

俗名を良峰宗貞と云ひ、學者として桓武天皇の御子と  
して有名な大納言良峰安世の子である。仁明天皇に仕  
へて知遇を得、從五位上藏人頭左近衛少將として時め  
いて居つたのに、嘉祥三年三月廿二日天皇崩御、深草  
の御陵空しく哀愁の煙のたなびくを眺め、やがて姿を  
暗まし叡山に入り、慈覺大師の戒を受け、三十五歳と  
云ふいまだしき年齢で出家し、

たらちればか、れとてしもうば玉のわがくるか  
みを撫ですやありけむ  
と述懐し、又の年の諒闇あけには、  
皆人は花の衣になりぬり昔のたもとよ乾きだ  
にせよ

と悲歌した。それより近畿諸國を遍歴して具さに修業  
を積み、一時雲林院を住持した後、花山の元慶寺の座主  
となつた。元慶仁和の間僧正に任ぜられて居たので、

世に彼を花山の僧正と云ふ。内外・朝廷の尊崇厚く、殊に光孝天皇はその七十の賀を内裡の仁壽殿に賜ひ、食邑百戸を下賜せられ、輦車宮門に入るを許され、學徳高き一世の僧正として、上下の信望の裡に一生を終つた。

彼は貞観・元慶年間の歌人として、所謂六歌仙の一人にかぞへられてゐる。古今集序には貫之が彼の歌態を評して、

僧正通昭は歌のさまは得たれどもまこと少し、譬へば繪にかける女を見ていたづらに心を動かすがごとし

と謂つた。云ふ心は「歌態はよろしいが着想が輕薄だ」と云ふにある。如何にも彼は輕快洒落な歌をよむ。

天つ風雲の通ひ路ふきとちよをとめの姿しげしとゞめん

名にめで、折れるばかりぞ女郎花我おちにきと人に語るな

世をそむく旅の衣は唯一重かさればうとしいざ二人れん

の如きは勿論、何とも無げの叙景にすら、蓮葉のにごりにしまぬ心もて何かは露を玉とあ

ざむく  
淺みどりいとよりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

よそに見て返らん人に藤の花はひまつはれよ枝は折るさも  
山吹に櫻吹きまき亂れなむ花のまぎれに君とまゐるべく

など一節をかしみを含めて居る。けれどもその人已に謹嚴端正の一貴族で一高僧であつた以上、その人格の表現もなくてはかなはぬ筈だ。即ち彼の歌は一面前例のごとき輕快洒落な趣に富むと共に、他の一面には熱烈眞摯の想を表してゐる。

前掲「たちれば」の如き「皆人は」の如き、或は、末の露本の雫や世の中のおくれさきだつためしなるらん

といひ、  
秋の野になまめきたてる女郎花あながしがまし花もひささき

さいひ、決して輕薄なものではない。つまり彼は構想にたけた歌人で、笑ふにも泣くにも何かな美的趣向なしには歌にしない人と思へば當つて居よう。之を天眞

の流露さながらに高唱する業平のそれと比較すると殊にその對照が鮮明になる。この意味に於て彼は古今集風の先蹤——否な時には新古今集風の新體をさへ隱約の間にほめかしてゐる歌仙と謂ふべきであらう。彼が詠は古今(一六)・後撰(五)・拾遺・新古今・續古今・玉葉・續後拾遺・新千載・三十六人撰等に入り、家集としては遍昭集(群二六五、九、一〇八九—一〇九二・續國五〇九—五一)があるし、歌話は大和物語にも散見する(國華二二九號二八三、一蝶筆僧正遍昭圖)

へんせうしふ 遍昭集 一卷

へんせう「僧正通昭」を見よ。

へんせうはつきせいれいしふ 遍照發揮

性靈集

「性靈集」を見よ。

べんのないし 辨内侍 ?

辨内侍日記奥書に「此辨内侍は閑院冬嗣公の一男中納言長良卿之末葉、中務大輔信實息女也」とあつて、鎌倉時代中期の女流歌人として名高い。父祖の素質を受けて歌文に秀で、後深草院の女房となつて宮中に奉仕し度々秀味を以てめでられたらしい。その歌は續古今(九)・新後撰(六)・増鏡等に散見してゐる。

折りがさすなぎの葉風のかしこまにひとりみちある小車の跡(増鏡烟の末々)  
(辨内侍日記にも彼女の歌が多く出てゐるが、日記そのものは別人の作だと云ふ)  
べんのないしにつき 辨内侍日記 二卷  
べんのないし「辨内侍」を見よ。

ホの部

ほうから 林鳳岡 二三一九—二三九二、萬治

二—享保一七、七十四歳

鶴峯の第二子、幕府の儒官、名は篤信、字は直民春常と稱し、研精勵志經書に通じ、詩律に耽嗜した。父春齋將軍の命により本朝通鑑を撰ぶことになつてから専ら彼が之に當つた。初め羅山の時忍陵に弘文館を建てたが、彼は台命を奉じて之を湯島臺に移した。その時



將軍綱吉親ら「大成殿」の三字を書掲せられ、彼は大學頭に任ぜられ、學徒は常に「げいに充ち満ちた」鳳岡林學士集」といふがその著。

ほうげんものがたり 保元物語 三卷

著者未詳。或説には葉室時長の作だといふ。しかし確證がない。保元の亂の顛末を三十九章に分けて叙述した和漢混淆文體の軍記物語である。原本は水戸彰考館本の参考保元物語（國書刊行會第四期本）が善本で六異本を對校し四十九種の關係資料をあさつたといふ。註釋には、

内藤聡叟 平井頼吉 訂 保元物語註釋  
三木五百枝 挿 保元物語講義  
鳥野幸次 保元物語評釋

等がある（日文九・國文大觀歴史部二・袖珍名庫文庫四〇・有朋堂文庫第一輯・校國五國華六三、六九、七一の諸號、保元平治合戦圖屏風）

ほうさい 龜田鵬齋 二四一四—二四八六、寶曆四—文政九、三、七十三歳

江戸の人、名は長興、字は稗龍、別號を善身堂と云ふ。折衷學の主唱者井上金蛾に師事し、山本北山等と共に大にその學風を世に布く。資性豪邁、博學洽聞名聲一

山越人系統の名俳、彼も亦父より俳諧を學び、寛政十年卅七歳にして江戸詰となり道彦の門に入った。自然堂鳳朗と號し權貴の門に出入して大に鳴り、蒼虬・梅室と相並んで天保三大家と稱せられた。その内甲は老練、乙は才藻、彼れは德行を以てたへられた。鳳朗句集といふのがある。

ほきいち 塙保己一 二四〇六—二四八二、延享三—文政五、七十七歳

武藏國兒玉郡保己野村の人、その先は參議篁に出てゐる。彼本姓は萩野、通稱は辰之助、號を水母子といふ。父宇兵衛陰徳家を以て近郷の尊敬を受け、加美郡藤木戸村の父老齋藤理左衛門の娘を娶り、その間に出來たのが彼で五つの年から肝を病み七つの歳に盲になつた（一説には十七歳とある）當時某なるもの太平記一部の誦讀を以て諸家に出入し生計を立て、あるのを聞て思へらく「太平記はたつた四十巻だけなのにあの通りだ。自分も少し勉強したならば學問で身が立たぬでもなからう」と志を立て、丁度その頃自分の村里へ來た絹商人につれられて江戸に行き、雨宮檢校須賀一の門に入った。當時の盲なみに箏・三絃・琵琶など稽古させたが一つも物にならない。その日に覺えたこと

時に上り、歐蘇の優長行流の體を以て物徂徠一輩の李王修流を排斥した。又晩年には書道にも心をひそめ草楷共に巧みであつた。その著に鵬齋遺文鈔・善身堂詩鈔・學政私議・北遊日記等がある。

ほうてうじらいき 北條時頼記

享保十一年（二三八六）四月大阪豊竹座上演、西澤一風・並木宗輔・安田蛙文等の合作。

「時頼の妾玉豊姫は、佐野源藤太の婿てにのつて時頼の妾月小夜の寢所へ鬼の面を被つて脅かしに入つたが、面が深く顔に喰ひ入つてとれない所から悔悟發心して出家し、時頼も出家して諸國行脚の途に上り、佐野の里で鉢の木のもてなしに遇ふ。時に常世は泰村、源藤太謀叛の徒を退治の軍に加はつて不在、妻と妹が夜と共に物語る身の上囁に常世の不遇を知り、時頼は鎌倉に歸つてから間なく彼に本領安堵三莊賞賜の沙汰を下した」といふ筋で大阪では竹本座の國姓爺以來の大當りを占めた（明治に入つて榮泉社・弘文館などから發行した）

ほうらう 田川鳳朗 二四二二—二五〇五、寶曆一—弘化二、一、二一、八十四歳

肥後熊本藩の藩士、名は義長、字は中立、通稱東源父鼎

はその夜に忘れ三年かゝつても何等得るところがなかつたにも拘らず、萩原宗因に物語や歌の本を習ひ、川島貴林に山崎流の神道や小學・近思錄の類を學び、松本織部正乘尹にも物を習つてこれ等は皆メキ／＼と上達するので近所合壁驚きの眼をみはつた。殊に乗尹の如きは公務多忙の身にも拘らず堅く契約して毎朝寅の刻から卯の刻まできつと教へてやり、人に語つていふには「彼は必ず他日成すあるの人だ。彼が盲なるこそ幸だ。若し清眼であつた位にはとても世間の凡くらこそりが合はないから制を犯す徒となることだらう」と。

雨宮は彼にまつては忘れられない大恩人である。彼はその一弟子たる保木野一（當時はさういつて居つた）に向つて云ふには「人には個性といふものがある。己れの長所によつて身を立てるがよろしい。もうその方に音曲を嗜めとは云はぬから、こゝ三年の間にこれと思ふ方向——盜賊と搏拘の外なら何でも許すから——を定めて申し出よ」との意を宣告した。彼は師の温情を多とし學問に身を委ねべく決意したが、生得病身とかく講學もはかどらない。そこで雨宮は又金子五兩を與へこの金が無くなるまで保養して來よといふ。彼は飽

くまでも親切な師を衷心感謝しつゝ、明和三年廿一歳といふに父宇兵衛と同道伊勢兩宮に参拜し、攝河泉紀和の名勝に放浪し、京の北野の天満宮に参拜してはいよいよ自分のあがめ神をこれと定め（これまで菅公にしようか豊公にしようかとたび／＼心に迷つたさういふ）六十日許の間にすつかり健康になつて歸つて來た。

當時宗因の門人で盲人で才のあるのは彼と横田茂語（字は孫兵衛）とであつた。宗因がいふには、

茂語は歌をむねとし讀書は是につげよ、保木は歌よむことをやめてもはらふみよむべし

と、乃ちその己れの門人たることを隠して彼を（宗因と眞淵とは學統相異なるより）縣居の門に入らしむ。

眞淵も深く之を愛して六國史などを授けたが、惜しむべし僅か半歳餘りで眞淵は亡くなつた。

安永四年正月元日、彼は勾當の位に昇せられ堀勾當保己一と稱した（保己一は文選の「保己安百年」から來た語だといふ。併し一説には彼が故郷の村名から來てゐるともいふ）

彼はこの勾當の位にあこがれ北野の神に千日の祈願をこめたのに九百日目に本望通りになつた。そこで師匠の家から離れて番町厩谷の北阪上の高井山城守が宅地

に移りすんだ（「番町で目あき盲に道をきき」といふ川柳はその頃のことを味んだもの）そこで彼が又思ふには「この調子で尙二千日の願をかければ檢校にもなれるだらうが、それは唯一身上の爲めのことである。何とかしてこの際廣く世の爲め人の爲めになる永久的に生命のある仕事が見たい……それには支那には漢魏叢書などを始め多くの叢書があつて非常に後進を益して居る。そこで自分も一つこれに習つて我國の古書の散佚せるを集めてたやすく良書を参考し得るやうにしよう」と安永八年己亥の元日から天満宮に大願をたて、ついで土手四番町なる東條信濃守が宅地に移り専らそのことに主力をそゝいだ（天明三年突然檢校に昇せられた）彼の名聲この頃より頗にあがつて礪川殿・市谷殿・麴町殿等皆御目通りを賜はつた。

寛政四年笄橋のほとりから火が出て江戸半分類焼の時彼の四番町の家もやけたので、しばらく他に寄寓して居つた。その頃上野國人驗者常照院なる人彼に面會を求め、

「我邦には神道歌道についてはその家々皆定つてゐるが「歴史律令」を講究するところがないから、その種の學塾を設けられよ」

と勧められたので翌六年七月六番町の宅地三百坪を貸し與へられてそこで開塾した。又群書類從の韻刻が進行するに連れて板木庫の用にとて品川村御殿山の下なる地一千六十坪をかし與へられた。文化二年正月には和學講談所が狭くなつたので表六番町八百四十坪を給はり大に規模を擴張した。享和三年十老の列に入り先例によつて京住まひをすべきところを、彼は特別の要件があるので江戸に止まることを許された。ついで江戸大城に詣で兩御所の謁見を賜はり「死して餘榮あり」とまで歎んだ。

文政二年に群書類從六百七十卷成る。更に渾身の努力をこめて、續群書類從一千八百部蒐輯の大業を完成した。その門人には屋代弘賢・松岡辰方・稻山行教・石原正明・中山信名など名家星の如く夥しい。彼は殊に源氏榮華に精通して居つた。燈が消えて「さて／＼眼あきは不自由な」と戯談をいつたのは、源氏物語帯木雨夜の品定めを講義中のことであつたといふ。

彼は又考證眼に鋭いところがある。水偏に義と旁し町とつゞけた町名を人々何まちかと思ひ惱んでゐた時、

それは「油町」だらう、無學の人が「油町とはどうかか」と聞き「サンズキにヨシだ」と教はり、同音で「由」を「義」と誤つたものだらうと謂つたが果してその通りであつたといふ。

又門人の一人山岡明阿その頃は淺草に居たが、その又門人に片山足水といふ人あり、宸翰の御願文一葉を愛藏した。ところが唯「太上天皇」さばかりあつて何帝ともわからないので知人間の議論の稱になつてをかつた。

保己一が試みにその本文をよませ「延禁之闕 宸居無勅 姑射之山 南樹不虧」といふ句に至つて「これは華園天皇の御宸筆である。なぜかといふに華園院が上皇の御時後伏見院も上皇でいらせられたので後伏見院を姑射と申し當今を延禁之闕と記させられたものであらうと。衆その説に服す。

嘗て上京の途信州を過り人から「姥捨の月は如何」と問はれて、

わが心なぐさめかれつ更科や姥捨山に照る月を  
見て（古今集や大和物語にあるもの）

の最後の「て」を「で」として盲人の味として答へたのは有名な話になつてゐる。尙彼の味で人口に膾炙するものは、

言の葉の及ばぬ身には目に見ぬも中々よしや雪のふじの嶺

紅葉げの碓氷のみ坂こえしより尙深からむ山路をぞ思ふ

などである。

彼は不具者にありがちな食欲とかひがみとかいふ風は少しもなかつた。そこで法兄豊一の遺産をもとらず師匠の雨宮が臨終財を譲つても受けなかつた。

最後に彼が一代の編者をあげておく。

群書類従・續群書類従・皇親譜略・椒庭譜略・螢蠅抄・花咲松・鷄林拾葉・武家名目抄・史料・耳食勞筆・水月文藻・松山集・總隱集(逸見忠三郎氏慶長國學者史傳、一二六一—三二二、群書類従略解題卷末附録、温古堂塙先生傳同塙前總檢校年譜)

ほくかい 江村北海 二三七三—二四四八、正徳三—天明八、二、二、七十六歳

播磨明石の人、名は綬、字は君錫、通稱は傳左衛門。始め俳諧を好んだが藩儒梁田蛻巖の説を聞いて大いに感奮し、京に出て經學を修め儒家江村氏を嗣いだ。けれども彼の天分は寧ろ漢詩にあつてこの方で名を天下に馳せた。その家集に北海詩文鈔あり、又その編日本

詩史五卷は斯道の好參考とせられ今「日本詩話叢書一」に入る。

ほくかい 片山北海 二三八三—二四五〇、享保八—寛政二、六十八歳

越後新潟の人、名は猷、京都へ出て折衷學を修めたが、天分の才は寧ろ作詩の方面にあつたので後大阪に移り詩社を結んで混純社といふ。その著に混純詩社會稿・北海集などがある。

ほくざん 山本北山 二四一二—二四七二、寶曆二—文化九、六十一歳

江戸の人、名は信有、號は孝經樓、井上金蛾の門に入り、その高足として師と共に折衷學を唱道した。孝經樓漫筆・作文志教等の著がある。

ほくし 立花北枝?—二三七八、?—享保三、五、一二

本名次郎右衛門、加賀金澤の生れで前田侯に仕へて刀研師をつとめたが、性來俳諧を嗜み、始め檀林風を慕つたが、芭蕉が北國行脚の際見つけ出して弟子入りな許し、遂に蕉門十哲の一人にかぞへらるゝまでになつた。だがその俳諧史上に於ける功績は作句よりもむしろ正風を北越地方に流布せしめた點にあるといはれて

ある。その作北枝句集・北枝俳文は俳文九に收められてある。

帆柱に並ぶや霧の向ひ鳥

淋しさや一尺消えて行く螢

池の星またはら〜と時雨哉

彼は又崎行に富んだ人で、始め家が焼けた時は、

焼けにけりされども花は散り澄し

さ云ひ、二度目に焼けた時、知人が、

もろともに硯も筆もすみとなる烟の中に一句作

塵生

と見舞を述べたら、

もろともに硯も筆もすみとなりその言の葉をか

く物ぞなき

と即答した。

ほくしのふ 新劇 牧師の家

中村春雨四十三年五月十日公表の脚本「暗い前半生を持つた兼子は藤原牧師に嫁いだ」が牧師には先妻の子信一があり、兼子にはアメリカで醜業婦を稼いだ頃産み落した鞠子さいふ連れ兒がある。兼子はせめて後半世を清いクリスチャンとして暮らしたいと思つて教會堂の新築費に一萬五千圓を寄附した。鞠子は父牧師の愛

が信一にのみ注がれるのが嫉ましくして新築中の塔から信一を突落して死を致さしめたが、誰一人それを知らぬものなく唯、神の攝理として受難者の涙をそゝいだだけであつた。獻堂式も無事終了した夜「潮金平」といふ海員が來て兼子に「金に困つて居るから二千圓くれ」とねだる。兼子は蒼くなつて拒んだがいつかなきかない。後刻出直して來るからそれまでにつもりしてくれよといひ去つた。潮金平も實は嘗ては兼子がお得意の客の一人なのであつた。「もし金を出さなきやあ一切がつかいさらけ出してやらう」これが潮の強迫であつた。鞠子は新思想の女子で、無神論者で、虚偽の社會を嫌つて、今嫁入盛りの年齢なのに、父母や植木老牧師とドシ〜議論する。鞠子の意見や自分の反省で兼子の自我が段々と目ざめて「なまじひ牧師夫人の地位に執着すればこそこんな苦しい思ひをせればならぬ」といふので、夫の前に凡てを告白する。藤原も一時は驚いたが次第に和解して、兼子を許すのみかどうも神の存在を否定したいやうな思想が擡頭しかけた。潮金平は鞠子の主張に共鳴し、鞠子も潮と海上の生活を望んで、一方工學士との縁談もあつたけれどもそれを棄て、潮に連れられて船に行く。兼子快く二千圓を

與へようさいふが潮は「今ではそれに及びません」でも鞠子の化粧料に「鞠子」お化粧なんかするものか」とてサツサと出かける

といふ筋で飄々臭味もあるがイブセン劇の好い模倣として當時稱讃を得たものである(四六判四九二頁、明治四十三年五月十日、名著刊行會)

ほくする 若山牧水 明治一八、八一

日向の人、延岡中學時代已に和歌を以て頭角をあらはし、卒業上京して尾上柴舟の門に入り、前田夕暮と共に「車前草社」を結び四十年「海の聲」以來、別離・路上・みながみ……くろ土・山櫻の花と十餘の歌集を出した。他に若干の紀行・隨筆・歌話などもあるが、現代に於て全人格的に短歌に生きて居る第一人者である。

ほくするかわ 牧水歌話

若山牧水の短歌観を見るに、第一編は「和歌評釋」として柴舟・品子・夕暮の三氏並に自分の短歌を評釋し、第二編は「歌集を讀む」として相聞・酒ほがひ・朝夕・收穫の四集の讀後感を掲げ、第三編「秀歌をおもふ心」第四編「感想断片」となり「編輯後記二篇」が巻末にある(四六判三四〇頁、明治四十五年三月一日、文華堂)

ほくせい 草村北星 明治一二、三一

肥後の人、名は松雄、東京専門學校文科を卒業し、小説、演子・澄子等約三十種の作品を出し、後書肆隆文館を経営して居る。

ほくたん 栗柯亭木端

徳川時代の狂歌師で大阪の人、教を鯛屋貞柳に乞うた。

ほくどう 立花牧童?

東山天皇の頃の人、北枝の兄で通稱次郎右衛門、金澤で刀磨師をして居たが始め談林の伴に遊び、後正風に歸した。その著に俳諧百太郎がある。

輕薄を申し盡して歳暮かな

ほくぼうさんし 北邸散史

さかのや「矢時嵯峨の舎」を見よ。

ほくへん 北邊

しげあき「富士谷成章」を見よ。

ほくやう 半井ト養?

名は奇雲、徳川時代、堺の醫師で、牧養軒法印雲也の子、その先祖は牡丹花宵柏。彼は幕府に仕へて侍醫となり、大和守と稱し永らく江戸鐵砲洲に住んで居た。性來和漢の學を好み、松永貞徳について俳諧を修めた

が殊に長じたのは狂歌であつた。その作はト養狂歌集一卷(安永九庚子年十一月京都頼田正三郎發行のものは二冊本)同拾遺一卷に収めてある(今國刊一期新群一〇にあるト養狂歌集は春夏秋冬と部立して一卷)

戌の年の春よめる

春たつた霞もたつた松たつたこれぞさんたのいのの年かな

寛文三年うしのゑとなれば

午ならば如何ほどはれん丑の年寛文三年さてもはれたり

類火にあひて

丸やけのつれなく見えし我屋敷あか土ばかりうきものはなし

堺少林寺の丁代ト養が古き薄羽織を常に

着しけるを嘲り途中にてよびかけ

我見ても久しくなりぬ其羽織

跡見返りて

貴様の袴いく世へぬらん

ほくやうしん 牧羊神

故上田敏博士の詩(牧羊神・汽車に乗りて・ちやるめら・踏繪・啄木との五篇)と譯詩とな竹友藻風・與謝野寛

兩氏の集めたもので「海潮音」共に著者の名を不朽にすべき好詩集と謂はれて居る。編者巻末の語を引くと、

竹友氏

「この詩集に收められた創作の詩はいづれも先生の所謂象徴詩の部類に屬すべきものではない「海潮音」の序文にも「素姓の然らしむる所が、譯者の同情は寧ろ高踏派の上であり、はたまたダヌンチオ・オパネルの詩に注げり」とあるやうに、先生の詩想は源を希臘・羅旬の文學に發し、文藝復興期を経て近代に流れる大雅の一脈であると共に、深くこの日本の風土文明に根を下したものであることを忘れてはならぬ。驅使縦横を極むる騷章麗句の間に、卒然として身に沁みわたる古歌小唄或は謡曲長唄などの遺韻を耳にするかと思へば、調は一轉してひろく舒び、ゆるやかに廣がり遠くレスボスの松風濤聲或はシチリヤの原に眞晝の静寂を破つて鳴響く牧童の笛の音に溶け入るやうなところがある。先生は詩に依つてその豊かな精神生活を披瀝し、これに適當な表現を與へようとせられた。先生の詩はその思想感情から生れた身振りである。長篇「牧羊神」には先生の人生觀を示して終始愛讀せら

れたモリス・マアテルリンクの思想にも相通ふ點があり、  
 「踏繪」には天草は農人、五島には勇魚とる子の信仰に殉ずる敢行決意の精神を讀へてつれづれ尊敬せられた。ロバート・ブラウニングの詩風に呼應する所がある。

途のはづれにふと聴いたちやるめらの音にも有爲の奥山道遠く、夢は雲居に身は浮世なる悶を感じ汽車の窓よりかりそめに見る村童にさへ産土の愛に堪へずして思はず「萬歳」と叫ぶ

これ等はただ象徴詩と呼ぶには餘りに廣かつ自由である。國文學に類例のない完全な叙情詩思想と言葉と  
 の見事な調和と言ふより外に名義の下しやうがない。先生の詩が不朽を豫想せしめるのもその理由のひきつはここにありと信ずる。」

與謝野氏

「この牧羊神を繙くときは博士の志であつた詩の創作が前の「海潮音」以上に飛躍を示して、彼れに於て病とした重厚沈鬱の趣に代るに暢明快豁の氣象を以てし、古代希臘の典雅に拉典氣質の透徹と高華と自由さを加へたる如き創新の詩風を建てられ、その背に無限の幽

愁を負ひながら飽迄も人間の完成を肯定し追求する博士の思想の展開されたのを見ることが出来て、誰れも博士の最も精神的な自畫像に對する喜びを感じるのである……

折々の詩壇の流行は如何にあらうとも自分は永久に詩壇の新人を鼓舞し、日本人の感情を優しく健かにする一つの泉源が「海潮音」と「牧羊神」とを併せて確かに上田博士の詩にあると思ふ」

今その詩風の片鱗をあげて見ると、

牧羊神

阜の上の森陰に直立ちて  
 牧羊の神バアン笙を吹く。

晝さがり日暖かに風も吹きやみぬ  
 天青し、雲白し、野山影短き

音無の世に、たゞ笙の聲、  
 ちよう、りよう、ふりよう、

ひうやりやに、ひやるる、  
 あら、よい、ふりよう、るり、

ひよう、ふりよう、  
 ……………

人の世に尊きものは  
 土の香ぞ、國の御魂ぞ。

偽の市に住へば  
 産土の神に離りて

養をかきたる人も、  
 植安の郷の土より

生ぬきのなれに呼ばれて  
 本然の命にかへる（踏切近く、乳呑兒負へる少女の

「萬歳」と囃し立てるに呼びかけた一節）  
 踏繪（この集で一番表現の生鮮なもの）

眞鍮の角なる版に  
 ビルセンの像あり、

諸の弟子之を環る  
 母にてなとめ

わが兒のむすめ  
 歸命頂禮、サンタ、マリヤ、

……………

見よかゝる殉教の士を、  
 天草は農人、

五島には鯨とる子も

……………  
 名に負ふバアン吹く笛の音に、

この天地のものみなは、  
 擧りて群れあふくまれて、

身も世も忘れ、處、時の  
 辨別も無き酔心地、

夢見る心地誘ふなる  
 不思議の笙の笛の聲、

悠やかに朗かに、あんなら緩やかに、  
 森の泉に来て歎く

舒姫さへほゝゑませ、  
 谷の八十隈吹き蹴け、

人里遠く傳はれば、  
 牧人笛を擲ちて、

羊蹄をひとをどり、  
 生の悦びみちわたる

……………  
 汽車に乗りて、

……………  
 萬歳はなれにこそあれ、

幾年を生きよ里の子、

ガリレヤ海の  
海人の習と  
悲節を守りつぐ。

けれどもこの書の大部分は海潮音以後象徴派詩人及び近代詩人の名篇の名譯を以て充たされて居る。その原作者は、

トリストラン・コルビエル 蟾蜍  
ジュウル・ラフォオルグ お月様の悲歎ぶし・月光・ピ  
エロオの詞・日の出前の對話・冬が来る・日曜・日  
曜日

モリス・マアテルリントク 湯室・祈禱・愁のむろ……  
ろ・病院・燧玉・めつき  
エミール・ヴェルハアレン 都會・思想・世界・俊傑  
フエルナン・グレエグ われは生きたり  
ボオル・フォオル このをとめ・別離・小歌  
ギイ・シアルル・クロオ 窓にもたれて・謔語  
レミドゥ・ガルモン 葵・雪・柘冬青・薔薇連禱・むか  
しの花・立木の物語  
の七家でその詩は皆で三十篇ある（四六判三六一頁、  
大正九年十月五日、金尾文淵堂）

ほくりじふにとき 北里十二時  
石川雅望の「江戸吉原の記」とも謂ふべきもの。江戸吉原に於ける卯の刻から寅の刻まで一晝夜を擬古文で寫したるもの。温知叢書五にあり。

ほけいしふ 慕景集  
太田道灌の家集。だうくわん「太田道灌」を見よ。

ほしすみれは 星莖派  
明治三十三年四月與謝野鐵幹が発刊した雑誌「明星」の一派の詩人をいふ。鐵幹を初め薄田泣菫・蒲原有明・平木白星・前田林外・岩野泡鳴などが主なるもので、その詩の題材は女性的な華美・柔弱・繊細を以て愛殊に戀愛を歌ひ、可憐優美な詩材として星・莖・百合・紫・紅などの語を多く用ひたところから負うた名である。

ほそかはげんしききがきぜんしふ 細川  
玄旨聞書全集 五卷  
細川幽齋の歌道に關する説を聞書したもの。

ほつく 發句（俳句）  
はいく「俳句」を見よ。

ほつこ 發語  
音調を優美ならしむる爲めに他語の上におく「語」といふよりは「音」といふに近いもの、それ一つ離れては何

等意味の無いもので我國文特有の修飾語である。  
例、さわたる か黒き い笹を笹 いゆきはゞかり等

ほつしんしふ 發心集 三卷  
鴨長明の隨筆、佛教に關する事件及所感を記す。和漢混淆文（大佛叢中同書佛教全書刊行會發行、史、二三）

ほつちやん 坊ちやん  
夏目漱石、廿九年四月一日作の小説。梗概は

「親譲りの無鐵砲で損ばかりして居る坊ちやんは、物理學校を出て四國の或中學校へ月俸四拾圓で聘せられて久しく住み馴れた東京と長らく面倒を見てくれたお清婆さんとを後に箱根より西の西の任地へ赴いた。校長は眞面目に細々と師たるもの、心得を説いた。坊ちやんはぶつきら棒に「そんなむつかしいことは私には到底出来ませんから辭職します」と云ふ「マアさう窮寫にとらなくとも其つもりで居ればよいのだ」と云ふことになつてヤツと出勤しかけた。同僚にはいるんなのが居る。教頭の赤シャツ（文學士）、數學の山嵐（堀田）圖畫ののだい、英語のうらなりの唐茄子（古賀）など。赤シャツは氣どりやのにやけた質で此節マドンナと云つてもと古賀の許嫁であつた遠山の令嬢を横取してゐる。のだい、こは赤シャツの帯つけになつてゐる。山

嵐は天下の志士はおれ一人と自任して剛直自ら持すること頗る重い。坊ちやんは此人と肝膽相照らした。赤シャツは山嵐の勢力を牽制しよう云ふので坊ちやんを我黨に引き入れようとして釣に誘つたりなんかする。坊ちやんはなか／＼其手は喰はない。生徒は随分いたづらをする。坊ちやんの行動を誰か々嘆きつけてはポールドに落書する。一つ天鉄羅四杯也。但し笑ふ可からず（二七九）それを叱ると又「天鉄羅を喰ふと減らず口が利きたくなるものなり」と書く。次には「團子二皿七錢」「遊廓の團子旨い／＼」などと書く「赤手拭」を評判する「湯の中で遊ぶべからず」とも書く。厭だけれども是も四十圓の中かと思つて辛抱してゐると宿直の夜にはバツタを五六十疋もほりこんだ。翌日は之が處分に就いての職員會議で山嵐は硬派（坊ちやんも）赤シャツは軟派（寛大の處置をとつてやつてほしい）と其中古賀は延岡中學へ轉任になつた。本人不本意なのに赤シャツ等は本人の希望で運動した結果のやうに云ひふらして居た。送別會の席では又候山嵐が皮肉な演説をして赤シャツ一派をやつつけた。坊ちやんは大に我意を得たと云ふ調子で、

「ハイカラ野郎だけでは不足だし、ハイカラ野郎の、

ベテン師のイカサマ師の猫つ被りの香具師のモモンガ  
1の、岡つ引きの、わん／＼鳴けば犬も同然な奴とで  
も云ふがよい(三七〇)

さ云ふと山嵐は君は單語を澤山知つてると云つてあき  
れた。  
赤シャツと、のだぬきとは深夜藝妓を角屋へ招んで構  
曳をしてゐる。それと知つた坊ちやんと山嵐は、宵か  
ら其前の家に見張して二人の歸るところをウンとやつ  
つけて、

取締上不都合だから蕎麥屋や團子屋へさへ這入つて  
行かんと云ふ位謹直な人がなぜ藝者と一所に宿屋へ  
泊り込んだ(四〇六)

といつて兵糧に持つて来た生卵子をした、かのだぬき  
の顔へ投付け顔中を黄味だらけにした。坊ちやんは手  
紙で退職願を出して山嵐と一緒に新橋まで歸つた。

私儀都合有之辭職の上東京へ歸り申候につき左様御  
承知被下度候以上(四〇八)

坊ちやんは多くの人々の誰しもが一度は通過する中學  
校の生活を取材したもので、一時は學生間に非常  
に愛讀された。併し中學教育其もの、描寫としては何  
等眞髓に觸れてゐない。唯生一本の口の悪い腹の正直

な痰阿をよく切る江戸ッ兒を痛快に(稍誇張して)寫し  
てあるのがよい(漱石全集第二卷二四九―四一〇)

**ほつま 秀眞** しんだいも「神代文字」を見よ。

**ほづみわらじ 穂積皇子** 一三〇三―一三七

五、天智二―靈龜元、七十三歳  
天武天皇の御子、一品太政官知事、御歌は萬葉の二、  
八、十六及び風雅集に出て居る。

**ホトトギス**

日本派俳句の機關雜誌。初め伊豫の松山で極堂が經營  
して居たものを三十一年に東京へ移し、高濱虚子が編  
輯の任に當り、爾後今日に及んで居る。俳句廣布の上  
に功あるのみならず寫生文や根岸派の短歌も本誌に發  
端し、漱石・虚子の小説も本誌がその苗床となつた。  
今座右に在るもので一部の目錄をあげておく。

第五卷 第一號 (三十四年十月卅日)

題辭 一 鳴雪

五卷一號のはじめに 一 碧梧桐 三 虚子

蕪村句集講義(四十四、夏十五) 五 虚子

矢口渡 一二 碧梧桐

汽車待つ間 一六 虚子

ほふしやうじにふだうさきのくわんばく  
だじやうだいじん 法性寺入道前關白太

**政大臣**

ただみち「藤原忠通」を見よ。

**ほりかは 待賢門院堀河**

神祇伯源顯仲の女、出でて鳥羽天皇の皇后待賢門院藤  
原璋子(一)に仕へたが生歿の年月不明である。歌は、

金葉(六)・千載(一五)・新古今(二)以下代々の勅撰集並  
に久安六年百首・大治三年西宮歌合に採られ家集に待  
賢門院堀河集一卷(群二七九、一〇、三四九―三五四續  
國七九四―七九八)がある。

**ほりかはうだいじん 堀河右大臣**

よりむね「藤原頼宗」を見よ。

**ほりかはがくは 堀河學派**

伊藤仁齋の唱へた古學派のこと、仁齋の邸が京の堀河  
に在つたので面かいふ。

**ほりかはひやくしゆ 堀河百首**

「堀河院初度百首」を見よ。

**ほりかはあんおんときひやくしゆ 堀河**

「堀河院初度百首」を見よ。

院御時百首

「堀河院初度百首」を見よ。

巴里消息	二〇	不折
ホートサイド來信	二四	不折
募集文章「孟蘭盆」	二六	虚子選
俳談會記事(第一回)	三八	虚子記
募集俳句 道路(秋)	附一	鳴雪選
東京俳句界	附一	
地方俳句界	附一三	
隨問隨答(一九)	附二二	
消息	附二三	
新刊	附二四	
次號課題	附二五	

**ほととぎす 不如歸**

徳富蘆花の出世作、少壯海軍士官川島武男と新妻浪子  
(陸軍中將子爵片岡毅の令嬢)との清愛を描いたも  
の。脚本にも改作せられ、舞臺にも上され、溝口白羊  
の唄もあり、繪葉書もあり、明治の小説中恐らくは一  
等一般化された作品であらう(四六判三八四頁明治卅  
三年一月十五日民友社、只今余が座側において居るの  
には大正元年十月廿五日發行百廿三版の奥附がある)

**ほふしもん 法師門**

芭蕉の門人稻津祇空の始めた俳諧の一派。

ほりかはるんこうどひやくしゆ 堀河院  
後度百首 (次郎百首、永久百首、永久四  
年百首)

後鳥羽天皇の永久四年(一七七六)十二月廿日時の歌  
入七名のもが、各自の咏百首を集め之を四季・戀・雜  
に部立したもの。歌人は源顯仲・藤原仲實・源俊賴・源  
忠房・兼昌・皇后宮女房常陸・六條院女房大進(群一六  
八、七、七四四―七六二)

ほりかはるんしよどひやくしゆ 堀河院  
初度百首 堀河院御時百首・堀河院太  
郎百首 二卷

堀河天皇の康和年中十六名の歌人が各自の咏百首づ、  
を集めて之を四季・戀・雜とわけたもの。歌人は、  
藤原公實・大江匡房・源國信・源師頼・藤原顯季・源顯仲・  
藤原仲實・源俊賴・源師時・藤原顯仲・藤原基俊・權少僧  
都永縁・阿闍梨隆源・前齋院肥後・高倉一宮紀伊・前齋院  
河内(群一六七、七、七〇六―七四三)

ほりかはるんたらうひやくしゆ 堀河院  
太郎百首  
「堀河院初度百首」を見よ。  
ほりかはるんにつき 堀河院日記

さぬきのすけにつき「讃岐典侍日記」を見よ。

ほりだしもの 堀出しもの  
櫻庭箕村が初めて纏まつた小説を作つたその題目で、  
又氏を有名にした出世作である(明治廿二年五月廿九  
日、新著百種第二號一―八二)

ほんかどり 本歌取り

古歌を地にふまへ、若くは古歌を換骨奪胎して別に新  
味ある歌をいふ。新古今集頃から多く見られ出した。  
例「本歌 くるしくもふりくる雨か三輪がさき佐野  
のわたりに家もあらなくに

新 駒とめて袖うちばらふかげもなしさのの  
わたりの雪のゆふぐれ  
本歌 たをやめの袖吹き返す飛鳥風都を遠みい  
たづらに吹く

たをやめの袖吹き返す飛鳥風たゞいたづ  
らに春雨ぞふる

ほんせつ 本説  
和歌や連歌に引用せられる故事をいふ。

ほんてうあういんひじ 本朝櫻陰比事  
五卷  
井原西鶴、元祿二年(一六八八)の著。雜著とも隨筆とも

法曹的小説とも教訓物語とも見るべきもので、判決例  
を集めた板倉政要十册、支那南宋の桂萬榮が棠陰比事  
三卷(疑獄集)などを取材し、裁判事件を通じて見た  
る世相と之に對する教訓とを綴る(日本古典全集中西  
鶴全集第二・帝文二四、西鶴文粹上卷)

ほんてうすゐごてん 本朝水滸傳 (吉野  
物語) 十卷、九册

建部綾足作の雅文小説で明和十年の出版、萬葉の吉野  
仙柘枝の故事を採り、味稻翁が柘枝仙女と契つて産ん  
だ百人の子が四方に散じとど惠美押勝が道鏡を滅すべ  
く、近江の伊吹山に兵をあげる段になつて百人とも集  
まるといふ筋で、琵琶湖を以て支那の水滸に比したも  
の。道祖王・監燒王・不破内親王・清曆・豊成・家持・泰澄  
などの人名は續日本記から採つたもの。十巻だけでは  
未完結だといふので安永二年に再版を出したが時好に  
不向で行はれなかつた。文も趣向もまだ不熟だが水滸  
傳翻案物の逸早い方で類作流行の備を爲し、殊に馬琴  
の八犬傳を思ひ立つたのもこの作が動機であつたとい  
ふから歴史的の價値は特筆すべきである(帝文三二)  
ほんてうすゐほだい 本朝醉菩提 十一卷  
山東京傳文化三年(二四六六)作の讀本、小説で、前

作昔話稻妻表紙の續篇。一人、一段の興趣は充分發揮  
せられて作者苦心のあとわかるが、渾然一融の妙趣  
に乏しく小説としては稍々失敗の作だと謂はれてゐる  
(榮泉社發行)

ほんてうぢよかん 本朝女鑑 十二卷

淺井了意作の假名草紙。古今名媛の美譚を賢明・仁智・  
節義・貞行・辨通・女式等に部類し繪を挿んで兒女の教  
訓に資す。

ほんてうつがん 本朝通鑑 二百七十二卷

徳川幕府の命により林羅山が稿を起し、その子鶴峯の  
時に完成した國史で、神武天皇から後陽成天皇に至る  
御歴代の事蹟を漢文で書いたもの。

ほんてうにじふしから 本朝廿四孝

明和三年(二四二六)正月十四日、竹本座上演、作者は近  
松半二・三好松洛・竹田因幡・竹田小出雲・竹田平七・竹  
本三郎兵衛の六人。

「山本勘助の遺子慈悲藏・横藏が越後と甲斐へ分れて  
仕へ、慈悲藏は直江山城守、横藏は父の名をついで山  
本勘助といつた。慈悲藏の孝心天に通じて寒中に母が  
所望の笥掘りに行くと笥はなくて掘り出したものは亡  
父が遺寶の六韜三略の巻であつた」といふ。題名はそ



の孝道から来て居るがこの劇の主想は寧ろ甲越の確執にまつける悲戀にある。

「齋藤道三は天下横領の野心を抱いて南蠻渡來の鐵砲獻上を名として、時の將軍義晴の目通りへ出てたゞ一發の下に將軍を討殺し行方をくらまし關兵衛と名を改めて上杉家の花作りとして住み込んだ。上杉・武田兩家には諷法性の兜のこさから確執數年に及んだが、今回將軍家の不幸により急に和睦し向ふ三年間に將軍弑虐の曲者の詮議をすることにした。信玄の子勝頼は板倉兵部我子と取替へ(武田家横領の爲め)てゐたのが、却て眞の勝頼には幸して今回三年の期限經過に拘らず、約束の曲者詮議手がかりなしといふので兼約により勝頼の首を討つて越後へ送つた勝頼の許嫁八重垣姫(信玄の子)は之を眞の勝頼と思ひ、せめては回向をとて繪姿をかゝけて十種香をたいて拜んでゐると、侍女濡衣(實は道三の娘)が一瞥見て自分の戀人、兵部の息子と知れてハツとする。そこへ花作りの義作實は眞の勝頼があらはれたので姫が驚く、濡衣も驚く。三人は妙な戀の巴を描いた物蔭より見知つた謙信は義作が勝頼たることを看ぬき、態と使に出し追手をかけて殺さうとしたが、親の心を子は逆に姫は法性の兜を取り

出しその徳を以て勝頼様を護らせ給へと祈る……と忽ち狐火が炎えて奇瑞が表れ「兜は武田家へ返せ」と示現ある。

義晴の後室手弱女御前にげて上杉家にかくまひの身となつてゐるのを又もや關兵衛狙ひ撃つたところ意外にも娘の濡衣に當つた。山本勘助目ざとくも義に將軍を撃つたのもこの筒とて道三を捕へ、こゝに兩家の不和も解け、兜は武田家に戻り勝頼と八重垣姫さはめでたく結婚する」といふ筋。身替りや變装が多くて稍や繁縷の嫌はあるが勇壯と華麗と悲喜とをうまくひまぜて當時大喝采を博した(帝文四七、六八七―七七六)

**ほんてうぶんかん** 本朝文鑑 九卷

各務支考の編輯した俳文集、享保三年(二三七八)の板行(俳諧文庫一九)

**ほんてうもんずる** 本朝文粹 十二卷

藤原明衡の撰で嵯峨天皇から一條天皇まで、代々の漢詩漢文を賦・雜詩・敕書以下三十三種に類集してある。

註釋としては最近柿村重松氏の好著が出た。國刊六期には正續本朝文粹一冊として收めてある。

**ほんてうりくこくし** 本朝六國史

「六國史」を見よ。

**ほんてうれいさう** 本朝麗藻 二卷

村上天皇から後三條天皇の御代までの漢詩集で、作者年代共に不明である(日本古典全集の編者は内部徴證によつて伊周が儀同三司に任ぜられた寛弘五年正月から、一條天皇御讓位あらせられた寛弘八年六月までの三年間に出て大江匡衡などがその撰者の一人であつたらうと推測して居る)(日本古典全集第一輯、群百廿七、六、六〇九―六四一)

**ほんてんこく** 梵天國

室町期お伽草子の一つで五條右大臣の一子玉若、笛の妙技と亡父母を慕ふ孝心とにより、梵天王にめでられその姫君を配せられ、又その姫の靈術により自身も梵天國に行くといふ筋(今泉定介等校お伽草子)

マの部

**まいげつせう** 毎月抄

ていか「藤原定家」を見よ。

**まうしんせう** 孟津抄 二十一卷

九條統通の著。河海抄・花鳥餘情・弄花抄等を參酌し私意をも加へて集成したもの。題名は脱稿の日が丁度七

マの部

月七日であつたから「張鷟様に乗じて雲漢を究めた故事」に因み源氏の奥義を究めることの困難は尙神仙探究のそれに等しとの意で名づけたものである。

**まがきのはな** 籬の花

爲永春水、文化十四年(二四七七)作の人情本。

**まがほ** 鹿都部眞顔 二四〇三―二四七九、寛保三―文政二、七十七歳

本名北川嘉兵衛、江戸の人、四方赤良を師とし、狂歌堂、四方歌垣など號し後には俳諧歌の中興をも計つた。家集を蘆荻集(文化十三年版七册本)といひ別に類題俳諧歌集の著である。

あらそはぬ風の柳の糸にこそかんにん袋縫ふばかりける

照りわたる大路はよきて葛の葉のうら傳ひ来る

秋の初風

**まくらことば** 枕詞

國文學特有の修飾語で、他語の上にあつて文の調子を優美ならしむるもの。但その用法は嚴密に限定せられ「草枕」といへば「旅」か「多胡」の上のみつき「千早ふる」と云へば「神」に限つた上につく、早く上代に於てあらゆる枕詞が發達し王朝期以後も韻文には盛に用ひら

れた。枕詞の語義についても異説があり、枕詞の語源については尙更ら諸説區々として居る（ちはやふる、あかれさす、ひさかたのなごを見るもとは下語を修飾する形容句であつたとも想はれ「草枕旅ゆく君」など云ふ。草枕は上代の風俗として下と同一のこゝを別の語で云ふ十寸即一尺の十寸と同じ様の形容句でなかつたかとも想はれ、始め形容句であつたものが同一の語の上にもいつも同一のおきまりことばを慣用するに至つて頭に帽子をかぶるこゝが無意識にされるやうに、之も無意識に唯語調上つけるやうになつたものでなからうか。しかしこのことを闡明するには一應枕詞のあらゆる用例を拾つて歸納的に考查し、明確なる語源研究が遂げられねばならぬ「ひさかたの」といふ枕詞のやうに説が區々となつてゐては不可能である）（賀茂眞淵冠辭考・上田秋成冠辭考續紹・香持雅澄萬葉集古義枕詞の部）

**まくらのさうし 枕草子（清少納言記）**

十二卷

清少納言の隨筆で源氏物語と相並んで王朝文學の双璧と謂はれて居る。自分が一條院中宮定子に奉仕した時の見聞感想と自分一個の趣味識を披瀝したもので、も

と他に見せるつもりでなかつたと自記して居る。書名は「花は」「木は」「山は」と様な枕をおいて文を綴つて居るからとも、伊周が奉つた料紙を中宮（伊周の御妹）が「これは何にしよう主上（一條院）には史記をお書きになつて居るが？……」と仰せになると清女が「枕にこそはせめ」と申すと「さらば得よ」とて賜はらせられたからだ（本文中にこの記事がある）ともいふ。文簡潔にして力あり、想、奇警にして生氣潑刺、我邦國文體隨筆の始めにして又斯の方面第一の傑作である。この書原本區々で多くの異本がある。明治に入つて武藤元信氏が十九種の異本を對校して本文を定められたものは最も正確に近いものだが、まだ「諸異本がありさうだ。」

註釋では北村季吟の春曙抄が廣く行はれてゐるが、金子元臣氏 枕草子評釋 二冊

は善本である（國華三八七號四三、四五、枕草紙畫）

**まさあき 石原正明 二四二〇—二四八一、寶曆一—文政四、正、七、六十二歳**

通稱喜左衛門字は逢堂、本居宣長及び堀保己一の門に入り詠歌考證訓詁に長ず、歌は一代の所詠一萬首に上るといふ。冠位通考は今も故實叢書に收めて行はれ新

古今集を註した尾張の家づとも名高い。その他壬戌隨筆・辛酉隨筆・癸亥隨筆・蓬堂集・江戸職人歌合等の述作がある。

**まさあき 飛鳥井雅章 二二七一—二三三九、慶長一六—延寶七、一〇、六十九歳**

雅庸の第三子、地位は從一位權大納言にまで進み堂上派歌人として聞え文を能くし書をも能くした。書は榮雅の流を汲んだ。新歌部類現葉集にその歌が載せられ、又紀行の著に吉野記一卷がある。

**まさあり 飛鳥井雅有 一九〇一—一九六一、仁治二—正安三、六十一歳**

鎌倉時代の歌人、後字多・後伏見の二朝に歴仕し、參議民部卿に任ぜられた。歌は續拾遺に七首、新後撰集に九首、玉葉集に十二首採られてあり、別に家集「隣女和歌四卷」（その部を見よ）がある。

**まさおみ 阪正臣 安政二、三、二—一**

愛知縣平民阪丈右衛門正緒の長男で茅田と號した。醫學・神官・英學・又神官と轉々して二十年宮内省御歌所寄人となり、華族女學校教授となつた。明治の宮廷歌人として秀味も少くないが氏の特徴は寧ろ高雅優麗な筆蹟にある。

裾野にはあらし吹けどもふじの嶺のこの曉の雲

ぞしづけき

雨けぶるそのふの花にたはる、はたかうた、ね

の夢の胡蝶ぞ

**まさかせ 高崎正風 天保七、七—明治四五、二、二七、七十七歳**

鹿兒島の人、幕末、維新の勤王家として死生の間を出入し、九年御歌係、十九年御歌係長を拜し二十年男爵に叙せられ、ついで樞密顧問官・正二位勳一等に昇せられた。和歌は早くより八田知紀に就いて學びその歌は新堂上派を基調づけたもので、桂園派が明治の時代に適應した姿を見せてゐる。一代の所詠數萬首内四千首を選んで家集として傳へて居る。

み國にて見なれしものは久かたの月ばかりなる

旅の空かな

久方の空飛ぶ鳥もうらやまね車や人のつげさな

ららむ

**まさたか 飛鳥井雅孝 一九五一—二〇一三、正應四—文和二、六十三歳**

鎌倉末期の歌人歌は玉葉（五）・新千載（八）・新續古今（一〇）の諸集に出てゐる。

**まさため** 冷泉政爲 二一〇五―二一八三、文

安二―大永三、七十九歳  
藤原定家の孫、爲相の後の下冷泉家の祖大納言持爲の子で自身も後柏原天皇の朝に仕へて正二位権大納言まで進んだ。永正十年出家して曉覺と法號、家集の碧玉集六卷は當時の家集中出色のものではあり、人々も一代の大家とあがめ自らも而か自任してはゐたが、時弊の悪風を受けてゐるだけ、父祖の歌味に比して大分風格が墮ちてゐる。

毎家有春

たれもよに戸さしわすれて住人の心や春のやどりなるらん

炭竈烟

絶々に炭やくみれの白雲はけふりの外のいろもさびしき

閑

すめばかくいづくもおなじ柴の戸をもとめし山もあさき心よ

**まさつね** 飛鳥井雅庸 二二二四―二二七五、

永祿七―元和二、四十七歳

室町末期の歌人且つ蹴鞠家、地位は正三位参議兼右衛

門督にまで達し歌は新題林和歌集や新歌部類現集などに載る。百首の作に入道中納言雅庸百首(續群三九二)があり、初心の爲めに懷紙案一卷の著もある。彼は又代々蹴鞠の家なので徳川家康に乞うて蹴鞠式の印章を受け他家の世職を妨げないやうにした。

**まさつね** 藤原雅經 飛鳥井雅經 一八三

〇―一八八一、嘉應二―建保三、五十二歳

頼經の子、(頼輔刑部卿頼輔)の孫、(宗長刑部卿)の弟に當り、新古今集撰者の一人で、その味も新古今(二二)・新勅撰(二〇)等に採られてゐる。その歌風は師家(俊成・定家)の流を汲んだものと謂はれてゐる。土御門の朝和歌所に直し、その頃勅を奉じて新古今集の撰に與り、承元中左近衛中將に轉じ、建保六年從三位に進み、承久二年参議に任ぜられた。家を飛鳥井と稱し、家集を明日香井集二卷(寫本二卷、群二四二、九、三三六―三九〇)と云ふ。子孫代々和歌・蹴鞠を以て仕へた。

千五百番歌合に春の歌

白雲のたえまになびく青柳のかつらぎ山にはる

風ぞ吹く

五十首歌奉りし時

尋ね来て花にくらせる木の間より待つとしもなき山の端の月

**まさもち** 石川雅望 (宿屋飯盛) 二四一三

―二四九〇、寶曆三―天保元、三、二四、七十八歳

徳川時代に於ける貴むべき雜學者と謂ふが適當であらう。小傳馬町の宿屋の息子で、若い時は放蕩もしたが父歿後心機一轉して學問に心を傾け、佐竹侯の用達津村三郎兵衛綜庵について國文和歌を、蜀山人・唐衣橋州等につきて狂歌を學んだが大部分は獨學でコツ／＼と根氣よくやつたものである。一時人の事に連坐して多摩郡・内藤新宿・靈岸島と轉々居をかへたが、文政十一年には法眼に叙せられ宗匠の稱號を贈られた。宗匠號は二條齋信卿が許されたもので文面には俳諧の徳によるやうに書かれてあつたが實はその著源注餘滴が繙紳の間に好評であつたからだと云ふ。この書と雅言集覽とは今も學者に貴重せられてゐるが、彼の著はこの外四十餘種もあつて雅文小説の近江縣物語・飛騨匠物語・紙魚の住家物語あり。雅文(と云つても卑近俗語交りで巧みに委曲を寫した)北里十二時・都のてぶり・狂文にあづまなまり狂歌に六樹園家集(一卷國刊一期新群一〇)・萬代狂歌集・飲食狂歌合・自讚狂歌合・めでた百

首夷歌(一卷國刊一期新群一〇) 狂詩に狂詩粹金等がある。

初咲きの梅は秤か市人の二りん三りんあらそうて見る

山河のわけへだてなく咲けばとて智者も仁者も花を樂む

**まさやす** 飛鳥井雅康 ?―二二四二、?―

文明一四

室町時代の歌人、地位は正三位權中納言、和歌・蹴鞠・文章を能くす。家號は二樂軒、文明十四年二月剃髮以後は宋世と號した。入道中納言雅康卿百首(續群三九二)・富士歴覽記(群三三五)・蹴鞠肝要抄等の著がある。

**まさずみ** 源當純 ?

文徳天皇の御子、源能有公の第五子で、古今集歌人、寛平・昌泰の間大皇太后宮少進・大藏少輔・縫殿頭を経て延喜元年攝津守同三年少納言に拜命。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

谷風にさくるこぼりのひま毎にうちいづる波やはるのはつ花

**まさよ** 飛鳥井雅世 ?

新古今集撰者雅經の子孫で、室町時代始めの歌人、稱

光・後花園の兩朝に仕へ左兵衛少將從二位より權中納言正二位に進む、嘗て後花園天皇の勅を奉じて新編古今和歌集廿卷を撰ぶ。その味も同集に十九首も入り、又別に富士紀行（群三三五、一一、一一二七—一一三三）の著がある。

かゞみ山を見て

老の坂はやくえかゝるかゞみ山今更なにか立よ  
りてみむ

**まさよし 尾崎雅嘉** 二四〇六—二四七八、延

享三—文政一〇、三、七十三歳

大阪の書肆にして又學者、通稱春藏、字は有魚、羅月・傳古知今堂・華陽・春の屋・春陽軒などの號がある。讀書を好み群書に通じ、作歌に於て一家の風格をそなへ、その著學說の創新なしと雖も穩健にして後進啓蒙の上に裨益を與へた。群書一覽・百人一首一夕話・和歌わさ衣・古今集鄙言・羅月歌文集などの著がある。

**まさより 飛鳥井雅縁** 二〇一八—二〇八八、

正平一三—應永三五、七十一歳

北朝延文三—**まさより** 應永三五、七十一歳  
家は代々歌を以て聞え、彼も亦歌人の譽高く家集に宋雅千首一卷あり、新編古今集にも二十七首入る。別に紀行「宋雅道すがらの記」一卷を書く。宋雅は應永廿五

年彼が出家以後の法號である。

**まさき 鎌田正夫** ?—大正、一四、一二、一三  
鹿兒島藩の家老のお家柄で、早くから和歌に熱心し八田知紀・高崎正風などの教へを受けて御歌所寄人を奉じ、日本歌道奨勵會の評議員であつた。

ちりつかの餌をあらそひて村鳥さわぐに似たる  
世にこそありけれ

遣水にはなてるかじか啼きかはし若葉涼しき山  
かげの庭

**まさかがみ 増鏡** 二十卷

後鳥羽天皇壽永二年（一八四三）八月廿日御踐祚から後醍醐天皇元弘三年（一九九三）六月五日隱岐より二條宮小路へ還幸まで百五十一年間の國文の史筆、年代は凡そ正慶二年より永和二年に至る間にさる宮廷に密接の關係ある人の手によりて記されたらうといふことだけは衆説一致して居る。著者は一條冬良・一條兼良・成恩寺經嗣・二條良基・南北朝頃の某なご擬せられてあるが確説はない。大鏡の後に同じ用意の下に執つた筆だといふので増鏡といふ。

發端嵯峨清涼寺老尼と古典に興味のある侍との對話に筆を起したのは大鏡の體に倣つたもので、毎卷の題を

やつか「藤原八束」を見よ。

**まささかのいぢや 松阪の一夜**

本居清造氏の本居宣長稿本全集第一輯、四七九—四八〇に左の如くある。

學問上ニ於ル眞淵翁ト宣長トノ關係

第二篇、四、二

古事記傳一 全集一六頁

玉勝間 全集四、五頁あがたのうしは古學のおやなる事

四〇、四七頁おのが物まなびの有しやう

四九頁、あがたのうしの御さとし言、おのがあ

がたの大人の教をうけしやう

五〇頁、師の説になづまざる事

一三一頁、縣居大人の傳

二六三頁、後の世はづかしきものなる事

うひ山ぶみ 全集四、六〇八頁上 六〇九頁上 六

一一頁下（カ）・六一三頁下（ラ）

大被詞後釋上 全集五、四〇七頁下

神壽後釋 全集五、五三九頁上

玉の小琴 全集五、六二〇頁上

鈴屋集 全集五、九八一頁、此ついでにかの大人をし

**またて 藤原眞楯**

ものも澤山あるが左の一書が善本である。  
和田英松 重増鏡詳解  
佐藤球 修増鏡詳解  
（これは從來のものに徳川義親侯爵家の應永本を參酌せられたもの）

ぬぶうた。

九九六頁、縣居大人の御前にのみ申せる詞

手向草

(佐々木信綱氏) 和歌史の研究三〇二頁眞淵と宣長

本居宣長 四六六頁 眞淵と宣長學

マタ萬葉ニ關スル宣長ノ質問書ハ「眞淵全集四」(三二

三七頁) 及び本全集ニコレヲ收メタリ

(この書第二篇の四ノ二には眞淵から宣長に宛てた書

簡が收めてある)

**まつほのうらものがたり** 松帆浦物語

兒物語で三角關係の悲哀を寫したるもの。若衆を藤侍從

(十六歳)と云ひ、宰相法師と睦むく契れるを左大將が

侍從を戀ひ法師を淡路に流す、侍從は一人のお供をつ

れて遙々淡路まで下つて松帆の浦をさまよひ辿る時さ

る老僧に逢つて戀人は已に七日前に亡くなつたときい

て力を落し高野山に入つた。著者未詳、猪苗代兼載と

いふ説があるがこれは單に淨寫しただけだといふ(續

史一一、校國六一九)

**まな (まんな) 眞名 (眞字)**

假名に對して漢字をいふ。例「まんなをはしりかき(源

氏物語帶木)

雲よ汝は夜のにはひに憧れて浮れ出でたる天なる蝶か

秋の日や見し朝顔の花おもひ憂を手ぐりて種子

もとめけり

秋はしも神のたまへる饗宴ぞ空の百鳥おりて野

に酔へ

(四六判一五〇頁、明治卅八年九月廿日、鹿鳴社)

**まぶち 賀茂眞淵 (岡部直淵、縣居翁)**

二三五七—二四二九、元祿一〇—明和六、一〇、三

〇、七十三歳

姓は賀茂、氏は岡部、先祖は神魂命の孫鴨武津奴見命の末裔で、京の賀茂の神官成助の分れであるが、彼の父與三郎定信は遠州濱松の庄岡部郷伊場村で農を營んでゐた。彼れ幼名三四郎、通稱衛士、出でて濱松の旅籠屋梅谷氏へ養子に行つたが、性來の好學心にまかせて徂徠の門人となつて漢籍を修め、朝夕讀書三昧に耽つてゐたので養父は不機嫌勝であつた。妻は思慮ある女性で彼に勤めて「夫程學問に御熱心ならば、幸、一子もあることとて後目の心配もありませんから、家政に心をのこさすしつかり勉強して天下に名をあげて下さい」と云ふ。それではとて享保十八年(三十七歳)に上京

**まひと 粟田眞人** ?—一三七九、?—養老三

天武・持統・文武の三朝に歴仕し律令の撰定に與つた學者。先祖は天足國押人命、學を好み文を能くし、禮儀

整齊唐朝の人々も感心したといふ。入唐したのは和銅

二年で、歸朝が慶雲元年、同二年中納言に進み和銅の

始、太宰の帥に任ぜられた。

**まひのほん** 舞の本 (舞舞 幸若舞)

かうわかまひ「幸若舞」を見よ。

**まひまひ** 舞舞

「幸若舞」を見よ。

**まひるの** まひる野

窪田空穂の詩歌集。巻頭に「椎がもと・朝遣遙」など四

十一目をあげ内第九までは短歌以下は詩である。短歌

は約二百首、詩の題は巡禮・綠蔭・波の音・小夜風・朝

夕・小唄・露と露・眠・夢のゆくへ・懶き音・夏の蝶・枇杷・

板屋・旅人・うたがひ・酔・枳殼・根分・露・えにし・薫風・

覺めぬ眠・貝の殻・春夜・春日・亡き母・いけにへ・呼びな

む母・宵闇・朝なき・早春・おもかげ・従妹よ

短歌の佳調と思ふもので初めの方數首をあげると

縁に落つる棟のかげの小搖ぎを指もてとむる山

の興かな

して荷田春滿の門に入り、魁勉五ヶ年の後江戸に下り、古學を以て一家を立て、延享三年(五十歳)の時、荷田在滿(春滿の養子)の後を受けて田安宗武に仕へ主君の寵を得て非常に優遇されたが、後仕へを退いて専ら研學講學に明け暮れ多くの名著と名家とを産み「眞淵の前に眞淵なく眞淵の後に眞淵なし」とまで人々にあがめられ、欽仰景慕の裡に無事老を以て逝いた。明治になつてから朝廷では正四位を贈られた。

彼が功績は古學の復興と萬葉風の歌風樹立とにある。

彼自身の文章も亦著しく古雅なもので「荷田在滿家歌合序」に「隅田河にて月を見る」「萬葉考のはじめにする

せる詞」などよく諸書に引かれてゐる。又彼の歌は、

第一期 師、春滿のふり

第二期 獨特の萬葉風

第三期 記紀の風までも加味したもの

と變遷があるがその二期のが最も多く質も優れてゐる。之を實際の咏について見るとその歌風は大體萬葉

を土臺にし、その上に古今・新古今の風を加味されて

ゐる。その家集は門弟三人によつて三種撰ばれ餘程精

選せられてゐる。

一、村田春海 賀茂翁家集

二、楳取魚彦 縣居歌文

三、加藤美樹選 上田秋成補、縣居の歌集

(今日では佐々木信綱博士校輯の續歌一、二賀茂眞淵翁全集が註和歌叢書六、一―九二賀茂翁歌集によるが便利だ)

うら／＼さ長閑けき春のこゝろより匂ひいでたる山さくら花

信濃なるすがのあら野を飛ぶわしのつばさもたわに吹く嵐かな

彼はまた長歌をも試み二十餘篇何れも相當に見どころあるものを吟んでゐる(倭學を悲しめる歌、詠蝦夷島四首、岡部の家にてよめるなど)即興にも秀で田安宗武四十の賀筵には、

大君の守となれる君なれば君が船は神ぞ守らむと吟んで御衣をかづけられ、

葵てふ綾の御衣をも民人のかづかむ者と神や知りけむ

その著には歌文の外、

一、歌學 歌意考・國歌三説・國歌論臆説

二、註釋書 源氏物語新釋・萬葉考・祝詞考・古今集

打開・伊勢物語古意・冠辭考・日本書紀訓考・延喜式

詞解

三、有職故實 古器考・古冠考・車服拔萃・神樂東遊

考

四、漢籍 論語紀聞・書經辨解・詩經辨解

などがある(明治廿六年六月より國學院編輯部編、賀茂百樹校訂賀茂眞淵全集五冊が出てゐて目下その重版を出しつゝある)

彼江戸に在つてもその居を故郷の田舎風に構へ號して「あがたゐ」(縣居)と云ひ、その門人を縣門と云ひ、田安宗武・楳取魚彦・清水濱臣・橋千蔭・三才女等多くの名家がある。本居宣長も彼の晩年伊勢參宮の時松坂の一夜名簿を入れてから始終書面で指導を受けてゐた(國學者傳記集成三五八―四二三)

まへくづけ 前句附

下の句の七七を題として上の句の五七五をつける娛樂文藝で徳川時代後櫻町天皇明和年間に盛行はれたが上の句だけの獨立した川柳がはやるやうになつて之に地位を讓つた(尤もそれ以後とても多少は行はれて來て今日に及んで居る)

今一例として「狐の茶ぶくる」より採る。

遠いことかな

椶の實を植ゑて恭盤の心あて。

雲の上から足がふら／＼

茶釜をば自在天までつり上げて。

いろりの中へ船が馳せ入

す、き焼くそのおき中にほが見ゆる。

ふらり／＼とふらり／＼と

千里行虎も時計の牛の供。

死んだるものの聲の太さよ

山ぶしの腰につけたるほらの貝。

四角な玉子もあるものにこそ

鳥の子の紙とて丸うすきもせず。

丸し四角し長し短し

まる盃にちんばが豆腐買ひに行き。

まみ 吉備眞備 一三五三―一四三五、朱鳥八

―寶龜六、八十三歳

國勝の子、奈良朝の學者、寶龜二年廿四歳の遣唐留學生として渡唐、深く經史を修め博く衆藝に渉る。歸朝の時大衍曆經・大衍曆立成・測影鐵尺・銅律管等を舶載し朝に獻じた。爾來、

正六位下・大學助・從五位上・東宮學士・右京大夫・從四位上・筑前守(これは左遷)・肥前守・遣唐副使(天平勝

寶四年)太宰大貳・筑前國怡土城を築くことを建議、

西海道節度使・造東大寺長官・惠美押勝征討の事に功あり、從三位・參議・中衛・大將・正三位・中納言・大納言・右

大臣・正二位と閏歴したが稱徳天皇崩御の後皇嗣の問題につき永平・百川等と意見を異にしたので退いた。

釋奠の禮は從來定まつてゐなかつたのを彼舊典に稽へてその方式を奠め爾來永くその例に則られた。彼亦律

令二十四條を刪正したが之は延暦年間に行はれた。その著に「私教類聚三十八條」(續紀、大日本史)がある。

「片假名」五十音圖も彼の創意だと謂はれるが、これは確説ではない(國華二六〇號一八五、吉備大臣入

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

唐繪詞)

様に一段を一切にしてある)

まんぎんしふ 漫吟集 二十卷  
けいちう「契沖」を見よ。

まんさいわかしふ 萬載和歌集 二十卷

後深草天皇寛治二年(一九〇八)の撰で勅撰にもれた古  
來の詠歌を集めたもの。撰者は不明だが藤原家長であ  
るとも謂はれてゐる。

まんじゆのひめ 萬壽の姫

資料、唐糸草紙・近世文鎌倉物語四四・早引人物故事  
上五二。

まんによろがな 萬葉假名

まんえうしふ「萬葉集」を見よ。

まんえうしふさうもくならびにじふにが  
ついでいしふ 萬葉集草木並十二月異名  
集

ばくてんせう「莫傳抄」を見よ。

まんえうしふ 萬葉集 二十卷

一、書名「よろづのことのはの集」の義とするものは早  
く仙覺の萬葉抄に「先此集を萬葉と名づくるは何の意  
ぞや、これはよろづの言の葉の義なり」と解したものが  
あり、荷田東磨・賀茂眞淵も之を以て同じ意に解

してゐる。葉を「ことのは」の意に解した歌集名は金

葉・玉葉・新葉などで恐らくこの種の集が出てから  
萬葉の「葉」をも「ことのは」の「は」と解するやうになつ  
たものであらう。處が最近山田孝雄氏は大正十四年二  
月の國語と國文學一―一三二に「萬葉集名義考」を題  
して有益な論文を寄せられた。これは契沖が代匠記  
の巻頭に述べたことに數歩を進めたもので、つまり、  
「萬葉の「葉」は「世」といふ意味だ」といふに歸する。  
氏の論旨を摘要すると、

一、葉が「世」といふ意味で成立した熟語例が支那  
に非常に多い(一葉五葉・七・八・九・十・千・上・後・  
來・季・累・重・奕・葉など)

二、我邦にも少くない(日本後記延暦十六年二月に  
「惡萬葉に傳へて變となす」藤原魚名平城京に萬葉  
寺を立つ、その他例證七つ)

三、最初の點者源順の「葉」の用例にも「萬葉ノ藝篇  
ヲ振ヒ百代ノ遺算ヲ知ル」とある。

四、菅公の新撰萬葉は僅か三百餘首であるに拘らず  
萬葉と下につけた。若し「よろづのことのは」の  
意だとすると合はない。して見るとこの書も「萬  
世」の意で名づけたと推すことが出来る。

右は如何にも慧眼な考證の見識で推斷されてあると思

ふ(因に「集」はもと鳥が木にあつまる象形文字で、  
支那六朝の頃は一人若くは衆人の詩文集をいひ、四庫  
全書では多く個人の詩文集をいふ)

二、撰集を動機づけた事象

一、傳來の漢籍、應神天皇の第十六年阿直岐の來朝  
によつて千字文が渡來した(但し之は記紀に云ふ年  
代で、支那の三國史記通鑑などには仁德天皇の末期  
としてゐる。この方が確からしい、即ち周興嗣の次  
韻、以前の千字文である)同時に論語も來た。繼體天  
皇の第七年には五經博士段楊爾によつて毛詩がもた  
らされた。すつと下つて聖武天皇の天平七年には袁  
晉卿なる者が文選三十卷を將來した。在廷諸臣之を  
愛讀し藤原常嗣の如きは殊に精通して居つた。懷風  
藻詩人は之から多分の刺戟を受けた。  
二、邦人の述作 極めて貧弱な上代に在つても尙ほ  
左の諸作品があつた。  
イ、傳說的・架空的の傳記文學 伊豫部馬養作浦  
島子傳? 吉野栢枝傳  
ロ、傳記文學 藤原仲曆作鎌足傳? 平群益人傳  
ハ、教訓緣起文學 光明皇后天平中の御作 鴨毛

ノ屏風(正倉院御物)? 法隆寺傳説緣起(缺文あり)  
二、銘文・願起文 現存するものは多くは勝寶以  
後の作

三、漢詩の流行 神龜年間宮中で詩賦の會を催さ  
れ出席者は百二十名もあつたといふ。藤原宇合に  
は詩集二卷があり石上乙磨には尙悲藻の集があり  
萬葉集の詞書から推せば旅人や億良にも詩集があ  
つたらしい。勝寶三年には懷風藻が撰まれた。

四、歌集や家集の存在を臆測せらるもの山上億良  
(類從歌林百卷)・元正天皇・舍人親王・光明皇后・推  
野長年・柿本人麿・藤原宇合・藤原房前・山部赤人等  
三、編者と年代

甲、靜的撰集説 この方では契沖の説が一番系統だ  
つて居る。彼は始めに從來の橋諸兄の撰だといふの  
は誤つてゐることを指摘し、

1、第六卷天平八年冬十一月九日姓を橋と賜はつ  
て太上天皇から「橋は實さへ花さへ」の御製をも  
戴いたといふその後の文言はどうも諸兄自身が自  
分のことを書いたものとは思はれない。

2、十六卷「あさか山 かげさへ見ゆる」の葛城  
王は即ち諸兄で、これも自身の書いた詞書の態で

はない（但し葛城王と名のある人前後三人あることと契沖も多少心づいてゐて、このは或は別人の葛城王であらうかと疑つて居る）

3、諸兄薨去後の味も入つて居る（定家も早くこのことを唱へた）

次に積極的に「この集は大伴家持の撰である」と唱へ、左の六説をあげて居る。

- 1、父旅人に限り微官の頃からその官名をあげて居る
- 2、家持は延暦四年薨去で集中の歌と時代が一致する

- 3、十七卷以下は殆ど彼の歌日記のやうなものだ（皆で四百八十一首）

- 4、自身の味を「拙歌」と謙遜して居る

- 5、妻の母に送る味草に「尊母」として居る

- 6、集中微官の作者にも官位氏名を記して居るに拘らず自身に限つて名を書いて居る

乙、動的撰集説 家持の撰だといふことは事實だとし更に彼の閏歴と萬葉集各巻の本質とを對照して「これは或一定の纏まつた一單位の年限の撰ではなく幾度かに割つて少しづつ手を入れて次第に出来たものだ」

といふので契沖の説に更に一步を進めたものであらう。早く荷田春滿が兩度の撰だと云ひ、賀茂眞淵が萬葉六卷説を唱へ本居宣長も二度撰集説を認め（東磨のは諸兄と家持と、宣長のは同じ家持が兩度にといふ）したが最近久松潜一氏の「萬葉集の新研究」三〇―四七には家持の閏歴と萬葉集各巻の本質とから詳細な考證がしてある。

尙上述のことが重複する嫌もあるが撰者年代についての諸説を一覽表的にあげる。

- 一、聖武朝説 古今集有季の歌 俊成正治奏狀
- 二、平城帝勅撰説 古今集序 折口信夫氏
- 三、孝謙帝勝寶五年橋諸兄説

イ、單獨説 俊成・眞淵・後拾遺集序・榮花物語

ロ、勝寶五年諸兄初撰寶字末年家持補撰説 新撰

萬葉集序・袋草子・八雲御抄・仙覺・荷田東磨・眞淵

等

- 四、嵯峨帝勅撰四卷説 源氏物語萬葉集會説

- 五、一二卷勅撰説 品田太吉氏・佐々木信綱博士

- 六、家持私撰説

イ、靜的 清輔（袋草子）定家・契沖

動的 本居宣長・久松潜一氏

四、歌の年代範圍 仁徳天皇から天平寶字三年正月頃の歌で、殊に舒明天皇以後の味が多い。

五、歌數 萬葉集古義によると

長歌 二六二首

短歌及反歌 四一七三首

旋頭歌 六一首

計 四四九六首

外に（以下は代匠記による）

詩、四

文、一

序、一三

狀、一二

六、歌人は大抵宮廷の人々ばかりだが之を類別すると

天子一二人（以下同上）・皇后三・太子四・皇子八・皇女

六・諸王三五・女王一八・夫人三・大臣五・諸臣一九四・

女四一・僧尼八・非常者四・遊行女婦四・白水郎一〇・

諸國防人若干

就中萬葉歌人として有名なのは柿本人麿・山部赤人・大伴旅人・同家持・笠金村・山上億良・高橋蟲磨・額田王・大伴阪上郎女・鏡女王・石川郎女などである。

七、歌態は左の六種に分けた（これは古今集以下の勅

撰集の歌態の分類の前驅をなしたものだ）

一、雑歌

二、相聞

三、挽歌

四、譬喻歌

五、四季雜歌

六、四季相聞

八、歌に含まれた思想

1、佛教思想

世の中を常なきものと今ぞしるならの都のうつろふ見れば（讀人不知）

うつせみの世は常なしと見るものを秋風寒みしぬびかれつも（大伴家持）

かくのみに在りけるものを妹も吾も千歳のごとく憑みたりけり（大伴家持）

世の中は空しきものと知る時しいよよますますかなしかりけり（大伴旅人）

2、支那思想 處々に散見する漢文の歌序や、天平

二年正月十三日の梅花三十二首や卷五山上億良のわがさかりいたくくだちぬくもとぶくすりはむともまたをちめやも（淮南王劉安ノ「仙藥白ニ殘



レルヲ鶏犬ナメテ雲中ニ飛ブ」といふことを採つたもの。

3、純日本思想 大伴家持の族に喩す歌や億良が老莊かぶれの畏俗先生を戒める歌や小野老が、御民われ生けるしるしありあめつちのさかゆる時にあへらく思へばなど。

九、形式上注意すべき點

1、萬葉假名 漢字の音訓を假りて表現を自由にした音をとつては加奇久家（正音）音の一部を省いては安延憶雲（略音）音と訓とを交へとつては還（今、知）三（音訓混用）などし訓をとつては月、丈夫、天地、（正訓）とし又訓を借りてその文字固有の意味以外の語句を表しては福路、薩雄、鬱瞻などし（借訓）八十一を「くく」十六を「し」山上復有山を「出」山下出風を「風」などもする（戲訓）  
2、修辭上殊によく用ひられたのは發語（接頭語）枕詞・序詞・對句  
一〇、後世に及ぼせる影響 勅撰集の前驅となりて歌謡や編次の體の範例を示し、私撰集だつて之に則つた

ものだ。長歌については唯一典型として代々顧られ、源實朝・田安宗武・平賀元義・良寛和尚・橘曙覧等を立たしめ、明治大正に入つても多くの萬葉振の歌人を起たしめた。

一一、参考書

原本註釋本を書いたものに、  
木村正辭博士の萬葉集書目提要  
元本の優れたものに、  
佐々木信綱博士等の校本萬葉集  
全部を註解したものに、  
北村季吟 萬葉集拾穂抄  
橘千蔭 萬葉集略解  
香持雅澄 萬葉集古義  
契沖 萬葉集代匠記  
井上通泰博士 萬葉集新講  
などがあり、最近この方面の目ぼしいものには、  
佐々木信綱氏解説 金澤本萬葉集附解説  
島木赤彦氏校訂 萬葉集叢書  
一、富士谷御杖 萬葉集燈  
二、荷田春滿 萬葉集僻案抄  
三、橘守部 萬葉集檜燭手

ミの部

四、荒木田久老 萬葉考槻落葉

五、岸本由豆流 萬葉集考證

六、北村季吟 萬葉集拾穂抄

折口信夫氏 口譯萬葉集

同 萬葉集辭典

久松潜一氏 萬葉集の新研究

土岐善磨氏 萬葉集短歌全集

同 作者別萬葉集

まんな 眞名

まんな「眞名」を見よ。

まんねん 上田萬年 慶應三、一、二、

尾張の人、二十一年東大和文學科を卒業し、獨佛に留學して歸朝後博士となり、樞要の教學職に轉々して最後に文科大學長となり、昭和二年停職年齢で勇退せられたが神宮皇學館の方は以前から館長で今後も變りはない。現時國文學界の老大家で幾多の學者を養成し、明治の國學を樹立した第一人者である。國語のため二冊・舞の本・袖珍名著文庫の校訂など大著ではないが斯界啓蒙の好著であり、松井博士との合著に係る日本大辭典は有史以來最も完全な國語辭典と謂つてよろしからう。

みかぜ 荷田御風（羽倉御風） 二三八―

二四四四、享保一三―天明四、八、一六、五十七歳

在滿の子で初め冬滿と云ひ、後東藏と稱し子玄と字した。家學を嗣いで江戸に住み博覽強記、從學の徒頗る多く、貴顯の聘を辭して専ら家に在つて子弟を教授した。その著には柿本朝臣人曆畫像考・西遊紀行御風家集などがある。

みかた 山田三方 ?

持統・文武・元明・元正の四朝に歷仕し文章博士・大學頭等に歷仕し、その詩は懷風藻に採られ又歌をもよくし萬葉に載せられて居る。

みかたしやみ 三方沙彌

みかた「山田三方」を見よ。

みかどのまつり 御門祭

六月と十二月とに宮城の四方の門々を守り賜へま祈る祭り、並にその時によむ祝詞のこと。

みかはごぶどき 三河後風土記 四十五卷

徳川氏の祖先の事から家康三河に生れ終に將軍となる

まで、徳川家の一族及び諸臣家の功罪二百餘件を詳叙した。著者年代未詳(慶長十五年)(二二七〇)五月平岩主計頭親吉が命を受けて撰んだといふのは俗説とるに足らぬ。成島司直が云つて居る。それは記事の杜撰なこと(一年を二年にさいたり數件を一件に合せたり)當時史官の制のなかつたことなどから推測したものである。寛永の頃の著であらうと想はれるが異本が色々ある中につき参考に値するものは右の成島司直の「改正三河後風土記」(史籍集覽本)である。

**みかんじん** 未閑人  
ちくれい「角田竹冷」を見よ。

**みくにまなび** 皇國學  
「國學」に同じ、その項を見よ。

**みこひだりけ** 御子左家  
「二條家」に同じ、その項並に「師範家」の項を見よ。

**みこひだりのおとど** 御子左大臣  
「兼明親王」を見よ。

**みちかぜ** 大淀三千風 ?

名は友翰、伊勢射和村の人、寓言堂(無言道とも)・大箭敷・無風非軒など號したが嘗て一日に三千句を吐いてからは自ら三千風と號した。十五歳から俳諧を好

み、三十一歳出家して香空法師といひ、名所舊蹟を歴遊し仙臺に住みついで十五ヶ年、それから又々七年許旅に出て一旦故郷に歸り、更に相模の鳴立澤に行つて自ら西行庵と虎が祠とを建て、之に居り、寶永六年(二三六九)四月四日自ら碑を建て「東往居士之碑」とし飄然去つて往く所を知らずと云ふ。世人は彼を、  
一聲や犬西行にほと、ぎす

其他仙臺大箭敷、松島一色兩吟集の著がある。

**みちかつ** 中院通勝 二二一八—二二七〇、永祿元—慶長五、三、五十三歳

權大納言通爲の子、才學秀絶、弘治二年權中納言侍從正三位に進み、後御旨に違つて丹後に蟄居、癡癡として素然と號し、専ら心を歌道にひそめ細川幽齋からその秘傳を授けられた。和歌の抄物、物語の註釋など澤山書いたが有名なのは岷江入楚(源氏の註)と百人一首像讚抄とである。

**みちさね** 菅原道眞 一五〇五—一五六三、承

和元延喜三、五十九歳

是善の子字多・醍醐の兩朝に仕へ、一學者の出を以て右大臣兼右近衛大將に任ぜられ、政績大いにあがり内外の信望厚かつたが、左大臣時平の讒によつて延喜元年太宰權帥に貶せられ配居三年遂に彼地に歿したが、後にその冤を憐まれ延長元年(一五八三)には官位を追復せられ、一條天皇の時には更に正一位太政大臣を贈られた。今日全國を通じて一番多く祭られてゐるのはその靈をいついた天満宮であらう。

彼は幼にして聰明博學、十一歳早くも月夜の梅花を咏じて師父を驚かし、長ずるに及んでは和漢古今通ぜざるなく、能くせざるはなかつた。その詩は扶桑集に、その漢文は本朝文粹に、その和歌は古今、後撰の諸集に採られてある。「このたびはぬさもとりあへず」「秋風の吹上にたてる白菊」などはかいなでの歌人の企及すべからざる秀味である。彼自身の詩文集に、

菅家後集(群一三一、六、八三七—八四五)がある。新撰萬葉集一名菅家萬葉集二巻も彼の著とあるがこれは偽作である。修史の筆に類聚國史といふがあり、三代實録の撰にも與かつた。

(菅家御傳記・北野縁起・大鏡左大臣時平の條・高山

樗牛菅公論・好古類纂第一編八、中田實信氏菅公事歴及系譜、同第十一、同氏菅公事歴追加・國華五三號九〇—九一・秋月筆菅公像五三號九〇—九一・周公筆菅原道眞像三六號二三八—二三九、八六號二四—二五・藤原信實筆北野縁起繪・榮泉社菅公御一代記・金松堂菅公御實傳記・存叢八菅原陳經著菅原御傳記・野村書店菅原天神御一代記・學友館愛國菅公美談・大川屋菅公御實傳・運塚麗水菅相丞博文館・藤園主人菅公唱歌(金港堂)

**みちしげ** 中院通茂 二二九一—二三七〇、寛永八—寶永七、八十歳

歌人通村の孫、權大納言通純の子、後西院以後の御歴代に仕へ東山天皇の時に内大臣に累進した。夙に和歌を好みて斯道に長じ、嘗て徳川幕府に幽居を命ぜられた時その述懐の味にめで免されたときまで噓せられた。家集を老槐和歌集(後にそれ以後並に子通躬のを合集して三槐和歌集)といひ、色紙形奥書、溪雲問答(歌學)などもある。

**みちちか** 源通親 (土御門通親) 一八〇九—一八六二、久安五—建仁二、一〇、五十四歳

内大臣雅通の子で、後白河—土御門の七朝に歴仕し

治承中藏人頭に補し參議に任ぜられ、權中納言・淳和  
獎學兩院の別當・左衛門督・檢非違使別當・權大納言・後  
院別當を歴、右近衛大將から内大臣にまで任ぜられた。  
歌に巧みで千載(六)・新古今(六)・新勅撰(五)等に採  
られて居る。その著に高倉院嚴島行幸記一卷(群三二  
九)がある。

**みちとし** 藤原通俊 一七〇七—一七五九、永承  
二—康和元、五十三歳

平安朝末期の歌人、白河の朝に仕へて權中納言に任  
じ、勅を奉じて後拾遺和歌集を撰ぶ。その味もこの集に  
五首金葉集に三首入つてゐる。彼和漢の學に通じ、才  
學一世に冠たるの名譽を得ようとして大分あせり氣味で  
あつたが、當時は大江山房・源經信などの大家があつ  
たので盛名を獨り放にすることが出来なかつた。その  
後拾遺の如き事實十一年も費したもののに、時の人  
は「難後拾遺集」を無名氏で出したり、「小餘集」を醜名を  
つけたりした。

**みちとも** 源道具 一八三一—一八八七、承安  
元—安貞元、五十七歳

内大臣通親の男、俊成の女婦、新古今集の撰者、土御  
門・德・後堀河の三朝に仕へ、官は右衛門督から大納

うげん」と音讀し醫を開業したが後、江戸に出て白雄  
の門人となり、その高足として春秋庵を襲名するつも  
りであつたが、話が不調に終つて別に一家をたて師道  
には背いたが巢光・成美と共に一世の大家とうたは  
れた。その著に道彦七部集がある。

**みちみ** 中院通躬 二二二七—二三九九、寛文  
七—元文四、一二、三、七十三歳

歌人通茂の子、東山より櫻町の朝に仕へ官は右大臣に  
至る。徳望あり家學たる和歌に達し又兼れて繪をもよ  
くした。嘗て正徳五年(二二七五)播州曾根菅公の祠に  
歌を集め記を作つて奉納した。家集を「通躬公集一  
卷」とし、尙三槐和歌集中にもその味が載せてある。

**みちむら** 中院通村 二二四八—二三一三、天正  
一六—承應二、二、九、六十六歳

國學者にして歌人を以て有名な通勝の男、後陽成より  
後光明の歴朝に仕へ官は内大臣に至る。然るに後水尾  
院御讓位の事に關し罪を獲て關東に幽閉せられ、雪冤  
全からずして長逝した。辭世にいふ、

さめにけり五十年の夢よ見しはなに高尾の紅葉

三吉野の雪  
家集を「後十輪院集二卷」といふ。尙「三槐和歌集」

言に至る。その歌新古今に十七首、新勅撰に三首、續  
古今集に四首採られてゐる。

千五百番歌合に

梅の花たが袖ふれしにほひぞと春やむかしの月  
にとはゞや

**みちなり** 源道濟?—一六七九、?—寛仁三  
信明の孫、方國の子、一條・三條・後一條の三朝に仕へ  
五位筑前守兼太宰大貳に至る。詩歌文章をよくし、詩  
文は本朝麗藻・類聚句題抄・文粹などに、歌は後拾遺  
(二〇餘)・詞華(六)・新古今(五)以下の諸勅撰に入り、  
別に源道濟集一卷(群二五二、九、六九九—七一)あ  
り、十體和歌一卷もその撰にかゝる。

**みちのぶ** 藤原道信 一六三二—一六五四、天  
祿三—正暦五、廿三歳

爲光の子で四位左中將に至る。歌は拾遺(二)・後拾遺  
(二)・新古今(九)その他の諸勅撰並に後六々撰等に  
入り、家集に道信朝臣集一卷がある。

**みちひこ** 鈴木道彦 (一説に村上道彦)  
二四〇三—二四六五、寛保三—文政二、九、六(一説  
に文政元年没)六十三歳

奥州仙臺の人、金令舎又は十時庵と號した。道彦を「た

中にも彼の味があつた。

**みちやす** 井上通泰 慶應二、一二、二一—  
兵庫縣平民松岡操の三男で、十一年井上碩平の養子と  
なつた。専門は(醫學博士で)眼科であつたが御歌所  
寄人として多くの秀味があり、澤山の門人があるし、  
御宸翰や國寶的な稀觀の書を數千卷も蒐集し、國文學  
界の恩人として一般の敬意を拂はれてゐる。その著に  
萬葉集新考があり、近くは日本古典全集中播磨風土記  
の攻證をして居る。

**みちゆき** 道行  
文體の名稱で、廣義では行路の情景と主人公の情趣と  
を融合して流麗な語句に整へたものを云ひ、狹義では  
戯曲脚本の人物について同様の文を云ふ。

例 播磨湯室のとほその曙に、室のとほその曙に、た  
つ旅衣色染むる、飾磨のかちち行く舟も、上る雲居  
や久方の、月の都の山陰の、賀茂の宮居に着きにけ  
り、賀茂の宮居に着きにけり(謠曲賀茂)

由良の湊を見渡せば、澳漕ぐ船の楫をたへ、浦の濱  
ゆふ幾重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠  
山渺々と、藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌吹上を  
外に見て、月に登ける玉津島、光も今はさらでだに、

長汀曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨を含める孤村の樹、夕を送る還寺の鐘、哀を催す時しもあれ、切目の王子に着き給ふ(太平記五大塔宮熊野落)此世の名残身も名残、死に行き身を譬ふれば、あだしが原の道の霜、一足づつに消えて行く、夢の夢こそはかなけれ、あれかぞふれば曉の、七つの鐘が六つ鳴りて、残る一つが今生の、寂滅爲樂と響くなり(近松作會根崎心中、お初徳兵衛の道行)

みちゆきぶり 道ゆきぶり 一卷

室町時代今川了俊(貞世)が九州探題在任の頃、京都を出発して中國街道づたひ長門の赤間關に至る紀行(群三三三、一一、一〇八一—一〇九八)

みづがきゑがほ 美圖垣笑顔 二四四九—二五〇六、寛政元—弘化三、九、五十八歳

江戸の狂歌師且つ戯作家。初め加賀町に質屋を営み美濃屋甚三郎と謂つたが、後轉業して本屋となり涌泉堂と號したが後更に芝田町に移つた。狂歌堂眞顔に狂歌を學び、涌泉亭眞清と號し又愛亭とも號した。その作兒雷也豪傑物語は有名で、他に柳髮吹雪夜風といふ作がある。

みづかがみ 水鏡 三卷

神武天皇から仁明天皇まで五十五代千五百餘年間の歴史を國文で書いたもので、記事の上からは大鏡の直ぐ前に配せられるが書物の出たのは大鏡の後、之に倣つて書かれたものである。「龍蓋寺に宿願ある尼がその參詣の序に長谷に詣でて、ゆき合つた修行者が葛城山中で逢つた仙人の物語をさながらに話さうとて、つぎつぎ語り聴かせたものを尼が心覺えに書きとめたもの即ち本書である」と冒頭して本文に入った。その趣向も大鏡の踏襲であり、大鏡に對して「水鏡」とつけたのも大鏡の手前作者自遜の題名である。作者は中山内大臣忠親で、年代範圍が廣い爲めに叙事疎漫の嫌あり、行文も濕ひがない(校日大一・二・國大、一七・江見清風氏、水鏡詳解・關根正直・萩野由之・松井簡治三氏校水鏡、六合館)

みづかたいへいき 三日太平記

明和四年(二四二七)十二月大阪竹本座上演、近松半二・三好松洛・八民平八・竹本三郎兵衛の合作。

「武智光秀は主君小田春永を討つて天下に覇を唱へたのも僅かに三日、久吉と戦つて一敗地にまみれ、小栗栖村の藪かげから一作がついた竹槍に左股に重傷を負ひ、一命も危い所を伏見の里の片ほとり軍書の耽讀に

餘念もない隠者の家にかくまはれたのは偶然にも妻早月の父松下嘉平次の家であつて、光秀をしとめた一作は松下の子であることがわかつたが、次第によせくる久吉方……中にも久吉は下郎の姿に身をやつしてこの家に入りこんでくる。それを早く看破した松下が「草履掴みの小童奴」と喝破する。さういはれても久吉は一言もない道理で、彼は往時松下の草履さりをつとめ士分に取り立てられて、桶革の鎧を買へて奥へられた金子若干を持ち上げてそのまゝ、清洲へ出奔したのであつた。久吉は年頃の不都合を詫び、その詫び代にとて立派な貝足櫃を昇がせる。中には光秀の一子重次郎が入つて居る。光秀は今更何の面目と首さしのべて久吉に討てといふ。久吉は可かす「窮鳥懐に入る時んば獵夫も之を殺さず」と拒む。光秀は已むなく自身刃に伏しその介錯をした一作はやがてとりたてられて小西行長さなるといふ筋。

みづからのうたあはせ 自歌合

じかあはせ「自歌合」を見よ。

みづくに 徳川光圀 (黄門義公) 二二八八

—二三六〇、寛永五—元祿一三、七十三歳  
家康の孫、頼房の子、嗣いで水戸の城主となり大いに

風教を刷新し、弘道館の藩學に彰考館の修史に、諸學者の優遇に、澁川の建碑にその治績は史上に名高い。大日本史・禮儀類典始め多くの有益な編著は皆この彰考館で大成せられた(大日本史・禮儀類典五百十五卷・扶桑拾葉集三十五卷など約八十部一千七百冊、朱舜水も公に身を寄せ契沖も公の囑によつて萬葉を註し、その藩からは安藤爲章のやうな篤學も出た。而かも尙偉大なるは他年水戸風と稱して大節に當つては身命を賭して王事に勤むる美風の素地をつくつて一種誇るべき水戸魂の種を蒔いたことである(國學者傳記集成一一—一七三)

みつとし 藤原光俊 一八六九—一九三六、承

元三—建治二、六十八歳

増鏡に辨の入道とある人で右大辨に任官の後入道したのである。鎌倉時代知名の歌人で後嵯峨上皇の院宣により爲家・行家等と共に續古今集を撰んだ。歌は續後撰(九)・續古今(二八)・續拾遺(一五)等に採られてゐる。

みつなか 色川三中 二四六二—二五一五、享

和二—安政二、五十四歳

考證家、常陸土浦の人。

みつね 凡河内躬恒 一五一七—一五六五、天

安元—延喜七、四十九歳

祖先は未詳。寛平六年、甲斐権少目・延喜七年、丹波権大目・兼御厨子所・同十一年、和泉権掾等に歴任、貫之等と共に勅を奉じて古今集を撰び貫之と相並んで當代歌壇の双星とも謂ふべき人であつた。その味は古今に五十餘首後撰に二十餘首採られ、家集に凡河内躬恒集(群二六一、九、九九五—一〇〇七、續國四〇四—四一二)がある。

彼が作歌の特徴は猶李太白の如く(貫之の杜甫式なるに對して)放膽にして即興、語の彫琢の如き措いて問はず、

照る月を弓張としもいふことは山邊をさしていればなりけり

白雲のこの肩にしもおりぬるは天つ風こそ吹きてきぬらし

秀味は特に叙景歌に多い。

住の江の松を秋風ふくからに聲うちそふる沖つ

白浪

千鳥なく濱の眞砂をふみわけてゆく旅人はあはれ誰ぞも

けれども一面又多情多恨或は老衰を歎じ、或は沈淪を

憾み厭世呑嗟の聲の悲しむべきものもある。

みな人は花のころもを着る中にひとりぞ老にしづみはてぬる

わび人のおもふ心をちる花にそへて雲ぬに吹きつけよ風

ことさらに死なむことこそ難からめいきてかひなく物おもふ身は

尙彼の著と稱するものに秘藏抄「古今打聞」といふがあるけれども雑駁で本物ではないといふ。

みつねしふ 躬恒集 一卷

みつねしふ 凡河内躬恒集を見よ。

みつのはままつ 御津之濱松

濱松中納言物語を見よ。

みつひで 烏丸光榮 二三四九—二四〇八、元祿二—寛延元、六十歳

左中辨宣定の子、才學を以て頻りに昇轉して内大臣に至る。歌文共に秀でその著に家集「榮葉和歌集」九卷・紀行「打出の濱の日記」一冊がある。

みつひろ 烏丸光廣 二二三九—二二九八、天正七—寛永一五、七、一三、六十歳

室町末期から徳川初期にかけての堂上歌人の代表的の

の空

千曲川岸のうげらに春行きて卯木に老いし渡守る子よ

汐ぐもり午より吹き立つ南風に死ぬけはひなる海ぞひの町

みつもの 三物

連歌、俳諧に於て發句・脇・第三の三句をいふ(千句興行の時には豫めこの三物だけを作つておいて會席にかけるとが定まりである)

みつゆき 源光行?

鎌倉初期の文章家、父を光遠といひ仕へて正五位下右衛門尉を拜した。彼亦後鳥羽・土御門・順徳の諸朝に仕へ河内守兼大監物正五位下を拜した。紀行文、海道記(群三二〇、一一、九六〇—九九五)は彼の著として名高い。源氏物語の本文を定めたものは河内本といつて定家の青表紙と相並んで重んぜられてゐる。又河内本に註を施した水原抄も源氏物語の古註本として名高い。彼れ別に蒙求和歌といふのを著した。歌も上手で千載以下の勅撰集や夫木集に散見してゐる。

みつゑ 富士谷御杖 二四二八—二四八三、明和五—文政六、八、六(一説文政六、一二、一六)五十六歳

一人で、蓋し當時の縉紳中、漢學には造詣の深い人もあつたが、和歌に心を潜めるもののないのを遺憾とし、自から進んで細川幽齋の教を受け、尙佛學の素養の必要なるを聴いて一糸和尙に參禪もした。家集を黄葉和歌集といひ、又書畫をもよくした。

まれに見ればあらぬところさたどるまで茂りそひたる庭の夏草

身のうさを忘れてむかふ山櫻花こそ人を世にあらせけれ

白妙の月の桂の種とりて卯花垣は植ふしとぞ見る

師幽齋の説を聴書した耳底記は斯道の人に重んぜられた(國華二〇一號五七三烏丸光廣筆十二月書畫卷拔萃)

みづほ 太田水穂 明治九、一二—

信州の人、名は貞一、長野師範卒業の外は正式の學歷なく、日本齒科醫學専門學校の教授として傍ら「潮音」の主幹として歌道にいそしみ、つゆ草・山上湖上・土煙・拇指・愛情・雲鳥等の諸集があり、他に芭蕉研究に關するもの古典註釋に關するもの及び隨筆にも好著がある。

夢とあひ夢と別ればつらかりき花ほの白き明方

成章の子、通稱専右衛門、初め成壽(又成元)といひ後御杖と改名、北野と號し又源吾ともいふ。學を父に承け、訓詁・和歌・國史に精通し彈琴までも堪能であつた。

古事記燈二卷・萬葉集燈・土佐日記燈二十四卷・假名訓纂追考・百家類葉二卷・百家部類抄・歌袋・詞葉新雅・百人一首燈・歌道非唯抄・いれひも・北邊隨筆・北野文集・和歌梯(磯部屋發行)

等の著がある。

**みとがく 水戸學**

徳川光圀尊王愛國の志深く、又熱心修史の業を治めた。所謂水戸學はこゝに發端し儒學を中心に神道歴史を併せ重んずるのがその特徴である。この派の主なる學者は安積澹泊・藤田圃谷・青山拙齋・藤田東湖などである。

**みとく 石田未得(未徳)** 二二四七—二三二九、天正一五—寛文九、七、一八、八十三歳

徳川初期の俳人で、出家後江戸兩替町にすみ、乾堂と號し、又右衛門と稱す。貞徳の門に入りて學殖奇才を以て聞えた。その著一本草五冊は俳諧を編したもので別に週文俳句百韻及び家集吾吟我集がある。彼又狂歌をも能くした。

出し置いて寝られぬ伽に炭火かな  
交らへば七重の膝を八重に折り袴のひだのむつ  
かしの世や

(國刊一期新群一〇、石田未得吾吟我集一〇)

**みどりくわいふう 緑廻風**

せいけん「三宅青軒」を見よ。

**みなせさんぎんひやくるん 水無瀬三吟**

百韻

後土御門天皇の長享二年(二一四八)山城の水無瀬で當時の名家宗祇・宗長・竹柏等の催した連歌の集(續群四八〇)

**みにしふ 壬二集**

いへたか「藤原家隆」を見よ。

**みにる 壬二位**

いへたか「藤原家隆」を見よ。

**みねもり 小野岑守** 一四三八—一四九〇、寶龜九—天長七、五十三歳

平安朝初期の漢學者にして漢詩人、桓武・平城・嵯峨・淳和の四朝に歴仕し、凌雲集の撰者として編選の事に努め、又内裏式の撰をも手傳つた。地位は治部大輔・皇后宮大夫・參議兼太宰大貳・勘解由長官兼刑部卿を閲

歴した。彼の有名な參議篁は實にその子である。彼の詩は凌雲・文華秀麗・經國の諸集に出てゐる。

遠使邊城

王事古來稱驛監 長途馬上歲云闌  
黃昏極嶂哀猿叫 明發渡頭孤月團  
旅客期時邊愁斷 誰能坐識行路難  
唯餘勅賜裘與帽 雲犯風牽不加寒

**みねを 上野岑雄 ?**

承和の頃の歌人だと云ふ。位は六位で、その咏は、古今、後撰に出てゐる。

ほりかはのおほきおほいましち君みま  
かりにける時に、ふかくさ山にをさめ  
ける後によみける

深草の野への櫻しこ、るあらばことしばかりは  
墨染に咲け

**みのは 美濃派(獅子門)**

芭蕉十哲の一人、各務支考が美濃に在つて立てた俳諧俳句の一派で俳系六世に及び可なりに繁榮を見た。横井也右の如きも支考の弟子太田巴靜について教はつたことがある。

**みふね 淡海三船** 一三八二—一四四五、養老

六—延暦四、六十四歳  
奈良朝の學者で、漢詩人、孝謙・淳仁・稱徳・光仁の四朝に歴仕して大學頭兼文章博士刑部卿に任ぜられた。日本詩集の始めの懷風藻は彼の撰だといふ。その詩は經國集に出てゐる。

**みもすがはうたあはせ 御裳溜川歌合**

一卷

さいぎやう「西行」を見よ。

**みやうじやう 明星**

明治三十年四月新詩社を組織した與謝野鐵幹によつて發刊された詩歌専門雜誌で、所謂「明星派」と稱し、斯境の一勢力を醸成した(尙「明星派」を見よ)

**みやうじやうは 明星派**

新詩社同人の詩人・歌人をいふ。與謝野鐵幹・一條成美・窪田空穂・水野葉舟・前田林外・平塚篤・山川登美子・茅野雅子・平野萬里・高村光太郎・相馬御風などが主なる作家で、殊に代表的な歌人は鳳品子(後の與謝野夫人)であつた。毎月一回研究会を開きその初回には落合直文も臨席して後進を激勵した(「明星」「星蕪派」を見よ)

**みやうほふだう 明法道**

大寶令以來我邦の主要科目の一つで、専ら我邦の律令を研究する學科（古類、文學部二、八九五—八九六）

**みやがはうたあはせ 宮川歌合** 一卷  
さいぎやう「西行」を見よ。

**みやこのてぶり 都の手ぶり** 一卷  
石川雅望の著。江戸の風俗を、

一、富澤町 古着市

二、小傳馬町 旅宿

三、兩國廣小路 見世物

四、茅場町 藥師まうで

五、辻君の風俗

と五段に寫したものを、全篇擬古文で、優麗に而かも達意に書かれてある（百説一）

**みらいき 未來記** 一卷

藤原定家が今の世の人の徒に近世歌人の秀味をまね新奇第一とれらつて歌道の眞意を去ること日々遠からんとするを憂ひ、わざとさうした自己の味五十首を春夏秋冬戀に部立して示したものを。後に中院通茂が之を講義したのを松井幸隆が筆記したものに「未來記雨中吟聞書一卷」といふがある。

**みわたし 見渡し**

八—二〇、但しこれとても善本とは謂へない、尙考訂の餘地がある）

**みんざん 中江珉山** 二二一—二二六、二二八—二二九、明

曆二—享保一—、七十一歳

儒家、伊賀の人、名は一貫、字平八、晩年薙髮して快安と號し、伊藤仁齋につきて儒を學び、寶永中大阪に居て盛に古學を唱へ、淺見綱齋・三宅尙齋等をめどにとつて大いに宋學を攻撃した。その著に理氣辨論・四書辨論等あり、詩は少しも作らなかつた。

**みんぶきやうにふだう 民部卿入道**

かめいへ「藤原爲家」を見よ。

**みんやくやくかい 民約譯解**

明治十五年九月中江篤介が佛のジャンジャックルツソ

（戎雅屈婁駭）の著を平明な漢文に譯したもので彼の馬場辰猪の天賦人權論と共に明治中期の政治界・思想界に自由平等の大波をあげた有名な譯である。

一、本卷旨趣・二、家族・三、強者の權・四、奴隸・五、終に約を以て國本とせざるべからず・六、民約・七、君・八、人生・九、土地

の九章に分れ、人類は元自由に生存したものを後世色色の束縛が出来た。この束縛は人類永遠の幸福を妨げ

連俳の用語で、ずつと一時に見渡される面、即ち懷紙一面の間をいふ。即一枚目の裏と二枚の表と。二枚目の表と三枚目の裏と。三枚目の裏と四枚目の表とは皆見わたしである。

**みゑきち 鈴木三重吉** 明治一五、九、二九—

廣島の人、三高から入つて東大英文科を卒業、漱石門下の一人でホトトギス風の寫生の筆致はその傳統だが、色彩の華やかな音調の律動的な文で新人の生活情調（ロマンチック・デカダン・耽美的・異國情調的）を委曲に寫し「小鳥の巢」が出世作で、創める花片・愛憎・勝敗・人間哀史（長編小説三部作）等多くの作品を出したが大正期に入つて一面淑女畫報の編輯に従事しつつ新兒童文學雜誌「赤い鳥」を出してその方で多大の成功を収めつゝある（鈴木三重吉全集十三冊）

**みんかうにつそ 岷江入楚** 五十五卷

中院通勝、慶長三年（二二五八）の作。源氏物語の註釋書で從來の河海抄・花鳥餘情・弄花抄その他既成註釋を勤勉に集成したもの。そこで書名は山谷の詩「鴻江初濫觴、入楚乃無底」の句意をとり源氏物語奥入（伊行著で源氏の註釋中一番早く出た）を斯學の濫觴に本書を岷江楚に入つて底無きに譬へたもの（國文註釋全書一

る所の思むべき羈束だ。眞に人類の幸福を享けんとするものは自然にかへれ、原始にかへれ、あらゆる人工の羈絆より解放されよと熱叫したものである（明治名著集一二五—一四〇）

ムの部

**むかしばなしいなづまへうし 昔話稻妻**

表紙 五卷 二十回

山東京傳、文化三年（二四六六）四十六歳の作。彼の讀本中劇的趣味の横溢したる點に於て最も世人の愛讀した小説で、大和國佐々木判官貞國のお家騒動を一篇の骨子とし、之にそれ／＼相異なれる三個の話、

一、は不破伴左衛門（佐々木の悪執權道犬の子、名古屋山三郎（忠臣三郎左衛門の子）

二、は佐々良三三郎と浮世又平さの話

三、は軍談師梅津嘉門のこゝ（應仁の亂に於ける細川山名の反目と結合し落を佐々木家お家騒動の圓滿解決とす）

を以てし「遺恨草履・風前燈火・刀劍稻妻・積善餘慶」等の題目の下に叙述したもの。その着想は早く不破名

古屋を主材とせる阿國歌舞伎があつて、ついで之をお家騒動にからませた狂言となつたものから暗示を得たもので、殊に第一の挿話に力点をおき、伴左が従來の芝居の着附は荷翠の句「稻妻の初まり見たり不破の關」からさつて、稻妻模様なので、美女名古屋の着附をげ之も其角の「傘に時借さうよ濡れ燕」から思ひついて濡燕ときめた處、これが又讀者の喝采するところとなつた。この作が餘り好評なので更に續篇を頼まれて書いたのが本朝醉菩提である（帝文第一五篇一—一五二）文章も流麗なり、和漢故事も豊富なり、作者の文才と學殖とをよく表してはゐるが構想には隨處に破綻と無理がある（藤岡作太郎氏近代小説史二七一、三八七、四三三、五一四、五八二）

**むぐらゐ 菘居**

おきなまろ「黒澤翁磨」を見よ。

**むげん 小原無弦**

英文學者で「シェリーの詩」などの名譯がある。

**むげんげき 夢幻劇**

構想を傳奇的とし舞臺に幻想美をたゞよはせ、實在の世界に在り得べからざる場面を演出する劇で、その優れたものは神韻漂渺の趣に富むが、その劣つたものは、

荒唐無稽に墮する。

例、近松の「傾城反魂香」の中狩野四郎二郎が亡き許婚遠山と同棲する處。

「本朝廿四孝」の八重垣姫が法性の兜の奇特で勝頼の危難を救ふ處。

**むさうこくし 夢想國師** 一九三一—二〇〇

六、文永八—觀應二、一〇、一、七十七歳

南北朝から室町初期にかけての學僧、名は疎石、伊勢の人、宇多天皇九世の孫に當り、弘安六年平鹽山空阿法師に師事してから以來叔父内山の明眞・戒壇院慈觀律師・建仁寺無隱・東勝寺無及・建長寺華航・圓覺寺桃溪・宋の一山・高峯禪師等について修業審に到り、正安二年那須の雲巖寺の庵居を始め、

美濃長瀬山の 古谿庵

土佐五臺山の 汲江庵

相模三浦の 泊船庵

上總千町莊の 退耕庵（元享三年正月）

鎌倉永福寺の傍の 南芳庵（嘉曆元年）

等に幽棲の迹をとゞめ、曆應三年足利尊氏に招かれてその建立に係る天龍寺の開山となり、貞和元年勅によりて金襴紫衣を賜はつた。法嗣に無極・春屋・絶海・

龍湫・觀中・義堂・古銀・默翁・無求などがあり、その著

に語録・臨川・家訓・西山夜話・和歌集などがある。

**むさうびやうゑてふものがたり 夢想**

**兵衛胡蝶物語** 九卷

瀧澤馬琴の諷刺小説で、初篇五卷には夢想兵衛が少年國・色慾國・強慾國・貪婪國を遊歴する物語を記し、後篇の四卷には、食言郷・煩惱郷・哀傷郷・歡樂郷をめぐることとを記す。この作品に忠臣蔵のお軽を論じた一節がもて師匠の山東京傳と感情が疎隔するやうになつたといふ（帝文四一、袖珍名著文庫二二）

**むしまろ 高橋蟲磨** ?

萬葉歌人中、傳説詩人・叙事詩人として異彩を放つて居るがその傳記はよくわからない。萬葉の六、八、九、にその味が出てゐるが、それ以外にも作者として擬せられて居る歌が多い（浦島の歌や富士山の長歌など）當時は「高橋蟲磨集」といふものがあつたらしいが、今日傳はつてゐない（久松潜一氏萬葉集の新研究二六三—二九四、傳説の歌と高橋蟲磨）

**むしまろ 下毛野蟲磨** ? 卅七歳

奈良朝の學者、元正の朝に文章博士となり、式員外少輔・大學助教等に歴任した。詩は懷風藻に出、對策は

荒唐無稽に墮する。

例、近松の「傾城反魂香」の中狩野四郎二郎が亡き許婚遠山と同棲する處。

「本朝廿四孝」の八重垣姫が法性の兜の奇特で勝頼の危難を救ふ處。

**むさうこくし 夢想國師** 一九三一—二〇〇

六、文永八—觀應二、一〇、一、七十七歳

南北朝から室町初期にかけての學僧、名は疎石、伊勢の人、宇多天皇九世の孫に當り、弘安六年平鹽山空阿法師に師事してから以來叔父内山の明眞・戒壇院慈觀律師・建仁寺無隱・東勝寺無及・建長寺華航・圓覺寺桃溪・宋の一山・高峯禪師等について修業審に到り、正安二年那須の雲巖寺の庵居を始め、

美濃長瀬山の 古谿庵

土佐五臺山の 汲江庵

相模三浦の 泊船庵

上總千町莊の 退耕庵（元享三年正月）

鎌倉永福寺の傍の 南芳庵（嘉曆元年）

等に幽棲の迹をとゞめ、曆應三年足利尊氏に招かれてその建立に係る天龍寺の開山となり、貞和元年勅によりて金襴紫衣を賜はつた。法嗣に無極・春屋・絶海・

經國集に出て居る。

**むしまろ 安部蟲磨** ?—一四一二、?—天平

勝寶四、三、

萬葉歌人。

天平 九、 九、外從五位下

同 一二、皇后宮亮、少進從五位下

同 一〇、 七、(問)中務少輔

同 一二、 九、廣嗣の反、勅によりて太宰府征討に發向

同 一一、從五位上

勝寶元、 八、兼紫微大忠

同 三、 正、從四位下

歌は萬葉四、六、八にある。

**むしんは 無心派**

鎌倉初期連歌作者の中、旨と機智滑稽を歌ふ一派の人々を云ふ。藤原宗行・僧泰覺等がそれで、この派を又栗の本さもいつた（古類、文學部一、一〇〇〇—一〇〇一）

**むぢゆうほふし 無住法師** 一八八六—一九

七二、嘉祿二、一二、二八—正和元、一〇、一〇、八十

七歳 諱は道曉、一圓坊と號し、無住和尚と稱した。十三歳



鎌倉の僧房に住み、十八歳出家、二十六歳京に出、東寺三寶院の一脉肝要傳授を受け、東福寺に入り開山聖一國師の法統を嗣いだ。沙石集・雜談集の著者として名高い(廣文庫第十八冊一一一五)

**むねたかしんわう** 宗尊親王 一九〇二—一九三四、仁治三—文永二、三十三歳

後醍醐天皇の皇子、寛文二年北條時頼に迎へられて鎌倉に下り將軍に任じ、同時宗の時に京都へ歸られた。藤原爲家を師として和歌をよくせられた。御歌は續古今(六十餘)・續拾遺(十八)・玉葉(二十)等に入り家集を瓊玉和歌集十卷(群二三〇、九、四三—六一)といふ。

**かねたけ** 徳川宗武(田安宗武) 二三七五—二四三一、正徳五—明和八、五十七歳

徳川八代將軍吉宗の子で田安家の祖、夙に國學と和歌に趣味を有し、賀茂眞淵の指導を受け萬葉振の歌味に巧であつた。歌學の書に國歌八論餘言、家集に天降言あり、又有職故實の造詣深く樂曲考。服飾管見・類聚愚抄・玉函叢說等を著す。

みよし野のとつ宮どころさめくればそことも知らに薄生ひにけり

今この地の別格官幣社井伊谷神社は即ちその靈を祭つた社である。

**むねはり** 在原棟梁?—一五五八、?—昌泰元業平の長男で、元方の父、清和・陽成・光孝・宇多・醍醐の五朝に歷仕して東宮舍人・筑前守などに任ぜられた。その味は古今・後撰などに數首とられてゐる。

春立てど花もにははぬ山里はものうかる音にうぐひすぞ鳴く

**むねゆき** 源宗子?—一六〇〇、?—天慶三光孝天皇の皇子是忠親王の御子で、寛平六年に源姓を賜はつて臣下に列し、延喜の頃荐りに國司を歷任し、從四位下右京大夫に至つた。その味古今(六)・後撰(三)等に入り家集に源宗子朝臣集(群二四八)九、五八三—五八四、續國四三六—四三七)といふがある。

山里は冬ぞさびしきさまさりける人めも草もかれぬとおもへば

**むねゆきしふ** 宗子集  
**むねゆき** 源宗子を見よ。

**むみやうせう** 無名抄 (山木髓腦 倭秘抄 莫傳抄)  
源俊頼の作と言はれてゐるが藤岡博士は日本評論史一

(國刊六期三十幅正編歌體約言一卷は延享三年(二四〇六)太田南畝が「みそのや」に收めたもので宗武の序眞淵の論外一篇より成る)

**むねながしんわう** 宗良親王 (尊澄法親王、信濃宮) 一九七三—二〇四五、正和二—元中二、七十三歳

後醍醐天皇の御子で護良親王の御同母弟(御母は藤原爲世の女爲子)十餘歳妙法院に入らせられ尊澄と申し元徳二年三品天台座主、元弘の役には兄君と共に叡山の僧兵を率ゐて奮戦せられ、不幸にして敵手に落ちて讃岐に流されられ、三年北條氏の滅亡と共に再び都に歸つて復座主となり、建武二年二品、延元元年一品(座主の一品はこれが始まり)四年天皇崩御、その御遺言により還俗して宗良と御改名、爾來南朝の爲めに駿河・信濃・美濃と馬鞍常に暖かに、最後に征夷大將軍として遠州井伊谷城に住まはせられ、天授三年大和の長谷に入りて僧となられ、又信濃や、河内(山田)に行かれ、弘和元年後龜山院の院宣を受けて新葉集をえらばれた。南朝方の諸家の味を集めたもので親王御自身のものも九十九首入つてゐる。けれども又別に李花集といふ御家集もある。斯して最後は又遠江に暮らされた。

九五—一九六に偽作なる由を論ぜられた(佐々木博士の日本歌學史も同様否定説)蓋しこの書に盛られた内容は大抵穩當だが又それだけ平凡で、到底散木集のやうな奇抜な味ある俊頼の作ではなく、全く二條家亞流の筆だといふ。浦島・姥捨山など歌にまつはる故事傳説などをあげて相當参考になる記事がある(註和歌叢書七、六〇五—六六七)

**むみやうせう** 無名抄 (無名秘抄) 二卷  
鴨長明の著、題心事・連から善惡ある事・隔海路戀事・我與人事・晴歌可見人事等凡て四十八項、當時の雜談逸話等を集めて歌學のたすけとしたもの(日本歌學全書一二・群二九四、一〇、七五二—七八八・大日本佛教全書中同書(佛教全書刊行會發行)

**むみやうせう** 無名抄 (無名秘抄) 二卷  
「無名抄」を見よ。

**むめいさうし** 無名草子  
鎌倉初期の作で、王朝以來の諸物語を批評し更に歌の批評にも及んでゐる。論旨概ね妥當、時に鋭い批評眼の閃きもある。我が國文學に即した文藝批評をしようと思ふものは、この原始的且つ古典的な文學概論を看過してはならない。著者は未詳だが序文には東山に住む八

十三歳の老尼とある。老尼はともかく永年お宮づとめをした老女官の筆であらう。そしてその人は少くとも散文にかけては一隻眼を具へてゐた人であらうと想はれる(阪井衛平氏撰新國文學通史中巻七五―七八・校日國文學大系第二巻、三九九―四六六)

**むらかみ 大伴村上?**

萬葉歌人、歌は集の八、一九、二十の三巻にある。續紀にその子益人瑞兆を奉つた賞に均霑したこと、寶龜二年四月從五位下に叙し同十一月肥後介に任ぜられ、三年四月阿波守となつたことなどが散見して居る。

**むらかみてんわう 村上天皇 一五八六一―六二七、延長四、六―康保四、五、二五、四十二歳**

第六十二代の天皇、醍醐天皇第十四皇子御母は皇后穩子(藤原基經女)銳意治を圖られ、後世醍醐天皇と並べて「延暦天曆の治」と申し奉る。御資性明敏にして夙に文學を好ませられ、和歌に詩に文に……琵琶までも御堪能であつた。嘗て一老吏を召して「朕が代と延喜といづれか優れる」と御下問になるとその老吏が「今太平にして復申上ぐべき事もなし唯主殿寮多く松明を進め率分堂草を生ずるを異にするのみ」と上奏した。即ち「劇務夜に至り歳貢の輸する無し」とい諷刺であつたから

天皇大に御反省の御様子であつたといふ。

**むらさきしきぶ 紫式部**

「源氏供養」を見よ。

**むらさきしきぶ 紫式部 一六三五―一六九一**

一、天延三―長元四、五十七歳  
(生死不明、今、大日本史本朝烈女傳堀秀成考によつて推定した)

藤原冬嗣の六男良門五世の孫に當り、父は正五位下越後守(後、越前守)爲時、曾祖父は短篇小説の作者(堀中納言物語)母は常陸介爲信女、幼より聰慧、兄惟規が史記を習ふのを傍で聽いてゐて先に覺えてしまつた。父爲時が之を見て「この兒男ならましかげ」と歎じたといふ。長じて同家うちの宣孝に嫁し二女大貳三位賢子と辨局とをあげたが、不幸にして夫が早世したのでそのまゝ、寡居、入りて上東門院に仕へ才筆のまに「源氏物語」五十四帖を著した。これ本邦文學中最大の傑作として後世に嘖々たる大著である。又自分の生活を書き綴つて「紫式部日記」(群三二一、一一、五七六六二七)をも作つた。これも彼が文才・歌才と源氏物語作者の人となりとなす貴重な記録である。尙又「紫式部集」といふ家集もある(羣書二七四、一〇、二一八

―二二四續國六〇八一六一三)

紫式部の名稱の中、式部は父か兄かの官名から來たことについては衆説一致してゐるが「紫」の名稱は、

一、紫の上(源氏物語中理想の女性)の描寫に最も力をそゝいだから。袋草子

二、式部の母は一條帝の乳母であつたから、天皇が上東門院に向つて「我がゆかりのもの」としてよろしくたのむと仰せられた。ゆかり・ゆかりの色・紫と轉じて式部の上につけるやうになつた。袋草子

三、始めは藤原の原を省いて藤式部といひ、藤の花のゆかりによつて紫といつた。河海抄

四、公任が彼女をさがすのに「あなかしこ、このわたりに若紫やさふらふ」といつた。紫式部日記

五、以上の折衷 本居宣長・萩原廣道  
など説が區々になつてゐる。

生歿の年もはつきりわからないのだから何とも斷言が出来ないが、彼が嫁いだのは廿三四歳乃至廿七八歳頃で當時にあつては晩婚の方であり、彼が源氏の大作に筆を執つたのは寡居時代の静かな人生觀照に浸つた時であり、彼の容姿は醜くはなかつたらうが大變な美人でもなかつたらしい(道長の挑みに應じなかつたこと

も單に彼女の高い矜持を示した話と観たい)彼の人物は勿論謙遜家であつたとしても幾分謙遜の自慢といつた氣障な點もあつたさといはれてゐる……が何にして我國文學史上誇るべき一大作家である(この項、芳賀矢一博士國文學概論三五―三六・藤岡作太郎博士國文學全史平安朝篇四六九―四八二・手塚昇氏源氏物語の新研究三二―七〇参照・國華二一六號二八一狩野探幽筆「紫式部」)

**むらさきしきぶがにつき 紫式部が日記**

「紫式部日記」を見よ。

**むらさきしきぶにつき 紫式部日記 (紫**

日記・紫式部が日記) 二卷

紫式部の作にかゝる日記で、一條天皇の寛弘五年(一六六八)の秋から同七年の正月までのことを記して居る。その中繁簡の異同があつて五年には中宮御産のこと、五節のことを委しく記し、六年は正月三日と、消息文と十一月の記事だけ、七年は正月一日、二日、三日、十五日のこゝだけがあがつて居る。

そこで現存の日記は原文の抄録であらう(中根淑)とも原文の脱漏した殘簡であらう(木村正三郎)とも日記とはいひ條印象記録や追録とも謂ふべきものである(關

根正直)ともいはれて居る(池田龜鑑氏宮廷女流日記  
文學一七九―二三〇・壺井義知、紫式部日記傍註、雁金  
屋・鈴木弘恭氏、校正紫式部日記、雁金屋・長田氏、  
紫式部日記講義・關根正直氏、紫式部日記精解・丹波一  
三一、紫式部日記繪卷・國華四六號一八四―一八五、  
六〇號二二六―二二七、紫式部日記の繪・九三號一六  
六一―一六七、二三九號二五九、二六一、紫式部日記繪  
卷)

むらさきにつき 紫日記

「紫式部日記」を見よ。

むらさきひふ 紫被布

廣津柳浪、三十二年四月作の小説。梗概は

「元高田村宇鴉山には家數三十ともなき其入口から五  
つ六つ目の茅葺屋根、此邊にては一二に數へらる、其  
門構に以前は名主をも勤めたかとも見える(三三二)  
「お若」は實に此家に生まれた一人娘である。天の成せ  
る麗質は廿六と云つても誰も本當とは思へぬ程の萬年  
娘である。

「契は太輪の銀杏返に五分ばかりの珊瑚珠の金飾の簪  
兒を挿し、がす双子の縮入に黒縮緬の一つ紋の半天羽  
織を着、兩ぐりの表付に黒の唐天の鼻緒をすげた下駄

神さんの茶店のおかみと心やすい所から、其處の仲居  
のやうにして手傳つて居ると又もや茶店が繁昌する。  
其中宮下と云ふ可成りの煙草店の主人に懇望せられて  
十八番目の結婚。始めは美人の看板で店も大變繁昌し  
たが「あれが名代の紫被布だ」と次々傳へて段々評判  
を悪くして店は一向はやらなくなつた。主人は「いつ  
そずぶ抜けたことをしよう」と奇抜にも紫被布きたお  
若の繪看板を掲げたがそれが又みんなの損する所と  
なつて商賣は愈々あがつたりになつた。流石の宮下も  
お若が怨めしくなつてそろ／＼痼癪を起し出す。妻  
だつて望んで来た譯でもありませんし、恥も外聞も捨  
て、看板にまで出されまして、それでうまく行かない  
つて怒られましては埋りませんわ」と澄ましてゐる。  
此にも一理はある宮下色々苦肉の計をめぐらして、と  
ど自分の親友で始めから自分とお若を争つて今もお若  
に思召のある小山と云ふのに譲らうと思つて、よくよ  
く小山としめし合はせて態と宮下の不在の時には偶然  
のやうにして小山が尋ねて来る。そしてちよい／＼浮  
氣っぽい風をして見せる。けれどもお若は此時頃から  
してはつきりと自分と云ふものを正視し出した。元來  
彼女は昔の初戀を何よりも懐かしんで其情調に耽らう

に徐かに石疊を歩む(三六一)……年は廿六であるが少  
くも五歳ばかり若く見ゆるのは色の飽くまで白きに細  
面で、而も小柄の爲かも知れぬので二重縁眼の太く清  
し愛嬌ありて此ばかりにも男兒の意を惹くべきに、眉  
毛は作りたる如く一糸の亂れたるなく鼻形よく高く口  
元に締ありて顰蹙の肉貧しからずして笑ひたる時に白き齒の  
似合はず頬の肉貧しからずして笑ひたる時に白き齒の  
少し露はれ鬢の渦巻もするかと見え、美しくして而  
も斯くまで愛深き女は鴉山の名物女の名虚しからぬば  
かりでなく、此が爲めには幾人の男の命を縮めたか知  
れぬとの評判(三六一)始めさる乾物屋へ嫁いだが間  
なく牛込の或小學教師と同棲した。此教師こそは實  
にお若が初戀の人で其時間問題の紫被布はして貰つたの  
である。所が其男が餘儀ない事情で國へ歸ることにな  
つて、つまり體のよいしよい投げをされた所から  
彼女の性格は段々荒み出した。此處に一年彼處に二年  
と流れ／＼して十七人まで夫を替へた。何れも嫁く時  
には天晴れ貞女を通さうとの意氣込なのが、暫らくする  
さ何でこんな處へ嫁ぐ氣になつたらうか後悔して歸  
る。果ては自分でも自分の本心が知れなくなつた。最  
近傳通院前の唐物屋を去られてから雜司ヶ谷の鬼子母

とする時に限つてどうしても紫被布が着なくなる。す  
ると誰かと戀に落ちるので世間ではお若の紫被布を目  
して彼女が生活の轉期の象徴として居る。けれども此  
節では最早小山の爲に紫被布を着る氣にもならない。  
彼女が宮下に嫁ぐ一寸前に途で見そめた金太の息子で  
銀次と云ふ美少年のことが妙に氣にかゝつてどうして  
も忘れられない。築地の活版所の小僧とばかりは聞い  
たが人妻となつてはそれ以上尋ね知るよすがも無い。  
或日その銀次が煙草を買ひに来た處から店の小僧に聞  
くと、近頃つい近所の活版所へかはつて来たのだと云  
ふ。その中毘沙門様の縁日に俄雨が降つて銀次がしと  
どに濡れて此屋の軒に來たので、お若は飛び立つ思ひ  
で我居室に入れて着物を乾かしてやつたり菓子をやつ  
たりした。其夜主人は丁度留守、店のものは縁日参り  
お若は天與の機會とをござりせんばかりに悦んで銀次  
やん／＼と大事にもてなして、果ては泊つて歸れとま  
で勧めたがそこへ小山が来る。雨は止むして濛々かへ  
した。其次の縁日には逸早く銀次が参るのを見つけて  
自分も女中を伴につれて直ぐ後を追つかけて参り、と  
う／＼首尾して料亭へ連れてあがり色々御馳走して更  
に二次會とまで誘ひ込み、とう／＼一つ宿に泊つて翌

朝歸宅すると主人宮下の大立腹「女房ともあらうものが無断でよそに寝とまりするとは怪しからぬ」と云ふ「だからわたしは浮氣ものですつて断わつてありますわ、それを承知でお迎へになつたのぢありませんか……イヤそんなことをぐすく云はうよりも妾は此までの御縁ですから去られませう」と何の未練氣もなくサツサと紫被布一つを荷物で車で歸つてしまつた。暫らくは手切金の強請にあはうかとて宮下は留守を使つて店へは出なかつたが、そんなにはひは少しも無かつた。お若は一二度銀次の手を引いてその店の前を通つたこともあると云ふ。思ふにお若はもう此時手練手管の戀には飽きて純粹思無邪の愛に活きよう——それが自分の眞實であると覺つたのであらう。

お若の移り氣と對照して兄の小日向藤太郎と云ふのは極めて眞卒な樸直な性質で、彼は其愛妻お高を亡くしてから此處五年振すつと獨身で通して、毎日お高の墓參りをつゞけて石碑の前で世間嘲をしてそれを唯一の慰藉としてゐる。彼はお若が實着であるならば養子を迎へて家督を譲つて自身はお高のあとを慕つて死にたいとまで思つてゐる。

(柳浪叢書後篇三二五—四四九)

メの部

**むろまちしゆみ 室町趣味**  
 王朝の華麗を包むに鎌倉期の質樸を以てし、一見人を惹くげばくしさはないが、よく味はへると、いふし銀のやうな澁い趣味がある。これが室町趣味の根柢だと謂はれて居る。繪畫に於ては土佐派の繊細優麗と宋畫の氣韻生動とから出た狩野派の繪、建築に於ては法興院や法性寺の雄大と京鎌倉五山の禪味を集成した北山東山の金銀二閣寺、文藝に於ては華やかな臺詞に悲哀厭世の想をもち、細心な用意の下に簡素な技を演ずる能などはその好き代表である。

**めいか 宇野明霞** 二三三八—二四〇五、延寶六—延享二、六十八歳

名は鼎、字は士新、明霞と號し又「三平」と稱す。京都の人、夙に經學に心を潜め獨學十數年、會々荻生徂徠江戸に復古學を唱ふるや、その身多病の故を以て弟士朗を江戸にやつてその説を聴かせ、之を講習して坐ながら衆人に説いたので京都にも始めて復古學派が行はれるやうになつた。後、學の進むに連れて獨自の一

見解を立てた。性狷介不羈、諸侯の聘を受けず終身獨居して清貧に甘んじて居た。著書は論語考・左傳考・姓氏解・名字解・唐詩集解・護國名考四序評・滄溟近體集解・語字解・唐詩正律・七絶聲律・七才子近體詩考・明霞遺稿等。

**めいからせうそく 明衡消息**  
 「明衡往來」を見よ。

**めいからわうらい 明衡往來 (明衡消息)**

雲州消息) 三卷

後冷泉の朝の博學、藤原明衡の消息中、正月から十二月までの文例を集めたもの。上啓・案内の事・清恩章の事・三日會の事などが記載してある。これは、消息文としては初期の漢文體の文例を見るにもよし、猿樂その他故實の參考資料にもなり、旁々注意すべき書物だ。

又有「散樂之態」 假成「夫婦之體」 學「衰翁」 爲「夫摸」 婉女「爲」 婦 云々  
 などある。之を

程經ばすこしうち紛るゝ事もやと、待ち過す月日に添へていと忍び難きはわりなきわざになむ(源氏桐壺)に比べると王朝時代に全く相異なる漢文體と雅

文體との消息文を併用されたことがわかる(群一三八、六、一〇四二—一〇九一・日本教育文庫、第九教科書篇)

**めいくら 明空 (沙彌明空)?**

鎌倉時代に宴曲を集めて宴曲集五卷・宴曲抄三卷・眞曲抄一卷・究百集一卷を編み(正安三年八月上旬まで)つゞいて嘉元四年三月下旬までに拾葉集二巻を集めた(續群五五四、一九ノ下、七六一—七五)

**めいげつき 明月記**

藤原定家の建久三年(一八五二)三月以下の日録で題名は住吉の靈夢からつけたもの、文體は當時に特有な和臭を帯びた漢文、冊數卷數はまち／＼で四十五冊本・五十四冊本・六十一冊本などがあり、群書一覽には九十六卷とある。

明月記脱漏七冊は同じく定家が右の記に洩れた分、寛喜二、三年・貞永二年・天福元、二年・文曆二年等か補つたものなり、又後世一條兼良はこの記中の和歌に關することだけを書き抜いて「明月記和歌部類」一卷を作つた(續群四七〇)には「明月記抄出」として出て居る。一七ノ上、二四三—二六九、尙國刊一期本は三冊にしてある)

**めいさうたい 瞑想體**  
土井晩翠の詩體をいふ「晩翠」及び「天地有情」を見よ。

**めいせつ 内藤鳴雪** 弘化四、四、一五—大正—  
伊豫松山の藩士、維新迄色々藩政を司り、維新後は又公職について忙しい中に時勢に適應する修養だけは怠らず、四十六歳の時から同郷の子規と共鳴して新俳句の鼓吹につとめ、穩健親切な指導振で都下の新聞雜誌二十四種迄句撰を頼まれた。鳴雪句集・鳴雪俳話・俳句作法・俳句獨習・俳句の近道・老梅居雜著等の著作があり、燕村句集論講中の評にも光つたものがある。  
元日や一系の天子富士の山  
春雨に杉苗そだつ小山かな  
書初や難波津のよし悪しくとも

(鳴雪自叙傳)

**めいちしよねんのしりつがくから 明治初年の私立學校**

明治の文化建設に交渉多いものとして左の各種がある

校名	創立年	創立者	特 徴
慶應義塾	慶應四年	福澤諭吉	英米の功利主義的思想

同人社	明治六年	中村敬宇	英吉利文化と常識道德
同志社	明治八年	新島襄	基督教的博愛思想
達理堂		村上英俊	佛蘭西の學問と思想
立志社		板垣退助	佛蘭西の學問と思想

その他尺振八の共立學舎・津田仙の私立農學校・福田理軒の順天求合社・近藤眞琴の攻玉塾等も名高かつた。

**めいちてんわら 明治天皇** 二五—二二五  
七二、嘉永五、九(太陽曆一一、三)—明治四五、七、三〇、六十一歳

允文允武なる明治大帝の我が國史上に於ける御聖徳は今更申上げずともことであるが、學問教育に御心をそがせられた點に於て明治文學の産みの御親と仰ぐべく、天皇御親らは世界の大詩人とまで外人に稱へられて御歌所の御設置、臣下詠進の御催し、歌集「日月帖」の御自撰の外御一代の御製約八萬首、崩御以來それらに係りに命じて御整理中であり、大正十一年發行の明治天皇御集も日夕國民の拜誦する所となつて居るし、その中の御秀味は澤山にある。

**めいちはいく 明治俳句**

竹村秋竹の編、明治の新俳句を、四季の季題順に排列

し、編者が俳書閱讀の際や、俳句の運座の席上や、俳句雜誌の瞥見に於て秀吟と認めて手記したもの約二萬句の中から更に七千餘首を選擧したもので、正岡子規の「春夏秋冬」と共に新俳句を見るに便利の書である。(菊判半裁四八六頁、明治卅四年二月十八日、博文館)

**めいどのひきやく 冥途の飛脚**

近松が正徳元年(二三七一)竹本座に書下した作。「浪華十八軒飛脚屋の鑑といはれた龜屋の養子忠兵衛は、新町槌屋の梅川に馴染を襲れ、果ては堂島へ持参の筈の三百兩の封金を以て借金五十兩を拂ひ、残りで女を身請して落ち行く先は新口村大百姓の孫右衛門；彼が生れ故郷へ最後の暇乞にと二人手に手をさつて落ち行く」この新口村の段といふのが好評で今もよく語られる。

この劇はその後度々變容されたが、今日では矢張近松の原作通り上場されつゝある。

**めいぼくせんだいはぎ 伽羅先代萩**

奈河龜輔安永六年(二四三七)四月に大阪中の芝居に書き下したもので、伊達騷動物中の傑作である。

「奥州五十四郡の太守伊達義綱吉原の傾城高尾の色香に溺れて政治を顧みず、奸臣貝田勘解由(原田甲斐)・

仁木彈正・錦戸刑部・渡會銀兵衛・女房八沙・大場道益妻小牧この機に乗じて御家を横領すべく義綱を強ひて隠居させた。幼君鶴喜代の運命は次第に危機に迫る。忠臣乳母政岡・伊達外記左衛門(伊達安藝)・松ヶ枝節之助(荒獅子男之助)は臥薪嘗膽して之を庇護する。とど細川勝元(板倉内膳)の盡力で首尾よく外記は勝訴となる。原田甲斐は口惜しまぎれに控所で外記に斬りつけたが却て外記の爲めに斬り殺される。外記自身も重傷を負うたが鶴喜代君の本領安堵と聞いて、嬉しさの餘り一さし舞うてやがて息が絶える。

この内「御殿場、政岡忠義の段」が佳處で、頼朝公より下され物の御菓子と稱して、毒を盛つた菓子を政岡の一人千松が横から来てムシヤ〜と喰つて直ぐ七轉八倒の苦しみ、榮御前が陰謀露顯を恐れて「おのれ大切な菓子をとつた不屈物」と一刀の下に刺し殺す。それをデット見てゐる政岡の苦衷、さては自ら煮炊して若君を守る心用意、敵方去つて後の彼女の悲しい告白は満座の同情を惹くに足るものがある。

**めいめい 鹽田冥々** 二三九—二四八四、元

文四—文政七、閏八、二二、八十六歳  
奥州安達郡本宮驛の人、通稱は茂兵衛、九淵齋と號し

た。蠶商で上毛武總を往來の序で春秋庵を訪ひ、白雄の門に入り、同國の乙二さの盛名を競うた。その著に粟蒔集がある。

**めいりんかしふ 明倫歌集** 五卷

徳川齊昭が風教に資する爲め、君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友・神祇・國體・文・武・拾遺等の部を立て、古來の名歌一千餘首を類集したもので、嘉永四年(二五二)の自序があつて文久二年(二五二)出版された。明治以後にも單行本として二三出版を見た(日本教育文庫、第四編下、明倫歌集一〇・佐々木信綱氏校註、明倫歌集博文館・室松岩雄氏抄註明倫歌集略解)

**めいろくしんし 明六新誌**

明治六年森有禮等の經營に係る明治社から出した雑誌で、新文明の先驅を以て任じ我邦雜誌中初期の代表的なものである。その執筆者には福澤諭吉・津田仙・西周・中村敬宇・加藤弘之・西村茂樹などがあつて、何れも最新知識を代表する名家である。森の廢刀論・禁妾論・男女同權論・西の羅馬字論などは本誌中反響多い論文で、前記諸氏以外だが坂谷素の萬國共通語の必要、神田孝平の演劇改良論、津田眞道の出版自由論、杉享二の硬貨制論なども當時の思想界に大きな波紋を起した。

西風等自然主義的なものを作り文章世界の編輯に従事した。

**もすゐ 戸田茂睡** 二二八九―二三六六、寛永

六一―寶永三、四、一四、七十八歳

本名恭光、徳川初期反堂上派の先聲として有名な人、家はもと名門の子で駿府城内に生れ、父の流滴について下野那須の里に生ひ立ち、後、江戸に出て本多侯に仕へ、侯の藩政改革の時、暇が出て淺草金龍山の邊に隠遁し一生著作の筆を執つた。

元祿十一年七十歳の時「梨本集」を書いた。これは中世歌學に反抗し制禁の詞の謂はれなきこと、歌詞の自由なることを主張した。此こそは近世和歌革新の嚆矢として後世非常に重んぜられた名著であつて、這般の主張は已に寛文五年正月の文詞にも含んでゐるが、この著はその圓熟の極を示したものである。本書以外紫の一本・若紫・隱家百首・とりのおと・さゞれ石・清の松等にその歌味が散見して居る。但し歌はその主張程には優れてゐない。けれども當時の舊派(二條流)に比べると遙かに新味があると謂はれて居る。  
のがれかれ世にふりはてし老の身はかくれすむ  
ベキ山梨のもと

た。

**めしもり 飯盛**

がばう「石川雅望」を見よ。

**めいけいだう 明經道**

大寶令以來大學の主要科目の一つで専ら經書を研究する學科である。之に大中小の別をたて、

大經 禮記・左傳

中經 毛詩・周禮・儀禮

小經 周易・尙書

外に孝經と論語とを兼習せしめた。

註も一定にして周易は鄭玄と王弼、尙書は孔安國と鄭玄周禮及び毛詩は鄭玄、左傳は服虔と杜預、孝經は孔安國と鄭玄、論語は鄭玄と何晏の註によつて居つた(古類文學部二、七四三―七四六)

**モの部**

**もくあみ 默阿彌**

しんし「河竹新七(二世)」を見よ。

**もくじやう 前田木城** 明治一二、一―

甲斐の人、名は晃、早大文科卒業、小説、盲人・獨身。

家づとにゆるせばとても櫻花みすべき人のあらばこそあらめ  
わかの浦にゆきかふ鳥の跡とめて猶も正しき道  
や求めむ

蓋し彼は才煥氣發。好學の念強く、和漢の學に通じ歌文の才もあり、自信も名譽心も人一倍に強く、加ふるに行路難を體驗して鬱勃の氣吐口を斯道に得たかの趣があつたといふ。

(その著「紫の一本は」百萬塔に入り、國刊四期戸田茂睡全集には左の七種十八卷あり、御當代記六、梨本書一、紫の一本二、百人一首雜談一、僻言調一、不求橋梨本隱家勸進百首一、鳥之迹六)

**もちとよ 芝山持豊** 二四〇二―二四七五、寛

保二―文化一二、七十四歳

徳川時代堂上歌人中傑出した一人で、官は權大納言、門下には畠山常操・澤田名垂等數人の名家が出た。

**もちゆき 狩谷望之(掖齋)** 二四三五―二

四九五、安永四―天保六、七、四、六十一歳

本姓高橋氏、後、狩谷氏を嗣ぐ。幼にして和學を修め、後律令學に志し六典唐律始め唐代の群書略知らざるなしといふまでに達した。箋註和名抄十卷はその力

著で今も世に行はれ、日本靈異記考證・延喜式藥錄・姓氏錄捷覽・本邦度量權衡考・同補正・本朝和名攷異・古京遺文・皇國泉貨通考・諸國採輯風土記・新撰字鏡分音等多くの有益な考證に關する述作を遺した。

**もと本**

神樂歌座席の用語、神座に向つて左方を本座といふ。「かぐらうたしを見よ。」

**もといへ 藤原基家 (九條前内大臣)**

一八六三—一九四〇、建仁三—弘安三、七十八歳鎌倉初期の歌人、四條の朝に仕へて内大臣をつとめ、又、後嵯峨院の院宣を奉じ爲家等と共に續古今歌集を撰んだ。その味は續後撰・七・續古今(一六首)・續拾遺(二〇)等に入る。

**もとかた 在原元方 一五四八—一六一三、仁和四—天曆七、六十六歳**

棟梁の子だが、棟梁の妹婿藤原國經の猶子となつた。官は民部卿、歌は古今(一四)・後撰(八)等に採られてゐる。

はつかりをよめる

まつ人にあらぬものから初雁のけさなく聲のめづらしきかな

**もときよ 元清**

せあみ「世阿彌」を見よ。

**もとさね 藤原元眞 ?**

朱雀・村上朝の歌人、甲斐守清正の子で五位丹波介に叙任せられ、後拾遺(七)・新古今(八)以下の諸勅撰、並に三十六人撰に入り、家集に藤原元眞集一卷(群二四八、九、五九七—六〇七、續國五五七—五六六)がある。

**もとすけ 清原元輔 一五六八—一六五〇、延喜七、一—正暦元、八十三歳**

清原夏野の後、深養父の孫、先祖は舍人親王で、代々文學に交渉多き家に生れ、殊にその女清少納言によつて一層斯道の家門を高めた。村上・冷泉・圓融の諸朝に仕へ、梨壺の五人の一人として斯道で侍らひ後撰集の撰者にも加へられた(撰者五人の中最も優れたのは彼と能宣とであつた)味は拾遺(五〇)・後拾遺(二〇餘)等に採られ、別に清原元輔集(群二五〇、九、六四五—六五二、續國五二—五三一)がある。

老の世にかゝる子の日はありきやさ木高き嶺の松に間はゞや

秋の野の萩の錦を故郷に鹿の音ながらうつつして

七、一、九九九—一〇〇六)延徳御八講記一卷(群四二八、一五、一一〇—一二八)がある。

**もとし 藤原基俊 ?**

平安末期の歌學者にして歌人、道長の次男頼宗、その子大宮右大臣俊家その子即ち彼にして白河の朝、俊頼と相對して彼は曾丹此は公任といつた趣がある。名門の出でありながら左衛門佐に止まり(兄の宗俊弟の宗通共に正二位權大納言になつてゐるのに)歌會の判者にも立てられながら上下の信望さほどにもなかつたのは、彼の人となり傲慢にして酷評を頻發させたからである。その味は千載(二七)・新古今(七)・續後撰(一四)等に散見し、家集に藤原基俊集(群二五五、九、八三一—八五八、續國七五二—七六〇)あり、撰集に新三十六人撰(群一五九、七、四五九—四六八)新撰朗詠集(群三五—一、二、三〇九—三三九)悦目抄(群二九一、一〇、六六八—六九八、歌學全書一)といふ歌學も彼の著だといふ。

**もとのもくあみ 元木阿彌 (落栗庵・小川木網・珠阿彌・知恵内侍) 二三九—二四七一、文化八、六、二八、八十一歳**

實名渡邊嵩松、通稱大野屋喜三郎、もと京橋北紺屋町

しかな

花薄まれく袂はあまたあれど秋はとまらぬものにぞありける

歌に恵まれた彼も官歴では餘り幸福ではなかつた。彼の述懐には、この種の咨嗟も多い。

ひく人もなくて年ふるみ芳野の松は子の目をよそにこそきけ

年ごとに春の忘るゝ宿なれば鶯のれもわきてきこえず

誰かまた年經ぬる身をふりすて、きびの中山こえむさすらむ

天曆五年河内權少掾に任じ、後希望の肥後守をやつと贏ち得て從五位下で終つた。

**もとすけしふ 元輔集**

もとすけ「清原元輔」を見よ。

**もとつな 姉小路基綱 二一〇一—二一六四**

文安元—永正元、六十四歳

室町時代の歌人、飛鳥井雅親に歌を學び後土御門・後柏原の朝は仕へて從二位權中納言に進んだ。その子濟繼亦歌で有名、彼の歌は續三玉和歌集類題・續撰吟和歌集類題に出て居る。和文の著に春日社參記一卷(群類二

で湯屋を営んでゐたが性學問風雅を好み、狂歌・俳諧を  
娛み晩年剃髮後は専ら之に耽つて居た。その著俳諧鏡  
舌録二卷は俳諧用の助詞文典とも謂ふべく一々句例を  
示して詳述したものである。

かくばかりかはる委や梅干も花をさかせしすい  
の身のはて

**もとひとしんわう 職人親王** 二三七三—二

四二九、正徳三—明和六、五十七歳

靈元天皇の皇子、堂上風の和歌をよくせられ、ついで  
教へをこふものも多かつた。御歌は「新續題林和歌集」  
に出てゐる。

**もとふみ 久米幹文** 二四八八—二五五四、文

政一—明治二七、六十七歳

水戸の人、本姓石河、同藩久米博慎の養嗣となり、本  
居内遠に國學を學び國史國典に精通し、明治以後文科  
大學講師、第一高等學校教授などに就職又歌文をも能  
くし、家集を水屋集さいふ（家號を水の屋と云ひ又桑  
園といつた）

**もとよししんわう 元良親王** 一五五〇—一

六〇三、寛平二—天慶六、五十四歳

陽成天皇の皇子で三品兵部卿、和歌に巧みで後撰以後

の諸勅撰に出てゐる。外に兵部卿元良親王御集一卷  
（群二三〇、九、三六一—四三・續國五八五—五九一）が  
ある。

**ものがたり 物語**

王朝時代に發達した雅文の小説をいふ。これに竹取  
物語のやうな傳奇的なものと、源氏物語のやうな寫實  
的のものと、堤中納言物語のやうな短篇ものも伊勢・  
大和のやうな歌物語など色々の別がある。名は物語で  
も實質はさうでないものがある「榮華物語・今昔物語」  
など又名はさうでなくとも實質は物語のものもある。  
和泉式部日記・蜻蛉日記など。

**ものくきたらう 物臭太郎**

お伽草子の一種「信州つるまの郡あたらしの郷に生れ  
たなまけもの物臭太郎は、都なる國守に仕へ暇をたま  
はり奉公を下つて後性來嗜める連歌の徳により、豊前  
守家の美しい女房に近づき又その連歌時のみかどの御  
ほめにあづかり信濃の國に所領を賜ひ彼の女房を妻と  
してめでたく榮えた」といふ（校日大一九）

**ものあはれ 物の衷れ**

人間の哀愁とも謂ふべく我國文學殊に物語小説着想の  
主要なる一動機となつてゐる。義理人情の甘い酸い

もかみわけた人がしみる、體驗する人間苦とでも謂ふ  
べきもので、徒然草には「物のあはれは秋こそまされ  
云々」とあるが、これとてその風物に投げる人間性の  
悲哀を謂つたものであらう。平家物語に熊谷が教盛を  
討つた後で發心したのもこの「物のあはれ」を痛感し  
たからであらう。本居宣長が玉の小櫛に源氏物語を評  
して「こはたゞ物のあはれを寫さんとて物せるなり」と  
の意を述べたのもこれに近い。

**ものな 物名（隠し題）**

事物の名稱を隠して詠み込んだもの、短歌の一態であ  
る。

例、ほととぎす

來べきほどときすきぬれや待侘びてなくなる聲  
の人をとよむる

もとこれ文字上の遊戯であつて、我邦人の秀句趣味や  
漢詩の離合詩から出たものだが、丁度机上趣味と同じ  
やうに限られたる物名を自己の小主觀の限界とし、之  
に幻想美をもるといふ點に文學的價値がないでもな  
い（古類、文學部一、五五六）

**ももたらう 桃太郎**

資料、雜通字計本・燕石雜誌四ノ五、四ノ二四・嬉笑遊

覽九ノ四七・古道大意下ノ五四蜀山人 寢惚先生文集二  
ノ三七・愈愚隨筆一二ノ九（似た話）・廣文庫第十九册三  
六五—三六七・存叢、近藤圭造編冷閑録第九册、桃太郎  
子傳・木村小舟作歌田村虎藏作曲桃太郎、東京堂（家庭  
唱歌）

**ももよ 大伴百代**

萬葉歌人、歌は集の三、四、五の各卷にある。續記に、天  
平一〇？、外從五位下・閏七、兵部少輔・同一三、八美作  
守・同一五、一二始めて筑紫鎮西府を置かれた時、副將  
軍・同一八、四、從五位下・同一八、九、豐前守・一九、正、  
正五位下とある。

**もりたけ 荒木田守武** 二二三三—二二〇九、

文明五—天文一八、八、八、七十七歳  
室町末期宗鑑と呼應して俳諧を確立した人、家は伊勢  
内宮の神官で、父を荒木田守秀といひ、母は藤浪氏經  
の女、彼はその第九男として生れ、夙に文雅風流のこ  
とに心をよせ逍遙院實際を慕ひ、宗祇・宗長・宗牧・  
闌桂等と雅交し始め連歌道に入り、後連歌の束縛を脱  
して俳諧の吟に力めた。即ち宗鑑の「犬筑波」永正十  
一年）の後二十六年の今天文九年の秋を以て「獨吟千  
句を著し、斯道の作法を示した。之を宗鑑に比するに



- 一、花實兼備風流のを追ひ
- 二、一句たゞしく獨立の詩味あること
- 三、全體としてはなかしみを基底とせること
- 四、長い連句の作例を示したること
- 五、品位高きこと

などは確かに一進境を開いてゐる。彼は又「世の中百首」一名「伊勢論語」を著し、伊勢の人々に修身道徳の心得を示した。

獨吟千句は俳諧文庫二・近代俳書大系二にあり、又荒木田守武句集は續羣四九一に収めてある。

元朝や神代の事も思はる、

落花枝にかへると見れば胡蝶哉

撫子や夏野のはらの落し種

夏の夜は明くれど開かぬまぶら哉

尙辭世の歌句は、

神路山我こしかたも行末も峯の松風く

朝顔にけふは見ゆらん我世かな

もりたけせんく 守武千句

どくぎんせんく 獨吟千句を見よ。

もりべ 橋守部 二四四―二五〇九、天明元―嘉永二、五、二四、六十九歳、嘉永六、五（國書解題）

天保四大家（伴信友・平田篤胤・香川景樹と彼）の一人として有名。元伊勢に生まれ、幸手驛に轉住、ついで江戸に出て、深川・淺草・辨天山等に住んだ。その學も始めは狂歌、ついで長短歌・文章・ついで音韻學と力點が移つて、晩年には古書の註釋に力をそゝいだ。就中音韻學と訓詁とが目立つてゐる。始め和泉眞國の教を受けたが他は全く獨學で一家をなし、その説多くの點に於て本居宣長と相反してゐる。著書は約三十種、今「橋守部全集」として國刊八期本がある。その中有名なのは

註釋 稜威言別・神樂歌催馬樂入綾（この二書吉川

弘文館よりも發行）・土佐日記舟の直路・萬葉

集繪の抓手

歌學 長歌撰格・短歌撰格・萬葉集緊要（吉川弘文館

發行）

國學 稜威道別・難古事記傳

家集 橋守部家集（橋守部全集首卷には守部のこと

を知る左の好資料が集まつて居る

橋純一氏、橋守部全集解題・同橋守部翁小傳・同、橋守

部翁略年譜・加藤玄智氏、神典解釋上に於ける橋守部

翁の位置・佐々木信綱氏橋守部翁の萬葉研究・保科孝一

氏、國語學史上に於ける橋守部翁の位置・橋冬照氏選、橋守部家集）

もろあけ 諸舉

神樂歌の歌ひ方の用語で、本座・末座・末座とも聲（調子）をあけてうたふこと「かぐらうたしを見よ。」

もろうじ 藤原師氏（枇杷ノ大納言）

？―一六三〇、？―天祿元、

忠平の子、正二位大納言に到る。その味は後撰・新古今以下の諸勅撰に一二首宛とられ、その著に大納言師

氏集一卷（本名海人手右良、群二三五、九、一七七、一

八〇・枇杷大納言記二卷がある。

もろえ 橘諸兄 一三六二―一四一七、大寶二―

―天平・寶字元、

從四位下橋ノ大養宿禰東人の女三千代始め美努王（敏

達天皇御孫）に嫁し、二男一女葛城王・佐爲王・牟漏ノ

女王をあげ、美努王薨後藤原不比等に再嫁して藤原安

宿媛即ち光明皇后を産まれた。その葛城王は即ち後年

の諸兄のことで、山城の井手に別墅を築いたので世に

井手左大臣とも謂ふ。地位は、

和銅三、正 從五位下

養老元、從正 五位上

同 五、正 正五位下

同 七、正 正五位上

神龜二、二 從四位上

天平元、三 正四位下

同 元、九 左大辨

同 二、九 催造司監兼任

同 三、八 參議

同 八、正 從三位

同 八、一 表に依つて橋ノ宿禰姓を賜はる。

同 九、九 大納言

同 一〇、正 正三位右大臣

同 一、正 從二位

同 一、一 正二位

同 一五、五 從一位左大臣

同 一八、四 太宰ノ帥兼任

勝寶元、四 正一位

同 二、正 朝臣の姓を賜ふ

同 八、二 致仕

と進み、門地も名望も高く和歌にも堪能であつた。萬葉六、八、十六、十七、十八、十九、二十、新勅撰・續後撰・續千載・續後拾遺・新千載等に散見してゐる。又彼の萬葉

集も諸兄の撰であるとの説まであるが、これには異説もある（けれども少くともこの集に多大の關係ある人であり、尙制限的に謂つても有數な萬葉歌人であることだけは否定することは出来なからう）

ふる雪の白髪までに大君につかへまつればたふとくもあるか（天正十八年正月の雪見に侍しての詠）

もろすけ 藤原師輔 一五七七一六二〇、延喜一七一—天徳四、五十三歳

忠平の子、朱雀・村上の兩朝に仕へ、正二位右大臣に至る。その詠は後撰（一五）以下の諸勅撰に採られ、その著に九條右大臣集一卷（丹叢四）・九條殿遺誠一卷（拾芥抄下、群四七五）・九曆（九記とも御曆とも九條右丞相記ともいひ、歴代殘闕日記卷九一に入る）九條殿年中行事一卷（一名新撰年中行事群八三）などがある。

もろひろ 加納諸平 二四六六一二五一八、文

化三—安政五、六、二四、五十三歳

安政四、五十二歳（佐々木博士近世和歌史）

遠江の人、本姓夏目、後和歌山藩醫加納家を嗣ぐ。本居大平の推薦である。これのみならず彼大平は非常に

其の他の述作には枕草子註釋・宇都保物語註釋・萬葉名所集・古今集眞字序解榮花物語校本・紀州名所圖繪・同後篇、最後の二種は天保二年頃から藩命によつて起草したもので、之がために實地跋涉した紀南の風物は又少なからず彼の詩囊を肥した。

もん 門

夏目漱石作の小説。四十三年三月一日より四十三年六月十二日まで大阪朝日新聞に連載されたもので、氏の作品中比較的自然主義的思潮に接近したものだと思ふ。主人公、野中宗助が齒科醫に診て貰ひに行つて、待合の處で「成功」と云ふ雑誌を見て「風碧落を吹いて浮雲盡き、月東山に登つて玉一團」と云ふ一聯を見て、開悟の機縁を得、更に同僚の紹介で鎌倉に參禪して、十日の幽靜に解脱の「門」まで到達してそこに低徊して居る心持をあらはした題名で、尙、此中に阪井と云ふ屋主の宅から梅の花の御手玉を子供にくれた返したと云つて袖萩の人形を貰つた。「この垣一重が黒金の」「門」の處で嘆く心持が、女主人公「お米」の情調と一脉通つた處があるので、旁、題名を「門」とせられたものであらう。

「中村宗助が東大から京大へ轉じた頃は、東京の實家

諸平の才學と風采をめで、心をこめて指導をし機會ある毎に藩主に薦めた。彼も亦その提撕を空しくせず、遂に一世の國學者として歌人として名をなし且つ藩の國學勃興の爲めにも盡すところが少くなかつた（安政三年紀州國學所をおいたことなど）

彼が幼時句讀の師は中山美石であつたが、父斐磨（國典に通じ和歌も巧み）の遺傳感化も少なくなかつた。其著龜玉集は當時の歌人の秀味を選んだもの、文化九年頃から始めて八編まで續けた（今日の年刊歌集の先蹤とも謂ふべきもの）彼自身の詠は柿園詠草同拾遺（續歌七）と云ふ。柿園はその家號である。

みづち住む淵を千尋の底に見て太刀の緒がため

行く山路哉

雲かゝるわたのみ中にあら潮を雨とふらせて鯨

うかべり

など雄勁にして典雅、萬葉振を基調する新古今の程よき加味といつた歌風で本居門下中出色の歌人と謂はれる。彼の歌學上の意見は安米都知や曾丹集摘草に見られる。又長歌にも秀で徳川期を通じてこの方面に於ても第一人者であつた。「夢心地に思ひつゞける歌」「登巴岳時作歌」「詠史」「神風歌」など何れも名高い。

は、可なり暮らして居た。福井縣人の安井が無二の親友になつてよく彼の假寓なる加茂の社の近くを訪づれた。そこへ横濱に預けてあつた安井の許嫁のお米が來た。大柄の浴衣を着た、おちついて靜かな彼女を見初めたのは、親友の細君としてゞあつた。安井は戀て、加茂を引拂つて、大學近くに轉居した。二人の往復は益々繁くなつた。その間に宗助とお米との戀は潜在的にはぐくまれてゐたのだつた。安井はその後呼吸器病の爲めにお米を連れて須磨に轉地療養に出かけた。その夏休には、宗助もそれを見舞つて陸まじい三つの影は始終漫歩の海岸に映つてゐた。……と突然愛の潜在が爆發した。宗助もお米も、運命を呪つて不義に墮ちまいと渾身の努力をしたが、二人の距離はその都度接近して、どうすることも出来なくなつた。社會に呪はれながら、愛に恵まれながら、この世を淋しく陸じく暮らさうとの堅い決心が相互について、とうとうそのことを友に告白した。豫期した通り、大學は諭旨退學となり、學友は相手にもなつてくれず、世間は皆爪弾きした。安井もこれに一頓挫して滿洲から蒙古の方へ遠征して、行方を暗ました。宗助は、つてを求めて廣島で就職した。東京の實家では「あんなものは籍

をおく譯に行かぬ」として廢嫡同様にした(八六八―八八九)併し實家の方もその後、父が死んで母はそれより數年前に亡くなつた)弟の小六一人つきりで誰も力になるものがないので、父の弟の佐伯が一切の家財を預かつて小六の教育を引受けることになつた。佐伯は大變な山師で委託された千圓の現金と、家財の賣上げ四千何百圓とを舉げて、自己計畫の事業に投資して、事毎に失敗し「失意蹉跎の間に、病に仆れた(七四五)一人息子の安太郎は東大工科の機械工業科を出て、「一時神戸に就職して居たが(七二四)父の血を享けて、これも山師的な氣風で、友人と一緒に、月島に工場を建て、個人經營をしようと云ふので多くもない公債や株を悉皆金にして五千圓を投じよう、と云ふので、それがために小六の學費もこの十二月きりで、支給する譯には行かぬと云ふ。これより先、宗助は福岡に轉任して相變らず日蔭もののやうな生活をして居たが、二年程した時、もとの級友の杉原(高等文官試験に合格して、今は某省の高等官)が出張して来て、不意の邂逅に、色々の話が出て、遂にその好意で麹町の某官衙に轉任した。夫婦の生活は相變らず淋しいあきらめ、と睦まじい魂の結合で變化がない(七三五―七三六、八

六六一―八六七)子は廣島でも福岡でも出來たが、始めは流産、次は早産でどちらも育たなかつた。東京へ來てからは女中のお清と云ふのを置いて靜かな三人暮らし「日曜に散歩をしたり(七〇六一―七一)縁日に盆我を買つたりするのが何よりの楽しみで、希望だの、野心だのと云ふものは、微塵も起さない。そこへ小六の學費問題が持上つた。彼は此を機會に、家の財産がどう處分されたかを聞いて見た。そして叔母から縷々辯解を聞いた要領は前述の通りであつた。外に、書畫骨董で金がさの品が二十數點預けてあつたのは、眞田とか云ふ佐伯の知人が、よい處へ世話すると云つては、一幅出し、二幅出しして、果ては行方不明になつてしまつた。後にはたつた一つ二枚折の屏風があるから、後程それを届けよう」と云つた「それは抱一の秋の七草に銀泥の月を描いて、贊句に、野路や空月の中なる女郎花其一」とあつた(七五二)「弟の小六は丁度一頃の宗助のやうに凝り性の神經質で(七二八)學費の問題が解決されない間は、勉強が手につかぬと云つて、學校を休んでゐた。お米は、この平和な夫婦の生活を破られるのが嫌だつたが、夫の弟だからとて、強ひて犠牲を拂つて自分が鏡臺を据ゑて、朝、身じまひをした

り、日曜の來客があると、自分一人控へてゐる外にあまり用のない六疊に小六を居らせて、賭の方をこちらで見、その他の學費を佐伯で見貰ふやうにと提議した(七七五―七七六)けれども佐伯の叔母は「此際月々十圓を支出することは、到底出來ない」と云つて、それをも拒んだ。その中、年の瀬は段々おしよせて來た「晚餐には同僚の高木の噂などから、春着の話が持上つた。外套が欲しいけれども、拂ふ當が無いからやめだ」と云ふさ、月賦にでもして、お持へなすつは如何など云ふ「靴も破れる、屋根も洩る。いつになつたら我身の春が來ることやら」など歎く(七七四―七七七)「いつそ屏風を賣つてはどう?……」とお米が云ひ出す。それよからうで近所の道具屋に見せると始めのつけ値が六圓であつたが、歸りがけには七圓なら貰ひますと云ふ「とにかく主人に一應相談して」と云つて居ると、翌日は十五圓で下げて下さいと云つたが、何もわからぬなりに、段々増してくるのが、をかしさに「抱一だから、そんなに安くては?」と斷ると、こんどは夫婦とも居る處へ、どこかの同業者と一緒に、やつて來て、コン／＼相談をして、とう／＼三十五圓でわけして下さいと云つた。そこでこちらも二人で立ち話をし

て、いよ／＼それで手放した(七七八―七八四)「處がその屏風は直ぐに、岸の上の坂井と云ふ屋主が、八十圓で買ひ込んで、飛んだ堀出し物が手に入つたと秘藏して居ることが後になつてわかつた(八一―八二)宗助はちつとも交際をしなかつた。家の前には本多さんさ云ふ隱居夫婦が逢ふ毎に「ちま話しにいらして下さい」など云ふが一度も行かない。岸の上の坂井は吝嗇家と聞いても居るし、貧富の隔りから尙更行かない「それが、妙なことには、一夜、坂井の宅へ泥坊が這入つて、落して行つた黒塗の蒔繪の手文庫を届けてやり、向ふからは、お禮に唐饅頭をくれしてから段々坂井さ心やすくなつた(七八八―八〇九)話して見れば、存外デモクラチックで、趣味は廣いし、聞かぬが如き吝嗇家でもなかつた。矢張大學を出たのだが、家は何々の守と云はれた、この邊きつての門閥家で、書畫骨董や狩獵を道樂にし、東作だの雪子だのと大分の子福長者である「その頃小六は宗助の方へ引越し障子貼りなどの手傳もし、姉とも大分打解けてゐた(八〇〇)が或時坂井がそれを聞いて「ちや家へおこしなさい、書生代りに置いて、大學を卒業させませう」と苦もなく引請けてくれた。宗助も非常に悦んだ「甲斐の國の行

商人が、甲斐絹の反物を賣るとて坂井の家へ来た。その應對がなかしいので、一同は笑ひこけた。宗助も春着をそこで取つた（八四八―八八六）坂井の弟は一種の冒險家で例の安井と遠く蒙古の探險を終へて歸京する「何なら御一緒に夕飯を喰ひに行きませうか」と坂井から云はれたが、宗助は安井の名を聞いて急に心持が暗くなつた「気分がすぐれぬ」といつて早く臥せつたり「お米と二人で寄席に行つたり（九一五―九一七）とど同僚で、電車の中で榮根譚などを讀むのが紹介してくれるのを幸「十日間病氣缺勤して、鎌倉へ行つて釋宜道に遇つて老師に參禪した。夢想國師の遺戒やら宗門無盡燈論を見、躰下丹田の工夫を積み「父母未生以前本來の面目は如何」など問はれたが（九二二―九三二）が、限りある日子に止むなく山を下りて町に歸つた。春着も整ひ、小六も坂井に引取られ、冗員淘汰の鞭にもそれて、お負に五圓増俸の辭令を受けましたのであつたのが、これも本復して「今に春が來ませう」と悦んだ「けれども、又その先には秋もある冬もある」と宗助はうつむきながら云ふ（漱石全集、第四卷六九七―九六八）

**もんざゑもん 近松門左衛門 二三一―二**

三八四、承應二―享保九、一一、二二、七十二歳  
我邦新淨瑠璃の創始者で、その出生地については、

- 一、京都 竹豊故事・音曲道知論・茶話雜談
- 二、長門萩 京攝戲作者考・好古類纂・柳菴隨筆・聲曲類纂

三、越前 卯花園漫錄・著作堂一夕話

四、越前 傳奇作書

五、三河 著作堂一夕話

などがあるが一が正しいとせられてゐる。本姓杉森名は信盛、父を信親といひ、兄弟には醫師の岡本一抱子といふのもあり、この一族が俳諧を嗜んで天野桃隣の點を乞うたことが俳書「寶藏」に出てゐる。彼幼にして近江の近松寺に小僧にやられ（一説には肥前唐津の近松寺）だが、讀經勤行は身にします、出でて正親家に奉公した處、その家の主人は粹人とも謂ふべく連俳狂歌に堪能で殊に當時の名俳都萬太夫のために演劇の臺本を作つてやつたりなんかして、その用事で彼も度度使ひあるきをさせられたが、見様見まれに自身でも折々作つて見、延寶二年二十五歳の時には「藤壺」の狂言を作つて右の都座に上場、同九年には徒然草を作

り、貞享三年義太夫が竹本座を開く段になつて、頼まれて縁起を祝つて「出世景清」を作つた。これ新淨瑠璃として劃時代的の史劇である。つゞいて浪花に下り竹本座々附作者となり元祿十三年長町女腹切を上場、是れは我邦世話淨瑠璃の始めである。同十六年會根崎心中を上場、是れは我邦心中物の始め、斯て彼は戯曲作家として第一流の地歩を確め、一作成る毎に滿都の子女を酔はせ、彼の浮世草紙の西鶴と相並んで實に元祿期文壇の二大偉觀を呈した。蓋し彼、學和漢を兼ね、才雅俗に亘り、立意・構想・情趣に充ちて人情の委曲を如實に舞臺化し、俚語・童語・俗諺を驅使して常識的道德觀を理窟なしに背かせ、情に解放せられた主人公にも相當同情すべき美點を示し、文致優艶朗々誦すべきなど幾多の長所を具へてゐる。一代の作百餘篇・その中殊に傑作と稱すべきは心中物では天の網島、世話物では女殺油地獄・冥途の飛脚・壽の門松・阿波鳴門・時代物では國姓爺・曾我會稽山・雪女五枚羽子板等である（水谷不倒氏近松傑作集・木谷蓬吟氏大近松全集・高野辰之博士等近松門左衛門集春陽堂本・藤井乙男博士近松全集大阪朝日新聞社本等がある）

**もんじ 文字**

聽覺に訴ふる言語を視覺に訴ふる符號として發達したものが文字である。

文字には聲音ながらの符號たる音字（又は表音文字又は音標文字）と一個の意味ある觀念を含む意字（表意文字）との二大別があつて、西歐のアルファベット我邦の片假名・平假名などは音字で朝鮮の諺文、支那の漢字などは意字である。

我邦上代には文字が有つたか無かつたか之については色々の議論がある（「神代文字」の項參照）漢籍の渡來と共に漢字の音訓を借りて祝詞宣命・萬葉記紀の文章を書いた。天武天皇の朝には境部石積をして新字を制定せしめられた（「倭字」の項參照）がその内容は今傳はらない。奈良朝の末に片假名が出来、王朝の始めにかけては平假名が出来て夫分表現機關が整つて來た。爾來漢字との兩假名と今一つ變態假名とによつてあらゆる一切の言語文章を寫して來たが、明治以後西歐文化の輸入につれて又若干の新字が出来、學問的に見て理想的合理的なる國字は當に如何あるべきかの議論が續々唱へられたが習慣性の久しいのと單に文字學のみの問題でなく國民性國民的趣味の上からも考慮を拂ふ必要があり今以て解決の運びに至らない（高橋龍雄

氏世界文字學・堀江秀雄氏國字改良論纂・文部省國語調査委員會編漢字要覽・拙著合日本文法講話四〇―六四)

**もんじやうせい 文章生**

大學で文章博士の下につき、記傳・詩文の教授の任に當つたもの。

**もんじやうはかせ 文章博士**

大學に在つて記傳及び詩文の教授の主任たりし職員。

**もんとくじつろく 文徳實錄 十卷**

文徳天皇御一代の記録・嘉祥三年(一五一〇)三月から天安二年(一五一八)八月まで凡そ九年間に亘る。始め都良香・菅原是善の二人勅を奉じて撰びかけたのを更に基經が勅を受けて修訂し、元慶二年(一五三八)十二月に撰進した。序は道眞が父是善に代つて作つた。六國史の一つで、王朝中の期文學をしらべる上に必讀の史書である。寶永六年版の外、國大三・單行本六國史などに入る。

**ヤの部**

**やいう** 横井也有二三六〇―二四四一、元祿一

五、九、四、申の下刻―天明三、六、一六、四ツ時、八十二歳

名古屋藩の重臣として政務に携る傍ら俳諧を好み、別に師傳なくして一家をなす(一時太田波靜の指導は受けたが)その句多くは滑稽飄逸、享保俳壇の一珍となつてゐる。

足と鉄三本洗ふ田打かな

此花さ札にはありて若葉哉

大將は負れて出るや蜚狩

追刺のながめて通す紙衣哉

赤かれと西瓜いのらむ龍田姫

けれども彼の特色は俳句よりは寧ろ俳文にあつてその著書衣載するところの長短各文の如き眞に天下一品の觀がある。外に羅葉集の著があり、今俳諧文庫六也有全集に取り容れてある(武笠三氏校註鶉衣卷末の年譜、及び傳、尙この記事によると也有の子孫は現に健在してゐること及び也有の研究家に伊勢四日市の加藤常三郎氏が在るとのことである)

**やいち 芳賀矢一** 慶應三、五、一四―昭和二、二、六、六十一歳

越前福井市の人、父眞咲は多賀神社や湊川神社の宮司

で國學は一面家學でもあつたが、二十五年七月東大國文科を優等で卒業して以來孜々として斯學に盡し、第一高等學校・東京高等師範・東大文學部に教職を執り殊に大學に永年勤続して多くの後進を教へ、上田萬年博士と相並んで明治の國學を基礎づけられた功績は不朽とも謂ふべきものがある。大正十一年三月病を以て大學教授を辭し、名譽教授に推され更に東宮御用掛を拜し、最近御大葬の奉悼歌をも作りながら不思議にもその御大葬の月の始めに薨去、眞に斯界の爲めに惜しむべきである。

著書の中、國文學史十講・國文學歴代選・國文學史概論・世界文學者年表・古今昔物語集・四流・新語曲二百番・月雪花・國民性十論・新辭典・詞藻類纂などは殊に博く斯界を裨益した。

(國語と國文學昭和二年四月「芳賀博士追悼號」國學院大學院友會編「芳賀先生」)

**やうめいがく 陽明學**

明の王陽明(一一八八歿)の學說に基き、我邦中江藤樹の唱へた儒學の一派である。陽明學說の骨子は一、心即理・二、性善説・三、知行合一説・四、致良知説の數項に歸するがその哲理的根據はとにかくその實際風教向上

刷新の上に齎らした効果は偉大なるものがあつた(古類、文學部二、八〇三―八〇六)

**やうらう 養老**

資料、十訓抄七ノ二・古今著聞集八ノ五・續史籍錄一七・類雜集五ノ二八・諸曲「養老」・諸曲拾葉抄「養老」・木曾路記下、六八・扶柔小島の口すさみ五六・木曾路名所圖會二ノ二二・廣益俗說辨附編三四ノ九・合類節用集一ノ四〇・和漢三才圖會五七ノ一七、七〇ノ二四・笈埃隨筆一・倭訓栞「やうらう」・姫鑑、紀行五ノ三・蜀山人半日閑話六ノ一二八・太平御覽七〇ノ四・廣文庫第十九冊四四四―四四六・國華三一二號二四五三、五八號三二三狩野探幽筆、養老瀑布圖二九七號二一九・岡田爲恭筆養老圖・連山人養老の瀧、博文館。

**やかもち 大伴家持** ?―一四四五、?―延

曆四・八、二八、

文學史家の多數に萬葉集の撰者と認められ、萬葉歌人として多くの秀味を残した彼は歌人旅人の男で、聖武・孝謙・淳仁・稱徳・光仁・桓武の歴朝に仕へ頗る波瀾多き生を閲歴した。

天平一三、四 内舍人の肩書あり

同一七、正 従五位下

- 同 一八、三 宮内ノ少輔
- 同 一八、六 越中守
- 天平勝寶元、四 從五位上
- 同 三、七、一七 少納言
- 同 六、四 兵部ノ少輔
- 同 一一、山陰道ノ巡察使
- 天平寶字元、六 兵部大輔
- 同 十二月頃 右中辨
- 同 二、六 因幡守
- 同 六、正 中務大輔
- 同 八、正 薩摩守
- 神護景雲元、八 太宰ノ小貳
- 寶龜元、六 民部ノ少輔
- 寶龜元、九 左中辨兼中務大輔
- 同 一〇 五位下
- 同 二、一一 從四位下
- 同 三、二 式部員外大輔
- 同 五、三 相模守
- 同 九 左京大夫兼上總守
- 同 六、一一 衛門ノ督
- 同 七、三 伊勢守

- 同 八、正 從四位上
  - 同 九 藤原良繼、大師仲磨を排斥せんとし  
家持一味の嫌疑か、り大不敬罪に問はれて姓位を褫奪せらる。
  - 同 九、正 正四位下
  - 同 一一、二 參議、兼右大辨
  - 天應元、四 春宮大夫、正四位上
  - 同 五 左大辨兼任
  - 同 八 左大辨兼春宮大夫
  - 同 一一 從三位
  - 延暦元、開正 水上ノ真人川繼(鹽燒王の子)
  - 同 五 參議をやめて春宮ノ大夫に任ず
  - 同 六 兼陸奥ノ按察使鎮守將軍
  - 同 二、七 中納言、春宮大夫故の如し
  - 同 三、二 持節征東將軍
- 薨後二十餘日死屍未だ斂むるに至らずして又もや種繼殺害事件(大伴ノ繼人・竹良等)に連座して名を追除せられ子永主を流刑に處せられた。が、承和年中族善男の訴によつて加賀郡の領田を返し賜はり、ついで彼を從三位に復せられた。
- 彼が歌は萬葉八、秋の歌四首(天平八年)から廿卷の末

天平寶字三年正月一日因幡の國廳で賜宴の詠までが萬葉に遺つてゐる。それ以前は彼の幼年時代であまり歌もなからうが、それ以後の廿數年間世の辛酸に遭逢してどんなに悲歌哀歌したことが、所傳のないのは頗る遺憾である。

彼が歌風は大體三期に分けて觀られる。

第一期 戀歌 越前守時代 青壯年期

従妹にして妻となつた大伴坂上ノ大嬢始め平群ノ娘子・傘ノ采女・紀ノ采女等多くの才媛貴女の愛を一身にあつめて盛んに應酬贈答すること宛かも後年の業平か、源氏の須磨謫居の如き歌風。

第二期 摸索 越中守時代 壯年期

古今歌人の所味を味讀し、多くの先輩の歌風の間に入してまだ一家の風を確立するに至らない時で、弟の死を哀しみ、姪藤原二郎の母の死を弔ふ。……

(人 磨)

二上山、布勢水海・有磯海・立山の咏……(赤 人)

史生尾張少昨を喻し、病に臥して無常を悲み、

道を修せんと欲して作れる歌……(億 良)

雪・梅・鹿・菽・酒等の咏……(旅 人)

さ様に、或は、記紀・宣命・祝詞に詞源をあさつたあと

なども見られる。

第三期 圓熟期 中央官時代 中年期以後

政治的地位と年齢の進むにつれて想形共に自家獨得の境に入り、陸奥出金の奉賀歌・勇士の名をあげんことを思ふ歌・防人が訣れの情を叙べた歌・殊に有名な族を論ず歌などはその代表作である。

家集を家持集(群二三四九、一五九—一六六・續國四一六—四二二群書一覽卷四)と云ふが、むしろ萬葉の十七、十八、十九、二十の方が彼の歌が澤山出て居る。同書三、四、八、一六、その他歴代の勅撰にも散見して居る。

やぎふむねのり 柳生宗矩

資料、姓氏雜選集五三・藩翰譜六ノ三五。

廣文庫第十九冊四五九—四六二。

やくもくてん 八雲口傳 一卷

藤原爲家の歌學書で詠歌一體の別名「えいかいつたい」を見よ。

やくもごせう 八雲御抄 六卷

じゆんとくてんわう 順徳天皇を見よ。

やしやらくわら 野相公

たかむら 小野篁を見よ。

**やす** 麻田連陽春？

聖武の御代の歌人且つ詩人、歌は萬葉四、一五、詩は懷風藻に出てゐる。

**やすすけわらのはは** 康資王母？

平安朝の女流歌人、筑後守高階成順の女、神祇伯・康資王の母・太皇太后宮に仕へて女房となり、四條宮の筑前とよばれた。和歌に秀でて後拾遺(九)・金葉(三)以下の諸勅撰並に堀河院艶書合、寛治七年高陽院歌合等に採られた。家集に康子王母集一卷(一名伯母集、群書一覽四・群二七八、一〇、三一七―三二四)がある。

**やすひで** 文屋康秀？

六歌仙の一人として、古今集歌人として有名な人。字を文琳といひ貞觀二年刑部中判事、後三河掾にうつり(此頃小野小町に「縣見に来よ」と誘つたのは有名な話柄)元慶元年山城大掾、同三年逢殿助に任ぜられた。春の日の光にあたるわれなれどかしらの雪となるぞ佗しき

草深きかすみの谷に影隠して日くれし今日  
にやはあらぬ

草も木も色かはれどもわたつみの波のはなには

秋なかりけり

**やすまる** 太安麻呂？——一三八三、？——養老七、

樂朝初期の人で、元明天皇の勅を奉じて、古事記三卷を撰び、後、元正天皇の時、日本書紀の撰にも與つた。即ち彼は我邦修史上の一大功勞者と謂ふべく、殊に古事記の文態については餘程苦心した(これ等のこまは和銅五年正月廿八日、撰成つて上表した時の文——今日、普通古事記の巻頭に載つてゐる——に詳かである。彼が當時の地位は正五位上勳五等で朝臣姓を稱してゐる)

**やすよ** 良岑安世 一四四六—一四九〇、延暦

五—天長七、四十五歳

桓武天皇の御子、延暦二十一年良岑と姓を賜はつて臣下の列に入る。平城・嵯峨・淳和の三朝に仕へて大納言に任じ、經國集・日本後紀・内裏式等の撰に與り、その詩は凌雲集・文華秀麗集・經國集等に入つてゐる。その子は即ち僧正遍昭である。

**やすよし** 藤原保吉？

春秋庵白雄の高足、俳諧を以て聞え母に至孝、人呼んで保吉先生といふ(彼の家は江戸大門通の馬具商だと

八、寛文元—元文三、一、三、七十八歳

越前福井の人、通稱彌助、江戸越後屋の手代となつたが、段々俳諧に興味を感じて、大阪轉住後は樗木社を結び、淺生庵・紗帽子・三日庵・高津翁などと號した。虚栗に野馬とあるのも彼のことで、彼の初號だといふ。その句は清新奇抜で、輕みとをかしみに富んでゐる。

蕉門十哲の一人。

長松が親の名で來る御慶哉

靜かには啼かれぬ雉の調子哉

郭公顔の出されぬ格子かな

苗代や仁王のやうな足の跡

人聲の夜半を過る寒さ哉

(俳文七に文集・句集あり)

**やはたのきやうちよ** 八幡の狂女

廣津柳浪、三十四年四月作の小説。梗概は

「赤坂溜池の鴛鴦と云ふ待合の隣に高松と標札を掲げた家がある。主人豊治は上官の命を帯びて臺灣へ出張中留守居は妻の植野さ女中のかれと二人きりである。かれは安房國八幡在の漁父鈴木甚兵衛の一人娘で今年十六七、母お北の筋を引いた上に都會で磨き上げてなかなかの美人な上に、正直で勤勉で奉公大事と精を出

もいひ、麻布芋洗坂の刀工黒田美濃守保吉のこゝだと

もいふ。又、天明四年三月に歿したがその時の年齢廿五歳とも卅五歳ともいふ)

**やつか** 藤原八束(眞楯) 一三七五—一四二

六、靈龜元—天平神應二、五十二歳

房前の第三子で後に「眞楯」と改名。聖武・孝謙・淳仁・稱徳の諸朝に仕へ、最後は正三位勳二等兼授刀大將から大納言兼式部卿に任ぜられた。續紀に「度量弘深有公輔之才」とほめてある。その味は萬葉の三、六、八、一九に出て居る。

**やどやのめしもり** 宿屋飯盛

がばう「石川雅望」を見よ。

**やなぎだる** 柳樽

川柳を集めたもので明和から嘉永にかけて二百餘篇、國書刊行會徳川文藝類聚に入る外名句の抄本は可なり多い。註釋には近頃武笠山椒氏、誹風柳樽通釋といふのが出た。

**やなぎだる** 柳樽 一卷

天明六年(二四四六)三月板行の小本の俳諧の書で催主諸江・一口・補助木綿さある。

**やは** 志田野坡(志多) 二三二—二三九

すので大層主家の氣に入つて居る。……或日突然かれに宛て、電報が来た「チチシススガカヘレスズキ」とあつたがお兼は氣も狂せんばかりに驚いた。主婦も痛く同情して早速暇をやり、其夜の汽船中村丸で歸らせられた。甚兵衛の死は眞の横死であつた。下手人は誰ともわからぬが八幡濱の北湊川の川口の直ぐ南の東に寄つた松林の中に殺されて居たのだと云ふ。それを逸早く見つけたのは港の與九郎と云ふ者で、これはつひ先達て甚兵衛と口論した隙もあり、旁々怪しいと云ふので拘引されたが別に此と云ふ證據がないものだから放免されたとも云ふ。與九郎は色々親切げに葬儀の世話をしたり、お兼に甚兵衛の殺されてゐた様子を物語りした。而も此瞬間にお兼は此下手人は與九郎に違ひないと直覺した「男子ならば直ぐにも仇を討たうに」とも思つた。涙の中に葬儀を出して懸てお兼は主家へ歸つた。あとは母親一人きり、すると不思議や與九郎がしげ／＼其家へやつて来る。其風采までも此邊としては洒落た様子にお北は益々無氣味になるのみならず夫の死と此與九郎のそぶりとは何だか一脉の關係があるやうに思はれてならない。一方お兼は上京したもの、あまりの悲しさにと／＼氣狂ひになつた。朝起きる

と釣瓶をたぐつて地曳網のまねをする。  
「はんちやア、／＼、それ／＼／＼、曳いたり／＼はんちやア、／＼、はんちやア、／＼、はんちやア、／＼」(六八八)  
の掛け聲の異様なのに女中のお苦(琴平町の槌野の姉)の家の下女でお兼の留守中に来て貰つてゐたは、ふき出した、槌野は不憫で氣の毒でたまらぬ。又もやお北に電報を打つて其旨を知したので隣の太助がお北代理としてお兼を迎へに來た。その來かけに與九郎が又警察へ捕られて行つたと聞いたので、大方甚兵衛一件の曝露であらうと云ふもんで、お兼に遇ふなり此事を知らせてやると其暫らくは非常におちついてゐた。けれどまだまだ全快と云ふところへは行かぬものだから、矢張連れてかへることにした。歸つてからのお兼は間歇的に發作したが矢張正氣ではない。お北は夫は死別娘は發狂と來て其悲しみつたら無い。かて、加へて與九郎が懲役から歸つて來て同棲しようとして強迫する(與九郎は以前に侵した罪で三ヶ月の懲役に處せられたのであつた)聞かねば殺すとも強迫する。否已に殺さうとしかけたことも一二度あつたが其都度狂女のお兼が「オヤ又面白い芝居をするのね與九さんが松助でお母

さんが秀調がオホ、／＼と茶化して邪魔を入れるものだから果さなかつた。やがて夏になつた。東京の槌野はお兼を見舞旁遊暑にとて八幡濱へ來てお兼の隣の太助の家に滞留して居た。或日港へ鯨がついて其料理をする所を見に出かけた處、與九郎もお兼も同じ群の中に居たが、お兼は氣狂ひの出まかせに散々與九郎を罵つた。與九郎も怒つてお兼を砂の上にねぢ倒した。此騒ぎをきいてお北は狂氣の如く驅けて來た。お兼の砂によごれた着物を見ると無念やるかたなく、  
「おら今こそ云ふけんぞ、甚兵衛さア死になさる前にも汝おれを口説いたこと忘れる筈はねえだよ」……皆の衆聞いて呉れさつせい此與九郎が甚兵衛さんを殺したゞから(七四九―七五〇)  
と罵つた。與九郎は又もやお北の髪ををつかんで捻ぢたふした。群衆は四方からお北を援けに寄つた。其中にお兼はいつ手に入れたか「手には鯨の胴も一撃の下に斷る可き鋭利なる庖丁を提げて居た(七五一)何なツと與九郎勢込んで後を向く途端、かざしたばかり切先鋭くグサとばかり胸まで差貫れてあつと云ふ聲もるとともに其場にパツタリ打倒れた。  
實はお兼は早くより敵を與九郎とめざしてにせ氣狂と

なりすましてゐたのであつた。  
北條警察署はお兼は狂人なれば無罪放免と申渡した。世間は擧つて其處置をほめた。  
數日の後お兼母子は東京の高松家に引とられて今尙健在だ」と云ふ(柳浪叢書後篇六四九―七五五)  
**やぶだん 野夫談 一卷**  
横井也右の著、太宰春臺が赤穂義士論を辯駁した論文(俳諧文庫六)  
**やほやおしちうたさいもん 八百屋お七 歌祭文**  
紀海音寶永元年(二二六四)二月豊竹座上演の爲めに執筆「一年の大火に八百屋の寵娘お七は一家と共に本郷駒込吉祥寺へ避難した。その寺小姓の吉三郎は元安森源次兵衛といふ侍の子息であつたが、お七は一目見て深い戀に落ちた。生憎に新普請ははかどつて彼女は本意にも戀人とわかれて新宅に歸つたが、その頃お七に縁談がまとまつて彼女は不日他へ嫁がればならぬ。思ひつめた娘心の無分別に「もう一度家が焼けたならアノ戀しい吉三様にあはれようか」と恐ろしくも放火の刑を犯した。鈴ヶ森に悲しい美しい戀の犠牲が火あぶりのしおきに會つて後その片われの吉三は割腹



して果てた」といふ。

やまうば 山姥

前シテ	山住の女	後シテ	鬼女
ツレ	都の女	ワキ	従者
處	越中		

都で「山姥」といふ遊女信州善光寺へ参詣の中途、或山里に女主人の住む一軒家に一夜をあかしたところその女主人「われはまことの山姥ぞ」と姿をかき消し……やがて恐しい鬼女の姿で現れて佛教々理を交へて山姥の境遇を説き「峯にかけり谷に響き今までこゝにあるよと見えしが行方も知らず」なつたことを綴る（國華二四號二七二—二七三・河鍋曉齋山姥圖）

やまきずるなら 山木髓腦（無名抄・倭秘抄・莫傳抄）

むみやうせう「無名抄」を見よ。

やまとし 大和詩（俳諧詩）

蕉門の其角・支考等に試みあり片歌・漢詩・古典・雜俳の趣味と相まつて徳川末期まで榮えた詞形で、一言にいへば漢詩の和譯とも謂ふべく、古い漢和の趣味に今様と俳諧の詩形を應用し、漢詩と同じく五言七言の別を立て二四不同の規定を設けた。

例、寛政年間の和詩集に「影法師」と題して、

影法師影法師 立ちつ居つ寝つきつ、  
總べて我に従へど 留守居には頼まれず

（尙この詩形は明治の新體詩や幸田露伴氏のみをつくし會の新詩形や夏目漱石氏が「猫」の中にあげた苦沙彌の「俳體詩」などに結びつけて史的開展をあとづけて居ると思ふ）

やまとまる 百濟倭麿 慶雲中辛、五十六歳

上代文武の朝の人、先祖は百濟人で、彼は詩文を能くした。詩は懷風藻に對策は經國集にある。

やまとものがたり 大和物語

竹取物語の歌の方面を強調すると歌物語となり、物語の方面を主にすると物語歌が出来る。伊勢と大和の兩物語はこの歌物語の系統に屬する。亭子院・弘徽殿・京極御息所から、芦刈や貞文や、色々趣味ある歌物語百七十種内外を集め、伊勢物語の「昔男」を中心にした聯作體ではなく、各段毎に主人公が變り且つその男女の實姓名も年次も明記してある。書名は「大和歌を骨子にした物語」といふ意であらう（支那に對する日本の物語とか大和の國の記事があるから大和物語といふとるのはどうかと思はれる。若し「からものがたり」

り」の少し後位に出たのだつたら「から」に對する「やまと」とも解せられないこともないが唐物語は後のものである）作者は未詳で、一説に在原滋春作といふが、滋春が「かりそめの」の絶味をよんで死んだことまで出てゐるからさうではなからう。又一説に花山院だといふが亭子院のことを熱を以て書かれた筆つきや院が歌才に秀でさせられて居た點から推せば或はさうかも知れないが、確かな證據もないし本文中時代の合はぬ記事が出て来る。まして今一つ「滋春が書いて花山院が補はれた」などいふ説は巧者に立説したといふだけのもので無根の臆測と謂はればならぬ。年代については

- 一、朱雀院の天慶の始め 袋草子
- 二、承平天慶の頃 大和物語拾穂抄
- 三、一條の始め頃 賀茂真淵
- 四、村上天皇天曆年中 尾上八郎博士

の諸説があるが、尾上博士は次のやうに云つて居られる。

「今の左大臣」といふ實賴は天慶十年四月に左大臣になり、天慶はその四月廿二日に改まつて天曆となつたのであるから「今の」の語は天曆の領分に入るわけであ

る。また、文中に師尹を「今の左兵衛督」と云つて居る。これも天曆七年まで左兵衛督であつたのである。

また藤原清隆を「故大納言」と云つて居る。この人は天曆四年になくなつたのであるから、これらも推してこの物語は大抵天曆中に出来たものであらうと思はれる（群三〇八、一一、三四—九七・日文六・校日大二・新釋日本文學叢書四・校國一八）

やみのはいぼん 闇の盃盤

岩野泡鳴が自然主義勃興時代に作つたもので、作者の詩想としては之が發達の最高度を示して居る（その後、彼は「戀のしやりかうべ」外數篇を作つただけで轉じて小説に執筆した）載せたのは短曲三十五篇・月と猫以下廿一篇・海音獨白以下六篇・黄金鱗（一、六部・委・二、わが兒・三、頁ひ厨子）と凡て六十篇で書名にとつた「闇の盃盤」といふのは、

夢は 失せにし 玉の 如く、  
覺めて 掴む と すれど あはれ。  
艶も 光も 跡を 絶ちて、  
闇に のべたる 片手 ばかり。

ゆるむ 節々 ちから 添はず、  
戀も のぞみ も なかば うつゝ。

まなこ 開らけば、暗き かもあ、  
あやし まぼろし これを めぐる。

鬼よ、羅刹よ、夜叉の首よ、  
われを 夜伽の靈の影か。

死はも わが身を 獄に つなぎ、  
肉は 魂さも 燃えて のぼる。

見えぬ 火の中、水の中の  
畏怖と 威嚇は 迫り 來れど、

酒の かなり に 泡の いのち、  
甘き 歡樂 れむり 誘ふ。

闇の 盃盤 闇を 盛りて、  
われは 底なき 闇に 沈む。

かくて 夢より 夢を 浮び、  
とこしなへ にも 生に 酔はん。

とそれから朝を歌うては我戀の空虚をはかなんで「我が世を 歎く 朝は 來ぬ」といひ「葉卷のくゆり香」に「樂しき夢」を幻想するといふ。一篇すべて中年の戀のやるせなさといつた風の情調が滲出して居る。

その他の作に於ても「悲戀悲歌」の時代に比して一體に反省と沈痛味の多いものが盛られてある。

この集は著者一代の優れた詩集であると共に、從來外面的な詞律に制約せられて居つた詩形を解放して、内容本位に自在の詩態を作出しやがて口語詩運動と呼應して大正の新自由詩を産む母胎となつた點に於て史的價值も認められて居る（泡鳴全集、第九卷、三五七—四九一）

**やりのごんざかさねかたびら** 鏡の權三重帷子

近松が享保二年（二三七七）八月竹本座に書下した世話物で、前月十七日大阪高麗橋にあつた女敵討を取材したものである。  
「雲州松江の藩士淺香市之進は妻おさいとの間に子二

**ゆうけいたい** 雄勁體

與謝野鐵幹の詩體をいふ「鐵幹」及び「鐵幹子」を見よ。

**ゆうしはうげん** 遊子放言

明和年間多田爺（丹波屋利兵衛の通名）の作、我邦酒落本の始めと謂はれて居る。内容は馬山檢校が吉原松葉屋の遊女瀬川を身受したことを脚色したもの。

**ゆうどうぶんがく** 遊動文學（不整形文學）

文字を有しない原始時代に於て口より耳に語り傳へ言ひ傳へた文學をいふ「The Floating Literature」又は「The Oral Literature」又は「The Spoken Literature」の譯、又「不整形文學」と謂つてもよい語である。

**ひゆうはう** 菊池幽芳 明治三、一一

水戸の人、中學卒業後三年間佛國に遊學し歸來操觚の人として立ち、遂に大毎文藝部長となり、今は副主幹として新聞經營に忙しい。明治三十五年の頃家庭小説の勃興に際し「己が罪」を書いて名をあげ、乳姉妹・月魄・百合子など可なりポピュラーなものを大分出したが、次第に水準が下つて通俗小説となり甘味が多くなつて來た。エクトルマーロー原作の家なき兒の譯もあ

ユの部

入までもなしたる仲、夫婦親睦一家圓滿に暮らしてこの簡主人市之進は江戸詰、留守に起つた不時の災難——さいふのは同家中の川側伴之丞、おさいに横戀慕してあらぬ戀を言ひよる。おさいは元來容貌よし「風しのばしくゆかしくの三十七には見えざりし」骨細の輕洒な女之を體よく刎ねる中、娘おきく今年十四歳の縁談これには同家中夫の弟子の鏡の權三こそ「しんさるとろりと見とれる男、油壺から出るよな男」目星をつけ、折から若殿の祝ひごに眞の臺子の傳授の必要ありとて娘の爲めに權三を口説くつもりで夜ふけて導く奥座敷それを立聞く伴之丞「不義者見つけた」と呼ばはつてあらぬ姦夫と姦婦のうはさ。意外な戀の一對は詮方なく松江をぬけて因州丹州攝州と道行をつゞけ伏見の茶屋の宵の間の橋のたもとでとうとう夫であり師匠である市之進に打たれた……といふ。今日の常識道徳から見ると餘り形式に囚はれ過ぎた武士道徳がわざとらしいが、それをぬきにすれば構想自然・文詞優艶又彼の一作と謂つてよろしからう。

り「女の行方」のやうな謎案物もあり、白蓮紅蓮のやうな劇的な作もあり確かに才筆である(幽芳全集十二册) **ゆうれいのう 幽霊能(精霊能)** シテ(主人公)が幽霊の能をいひ、通常五番目物として演ぜられる。一度は現し世の姿で現れ中入以後となつて居直り幽霊となつて出現するといふ。構想で此點在來の猿樂よりも一步を進めたもので、これによつて夢幻劇の美や神秘莊嚴の美を増し、想を複雑にして時間的弾力性を帯びしむる。

- 幽霊能の主なるものは、
- 一、武士 實盛・朝長・兼平
  - 二、公卿歌人 定家・志賀
  - 三、僧侶行者 東岸居士・雨月
  - 四、賤夫女人 鶉飼・松風
  - 五、鬼神天狗 安達ヶ原・葛城・天狗
  - 六、木石草蟲 遊行柳・芭蕉・胡蝶
- ゆきいへ 藤原行家** 一八八三—一九三五、貞應二—建治元、五十三歳
- 知家の子、後深草・龜山の兩朝に仕へて、三位左京大夫に至り、又後嵯峨上皇の院宣を奉じ爲家等と共に續古今集を撰んだ。續古今(一四)・續拾遺(一七)・新後撰

(七)等にその味を見る。  
**ゆきぢよこまいはといた雪女五枚羽子板** 近松が寶永二年(二三六五)七月竹本座に書下した所謂「東山の世界」の時代物。  
「赤沼入道逆心あり、將軍義教は爲めに一旦都落をせられたが、藤内五人兄弟の働き、斯波細川の忠戦によつて入道は滅ぼされ將軍の御代は安泰となる」といふ筋で左の文句は余が愛誦の一節で兼てこの題名の意をほのめかした句でもある。  
……とりく響く羽子板の、音は娘の集りや、笑に春の色籠る祝儀も籠る伊達籠る、情の何も鳴る羽、雉子の風切思羽や、思の数を一つと二た三や四や十二三まで、まだ君しらす十五六から濡鷲の羽の数々の數、讀む聲きけば姿まで左こそと思ひやりは子は正月めきし景色なり……  
面も恥も名も晒の宇治の里へと送り行く、世も微なる陽炎の、森の下庵朽荒れて、月の影さへ盛治が、妻の女房小晒は、夫の出世の物入に、我身を捨る志、あはれやさしき貞女なり

**ゆきち 福澤諭吉** 二四九四—二五六一、天保五、一二、二—明治三四、二、二、六十八歳

夙に歐米の世態民情を研究して我國文化の親切なる指導者となつたことの一事に付て、一庶人としての氏が貢獻は王侯將相の勳業赫々たるに劣るものではない。貧窶の中に志を立て蘭英の外國語學の修習に努力したこと、二回歐米に渡つて親しく文明の世態を視察したこと、慶應義塾を開いて萬餘に亘る知名の士を養成したこと、西洋事情・學問のすゝめその他多くの著書によつて利用厚生の実をあげたこと、時事新報を起して社會の木鐸なる機關を如實に示したこと、その人となり勤勉・實着・正直・親切にして毫も邊幅を飾らなかつたこと、以上の何れ一つをとつても氏に及ぶことは困難であるのに、ましてこの衆美をあつめた氏の偉大さは眞に彼の豊前中津が明治文化に寄與した絶大の誇りと謂ふべきである。

氏の家はもと豊前中津の藩士であつた。安政元年二十歳長崎に行つて蘭語を學び、二年の後大阪なる緒方洪庵の塾に入り、安政五年十月江戸の鐵砲洲に塾舎を開いて同藩の子弟に教へ、安政六年米國に渡り其世態・文物を實見し、翌年歸朝を命ぜられて幕府の外國方翻譯掛となり、文久元年十二月幕府の使節に隨行して歐洲を巡見、歸來「西洋事情」の一書をあらはす。慶應三年

再び渡米し歸つて三田に私塾を開き名づけて慶應義塾といふ。即ち今日の慶應大學の前身である。明治十五年から時事新報を發行し民衆教化や時代精神の趨向すべき所を示した。朝廷その功を嘉して文學博士の學位を授けようとせられ、爵位も與へようとせられたけれども共に固辭して請けず、終生一平民として去名採實の範となつた。

明治の初期、潮の如くに流れこんだ西洋思潮の中、氏の紹介によつて入つたのはベンザムやミルの功利主義で、それを日本化したイズムは即ち氏の「獨立自尊」であつた(福翁自傳・福澤全集・太田正孝氏町人論吉)

**ゆきなが 信濃前司行長** 一八二五—一八九四?、永萬元—文暦元?、七十歳?

徒然草に平家物語の著者さあるので有名な人だが、その他は傳記不明である。國語調査會の「平家物語考」上、五六三—五七三には正四位下左大辨造東大寺長官中山行隆の子で月輪關白兼實の家司、その縁故で攝政良經郎にも出入し、元久詩歌合の席にも連り、良經の一族たる八條院の院司ともなり、出家して慈鎮和尚(實家は月輪家)の青蓮院門跡の客ともなつたもの歟、この人ならば當時の記録玉葉・明月記・元文詩歌合(群

二二三)等に散見して、文筆の堪能であつたことがわかるとある。今のこの論旨によつて生没を推測しておく。

**ゆきのぶ** 垣本雪臣 二四三七—二四九九、延寶五—天保一〇、六十三歳

伊勢の人、上京して伴蒿蹊・加茂季鷹を師として歌道に達し又狂歌をもよくした。

**ゆきのり** 海野幸典 二四四九—二五〇八、寛政元—嘉永元、一一、一一、六十歳

江戸の人(旗下の士とも松江藩士ともいふ)國學について本居大平に、和歌については前場黙軒(蘆庵の高弟に指導)を受け、後に一家の見を立てて國語學上の著には五十音口訣・天言活用圖(附話用圖解・天言活用圖安良麻之等あり、又和歌に於ては「ひびきの説」を立て「歌はことばのつらなりゆくひびきより共おもむきのおのづからあらはるもの」と云つて語の連接を強調し、旋頭歌をも獎めて自ら五十餘首を作つた。家集を「柳園家集」と云ふ。蓋しその門一株の柳があつて「柳園」と家號したからであらう。性温順名利に拘らず、殊に風雅に心を馳せ、早く薙髮して、うれしきはわが身なりけり月花に遊ぶ翁と世に

は言はれてと咏んでそれからは「遊翁」と稱したといふ。

**ゆきひら** 在原行平 一四七九—一五五三、弘仁一〇—寛平五、七十六歳

阿保親王の第二男で、母は桓武皇女伊登内親王・弟業平・兄仲平等と共に、天長三年在原と姓を賜はり

承和七、正 藏人 同十二月辭退

同 七、一二、二〇 從五位下(侍從になつたのもこのちない)

同 一三、正 從五位上、左兵衛佐

同 五 右近衛少將

仁壽三、? 正五位下

齊衡二、正 從四位下因幡守

同 四、兵部大輔

天安二、二 中務大輔

同 三、四 左馬頭

同 三、正 播磨守

貞觀二、六 内匠頭

同 八 左京大夫

同 四、正 信濃守從四位上

同 五、二 大藏大輔

今かへりこん

**ゆきよし** 藤原行能 ?

鎌倉時代の歌人、皇太皇宮亮伊經の子四條の朝に仕へて從三位右京大夫、仁治元年(一九〇〇)に出家、その終りを知らず、歌は新勅撰(八)・續後撰(七)・その他に入る。

**ゆげのみこ** 弓削皇子 ?—一三五九、?文

武三 ?歳  
天武天皇の御子で、和歌をよくせられ萬葉の三、二、八、九の各巻に出て居る。

**ゆづる** 岸本弓弦 二四四七—二五〇四、天明

七—弘化三、五、一七、五十八歳

伊勢に生れて江戸に出、村田春海について和學を修めた。もと朝田大隅と稱し、拵園・棟棠園・尙古考證園など家號をつけたが、幕府の御弓弦師、岸本家を嗣ぎ、實家は次男弓槻につがせ、その身は早く世帯を長子に譲つて向島白髭神社下に退き、後更に聖天町に轉居し春は花咲く向島、秋は月澄む隅田河と自然を友とし傍述作に筆を執つた。藏書三萬卷・藏書目錄だけでも十卷もあつた。狩谷披齋とは姻戚でもあり魂合ひでもありして互に相往來し、古器や稀觀を競つたりかへたりして

同 六、正 備前權守  
同 六、三 兼左兵衛督  
同 八、正 正四位下  
同 一〇、五 兼備中守  
同 一二、二、一三 參議 同二六日 左兵衛督  
同 一四、八 藏人頭  
同 一五、 從三位太宰帥  
元慶元、 治部卿、同一〇月獎學院別當  
同 六、正 中納言  
同 八、? 正三位民部卿  
仁和元、 按察使  
同 三、四、一三 致仕

と仁明・文德・清和・陽成・光孝の歷朝に仕へ、經世濟民の術に長じ(太宰帥時代對馬貢賦の制を改めたのは有名な話)政績顯著であつた。その味は古今(四)・後撰(四)・新古今・續古今・玉葉等に出、彼が主催したものに在民部郷家歌合一卷十二番(群一八〇、九、一一二)がある。  
わくらははにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつ、わぶとこたへよ  
立別れいなばの山の峯におふるまつとしきかば

清交美むべきものがあつた。彼の得意とするところは考證訓詁にあつてその所説、何れも精緻にして親切であつた。その著約三十種その中何々考證名ものつくものは十六種で左の通り。

徒然草考證・十六夜日記考證・土佐日記考證・多武峯中將物語考證・新まりかへばや物語考證・江談抄考證・古事談考證・續和歌集考證・漢古事考證・續古事考證・古歌集考證・契沖雜記考證・契沖雜々記考證・曾丹集考證・堀河院百首考證・草山和歌集考證・永久四年百集考證・その他古今集序考・和泉式部家集標註・八代集増註等がある。

**ゆはらのおほきみ 湯原王 ?**

志貴皇子(一三三九—一三七六)の御子、歌をよくせられ萬葉の三、四、六、八に出て居る。

**ゆふぎりあはのなると 夕霧阿波鳴門**

近松が寶永七年(二三七〇)正月、竹本座に書下した世話物。

「大阪の富豪藤屋の一人息子伊左衛門は新町扇屋の夕霧に馴染んで一男児を産ませるが、その爲め母の勘當を受けて浪々の身となる。夕霧は我子の爲め夫の爲めその兒を阿波の大盡とあだ名してこの節しげく通

ふ平岡左近の胤といひなし「子なきを幸ひ我が世嗣」とて上本町の邸へ引き取らせ、我身は乳母として附添うて行く。その籠身の片棒は我兒にあひたさばつかりに伊左衛門が人足姿(こゝに親子のよそながらの暇乞のあはれにをかしい場面がある)……やがて伊左衛門は勘當を許され、夕霧は藤屋の老母の心配と扇屋主人の義侠と左近の妻お雪の膽煎で無事廓をぬけて伊左衛門とつれそふ身となつた」といふ筋。

**ゆみながし 弓流し**

資料、平家物語一ノ一三・謡曲「八鳥」

**ゆみはりづき 弓張月**

「椿説弓張月」を見よ。

**ゆや 熊野**

謡曲 シテ 熊野 ツレ 侍女朝顔

ワキ 平宗盛 トモ 太刀持 處 京都

「遠江の國池田が宿の長者が娘熊野、故郷の老母病危篤ときいて暇を乞ふが宗盛には「この春ばかりの花見のともなひさて許されなかつたが、折柄故郷より朝顔が來て老母の手紙を傳へるので熊野の歸心は矢の如く、

やがて催された清水寺の境内地主権現の花見のうたげに、

いかにせん都の春も惜しけれど

なれしあづまの花やちるらん

と述懐の一さしを舞ふと、宗盛もその孝心に感じて暇を許す「又もや御意のかはらぬうち」と倉皇歸省の途につく……文詞優艶豔物の上乗なるものであらう。

ヨの部

**ようしやばこ 用捨箱 三卷**

山東京傳天保十二年(二五〇一)作の隨筆、調度・風俗・傳記・故實等五十一項を集めたもので、題名は「この中探るべきあらば用ひられよ、捨つべきは遠慮なく捨てられよ」との自遊の意でつけたもの(温知叢書、有朋堂文庫の内)

**ようれん 涌連 ?—二四三四、?—安永三、**

徳川時代の歌僧、伊勢に生れ、江戸に出て一寺を住持し、京都に出奔し嵯峨に隠れて世を終へた。家集を獅子巖和歌集といふ。

**よんや 壽詞**

上代、天皇皇室を謳歌して祝賀の意をこめた朗讀文で現存するものに出雲國造神壽詞・中臣壽詞の二篇がある。

**よさのおほきみ 譽謝王 ?**

持統・文武の頃の女流歌人で歌は萬葉の一に出て居る。

**よしか 都良香 一五〇四—一五三九、承和二—**

元慶三、三十六歳

王朝初期の漢學者にして漢詩人、菅原道真も彼に師事した。その詩は扶桑集に出、傳説によれば嘗て、

氣晴風櫛=新柳之髮 (良香)

氷消波洗=舊苔之鬚 (竹生島の明神)

とて神と唱和したといふ。

都氏文集(群一二九)・富士山記(本朝文粹第十二)・道場法師傳(本朝文粹第十二、群六九)・應速討賊事(朝野群載第十二)

の外、歌をもよくしてその味古今集にとられ、又元慶三年には陽成天皇の勅を奉じて文徳實錄十卷を撰んだ。

**よしき 大塚嘉樹 二三九—二四六三、享保**

三、六、二九、七十三歳

江戸の人、通稱市郎右衛門、字は子敏、蒼梧又は老邁と號す。幼より好學の念強く又詩文に巧みであつた

が、中年以後力を有職故實の研究に注ぎ、思ふのに「古來斯の學の研究に従ふ者は随分多いが、その根柢の學力を缺く爲めに價値ある考證を遺すことが出来なかつたのだ」と、爾來奮勵和漢の學を兼修し、遂に一世の大家となり聲譽・伊勢貞丈を凌駕して教を乞ふもの陸續絶えなかつたといふ。その著甚だ多く慶長國學者史傳あぐるところ百五十一種に及ぶ。儀同三司考・喪服五異考・魚綾考・麴塵黃檗染考・笏考・八坂瓊之曲玉解・勘解由字義・服飾類聚・扇之由來・白馬節會拜見記などはその専門に係り文集に橋翁文章、隨筆に蒼梧隨筆などがある。

**よしざね 藤原良實 (普光園院)** 一八七六

—一九三〇、建保四—文永七、五十五歳

鎌倉時代の歌人で、官は左大臣關白、その味續後撰(四・續古今(一三)など)に入る。

**よしたか 藤原義孝 (後少將)** 一五三九

—一六三四、元慶三—天延二、九十六歳

攝政伊尹の男、地位は從五位下右近衛少將に至り、歌は拾遺・後拾遺・詞花・續後拾遺・後六々撰等に入り、家集に藤原義孝集一卷(群二四九、九、六一三—六一七、續國七〇五—七〇八)あり尙又「義孝日記」の著がある。

うすい衣しなど、

四、世俗通用の語をも歌語とせること

夏はぎの麻のながらとあだ人の心かるさといづ

れまされり

そして彼の秀味としては、

蟲の音もまだうち解けぬ草むらに秋をかれても

結ぶ露かな

みしま江に角ぐみわたる芦の根の一よの程に春

めきにけり

拾遺(九)・後拾遺(九)・詞花(一七)・新古今(一三)等の外、家集に曾根好忠集がある(扶桑拾葉三、群書一覽四—六四—群二六二、九、一〇二—一〇三八、續國六一九—六三二)

**よしつね 藤原良經** 一八二九—一八六六、嘉應

元—建永元、三、七、三十八歳

月輪兼實の男で、その官歴は後鳥羽・土御門兩朝に仕へて権中納言正二位から

文治五 權大納言

建久六 内大臣

正治元 左大臣

等を経て遂に攝政まで仰せつけられ、内外の信望甚だ

**よしただ 曾根好忠 ?**

傳不詳だが、曾て六位に叙し丹後掾に任ぜられたので世に曾丹後掾とも曾丹後とも曾丹ともいふ。彼も歎じて「しまひには「そた」なんか云ふだらう(いつまたそたさいはれんすらん)」とこぼしたといふ。彼は當時の歌人(平兼盛・清原元輔・源重之・紀時文等)に反旗を翻して形式の新調を唱へた。その歌態の奇矯は人物の狷介と相まつて時流には入れられなかつたが、後來、源經信・俊賴父子に認められて多く入撰し、寶町の徹書記・徳川期の契沖等(岸本由豆流・安田躬弦・村田了阿・加納諸平等)の推稱によつて益々その眞價を稱へられた。今彼が和歌の特徴をあげるこ、

一、やす川・かまど山・牛窓等の新しい土地を歌枕にしたこと

二、草木も、薺・は、こぐさ・みやつこぎ等新しいものを取材したこと

荒小田の去年の古根のふるよもぎ今を春べといこぼへにけり

三、好んで萬葉の古語をさりいれたこと「底の蛙ぞ聲すだくなる」もとあらの櫻「けを寒み」「蟬の羽の

厚かつたのに三月七日の朝突然變死、朝野擧つて之を惜しんだ(實は刺客の爲めに殺されたのだが、その刺客の出處原因については衆説區々である)彼は堂上第一の歌人と謂はれ後の和歌史家は俊成・定家・家隆・西行・兼鎮と共にその家集を六家集の中に加へた。その味、新古今(八〇)・新勅撰(三〇餘)・續後撰(二〇餘)・續古今(二〇餘)の外代々の勅撰に採られた。家集は秋篠月清集といつて四卷ある(續國二七一—二七六)後世荷田在満はその歌源論に良經の味を稱へて「毎句皆錦繡、每首皆金玉云々」と云つた。若し借すに今三四句の齡を以てしたならばその歌境は裕に朝野をあげて第一人者ともなつたであらう。

燕子樓中霜月夜秋來只爲一人長といふ心を  
ひとりのみ月と霜とに起るつ、やがてわが世も  
ふけやしにけむ

内侍所御神樂

雲の上に神も心やはれぬらむ月さゆるよの赤ほ  
しの聲

和歌所歌合に關路秋風といふ事を

入すまぬ不破の關屋の板びさし荒れにし後た  
だ秋のかぜ

尙彼の著には殿記（殿御記）八卷・後京極攝政詩集一卷・後京極攝政良經卿別記（高倉院第二親王御書始記・伊勢公卿勅使別記・今上第一皇女第五十日記・被賀入道三位釋阿九十算記・任太政大臣記を合せたもの）などがある（史二四ノ三〇後京極攝政良經公記）

**よしつねせんぼんざくら 義經千本櫻**

延享四年（二四〇七）十一月竹本座上演、作者は竹田出雲・三好松洛・並木千柳

「義經頼朝と不和になり、吉野落の時兼て義經に恵を受けた老狐が忠臣佐藤忠信と化けて危難を救ひ、之によつて無事追手を斬りぬけて大物の浦まで行くと平家の殘將平知盛・渡海屋銀平と變名、安徳天皇を奉じてこの里に蟄伏し「今こそよきなり」と夜中白装束に幽霊と見せかけ義經に討つてかゝつたが、却て義經に斬り伏せられ碇を負うて入水する。一方平家の大将維盛は吉野下市の釣瓶鮎屋彌左衛門の家に彌助と名を變へて下部となり濟ます（主人は彼が恩顧の舊臣）娘お里は維盛とはしらす鄙の里には「色珍しい若殿御」と思ひ焦れる。そこへ維盛の奥方若葉の内侍と幼君の六代とが尋ねて来る。お里の兄のいがみの權太は維盛を討つて梶原の恩賞に與らうとて彌助をそれと感づいて討ち

に入る。彌左衛門は兼て維盛の部下主馬小金吾の討死した首をしまつておいてそれを維盛の身替りにする。いがみの權太も實は平家の爲めを思つて居たこととて己が妻子を若葉内侍と六代君の身替りに立て、お里も己れの戀をあきらめて一同を上市へ落すことに盡力する

といふ筋で鮎屋の段も狐忠信も碇知盛も皆喝采を得た作意である。

**よしとも 壺井義知 二三一七―二三九五、明曆三―享保二〇、一〇、二四、七十九歳**

河内の人、通稱安左衛門、字は子安、鶴翁・鶴壽・又温古軒と號し、有職故實に精しく、當期斯方面の先驅者として聞え、又古典にも精通した。その著裝束圖式・裝束要領抄・枕草子裝束抄・源氏物語男女裝束抄・紫式部日記傍註始め約三十種何れも斯道有益の述作と稱せられて居る。

**よしの 榊原芳野 二四九二―二五四一、天保三**

―明治一四、一二、四、五十歳  
東京の人、通稱は兩藏、號は琴州、又兩齋・又櫻などいふ。父爲謙は俳諧師、母は國學の素養があつて熱心に彼を鞭撻した。伊能類則・蓄村・深川潜藏を次々師と

して國學古典を專習、やがて帷を下して後進に教授した。家貧しきより雨天來客あれば傘をさして應接談笑した。明治維新人々散髪の風行れしも彼獨り依然として髪を剪らず白服縁袴平然と澄まし込んで居た。昌平大學中助教より文部省一等屬に遷り、俸給が入るる書籍を買ひ家藏幾千卷一朝失火に遇つて全部焼失、それにも懲りず又も蒐集して數年の後には七千餘卷に達した。晩年瘋癲にかゝつて人事を辨へぬやうになつて談一たび古典のこゝに及べば、博引旁證一も誤ると、るなかつたといふ。博覽強記一世に重んぜられ知人相會して疑義ある都度、那珂通高でなければ彼を推して教へを乞うた。彼遺兒なし友人大槻修二・同文彦・兄弟その遺囑によつて喪事を治め藏書をばあげて東京圖書館に寄贈した。その著には次の七種がある。

文藝類纂・太古史略・小學讀本・文藝概略・醬油集説・蒔繪集説・染色考

**よしのしふる 吉野拾遺 二卷**

南朝二代（後醍醐・後村上）の見聞・逸話・歌話を雅文體に綴つた隨筆で、文は平明典雅稍くどくしい感がある。内容は神皇正統紀・太平記・新葉集・新後拾遺集などと出入があるが、主として太平記の遺ちたるを拾ふ

といふ意の書名であらう。作者は「松翁」と號する待從吉房とも（この説が一番多い）尊氏の侍童の命鶴丸とも（栗山潜鋒の潜鋒集）兼好の侍童命松丸とも（文祿清談）いふが要するに不明で、年代も亦わからないが大約至徳以後の作と推されてゐる。原本は二卷本が正しく、三卷本・四卷本は後人の偽補（宗祇の句など入れ）だとなつてゐる（群四八五、一七、五二七―五五七校日系一八・百萬塔）註釋には中村秋香翁の吉野拾遺詳解がある又「熊王發心の事」などはよく教科書に引かれて居る。

**よしのぶ 大中臣能宣 一五八二―一六五一、**

延喜二二―正曆二、七十一歳  
梨壺の五人中殊に優れた歌人の一人で、家は始め中臣と稱して代々神事に仕へ、稱徳天皇の朝、清曆の時から大の一字を加へて大中臣といひ、その七代の孫頼基は伊勢の祭主に任じ、詠歌に巧であつた。能宣は即ちこの頼基の長男で、歌才は更に秀でて居つた。藏人所衆から祭主に昇り尙累進して正四位上神祇大副に任ぜられた。その歌風は即興に巧みで、高い感激（殊に戀の）を歌つたものに秀味が多い。  
千載まで限れる松も今日よりは君にひかれて萬

代やへむ

御垣守衛士のたく火の夜は燃えて晝は消えつ、物をこそ思へ

さりともと頼む心にはかられて死なれぬものは命なりけり

家集を大中臣能宣朝臣集（群二五〇、九、六三八―六四一、續國四五〇―四五三）と云ひ、又、拾遺（五〇餘）後拾遺（二〇餘）以下の諸集にも採られた歌が多い。又村上天皇の勅を奉じて他四人と共に後撰集を撰んだ。尙又「榊日記」も彼の作だと言はれてゐるが、これは偽作らしい。その男輔親、女伊勢大輔も亦和歌を以て世に聞えた。

よしのぶしふ 能宣集

よしのぶ「大中臣能宣」を見よ。

よしのものがたり 吉野物語

「本朝水滸傳」を見よ。

よしひさ 貝原好古 二二三四―二三六〇、寛

文四―元祿一三、五、三十七歳

貝原益軒の姪で、後その養子になった。字は敏天、號恥軒、通稱を市之進と云ふ。力學博覽、福岡藩の儒官となつたが、惜しむらくは夭折した。その著には諺草・

和爾雅・日本歳時記・八幡宮本記・和漢事始などがある。

よしもと 二條良基、後普光院 一九八〇

―二〇四八、元應二―元中五、六十九歳

九條師輔の遠孫關白道平の男、後醍醐・光明・崇光・後光嚴・後圓融の數朝に歴仕し、

嘉暦二、元服、禁色をゆるさる

? 從五位下權中納言

? 太政大臣從一位

天授二、准三宮

弘和二、四 攝政

元中四、辭職

同 五、再び攝政

同 五、六 攝政をやめて關白となり即日辭退して薨去。

その名門、多趣味の人であつたことが非常に我國文學史上に好事情を産んだ。

一、連歌の體系を整へ、この趣味を世にひろめた。寛政波集二十卷、連歌新式（應安二年の作、一に應安新式といふ）筑波問答等の著は連歌の典型を示したもので從來永く斯道の寶典とせられた。これより前鎌倉期に冷泉爲相・大納言爲世などの歌本が出てゐるがあ

まり行はれなかつたから本當の意味に於ての連歌作法書の嚆矢は良基の著であるといつてよろしい。救濟・祇公・周阿・眞鍋新左衛門などは皆彼を中心にして相呼應し連歌壇の先輩であつた。

二、和歌をも盛んにしたこと

彼の時代には、

延文 新千載 爲定

貞治 新拾遺 爲明

永和 新後拾遺 爲遠

の三勅撰集が出て撰者はそれ／＼ちがつてゐるが、内實は良基の斡旋に俟つものが多かつた。彼亦歌道を頼阿に問ひそか手記して愚問賢註を著す。

三、多くの編著

御禊記・百寮訓要抄・神業日記・小島口すさび・貞治御鞠記・諒闇記・大嘗會記・雲井御法・白鷹記・山鳥之慰・魚鳥平家・小夜寢覺

等、有職故實や物語など随分澤山ある。又祖先師輔以來の「家庭日誌」をも謂ふべき「二條殿日並記」も彼の代に整理したが、これは朝廷・公家・武家の儀式典禮の根本資料として重寶がられた。

四、建築作庭の趣味

その邸内には藏春・洗箸・聽松・御榻の閣を構へ、魚臺・吉靈泉・梅香・水明等の樓榭をしつらへ、池に龍躍あり、橋に縁揚ありて數寄を凝らした設備があつた。

よじやうほふ 餘情法（含蓄）

十のものを十ながら表現しないで六七分に止め、あと三四分は讀者をして味はしめる修辭法で、韻文には必要缺くべからざる手法である。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つはもとの身にして

といふ業平の一首は古來餘情法のすぐれた歌となつてゐて、之が情趣を悉くあげるならば一個の短篇小説が出来る位だ。

すがらなく秋の萩原朝立ちて旅ゆく人をいつと  
か待たん

の「いつと」か待たん」が餘情法でもし之を「旅ゆく君のをしまるゝかな」としたならば餘情はなくなつて平面的な散文句になる。

秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか波のよ  
するか  
菅原朝臣

の下句を素性集に「花の咲けるか波のよするか」として



あるがこれも餘情法の有無によつて立體的と平面的と韻文と散文と別れる句だ。  
宣秋門院丹後の

わすれじなにはの浦の夜半の空こと浦にすむ  
月は見るとも

は「ことうらの丹後」の名をとつた秀味だが、歌合の時  
之と番うて負けたのは參議雅經の、

秋はこよひ浦はあかしの波の上にかゝる月をば  
いつか眺めむ

さいふので判者俊成の意見はごうあつたか知らぬが、  
要するに餘情の有無によつて、優劣が別れたものと想  
はれる。

よつぎ 世繼

「榮華物語」を見よ。

よつぎものがたり 世繼物語

「大鏡」を見よ。

よつな 大伴四綱 (四繩とも書く) ?

萬葉歌人、歌は集の三、四、八各巻にある。

よどがは 淀河 (新增犬筑波集) 一卷

松永貞徳の作、寛永二十年(二三〇三)の板行、山崎宗  
鑑の犬筑波集中の附句を批評したもので油糟・御傘と

共に貞徳三部の書といふ(俳文二)

よねじらう 野口米次郎 明治八、一二、八一

尾張の人、慶應義塾中途退學の後歐米大陸に放浪し、  
オーキーン、ミラーの山莊に數年寄寓して詩名漸く上  
り、「Seen and unseen」の出世作を始め「東方便り」「ア  
メリカ少女の日記」「日本詩歌論」(後の二書英文邦文  
ともにあり) 歐洲文壇印象記・二重國籍者の詩・林檎一  
つ落つ・沈黙の血汐・野口米次郎詩論・敵を愛せ・廣重  
(英文) 等情味豊かな詩作と繊細精緻な鑑賞評論とに  
特異の地位を占めて居る。今は慶大教授を勤め傍ら述  
作に従事してゐる。

よのなかひやくしゆ 世中百首 (世中百  
首繪抄) 一卷

荒木田守武大永五年(二一八五)の作、每首「世中」を  
いた教訓歌百首を詠じ、

世中の親に孝ある人はたゞ何につけてもたのも  
しきかな

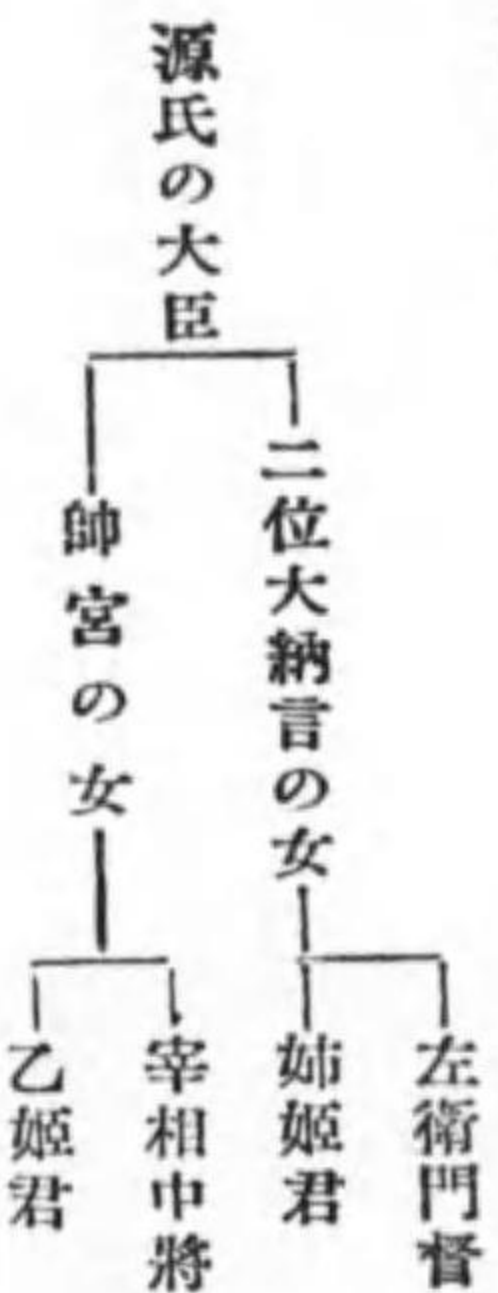
などいふ。享保七年(二三八二)板行、繪は川島重信筆、

よのなかひやくしゆ 世中百首繪  
抄

「世中百首」を見よ。

よはのねざめ 夜半の寢覺 五卷

源氏物語模倣の物語中優れたものの一つで、先帝朱  
雀院の兄弟源氏の大臣に二人の北方あり共に一男一女  
をあげられた。



右の中乙姫君を女主人公とし關白の太郎君、中納言を  
男主人公として世は生憎戀は無常の世相を描いたも  
の。この書刊本無く藤岡博士は黒川・中村兩先生所藏  
の寫本と拾遺百番歌合風葉和歌集・無名草子等に散見  
するこの書の記事とによつて國文學全史中六一―六  
二七に評論せられた。

よひからしん 宵庚申

「心中宵庚申」を見よ。

よみほん 讀本

「讀本」といふ名稱は早く八文字舎本の廣告に見え、從  
來八文字舎・菊屋などから出した挿畫本位の西川祐信  
などの假名草紙様の小本に對して旨と文章を本位とす

る作品を指したものでらしい。それが後に江戸に移り實  
録物の眞面目なところを加味して所謂讀本なるもの  
地歩が確實になつた。寶曆以前に出た近路行者千里浪  
子 古今英草紙は通常讀本の始めとせられてゐる。

- 一、よく國民性を發揮して忠孝尙武等の美德を小説  
化したこと
- 二、作者は一廉の學識ある人なること
- 三、勸善懲惡を標語としたこと
- 四、説明的に委曲を盡した叙事文叙情文なること
- 五、支那の傳奇や我邦の歌舞伎などから着想して趣  
向に新意匠のないこと
- 六、人物多くは類型的、構想多くは概念的なること
- 七、文體は和漢混淆なること

などが目立つた特徴で、代表作家は山東京傳・瀧澤馬  
琴等で、京傳の讀本には安積沼・優曇華物語・善知鳥安  
方忠義傳・忠臣水滸傳・櫻姫全傳曙草紙・昔語稻妻表紙・  
本朝醉菩提等があり、馬琴の作には南總里見八犬傳・三  
七全傳楠柯之夢・松染情史・椿説弓張月・頼豪阿闍梨怪  
僧傳などがある(國刊一期新群、漆山天童、讀本年表  
一)

よもさんじん 四方山人

なんぼ「太田南畝」を見よ。

**よもた 坂本四方太(文泉子)** 明治六一大

正六、五、一六、四十五歳

因幡の人、名は四方太、それを「よもた」とよんで雅號にした。三十二年の帝大文科出で、子規や虚子の後進として親しく出入し、日本派の俳人として有名だが殊に文章史上「寫生文の唱道普及」に於ては理論と作例と兩方から努めた點を閑却するわけにゆかぬ。その著には寫生文集帆立貝・寫生文集・寒玉集(以上他との合著、續寫生文集(附録に寫生文話の一篇あり)などがある。

泥ながら田螺入れたる小桶かな

梁上の君子の尻や明け易き

**よものあから 四方赤良**

なんぼ「太田南畝」を見よ。

**よものうたがき 四方歌垣**

まがほ「鹿部眞顔」を見よ。

**よものためかす 四方の留糟** 二卷

太田南畝の狂文集「狂歌新玉集」以下三十餘篇凡て諸書の序文として書いたものを集め文政二年(二四七九)四方眞顔の序をそへて版行した。

**よやうのがく 餘姚之學**

王陽明の學をいふ。餘姚は彼が出生地の名。

**よゆうはせうせつ 餘裕派小説**

非常なこゝろ、過激なこと、深酷なこと、死生の巷に入するやうなことを題材とせず「菊を東籬の下にうゑて悠然として南山に對する」底の綽々たる餘裕を以て悠々自適する想をとつた小説のことで、夏目漱石が自分の小説に自ら名づけたもの(高濱虚子作「鷄頭」夏目氏の序)又之を低徊趣味の小説ともいふ。漱石以外高濱虚子の作品も之に近く森鷗外の「あそび」説も之と近いものであつた。

**よよし 四十四**

四十四句より成る連歌又は俳諧をいふ。懷紙書式は一枚目の裏八句裏十四句二枚目の表十四句裏八句。

**よりさね 源頼實 ?**

源頼家の從子、美濃守頼國の子、從五位下左衛門尉に至る。和歌をよくし和歌六人黨の一人にかぞへられた。その味は後拾遺(五)・玉葉・風雅等に入り、家集に源頼實集一卷(故侍中左金吾歌集ともいふ。群類二五三、九、七二六―七三一)がある。

**よりなり 藤原頼業 (寂然) ?**

丹後守爲忠の子、平安末期、朝に仕へて壹岐守たりしが、性最も和歌を愛好しその所味又妙境に入る。兄爲業(寂念)と共に大原に幽栖し以てその雅懷をやる。西行法師などとの贈答殊に名高い。千載(七)・新古今(九)・風雅(八)その他に採歌せられ、家集に寂然法師集(群二二九、一〇、七四―七八、續國七八―七八三)がある。

(高野よりいひ贈れる)

山深み岩にせかるゝ水ためんかつく落つる椽

ひろふほど

西行

(返し)

山風に峯のさゝ栗はらくさ庭に落ちしく大原

の里

寂然

**よりなり 清原頼業** 一七八二―一八四九、保

安三―文治五、六十八歳

夏野の裔で、初め顯長と云つた。父は大外記祐隆、彼は明經博士で明法をも兼ね高倉天皇の侍讀となつた。兼て禮記を讀むに本經に依つて舊註を採らず、頗る同時代宋の朱熹(一七九〇―一八六〇)の説と暗合するものがあつたといふ。

**よります 源三位頼政** 一七六五―一八四〇、

長治二―治承四、七十六歳

後白河法皇に仕へて判官代となり從三位に叙せられた。文武兼備の士として逸話も大層多い。俊惠法師の無名抄には「彼の生活の凡てが歌になりきつて居る」との意で激賞した詞がある。蓋し武人にして裕に堂上歌人を瞻若たらしめる程の詩人であつたらう。鶴退治・菖蒲の前「推を拾ひて」の述懐「みのなるはて」の辭世など平家や盛衰記に散見し、

深山木のその梢とも見えざりし櫻は花にあらは

れにけり

花さかば告げんさいひし山守の來る音すなり馬

に鞍おけ

庭の面はまだかわかぬに夕立の空さりげなくす

める月かな

など人口に膾炙した味も多い。千載(十餘首)・新古今(四)・風雅(十餘首)等の諸勅撰にさられ從三位頼政卿集(群二四六、九、五三二―五五二・續國八〇九―八三四)といふのもある(國華九一號、一二八―一二九松原慶琢筆、源三位頼政圖・二三〇號一五傳隆信筆頼政卿像)

**よりもと 大中臣頼基 ?** 一六一八、?―天

徳二、  
王朝時代の歌人で、肥後守輔道の子、四位に叙せられ神祇大輔に任ぜらる。歌は拾遺・玉葉・續後拾遺・風雅・新千載・新拾遺・新後拾遺・三十六人撰等に採られ、家集に大中臣頼基朝臣集一卷(群書一覽卷四、群二四八、九、五八六―五八七、續國五四三―五四四)

天曆の御屏風に春日野に若菜つむところ  
いくばくの年つみくれど春日野に生る若菜は老  
せざりけり

秋の山を

白露はわきておかじを秋山のなか紅葉のうら  
こかるらん

よるのつる 夜の鶴 (阿佛口傳) 一卷

阿佛尼がさる「さりがたき人」に頼まれて作歌の心ばへか説いた小冊子で、大體定家の主張をそのまゝに取り入れ、中には歴代勅撰集に對する彼女の意見なども入つて居る(群二九二、一〇、七一―七二)

よろこんぶひいきのえぞおし 悦最負蝦夷押領

戀川春町黄表紙の名作で、源義經が奥州高館をのがれ蝦夷に渡つてその地を征服したといふ傳説を、をかし

く脚色したものの(晝は政美、奥書に左の記事がある。  
春町の作二三年絶しが久し振にて出せり是も柳營の諷刺なるべけれど深く匿しある故に分らず思ふに當時松前か或は長崎邊の交易上に不都合なることありしやうに思はる(續帝三四、四七七―四九〇)

ラ の 部

らいざん 小西來山 二三一四―二三七六、承應三―享保元、一〇、三、六十三歳

徳川初期談林派の一明星として浪華俳壇に輝いてゐた。生れは泉州堺で大阪に移り住み、前川由平を師として(來山の資性敏活なるを愛し、彼から求めて秘藏弟子にした)句作し、この派の流布につとめた。性狷介不羈、一生を雅懐に隠れて名利の都市を卑しく視てくらしした。墓は今宮にある。家集に來山句集がある(俳文一〇)

涼しさに四つ橋を四つわたりけり

元日やされば野川の水の音

夏川や草で足ふく時もあり

らうえい 朗詠

ひらやなるむれもりにかに騒ぐらん柱と頼むす  
けをおとして

富士川によるひは捨てつすみぞめのころもたゞ  
きよ後の世のため

など落書したといふ。建武元年八月二條河原の落首は七五を八十八句つられたもので古來落首の最長篇であらう(拙著國文學概説八一―八一八)内容も相當時弊に觸れたものがあるやうだ。

(中村秋香氏の「歌がたり」に、徳川時代江戸島居坂の火事に役人の戸河内膳にあてつけて、

この火事は人の命をとりぬ坂これより上のが  
はないぞん

と落首したのを松平定信が作りかへて、  
この火事は人の命をとりぬ坂怪我のことなりと  
がはないぞん

としたといふ。幕末長州征伐の時、余が郷里(丹波)地  
方では、

今年しや母さんもうりをおひて初手のちやうし  
ゆで暮らしたい

といふ俚諺が落書されてはやり唄のやうになつたとい  
ふ。要するに落首の技巧は洒落か地口ばかりで作者は

漢詩文や和歌の句調の優麗なものに節をつけて朗誦すること、玉細緒の一つの暗みとして流行した。その歌句を集めたものに藤原公任の和漢朗吟集・藤原基俊の新撰朗吟集などがある(江見清風氏和漢朗吟集新釋卷末記事)

らうさう 老莊

支那周代の學者、老子(老聃)と莊子(莊周)とを云ひ、又、それ等の人々の唱へた虚無恬淡の學を指してもいふ。

らえうしふ 蘿葉集 一卷

横井也有の句集、明和三年(二四二六)九月の新版(俳諧文庫六)

らくくん 樂訓 三卷

貝原益軒寶永七年(二三七〇)の作(著者八十一歳)享樂に對する教訓文學とでも謂ふべきもので總論・節・序・諸書・後論の四編に分けてある。文體は平明なる和漢混淆文(益軒全集第三卷)

らくしゆ 落首

落書の歌をいふ。上代童謡の系統を曳くもので作者匿名の諷刺歌である。源平時代頃から代々あつたやうである。富士川の戦の後、

彌次馬の消極性なものだと想はれる)

**らくしよろけん** 落書露顯

れうしゆん「今川了俊」を見よ。

**らくてんきよ** 樂天居

さざなみ「巖谷小波」を見よ。

**らくばいしふ** 落梅集 八篇

島崎藤村三十四年作の第四詩集。氏が信州小諸の體驗により益々實生活に興味をもち、積極的的人生觀を謳ひ農民藝術郷土藝術に近いやうな詩境を披瀝し、從來の感傷的・傳奇的傾向を擺脫して現實的理性的轉機を示し、同時に氏の心が詩人から小説家になりつゝ、ある内面生活史を展開したものと見て注目されて居る。「労働の歌・響りんく音りんく・鳥なき里」は幾度か若人の口の上つた佳什である(藤村詩集第二卷一―一七四)

**らくびんのせつ** 洛閩之説

支那宋代の儒學の大家中二程子(程明道・程伊川)及び朱子の學說をいひ又之を理學ともいふ。二程子は洛陽に朱子は閩州に居つたから洛閩といふ語が出来た。

**らさん** 林羅山 二二三七―二三一七、天正五―

明曆三、正、二三、七十五歳

政治上の顧問たらしめた。爾來秀忠・家光・家綱と四代に歴任して即位・紀元・行幸・入朝の禮から宗廟・祭祀の典・外國蠻夷の事に至るまで與り議した。

幕府學問所の昌平黌も事實羅山が基礎を開いたもので子春齋、孫鳳岡と代々大學頭をつとめて官學の大家となつた。

彼は又四書・五經に訓點を附し之を道春點(道春は彼が薙髮後の號)と云ひ廣く行はれた。

學說としては「純正朱子學派」と謂ふが一番適切であらう(彼の言に「周子の主靜、明道の定靜、伊川の主一無適、朱子の格物窮理、みな入處異にして而して其致處は異ならず」と)が、彼が「王道神道其の義一なり」と唱へたのは神儒を融合しようとする調和的見解の表れである。

彼の編著約百七十種、本朝編年錄・寛永諸家系圖傳・貞觀政要抄・論抄・神道秘傳・本朝神社考・神社啓蒙・徒然草野槌の如きは國文學研究にも好資料である(平安考古學會發行、羅山全集全四冊、一、二、文集、三、四詩集)

**らびじん** 裸美人

こてふ「胡蝶」を見よ。

**らふう** 羅風

徳川初期文藝復興に際し、惺窩の衣鉢をついで純正朱子學を世に布いた大儒である。

父を信時といひ、彼は幼名を菊麿(又菊松丸)通稱を又三郎と云ひ長じて後、名は忠、一名は信勝、字は子信、別號としては羅浮山・浮山・羅洞・羅・長胡・蝶洞・瓢菴・夕類庵・雲母溪・尊經堂・梅花林・麝眠等もある。先祖は加賀で後に紀州に移つた。彼幼より神童とよばれ十四五歳にして凡そ書冊の形したもので讀まないものはない位であつた。その中歸趣を朱子學に見出していふには、

漢唐以來の文字は、皆な原く所ありて其の大意は六經に歸す唯六經の文字は原く所なし道固より此にあり……後世能く六經の旨を得る者は唯程朱の學なり、今日異端外説又之を雍塞す是れ努めて闢かざるべからず。

と、博士清原秀方、彼が從來の明經道を無視して妄に新説を唱ふることを非議したが徳川家康は却つて秀方を偏狹だとけなした。時に藤原惺窩洛北に隱栖し令名噴々で彼も深くその風を慕ひ、遂に許されてその門に入り、師の信任を得て高足としてもなされたが、家康は特に羅山の人物を見込み慶長十一年召して博士とし

らふう「三木露風」を見よ。

**らんかう** 高桑關更 二三八七―二四五九、享

保二―寛政一、五、三、七十三歳

加賀金澤、釣瓶屋の息子で名は長次郎、希因の俳弟子となり、後立机して南無庵・二夜庵・半花坊など號し、中年、一時醫者ともなり間もなく廢業、京都に轉住して寛政五年曉臺の後を承けて花の本宗匠となり、洛東双林寺に芭蕉堂を營んで幽栖した。その句平凡、や、俗趣に墮する嫌あれども奇巧を弄せぬところむしろ自然味があつてよろしい。その門弟には梅室蒼虬などいふ大家(月並風の宗匠ではあるが?)を出した。

雪消えて麥一寸の野面かな

雨乞や火影に動く雲の峰

五月雨や鼠の廻る古葛籠

山道の下に開えて鳴子かな

枯芦の日にく折れて流れけり

**らんぐわい** 辻嵐外 二四三一―二五〇五、明

和八―天保二、三、二六、七十五歳

越前敦賀の人、通稱五七、椰の屋・六庵・南無庵・北亭等の號がある。初め關更について俳を學び、その紹介により更に甲州の可都里が許に行つて習つた。

らんさい 藤井懶齋 ?

筑後の人、東山天皇の元祿頃を盛りとした人と推せられる。名は賊、字は季廉、初め醫を以て久留米侯に仕へたが中途慨然として匙を投じ、京師に行いて山崎闇齋の門に入り當時の學者たる中村惕齋・米川操軒・川井正直等と相交はり、學は紫陽を尙び性理を高談し隱君子の風があつた。その著には以下の數種がある。

國朝諫諍錄・開齋筆記・睡餘錄・徒然草摘議・本朝孝子傳・同平假名・二禮童覽・大和爲善錄・竹馬歌・藏笥百首。

らんざん 高井蘭山 二四二二—二四九八、寶曆一—二天保九、一二、二三、七十七歳

名は伴寛、字、思明、通稱文左衛門、小説(讀本)の作家として有名な人。江戸、芝の伊皿子に住んだ。その著に孝子欽鈔解・三國妖婦傳・孝子嫩物語・水滸傳・應仁記・星月夜顯晦錄・那智能白絲などがある。

らんしう 五井蘭洲 二三五七—二四二二、元祿一〇—寶曆一二、六十六歳

名は純禎、字は子祥、通稱藤九郎、蘭洲又は州療又は列庵と號した。大阪の人持軒の第二子、家學を修めて懷德堂の助教となり、ついで津輕藩主に聘せられ、大に治化の文教を助け、歸りて再び懷德堂の教授となつた。

四、積極的

四、消極的

蕪風寂楽の俳脈は其角よりも寧ろ彼によつて正しく傳へられた。

その門弟を雪門といひ更登・蓼太等多くの名家を出した。子孫相襲いで雪中庵を稱し、以て明治に至る。その句集を玄峰集・若水と云ひ、今は嵐雪全集として俳文七に取客れてある(尙彼は幼名久米之丞、又は孫之丞、長じて治助と稱し後に彦兵衛と改めた。別號としては寒蓼堂・黃落堂・不自軒・石中堂・玄峰堂・蓼太郎・佛山大居などいひ、畫號を良香といつた)

梅一りん一りんほごのあたゝかさ

ぬれ椽に薺こぼるゝ土ながら

花に風輕く來て吹け酒の泡

文もなし口上もなし糍五把

秋かぜの心動きぬ繩すだれ

名月や烟這ゆく水の上

黃菊白菊其外の名はなくもがな

はゞ釣や水村山廓酒旗の風

琴は語る菊はうなづく籬哉

ふとん着て寝たる姿や東山

た。その學朱子を奉ずれどもあまり之に拘泥しない。

但し反對の古學派は熱心に攻撃し非伊・非物・質疑等を著した。又國史國學にも通じ讀史訪議・萬葉集詁・古今通・勢語通・源語詁・瑣語著語・兵論・新題百首等の著がある。

らんせつ 服部嵐雪 二三一四—二三六七、承應三—寶永四、一〇、一三、五十四歳

淡路國三原郡小坂並村の農家に生れ、丁年江戸に上り始め新莊隱岐守に仕へ、後故ありて更に井上相模守に仕へ、争諫三度大に財政の非なるを説いて用ひられず、飄然風雲に思を托し、芭蕉の門に入つて俳諧を修め、又濟雲方丈に參禪し、英一蝶(當時多賀信香)といふに畫をも習つた。雪中庵嵐雪なる號も「雪埋千山什麼孤峯不自」から採つたものである。

彼は蕪門の十哲中でも其角と相對して左右の高弟であつたが句振も性格も互に相對照すべきものがあつた。

其角

嵐雪

- 一、才子
- 一、誠實の人

- 二、放縱
- 二、老實

- 三、句は奇抜にして強み
- 三、句は温雅にして練熟

あり

す

リ の 部

りいう 河野李由 二三二—二三六五、寛文元—寶永二、六、二二、四十五歳

近江國平田村光明遍照寺四世の律師、本姓河野(一説に越智)名は亮隅、字は買年、四梅廬と號した。別に月澤老人の號もある。夙に芭蕉を慕うてその門に入り、許六と俳交特に親密であつた。その著には韻塞・篇突・宇多法師などがある。

りうがくせい 留學生

學術研究の爲め海外に派遣せらるゝ人々をいひ今の海外研究員に當る。推古天皇の朝遣隋使小野妹子と共に南内請安・高向玄理・僧晏などが彼土に留學したのがその嚆矢である。

りうきよ 佐久間柳居 二三四七—二四〇八、貞享四—延享五、五、三〇、六十三歳

江戸幕府旗下の士、名は長利、通稱藤左衛門(或は云ふ三郎右衛門、又、半左衛門)守墨庵・二斛庵・鳴心亭・眠柳舎・松籟庵・落霞窓等の號がある。初め清徳の門に入り、後伊勢に行き麥林の門に入り麥阿と改名し

江戸に歸つて大に伊勢風を鼓吹した。同光忌・世の中百韻・高軒・雨の日敷・夏山伏・俳諧和歌連歌等の著がある。

**りうけい 矢野龍溪**

大分縣の人、家は代々佐伯の藩士、彼れ、名は文雄、政治・官職・新聞經營上の閱歴は已に一般史に明らかなことだが、文學の方では經國美談の譯をして明治初期の小説界に佳人之奇遇と共に博く讀まれたこと、浮城物語・新社會・不必要等の小説を書いたこと、演說文章組立法・文體文字新論等の文章論の著「出鱈目の記」など隨筆物の述作をした。

**りうそん 柳村**

びん「上田敏」を見よ。

**りらほ 野々口立圃** 二二五九―二三二九、慶

長四―寛文九、七十一歳

京都の人、名は親重、通稱雜屋市兵衛（家は雛人形を商つてゐた）徳川初期古風俳諧の名家で、始め松永貞徳の門に入つたが、同門の松江重頼と俳を激論して師翁の感情を害してから、去つて烏丸光廣の門に入り、その教を受けて一派を立て多くの弟子を養成し、三十餘種の述作をした。立圃句集（俳文一八）はなび草等

は殊に名高い。

口切の茶や邯鄲の粟の飯

ふる雪は柳の髪のみだれ哉

天も花に酔るか雲の亂れ足

**りうほく 成島柳北** 二四九七―二五四四、天

保八、二、甲子―明治一七、一一、三〇、四十八歳

名は温、字は叔厲、家柳橋の北にあり乃ち柳北と號す。十八歳父稼堂の後を嗣ぎ將軍家定・家茂二公の侍講に擬せられ、慶應元年累進して騎兵奉行となり、俸二千石を食みついで外國奉行として會計副總裁として鮮やかな腕をふるつたが、幕府江戸開城の後、退いて靜かに野に居り、朝廷の徵にも應ぜず私塾を淺草本願寺に開いて弟子を教へ、又歐米に渡航して親しく彼の文化を視察し歸來衆の推す所となつて朝野新聞社長となり才名文名一時に高くなつた。尙「柳北全集」を見よ。

**りうほくぜんしふ 柳北全集**

明治初期の文章家成島柳北の全集

和文「花のなさけ」外五篇

雜文「華陽新聲題言」外百三篇

紀行「航薇日記」外七篇

雜著「伊都滿庭草」外三種

甘い家庭小説や、始めから落想を豫想させるやうな觀念小説に比しては多大の進境を示して居る（名家小説文庫柳浪叢書）

**りうりきやう 柳里恭**

きん「柳澤淇園」を見よ。

**りがく 理學**

しゆがく「朱學」を見よ。

**りがく 陸學**

支那宋代の大儒陸象山（一七九九―一八五三）の唱へた學說で二程子から出た學の中朱子と相對照を爲すものである。陸子の學說は主觀的で、萬物皆我に備はるとの見解から、學問修爲の工夫は心内の工夫にありとし人心道心その歸一、人よりして言へば惟れ危く道よりして言へば惟れ微なりといひ、この道心人心二にして一なるものを本心とし、本心を蔽ふ物欲を私心といひ私心を去つて本心に從つてこの世に處するを道德の目的とする。

**りくかしふ 六家集**

るくかしふ「六家集」を見よ。

**りくわわかしふ 李花和歌集** 三卷

宗良親王の家集で四季・戀・雜と部立がしてある。享徳

漢文「海警録自序」外十六篇

詩鈔 古今體、狂體

歌鈔

年譜

を収めてある（菊判三三二頁文藝俱樂部第三卷第九編臨時增刊明治三十七年七月九日博文館）

**りうらう 廣津柳浪** 文久元、七、二五―

舊久留米藩士廣津弘信の次子、名は直人、その祖先の「朝顔日記」の作者「馬田昌調」の號をとつて「柳浪」といふ。醫師・實業家・會社員・屬官と轉々して二十年五月友人の勧めで東京繪入に「女子參政展中樓」を寄せて社主に悦ばれ、禮を厚うして更に續稿を切望せられたのが抑々で硯友社同人に加はり「殘菊」で後來の深刻な特風を示し二十九年「今戸心中」に至つて文名噴々「河内屋」を出すに至つて世間は紅露二大家と並べ稱した。加ふるに健想健筆で深夜臘るの一室に端座して筆硯を呵す（これが氏の癖）れば數十枚稿立どころになるといふ有様、今日までの作品は百七十篇以上にも達し、龜さん・黒蜥蜴・羽ゆけ鳥・骨ゆすみ・おもかげ橋等殊に名高い。その作風は所謂「深刻小説」の代表的なもので、時には深刻變じて深刻に墮するものもあるが、

元年(一一二二)多々良朝臣の奥書、享祿四年(一一九九)中原遠忠の奥書がある。此集の歌は叙情露骨、修辭粗硬の失もあるが高貴の御身を以て東奔西走王事に盡瘁せられ、風窓の浙瀝たる山月の悽愴なる一に慷慨淋漓たる御心に渾融して言々句々心血の聲熱情の叫び、至誠の神韻として感味の多いものばかりである。なほむれながしんわう「宗良親王」を見よ(又尾崎雅嘉の李花和歌集類題二巻といふのもある)

**りくこくし** (ろくこくし) **六國史**

日本書紀・續日本紀・日本後紀・續日本後紀・文德實錄・三代實錄をいふ。各書名の所を見よ。

**りけん** **中井履軒** 二三九二―二四七六、享保一七一文化一三、八十五歳

覺庵の二男、竹山の弟、字は處叔、通稱徳二、五井蘭洲について宋學を究め、兄の死後懷徳書院を守つて衆弟子を教へた。その著に七經逢原・昔々春秋・七經雕題・通語・傳疑小史・恤刑茅議・弊帚集などがある。

**りげん** **木下利玄** 明治一九、一、一、

岡山縣吉備郡足守町の舊藩主利永の嗣子、子爵、四十四年の東大國文科出身、貴族中の新派歌人で、その咏心の花・白樺・短歌雜誌などに掲げられ、歌集に銀・紅玉

などがある。

**りさうしゆぎ** **理想主義**

文藝上に於て作者が如實の世界を寫すを可とする寫實主義に對し、作者が當爲の世界(まさに斯くあるべき世界)を表現するを可とする主義をいふ。

**りさうは** **理想派**

文藝上「理想主義」を執れる一派をいふ。

**りぢやう** **瀧亭鯉丈?**

江戸の人、通稱八藏、始め下谷廣徳寺門前稻荷町で櫛屋を(一説に経筒師)ついで淺草傳法院裏門前に移り又駒形河岸通りに移る。新内節の三味線が上手でその戯作(人情本滑稽本)は趣向陳腐、文詞も格別優れては居ないが、花暦八笑人六卷は時好に投じて有名なもの。之につぐものは滑稽和合人六卷である。

**りつご** **律語**

音數や韻や、音の強弱について一定の詩律をふんで配置せられた語をいひ「散文」の對を爲す語である(我邦の長歌・短歌・旋頭歌・今様・俳句・新體詩などは之を「韻文」といつてもよろしいが寧ろ「律語」として散文に對せしめた方が一層適切なやうに思はれる)

**りつざん** **柴野栗山** 二三九四―二四六七、享

保一九―文化四、一二、一、七十四歳

讃岐高松の人、名は邦彦、彦輔と稱し栗山又は古愚軒と號した。江戸に上り昌平黌の教官に任じ大に學風を刷新した(異學を禁じて全く程朱の宋學に歸せしめた)栗山文集・資治概言その他多くの著がある。

**りつし** **律詩**

支那唐代に起つた漢詩の一形式で八句より成る詩體をいふ。その内五言八句なるを五言律詩、七言八句なるを七言律詩といふ。

**りつぽ** **野々口立圃**

りふほ「野々口立圃」を見よ。

**りつりやうきやくしき** **律令格式**

古代制度の總稱で、

- 一、律は 刑罰の制即ち刑法に
  - 二、令は 一般に公布する法令即ち普通の私法に
  - 三、格は イ、令式律の臨時の改訂増補  
ロ、執行の命令 即ち今日の補則や施行細則や手續法に
  - 四、式は 官吏の職務に關する事務章程即ち今日の官吏服務紀律のやうなものに相當する
- 弘仁格の序に「律ハ懲肅ヲ以テ宗トナシ、令ハ勸戒ヲ以

テ本トナシ格ハ則チ時ヲ量リテ制ヲ立テ式ハ則チ關ヲ補ヒ遺ヲ拾フ四者相須ツテ以テ範ヲ垂ルルニ足ル(原漢文)とある。この文の基づく所は唐制にあり、舊唐書刑法志に、

人之爲惡入于罪戾一斷律禁未然曰令尊卑貴賤之等級國家之制度也設於此而逆於彼曰格百官有司之所奉行者也設於此而使彼效之謂之式諸司常守之法也

とある。それに甚だよく似たいひ方だ。尙「三代格式」を見よ(大日本國語辭典四、一四四二、萩野由之・小中村義象・増田子信三氏日本古代法典、三浦周行氏法制史之研究)

**りつゑん** **中村栗園** 二四六六―二五四一、文

化三―明治一四、七十六歳

豊前中津の人、名は和、字は子藏、幼時母の激勵に發奮して學に志し、帆足愚亭について洛陽の學を受け上國に歴遊して篠崎小竹・齋藤拙堂・野田笛浦等と交り進境見るべきものあり、後小竹の推薦によつて水口侯に仕へた。時恰かも幕末騷擾、彼れ藩政を扶けて内訌を防ぎ、藩是を尊王に定め戊辰伏見の役には篋を岩倉公

に献じて王師の東征を促し、維新の後、藩主知事となり彼大参事に任ぜられて輔翼三年病を以て辭職、朝廷その功を多とし祿を賜うてその老を養はしめられた。孝經翼・日本知囊・寤眠録・栗園詩文鈔・栗園餘稿等の著がある。人となり磊落にして而かも忠孝の念あつく、大に酒を嗜み晩年半仙子と號して益々之を樂しんだ。

**りとう** 櫻井吏登 二二七五—二三六七、元和元—寶曆四、六、二五、九十三歳

江戸の人、初の名は人佐、後、班象・李洞・吏登と次々改名、服部嵐雪の末弟子で先輩周竹から點式を譲られて雪中庵二世となつた。著書に左記各種がある。

野遊・或問珍・ぬか袋・起朝・和竹聲・桃の親・七部搜（俳文七吏登全集）

**りやうから** 兩香

しあん「石橋思案」を見よ。

**りやうぎげ** 令義解 十卷

清原夏野が淳和天皇の勅を奉じて天長十年（一四九三）に撰進した制度の書で、小野篁・善道眞貞・菅原清公・藤原常嗣等も與つて居る（今大日本史第五十三冊及び國大一二、一—三二八に入る）

**りやうしう** 塚原蓼洲

しふしふん「塚原澁柿園」を見よ。

**りやうぜん** 良暹（釋良暹、良暹法師）？後朱雀・後冷泉の兩帝の頃、叡山の僧で祇園別當に補せられた。後拾遺歌人として有名である。

うらやまし春の宮人うちむれてのが物さやはなを見るらん

あふさかのせきの杉むらひくほどはおぶちに見ゆるもち月のこま

淋しさに宿をたち出で、ながむればいづこもおなじ秋の夕暮

**りやうた** 大島蓼太（雪中庵蓼太）二二三六

八一—二四四七、寶永五—天明七、九、七、八十歳

江戸幕府の御用縫物師藤屋平左衛門の子、本姓吉川、後大島と改めた。名は平八、諱は湯喬、後吏登に入門し師の名を襲いで雪中庵三世といふ。彼は世才に長じ、門人も多く、交際も廣く、句作も著書も多かつたが、や、卑俗の調を帯びてゐた。その著書蓼太句集・筑波紀行・俳諧付合小鏡・俳諧發句小鏡は今、俳文一七にある。

彼の句で人口に膾炙してゐるのは、  
馬借りてかはるゝに霞みけり

更る夜や炭もて炭をくたく音

むつとしてもごれば庭の柳かな

世の中は三日見ぬ間に櫻かな

五月雨や或夜ひそかに松の月

**りやうたい** 建部涼岱

あやたり「建部綾足」を見よ。

**りやうぢんひせう** 梁塵秘抄

後白河院の御撰だといひ、始め廿卷あつたものが今散逸して傳はらない。近年和田英松博士が殘闕を得られ、それに綾小路家藏書（これも殘闕）とを對校して佐々木信綱博士の出された増梁塵秘抄が今のところ一番正確なものだ（卷一、斷簡と卷二とだけ）卷頭卷尾諸家の考證、解題も有益な文字である。

**りやうと** 岩田涼兎？—二三七七、？—享保二

芭蕉の弟子で別に伊勢風なる一派をたてた人で、家は伊勢山田の祠官で、彼は別號を神風館とも云ひ、その門から乙由・關更・若此・千代女などの名俳を出した。

鞍壺に日は長閑なり我軒

宮島や廻廊に夜の明け易き

**りやうとく** 雞冠井令徳 二二六七一—二三三七、慶長一二—延寶二、三、三、六十八歳（一説に延

寶七、三、三、九十一歳

京都の人、通稱九郎右衛門、陀隣軒・梨柿園の號がある。貞徳の老足として俳諧を以て聞え、その著に昆山集・土塵集・四十四年・親炙・擧直集などがある。

**りようらんしんしふ** 凌雲新集

「凌雲集」を見よ。

**りようらんしんしふ** 凌雲集（凌雲新集）一卷

小野岑守が弘仁五年（一四七四）嵯峨帝の勅を奉じて撰んだもの。本邦勅撰詩集の始めて、序文によるに撰者は先匠賀陽豊年に指導を乞ひ、菅原清公勇山文繼の補助を受けたもので、桓武天皇延暦元年（一四四二）嵯峨天皇の弘仁五年（一四七四）まで三十三年間の詩人二十三人の作九十二篇を収め、排列は階級によつて次第して太上天皇（平城天皇）今上、皇太弟、大伴親王即ち後の淳和天皇から始まつて無位の巨勢志貴人に終る（群一二三、六、四七一—四八九・日本古典全集第一輯）

**りよくら** 齋藤綠雨（江東綠・正直太夫）

慶應三、六一—明治三七、四、一三、三十八歳

伊勢藤堂藩の典醫齋藤謙堂の長子、名は賢、十七年假名垣魯文の今日新聞記者となつたのが文壇の出發で爾



後國會・改進・朝日・讀賣・萬朝・二六と轉々して物の五年と同一社に勤続しなかつた。小説には油地獄・あられ酒・あま蛙などがあつて氏自身大に推稱もし世間でも或程度まで稱讚したが、その特徴は寧ろ評論の側にあつて、天才機智縦横自在にして皮肉・痛罵・警句・漫罵・鋒鋒當るべからざるものがあつた。晩年肺を病んで孤犢寂莫の裡に自から死亡廣告まで書いておいて瞑目した。尙左に彼れの知人上田萬年博士の文の一部を借りて補つておく、

「彼れの居を轉じたるは殆ど其數十二箇所にして恰も我文部大臣が十年間に十二三度交迭せしと同一の觀なくんばあらず……」

三十八年の生涯を通じて貧の爲に、病の爲に、文の爲に戦ひしなり。彼れの一生は不幸の地位にてありしなり。

彼れの記憶力は強かりき。彼れのひかえ帳おぼえ帳を見よ。多くの人の失敗談を載す。現に余の失敗は十箇條も之にあり……彼れば書籍を座右に置かざりき……彼れば先天の文士なりしが如し……彼れば秩序正しきを欲する人なりき……彼れば世の凝り性なるものなりき。例へば彼れの晩

年は昔き以前は下駄は伊勢田のものならざるべからず。斬髪は薬間堀の某床ならざるべからず。其他衣類といひ、何さいひ、それぞれ彼れの嗜好は一定せしなり……

最後に、彼れの嫌忌せしものを數へむ。曰く犬・渡船・帽子、文壇にては大町君、而して最も嫌ひしは借金取なり……

必要するに明治時人傳中の一人とも謂ふべく、文以外人として研究しても興味多いものがある(縁雨全集)

**りわう 李王**

支那明代の學者にして詩人たる李于鱗及び王世貞をいふ。

**りんえうるみぢんしふ 林葉累塵集**

ながる「下河邊長流」を見よ。

**りんかしふ 林下集 二卷**

藤原實定の歌集。題名は、

一、林下といふ語、毛詩周南の篇に見えそれをとつたものか

二、白氏文集「林下幽閑氣味深」の意からきたものか

三、大將を「羽林」といふから大將在任時代の集の意か(「羽のはやし云々」といふ歌が最後にある)

ル の 部

**るあから 黒岩涙香 文久二、九、二八一―大正九、一〇、六、五十九歳**

高知縣の人、名は周六、大阪の英語學校・成立學會、及び慶應義塾に學び二三の新聞社を轉々して後獨力で萬朝報を起し、社長として健闘をつゞけ以て今日の地盤を築いた。思想問題・時事問題についての一世の先覺として徳富蘇峯などと等しく重んぜられたがその論旨は稍激越の調を帯びて居つた。ユーゴーの噫無情・ジューマの巖窟王・鐵假面・有罪無罪・人耶鬼耶等幾十卷の翻譯譯案は所謂「涙香物」と稱し探偵小説全盛の一時期を劃したものである。又天人論・精力主義は氏の人生觀・社會觀・哲學觀の披瀝で内容は健全、文章は生彩に富んでゐる(涙香全集十五冊)

**るあからじ 類柑子 三卷**

實井其角の俳句俳文集。彼の歿後十三回忌寶永四年(二二六七)に初版を出し、享保四年(二二七九)に再版を出した(俳文九蕉門十哲集)

**るあだいさうやしふ 類題草野集**

四、古今集序の「林にしげきこのは」といふ語から名づけられたか

など色々の推測がある(弘化二年、二五〇五、五月江戸入谷の田居蓬生のあるじ仲田歌史(藤右衛門)が和文の序をそへて出版した(日本歌學全書八))

**りんぐわい 前田林外 元治元、三―**

兵庫縣の人、名は儀作、大阪泰西學館、東京專門學校文學科、東京外國語學校露語科等に學び詩を能くし夏花少女・花妻等の集があり、外に若干の露詩翻譯もある。

**りんぢよわかしふ 隣女和歌集 四卷**

鎌倉時代飛鳥井雅有の家集「西施が隣の女の彼を羨めるよそほひもこのかちよりはますくみにくくなりけるになすらへて此集の名とせり」と云つて居る(群二四三、九、三九一―四六九)

**りんえ 輪廻**

連俳に於て立句(第一の句)と打越の句(一句隔てた句即ち第三の句)とが同じ様になることを云ひ、連句上の制條となつてゐる(連俳は變化を旨とするものだけに、斯くすれば句の付意同じやうのことを繰り返してアルくまはることになるから避けたものであらう)

「草野和歌集」を見よ。

るみだいわかしふ 類題和歌集（敕撰類題和歌集） 三十一卷

後水尾天皇延寶中（二三三三—二三四一）諸臣に勅して古来の勅撰・私撰・家集・歌合の歌約一萬二千首（外に題のみあつて歌詞の缺けたもの一千七百餘首）を類集せられたもの。部立は、

卷 一—五 春

六—八 夏

九—一三 秋

一四—一六 冬

一七—二二 戀

二三—三〇 雜

三一 公事部

版行は元祿中のこと。

るみだいわかしふ 類題和歌集

れいやしふ「怜野集」を見よ。

レの部

れいらん 田岡嶺雲 明治三—大正元、九、七、

四十三歳

土佐の人、通稱は佐代治、上京して水産傳習所を出、文科大學を二年でやめて漢文の選科に入り、卒業後雑誌「青年文」を發行した後、新聞記者・中學教師・支那江蘇學堂の教授等になつたが何れも長くつかず始終轉々して貧窮した。晩年春癩病に罹つて日光に静養したが四肢の自由を失ふに至るまで筆を離さず絶えず述作をつづけた。その文は思想と相まつて奇峭熱烈、明治の評論家の一異彩とせられた「うるこ雲」、「ちぎれ雲」はその名文。嶺雲搖曳・霹靂鞭・俠文章・下獄記・壺中觀・數奇傳等何れも名著とせられて居る（笹川臨風・白河鯉洋共編嶺雲文集）

れいこ 荒木田麗子 二三九二—二四六六、享保

一七、二—文化三、正、七十五歳

伊勢山田の武遇が養女で、後に山田の御師慶徳三郎太夫に嫁ぐ、始めの名は「隆」後に浪華に住んで「麗」と改め、號は紫山とも清渚とも云ふ。幼少の頃から學問が好きで兄が論孟を讀む傍に在つてよく暗誦し、頗る紫式部の生立ちに似て居つたが父は「女子に學問は無用だ」とて讀書を嚴禁した。それを十三歳の時伯父が引きとつて、自分も學問が好きなるから漢詩・漢文・

文選の類を習はせた處メキ／＼と文才が伸びた。十七歳の時兄正紀の縁故で浪華の西山昌林の門に入り、歌書に心を傾け廿一歳の時京の花の下里村昌迪に入門して俳諧にも熱心した。嫁いだ先の夫も靜居讀書の趣味がらつてその勤めによつて色々の起稿をし生前已に諸名士の間に重んぜられたが、唯その先輩の多くが漢學者（龍公・美野公・臺江・北海等）と俳諧師とであつた爲めにその文章の法格外れたものがあるのは遺憾とせられて居る。その著は、

月のゆくへ三卷 高倉安徳二代の國史（史二、校日月のゆくへ三卷 高倉安徳二代の國史（史二、校日

一一）

池の藻屑七卷 増鏡の後を受けて慶長までの國史

（史三）

以上は校註日本文學大系第十三にも收められ、ふじのいはや二卷・桂中將三卷・安達原三卷・野中清水二卷五葉五卷・奈良志波五卷・常陸帶五卷・しの竹八卷・桐の葉六卷・落葉七卷・奈良の葉十六卷これ等の多くは與謝野晶子女史が校訂に係る「麗女小説集」に入つて居る（國學者傳記集成六七四—六八二）

れいすゐ 遅塚麗水 明治元、一二、一九—

駿河の人、名は金太郎、學歴はないが早くより文筆に

趣味を持ち、二十二年報知新聞に雪月花物語を寄せ小説家を以て立たうとし、事實百篇近くも創作して居るが世評では氏の特徴は小説よりは寧ろ紀行にあつて、漢文直譯體の簡潔にして優麗を兼ねたる紀行文作家として他に並ぶ者がない。

日本名勝記・松島遊記・ふところ硯・露わけ衣・山水往來・山水供養・日本道中記・山東通路等の著がある。

れいせいけ 冷泉家

和歌師範家中冷泉爲相の系統をいふ（冷泉派）及び「師範家」を見よ）

れいせい ためすけ 冷泉爲相

ためすけ「藤原爲相」を見よ。

れいせい 冷泉派

定家の子爲家の第三子冷泉爲相の一派をいふ。爲相は長兄爲氏と例の所領争ひで起訴した仲なり、仲兄爲教（京極派の始祖）は母阿佛尼と親しかつたので感情問題がもとでその歌風も京極派に近いものであつた。

れいやしふ 怜野集（類題和歌集） 十二册

清原雄風の撰、中古以來諸家の咏數千首を四季・戀・雜に類集したもの。文化三年（二四六六）橘千蔭の序、村田春海の跋がある（明治廿七年青木嵩山堂發行。尙最近

まで大阪櫻園書院で發行して居つた)

**れうい 浅井了意** 二二七二—二三五一、慶長

一七一—元祿四、正、元? 八十歳

別號を松雲又は瓢水子と云ひ、徳川期の初め啓蒙時代に長生して、假名草子その他多くの雜著に筆を執り、その著述の多いことは當時の多作家北村季吟よりも多かつた。但し中には彼以外の偽作もあるといふ。傳記が不明で、京都黒谷の浄土宗の坊さんだと云ひ、本性寺昭儀坊の一向宗の僧だつたと云ひ、

あしびきの山鳥の尾のながくしき牢人にて云々

(可笑記評判奥書)

とあるから、元はさる武家で後に浪人になつたとも云ひ、柳亭種彦の如きは同時代了意に僧俗の二人があつて僧は狗張子御伽婢子など稍硬いものを書き、俗の了意は江戸名所記・東海道名所記など軽い軟いものを書いたと云ひ、水谷不倒氏はこれを同一人の出家前と出家後とに別けて観るべきだとの意を述べ(列傳體小説史三七—四二)藤岡博士は妄に臆測は出来ないが、少くとも上述の諸書は同一人の筆だと思ふと様に論ぜられてゐる(近世小説史七四—八五)

もそれが瓢水子・瓢水子松雲・松雲子了意などあり、晩年には洛之本性寺昭儀坊桑門釋了意と稱して了意、松雲之印といふ二顆を捺しなど區々である。

その著書をあげると、

第一 佛書 大經鼓吹六册外十四種二百三十七册

第二 軍書 太平記首書二十五册外三種四十册

第三 古文註釋 源氏雲隱抄九册・伊勢物語抄海十册・百人一首頭書二册

第四 教訓草子

孝行物語、萬治三年(六册)

勘忍記(同年頃)八册

本朝女鑑 十二册

大和二十四孝 十二册

新語園 十册

第五 名所記及び戲作

「可笑記評判」(萬治三年)十册

東海道名所記(年代不詳)六册

江戸名所記(寛文二年)七册

京雀(寛文五年)六册

御婢子(寛文六年)十三册(國刊二期)

會呂利狂歌話(?) 五册

百物語(萬治二年)二册

武藏鏡 萬治四年)二册

かなめ石(?) 三册

安部晴明記(?) 六册

浮世物語(延寶九年)六册(國刊四期五)

あかうそ(元祿十六年)一册

これ等の中有名なものは東海道名所記、お伽婢子である(又彼の作「狗張子」七巻は怪談小説で國刊四期本に入る)

**れうしゆん 今川了俊 (今川貞世)** 一九

八五—二〇八〇、正中二—應永二八、九十六歳

名は貞世、上總介範國の次子で足利二、三代の兩將軍に仕へ左京亮正四位下伊豫守に任じ、攻城野戦前後數回

正平十四年 吉野の合戦

同十六年 楠木正儀と

建徳二年 鎮西探題として菊池武光と

天授元年 小貳冬資と

何れも彼自ら一方の主將として奮闘した。後、將軍義満に疑はれて一時藤澤に蟄居し、間もなく許されて上洛し、文机に親しんで讀書と著書とに幽栖した。落書露顯(群三九八、一〇、八二三—八四一)・了俊辨

要抄(同上八一—八二三)・今川了俊和歌所不審條々(二言抄)(同八〇三—八一二)言塵集師説自見集など彼の本領は寧ろ歌學に在つたと思はれる。殊に二言抄に於て古人のたゞことを歌語にうたひ込んだことな一々例證して用語自由論の先驅をほめかし、始終冷泉派をかばつて反二條派の氣勢を高めた二點は我が和歌史上注目すべきである。

紀行の「道ゆきぶり」(群三三三、一一、一〇八一—一〇九一)も亦名高い。作歌の方面も僧正徹が師事したさいふのだからその堪能さ想ふべしである。

はし鷹のとかへる山の木の下に宿りとるまで狩くらしつゝ、

**れうしゆんべんえうせう 了俊辨要抄**

れうしゆん「今川了俊」を見よ。

**れきしせうせつ 歴史小説**

歴史上の人物事象を材料として之を藝術化した小説をいふ。我邦の四鏡や平家物語や太平記はこの點に於てこれ等を一種の歴史小説と謂つてもよいが、普通は明治廿年だいから興つた小説をいひ、高山樗牛の瀧口入道・幸田露伴のひげ男・塚越停春の衣笠城・塚原濫柿園の諸作品などが名高い(中には明治初年松村金輔の實

録物「復古夢物語」や「近世櫻田紀聞」を明治に於ける最初の歴史小説とした書物もあるが、これ等は寧ろ「小説の世話物とも謂ふべきもので「歴史小説」を銘打つには餘りに遠いものである」

**れんが** 連歌

早く日本武尊が御東征の歸途、甲斐の日焼の翁と問答せられた。

にひばりつくばを過ぎて幾夜か寝つる 尊

かゞなへて夜には九夜日には十日を 翁

さいふが始まりだといふ。これは一問一答の問答體であるが、萬葉集には、

佐保川の水をせき入れて植ふし田を **家持**

刈るわさ稻はひとりなるべし **尼**

と様に一首合作體のものが有り。連歌といふ目が始めて立てられた。

金葉集にも、

桃ぞのの桃の花こそ咲きにけり

頼經法師

梅津の梅は散りやしぬらむ

公資朝臣

など同様の體が見られた。處が鎌倉初期後鳥羽院の頃から支那聯句の風が輸入せられて五十韻百韻と多くの句を聯れるやうになり、從來の對して「鎖連歌」

又は「長連歌」と云つた。これ即ち狹義に所謂連歌であつて後世一口に連歌といへばこの長歌をいふ。聯句の影響と歌人の勅撰もれの不平のやり場と射倖心の増大と（連歌はよく物を賭けて催された）邦人固有のノンヤ性もこれ等數種が混融して連歌は益々盛んになつた。

後鳥羽院の頃には典雅な有心派と滑稽な無心派とあつて漸く分派を始め、無心派は後世俳諧の勃興を豫現して次第に發展したが鎌倉初期に在つては有心派の方が有力であつた。室町期に入つては二條良基が攝關顯要の地位にあつて連歌を好み、救済に師事して熱心に作法を講じたので一代の好尚之に向ひその著筑波集連歌新式（應安新式）は斯道の典型とせられた。周阿・梵汀・兼載・知蘊・宗祇・宗長・紹巴・宵柏・宗牧と續々名人が輩出し、兼載は鎌倉時代の作法を考證して連歌本式を著し、一條兼良が出て良基の著を敷衍し連歌新式追加を作り、ついで宵柏が「新式今案」を著し（後世この三書を合せて連歌新式今案といふ。この書によつて室町期の新式目を明らかにし、兼載の連歌本式によつて鎌倉期の式目を明らかにすれば式目（連歌作法）の研究は一通り全き譯だが純鎌倉の式目は今傳はつてゐな

い。兼載のは大分臆測の加はつたものといふ）宗鑑・守武が出て俳諧を唱ふるやうになつてからは、連歌はその地歩をこの新興文學に譲り、爾來頗る衰微した。

連歌では始めの五七五を發句次の七七を脇句次の五七五を第三句以下第四句第五句と云つて最後の七七を舉句又は結句といふこゝ後の俳諧と同じである。

例

あは雪は春のしるしに消えそめて 善阿

うすき煙は草の下崩

故郷となるまで人の猶すみて 頼阿

萩吹く風に衣うつこゝ

風の音までさむき夕暮

秋はたゞ人をまつにもうきものを 救濟

わかれ思へば涙なりけり

尙連歌式目で規定せらるゝ重なる事は、

一、賦物の二、輪廻・三、前後句同韻の場合・四、一定の隔句を要する重用語・五、一座中二回又は三回以上用ひてはならぬ語などである。各項を見よ。

猪苗代兼載連歌本式（群三〇六、一〇、一一二二―

一一三―連歌新式追加並今案等・群三〇六、一〇、一

一一三―一二二・池田常太郎日本俳諧史一―三二・神

谷保朗帝國歌學史四一五―四六八・古類文學部一、九四四―一一七二）

**れんがしんしきつゐか** 連歌新式追加 一卷

二條良基が後龜山天皇の文中元年（北朝應安五年―二〇三二）に救濟・周阿等と相諮り、連歌古來の式を刪潤して作たもの（群三〇六、一〇、一一三―一二二）

**れんがしんしきつゐかならびにこんあん**

連歌新式追加並今案

「連歌式目」を見よ。

**れんがぬすびと** 連歌盗人

「盗人連歌」を見よ。

**れんがひきやうせう** 連歌比況抄

猪苗代兼載が連歌の性質作法等について論述したものの蓮の莖・五尺の菖蒲・雲雀の巢等四十餘の譬喩をあげて説いて居る。

**れんがほんしき** 連歌本式

猪苗代兼載の著、本式連歌についての規定を記す（群三〇六、一〇、一一二―

れんげつに 大田垣蓮月尼 二四五―二五

三五、一寛政三―明治八、八十五歳

因幡の人 大田垣光古の女、幼名誠、家は農、母にも夫

(富田泰州云つて桂園派の歌人)にも、子にさへ早く  
訣れて、洛東岡崎に庵を結び(三十餘歳)陶器を焼いて  
自味の歌を染め出し、之をひさいで口を糊し、その暇  
暇には好きな歌に耽つて永い餘生を清く楽しく過し  
た。家集を「海人の刈藻」といふ(續歌一二)

川沿の柳のいとにかゝりけり残る氷のかたわれ  
の月

有明の霞にほふあさもよし二月ごろの夕月も  
よし

宿かさぬ人のつらさを情にておぼろ月夜の花の  
したぶし

里の子が機織る音もとだえてして晝寝のころのあ  
つき旅かな

小山田の霧の中道踏み分けて人來と見しは案山  
子なりけり

岡崎の月見に來ませ都人がどの畑芋煮てまつら  
なん

山里は松の聲のみ聞馴れて風吹かぬ日は淋しか  
りけり

あけたてばはにもてすさび暮れゆけば佛をろが  
みおもふことなし

ちりばかり心にかゝる雲もなしいつの夕か限な  
らむ(京都山科御陵内 蓮月尼全集頒布會本)

れんしやう 蓮性

ともいへ「藤原知家」を見よ。

れんばい 連俳

連歌と俳諧とを併せいふ名稱。例、佐々政一氏連俳小  
史。

口の部

ろあん 内田魯庵 (不知庵) 明治元、九一

東京の人、名は貢、年少志望定まらず、政治家・軍人・  
醫師・建築家・實業家と色々と思ひ惑うたが天稟の才は  
遂に氏を文壇の人とした。永年丸善書店の顧問をつと  
め翻譯・創作・評論・隨筆の大家として現時斯界の耆宿  
と推されて居る。二十五年ドストイェフスキイの「罪  
と罰」を四十一年トルストイの「復活」を譯し、紅葉  
全盛の頃その皮想なる觀念描寫を飽き足らずとして  
「暮の二十八日」を作つて社會小説の先驅となり引つ

づき落紅・片うづら・霜くづれ・うきまくら等を發表し  
た。又、猿の舌・バクダン・典籍の廢墟等は貴重な文獻、  
感想を含んだ隨筆である(世評を通じて氏の人となり  
を想像するに「文壇のわけ知り」とても謂つたやうな人  
と想はれる)

ろあん 小澤蘆庵 二三八三―二四六一、享保

八一享和元、七十九歳

徳川期新派短歌の先蹤とも謂ふべき人である。

生れば尾張だが難波や京に移り住み、冷泉爲村に入門  
して和歌を學んだ。爲村は無論堂上風の歌人ではあつ  
たが、比較的解放的態度を採つた。後彼は獨立して「た  
だこと歌」を主張した。即ち日常の俗語を歌語にとり

容れ平明自然の味を可としたもので、彼の味はその主  
張程ではないまでも、感情表現の素朴自然(併し中には  
無味平板の嫌のあるものも交つてゐる)なものがある。  
家集を六帖詠草及び同拾遺といひ今蘆庵全集として續  
歌六に容れてある。歌學の書には「ふりわけ髪」と「古  
の中道」とがあつて後者には塵ひち・芦かび・惑問が入  
つてゐる。

彼は澄月・慈延・蒿蹊と共に平安和歌の四天王と呼ば  
れ、縣門の宣長・千蔭とも親交があり、又氣概のある人

とて蒲生君平などとも親交があつた。その門には田山  
敬儀・前場黙軒・小川布淑・桑門昇道など多くの優れた  
歌人が出た。

大井川月と花とおぼる夜にひとりかすまぬ浪  
の音かな

波となり小舟となりて夕暮の雲のすがたぞはて  
は消ゆく

解くるかと思見る程もなく水りけりまだ春淺き池  
の川波

ろうくわほふ 瓏化法

露骨をさけて婉曲に、直寫を和けて側寫に、荒い音調  
を變へて優美に表現する詞體修辭の一法「彼は死んだ」  
とよりは「あの方はとうとうおよろしくなかつたさう  
です」「肺病にかかつた」とよりは「胸を病んだ」「頭が  
痛い」とよりは「おつむが痛い」「足を洗へ」とよりは  
「おみあしをお洗ひなさい」と様に今日の口語にも多い  
が、殊に多いのは小説戯曲などで源氏物語中「契る」  
「逢ふ」「離く」などが男女情事の婉曲語に使はれてゐ  
る箇處が澤山ある。

ろえう 山本露葉

東京根岸の生まれ、名は三郎、東京専門學校文學科卒

業、三十三年から約十ヶ年間小説の作を発表した。革命来・村の詩人・梵音・S S 俱樂部等の作がある。

**ろから 瀬川路考?**

徳川時代文政頃の脚本作家、その作には色三味線仇合譚・結縁日浮世雛形等がある。

**ろくかしふ 六家集**

王朝の末から鎌倉初期にかけて有名な歌人の歌集六種をいふ。

- 一、藤原俊成 長秋詠藻
- 二、藤原良經 秋篠月清集
- 三、慈鎮 拾玉集
- 四、西行 山家集
- 五、藤原定家 拾遺愚草・拾遺愚草員外
- 六、藤原家隆 壬二集

**ろくかせん 六歌仙**

王朝初期六人のすぐれた歌人、在原業平・僧正遍昭・小野小町・文屋康秀・大伴黒主・喜撰法師をいふ(歌の上手さも右の順序だと思ふ)古今集序の六歌仙評は有名なものだが尙各人名の項を見よ。

**ろくこくし 六國史**

りくこくし「六國史」を見よ。

**ろくじゆゑん 六樹園**

雅望「石川雅望」を見よ。

**ろくてうけ 六條家**

平安朝の歌人藤原顯季「六條」と號したので、その一流を六條家といひ鎌倉時代まで歌壇の一方に雄視した趣があつたが、その後はあまり續かなかつた。この派なる主なる歌人は顯季とその子顯輔・顯輔の二子清輔・顯昭・藤原有家・藤原行家等である。

**ろくてふえいさう 六帖詠藻(詠草)**

七卷 小澤蘆庵の和歌集である(續歌六、小澤蘆庵翁全集)(尙「蘆庵」を見よ)

**ろげつ 石井露月**

日本派俳人として有名な人。

**ろげんぼう 仙石蘆元坊**

二三五二―三四〇七 元祿五―延享四、五、一〇、五十六歳

美濃の人、茶話仙・黄鸝園・里紅等の號がある。各務支考の門に入り獅子庵二世を稱して一代の宗師となつた。常に烏藤を鳴らして諸國を吟行した。加賀の松任村に行つた時千代女が教を乞うたといふ逸話もある。その著には其日歌仙・文星觀・藤の首途・花供養・渭江話・袖土産などがある。

**ろすゐ 青木鷺水**

二三一八一―二三九三、萬治元―享保一八、七十六歳

白梅園・三省軒・歌仙堂などの號がある。京都生れて野野口立圃に師事して俳諧をよくし、後天稟の文才を以て浮世草子を書いた殊に怪談物を専門にしたらしい。即ち、

寶永三年に お伽百物語

同 四年に 近代因果物語

同 五年に 本朝新勘忍記

などを書いたが尙この外に新玉櫛筒・丹前艶男等の作があり、俳諧に關しては俳諧新式の著もある。

**ろせき 水落露石**

四十八歳

慶應三―大正七、四、一〇、

大阪の人、名は庄兵衛、日本派俳句の關西に於ける重鎮で子規との俳交厚く、資財の豊かなるに任せて多くの古俳書を集め酒竹や松宇についての藏書家であつた。蕪村遺稿を始め多くの翻刻出版をし又多くの句作をも遺した(聽蛙亭句集・聽蛙亭雜筆)

**ろだう 那波魯堂**

二三八七―二四四九、享保一―寛政元、九、一一、六十三歳

播磨姫路の人、名は師曾、字は考卿、通稱主膳、魯堂

又は鐵硯道人と號し、京都に出て岡白駒について古學を修め、聖護院教授となり次で侍讀となり後程朱の説を悦び晩年阿波侯の儒官に聘せられ、大に理學を奨励す。人呼んで四國の正學といつた。左傳標例・道統問答・東遊編・魯堂文集等の著がある。

**ろてん 内藤露沾**

二三一五一―二三九三、明暦元―享保一八、九、一四、七十九歳

名は義英、磐城平の藩主風虎子の嗣子となり下野守に叙せられたが、俳諧を好んで早く隱居し遊園堂・傍池亭などと號して盛んに作句した。その句始めは談林風に深入りし元祿以後は蕉風を加味して獨自の一風を立てた。

提灯消せ夕日の名殘路の花

ぬり桶や遠山見する夜の雪

貞享四年芭蕉への餞別に

時は秋吉野をこめし旅のつと

その門に水間活徳・菊岡清涼等の名俳を出した。

**ろぼん 幸田露伴**

慶應三、七、二六―

東京の人、名は成行、獨學の人、而かも博覽強記、漢籍・國學・俳書・歴史・稗史・彫刻・俗文學一として通ぜざるなく、殊に佛典の造詣に深い。二十一年「天魔」の一

篇以來筆を小説に染め露園々・一口劍・風流佛より五重の塔に至つて頓に名聲を高め、紅葉と相並んで兩大家と稱せられた。その想は雄渾にして男性的・理性的・藝術至上主義的その文致は西鶴より出でて更に一層の洗煉味あり、二日物語・きくの濱松・ひげ男・天うつ浪に至つて益々圓熟を示したが、それより作を廢して向島の蝸牛庵に幽栖し、碁將棋のあそびや釣りの娛しみに適樂して居る。氏は又隨筆にもたけて長言・調語・潮待草等非常に愛讀者を持て居る。その他「頼朝」は歴史小説として「努力論」はその體驗から得た教訓として「幽情記」は支那古典の鑑識を表したものとて、日本史傳文選は多くのいさこから拾つた白珠真珠として「冬の日抄」は俳文學の教養の深いしるしとして何れも貴い述作である(露伴叢書)

**ろふう 三木露風(羅風)** 明治二二、六、二三—兵庫縣の人、名は操、閑谷巖・早大・慶大等に學んだが、その文名は明治末より大正昭和の現代にかけての象徴詩人として世に知られて居る。雑誌「未來」の主幹「中央文學」の長詩の選をしたこともあり、廢園(山田耕作氏の作曲あり)・寂しき曙・白き手の獵人・幻の田園(以上三種は近頃象徴詩集と題して合刊)信仰の曙・

青き樹かげ等の詩集や眞珠島(繪入童話)・生と戀(抒情小詩)・美學草案等の著がある。

**ろふう 秋元蘆風**  
獨逸文學に精通し、獨逸語雜誌に筆を執る「野葡萄」は獨逸詩集の譯で、小倉百人一首の獨譯もある。

**ろぶん 假名垣魯文** 二四八八—二五五三、文政一二、正、六一明治三七、一一、八、六十六歳  
戯曲界に於ける河竹默阿彌に相當する。小説界に於ける舊作家の殿將としての名家といひたい人で、もとは江戸魚屋の息子、性來の機智喚發に加ふるに大の讀書好きとて、洽く百家の戯作を耽讀し遂に己れも戯作家として世にたつに至つた。その代表作は西洋膝栗毛で假名讀八犬傳・高橋お傳・胡瓜圖解なども名高い。又自ら新聞雜誌を經營し、假名讀新聞・いろは新聞・魯文珍報・猫洒落誌など、何れもその時々々に讀者の注意を惹いた(野崎左文氏、我が見たる明治の文壇)

**ろんどんたふ 倫敦塔**  
夏目漱石、廿八年一月一日作の小説。氏が想の富瞻を示せるロマンチックの作品で、著者自身塔を見ての實景と想像とを綱ひ交ぜ、最後に下宿屋の主人の擲楯一番を以て終つてゐる。之を讀む時余はそゞろに徒然草の

「柑子の園」や古語の「それはわたしの尿で候」を思ひ出す。蓋し此等は其始め眞面目に高揚し後頓降法によつて筆路を急轉せしむる趣が相似てゐるからであらう。  
御殿場の兎が日本橋へ抛り出された様な心持で一枚の地圖を便りに、

來るに來所なく去るに去所を知らず……前はと問はれると困る。後はと尋ねられても返答し得ぬ。只前を忘れ後を失したる中間が會釋もなく明るい。恰も闇を裂く稻妻の眉に落つると見えて消えたる心地がする。倫敦塔は宿世の夢の焦點の様だ(二)

偕てテムズ河を隔て、塔を望むと、  
空は灰汁桶を掻き交ぜた様な色をして低く塔の上に垂れ懸つて居る……其中に冷然として二十世紀を輕蔑する様に立つて居るのが倫敦塔である……九段の遊就館を石で造つて二三十竝べてさうして其を蟲眼鏡で覗いたら或は此塔に似たものが出來上りはしまいかと考へた……セビヤ色の水分を以て飽和したる空氣の中にぼんやり立つて眺めて居る(三一—四)  
それから塔門に駆けつけ、  
見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁石は、現世に浮

游する此小鐵屑を吸收し了つた……

憂の國に行かんとするものは此門を潜れ。

永劫の苛責に遭はんとするものは此門をくゞれ。

迷惑の人と伍せんとするものは此門をくゞれ。

正義は高き主を動かさし、神威は、最上智は、最初愛はわれを作る。

我前に物なし、只無窮あり、我は無窮に忍ぶものなり。

此門を過ぎんとするものは一切の望を捨てよ。

といふ句がどこぞに刻んではないかと思つた(四—五)

それから中塔鐘塔(此にも美句がある)逆賊門と云つて四人の入口、大僧正クランマー・ワイアット・ローリなどの面影が髣髴とする。次に血塔(薔薇戦争の時目に餘る多くの人を幽閉したと云ふ)そこに番人が居る。氏の皮肉な筆が一寸づつて、

其側に冑形の帽子を着けた兵隊が銃を突いて立つて居る。頗る眞面目な顔をして居るが、早く當番を済まして、例の酒舗で一件にからかつて遊びたいと云ふ人相である(七)

更に幽渺の想を馳せて、エドワード四世の二王子が幽

閉された當時を思慕する、

兄は優しく清らかな聲で膝の上なる書物を讀む  
我眼の前にわが死ぬべき折の様を想ひ見る人こそ幸  
あれ。日夜夜毎に死なんと願へ。やがては神の前に  
行くなる吾の何を恐る、……

朝ならば夜の前に死ぬと思へ。夜ならば翌日ありと  
頼むな。覺悟をこそ尊べ。見苦しき死に様ぞ恥の極  
みなる……

と讀むと弟の王子がアーメンと云ふ。聽て母后のエリ  
ザベスが王子達に會はうとて態々來られる。牢守が「規  
則だから」さて面會を斷る。母后は頸の金鎖を彼に與  
へて是非逢はせてくれよと頼まれる。漆にはかいつぶ  
りがひよいと浮いて又びよこんと沈む。金の鎖は敷石  
の上に落ちて鏘然と鳴る。

「如何にしても逢ふ事は叶はずや」と女が尋れる。

「御氣の毒なれど」と牢守が云ひ放つ。

「黒き塔の影、堅き塔の壁、寒き塔の人」と云ひなが  
ら女はさめくと泣く(一〇)

と空想の舞臺は更に轉じて二王子を刺した黒裝束の獄  
吏の對話となり、其が消えて白塔の觀覽となる。塔中  
最古く高く堅二十間横十八間壁の厚さ一丈五尺、こゝで

塔で、實に倫敦塔の歴史を代表するものである。其一  
階室には百代遺恨の結晶とも謂ふべき九十一種の題辭  
が先づ觀る人の心臍を寒からしめる。

凡ての反語のうち自ら知らずして後世に残す反語程  
猛烈なるはまたと有るまい……余は死ぬ時に辭世も  
作るまい。死んだ後は墓碑も建て、もらふまい。肉は  
焼き骨は粉にして西風の強く吹く日大空に向つて撒  
き散らしてもらはう杯と入らざる取越苦勞をする。

(一六)

色々の國語で色々の語が刻まれてある。

運命は空しく我をして心なき風に誅へしむ。時も摧  
げよ。わが星は悲しかれ、われにつれなけれ。

凡ての人を尊べ、衆生をいつくしめ。神を恐れよ。

王を敬へ。

など思ふに、

彼等が題せる一字一畫は號泣・涕淚其他凡て自然の  
許す限りの排闥的手段を盡したる後、猶飽くことを  
知らざる本能の要求に餘儀なくせられたる結果であ  
らう(一七)……又想像して見る……壁の上に殘  
る横縦の疵は生を欲する執着の魂魄である(一八)  
二人の首斬りの歌と對話とが窖の中に唸るやうに聞え

リチャード一世がボーリングブルック侯爵に位を讓る  
ことを餘儀なくせられた悲慘の回想がある。又階下の  
一室囹圄の人となりながら萬國史の稿を起したマルタ  
・ローリーを思ひ、螺旋狀の階段を上つて武器陳列場  
を見てヘンリー六世の甲冑の美なるに驚き、塔守のピ  
ー・イーターに日本の具足(蒙古よりチャールズ二  
世に獻じた)なども觀て、次はボーシャン塔で、塔へ  
行く迄に分捕の大砲が並べてあり、其前に鐵柵で圍ん  
だ空地が昔の仕置場……

鳥が一疋下りて居る。翼をすくめて黒い嘴をとがら  
せて人を見る。百年碧血の恨が凝つて化鳥の姿とな  
つて長く此不吉な地を守る様な心地がする(一四)

さ、そこに七つばかりの男の兒を連れた若い女が來る  
希臘風の鼻と、球を滑いた様にうるはしい眼と、眞  
白な頸筋を形づくる曲線のうねりとが少からず余の  
心を動かした(一四)

子供は母に向つて「鴉が鴉が……」と云ひ「鴉が寒さ  
うだから麵麩をやりたい」と云ふ。母は靜に「あの鴉  
は何もたべたが居やしません……あの鴉は五羽居  
ます」と神秘的な對話をする。さて彼のボーシャン塔  
は十四世紀後半にエドワード三世の建立せられた三層

る。

切れぬ管だよ女の頸は戀の恨みで刃が折れる(一九)  
生える白髪を浮氣が染める首を斬られりや血が染め  
る(二〇)

など職業が此の慘事を尋常一様の茶番化する處云ひし  
れぬ凄愴となる……さ忽最前の母子が佇んで  
る。左に熊右に獅子を書いたダッドレー家の紋章に就  
いて母は委しく其兒に語り聞かせてゐるのを見て不思  
議に思ふ。尙壁には小く「ジエーン」と書いてある。  
薄命美人として誰知らぬものなき義父と夫の野心の  
犠牲として十八年の芳紀をあへなくくすをれた彼のジ  
エーンの事である……想像のフィルムは更に斷頭臺の  
光景となる……今しも刑場の露と消えようとして居る  
のは最前の女である。眼かくしをしたまんま傍の僧と  
問答して、

まことは吾と吾夫の信する道をこそ言へ御僧達の道  
は迷ひの道、誤りの道よ……吾夫が先なら追ひ附か  
う、後なら誘うて行かう、正しき神の國に正しき道  
を踏んで行かう(二三—二四)

狐に化かされたやうな氣持で暫し茫然として立ち盡し  
やがて歩を返して外に出るさ街には驟雨が降つてゐ



た。歸つて下宿の主人に「今日は倫敦塔を觀て來た」と云ふと、主人は「鴉が五羽居たでせう」と云ふ「オヤ」と思つて例の女のことを話すと「皆あすこへ行く時にや案内記を讀んで出掛けるでせう(二五)」と平氣なものはで余の空想の後半が代なしになつた。主人は廿世紀の倫敦人である(漱石全集第二卷一—二五)

ワの部

わうだいもの 王代物(又、大時代物)

戯曲で王朝時代以前の事象を脚色したもの。例、妹春山婦女庭訓・蘆道屋満大内鑑。

わうやうめいのがくせつ 王陽明の學說

よやうのがく「餘姚の學」を見よ。

わうらい 往來

消息文のことをいふが、中には啓蒙的に連歌や物盡しや教訓を含めたものもある。その起原は平安朝の明衡往來(雲州消息)などにあるが、盛んになつたのは室町期から徳川期にかけてのことで異姓庭禁往來(遊學往來)・小密往來・庭訓往來・尺素往來・雜筆往來・蒙求臂鷹往來等は殊に名高い(坂井衡平氏新撰國文學通史中卷)

の咏に始まる。

四、上代の和歌 は記紀萬葉に残り、片歌・短歌・旋頭歌の類から萬葉に至つて長歌の全盛を見、譬喩繰返し發語枕詞等一通りの修辭も備はつてゐたが、多くは即興で形よりも想が主で、不精煉ではあつたが實感が注溢して居つた。記紀の歌は大抵天皇・皇后・皇妃・皇子の御咏であるが、萬葉時代に至つて柿本人麿・山部赤人・山上億良・大伴旅人・大伴家持・笠金村・額田王・阪上郎女など臣下皇族にも臣下にも名流が出て漸く専門歌人の備をなした。

五、中古の和歌は 始に「古今集の讀人しらす時代」とも謂ふべき王朝初期があつて、萬葉の古雅と古今の優麗との過渡にある面白い咏歌があるが、その量は餘り多くない。ついで六歌仙時代となり、古今集の先驅者らしい秀味が多く見られ、やがて延喜の古今集時代となつて四撰家始め名流林の如く繁く華實兼備の代表的和歌を見るに至つたが盛んなのは短歌だけで、長歌は萬葉の五七調が七五調に移り而かもその量多からず爾後徳川時代古典派の勃興に至るまであまり秀味は見られなかつた。古今以後拾遺以下八代集の中最後の新古今をのけた第七までの勅撰集が出、又個人の家集も出

四九五—五〇二)

わか 和歌

一、「こたへうた」とよめばこれは贈答歌や奉和歌のこと、甲の詠んだのに相和して詠んだり、題を與へられて咏進したりすることである。

二、「やまとうた」とよめば「からうた」即ち漢詩の對で短歌を中心として我邦に發達した我國固有のうたのことになる(通常一口に「わか」といへばこの方を意味するから以下この意味に於ける和歌の變遷を一通りあげる)

三、起源 古今集序には「ひさかたの天にしては素盞鳴尊に始まりあらがれの土にしては下照姫に始まる」ことがいつてあるが、詩が感激の情呼に發端する上から見れば、寧ろ諸册二尊が天の浮柱をめぐつて、

あなにやしゑをとこを  
あなにやしゑをとめを

の御叫び(五五の調)から始まると謂ふべきであらう。けれどもその形式の稍整つたものは素盞鳴尊の御作と傳ふる、

八雲たつ出雲八重垣つまごめに

八重垣つくるその八重垣を

て歌態は益織巧となり着想に新趣向をこらし、表現を第一義として辭句を弄するの風盛となり、和歌そのものを一個の専門的な技術として理論づけする風は歌合の盛行と共に盛大となり歌學が勃興して五家髓以下種々の論議が公にされた。

六、近古の咏歌 は初めに新古今集が出て咏歌史上一時期を劃し、着想は織巧優美の極に達し格調は緊密にして而かも流麗、從來和歌に用ひられたあらゆる手法を集大成し、會根・好忠・源俊賴以來働きかけてゐた斯壇革新の氣運は茲に爛熟したかの觀がある(「幽玄」といふのが此期の歌風の新標語と看做される)爾後所謂十三代集の勅撰を見たが多くは様によつて胡蘆を描くに過ぎず、當期にあつて特色あるものは寧ろ勅撰以外初期の六家集と南北朝時代の新葉集とであつた。室町時代に入つては彼の東常縁によつてはじめてれた古今傳授を中心に典型の弊次第に斯道の展開を妨げ、それも戦國亂離の世となつては微光明滅として唯細川玄旨幽齋が田邊の城に函底深くその秘を鎖してゐるに過ぎなかつた。

七、近世の和歌は この幽齋によつて序幕が開かれ文藝復興につれて和歌は先づ廟堂に榮え、堂上風といふ

一派はこの期を通じて多量の咏歌を出したが、文學教化の民間に及ぶにつれて、戸田茂睡が梨本集によつて解放の第一聲をあげ、小澤蘆庵のたゞことうた、香川景樹の桂園派によつて斯の期に於ける新派は大成せられ、賀茂真淵の首唱する古典派、その古典派から出た村田春海一派の江戸派又非常の盛況を見、それ等流派以外各個独自の歌の分野の開拓も可なりによく、斯くしてこの期は和歌史上多くの方面に於て多大の進展を見た。

八、現代の和歌は 前期の風をつぐ舊派の和歌と、明治二十年頃から起つた新派和歌と、大正より昭和にかけて作られた最新派とも謂ふべき生活派唯美派等の和歌とがあつて、次第に新時代に觸れた新生命の表現を見つゝある(山内素行氏日本短歌史)

**わかさくしき 和歌九品**

藤原公任の著、古來有名なる和歌を選び、九品淨土の佛説に準へて上品上、上品中と九等に別けて品臨したもの(群二九三、一〇、七一七―七一八)公任別に(和歌九品論議)の著があつたといふが今傳はらない。

**わかさくしき 和歌作式**

きせんしき「喜撰式」を見よ。

**わかししき 和歌四式**

作歌上の規則を書いた左の四書を見よ。

奈良朝末 藤原濱成 歌經標式(濱成式)  
平安朝始 喜撰法師 喜撰式(和歌作式)

? 孫姫式

平安朝始 安部清行 石見女式  
何れも和歌の部類、病などを略記した小冊子だが、今傳はるものは偽作であらうといはれる。

**わかしてんわら 和歌四天王**

此に二つある。前四天王は南北朝から室町時代へかけての四天王で頼阿・慶運・兼好・淨辨をいひ、後四天王は徳川時代平安歌壇の四名流蘆庵・澄月・慈延・蒿蹊をいふ。各人の處を見よ。

**わかしよがくせう 和歌初學抄 四卷**

藤原清輔が嘉應元年(一八二九)に攝政の命によつて撰んだ歌學の法式を論記した書物。古詩・山緒詞・秀句・諷詞・似物・必次詞・喻來詞・物名所名・讀習所名・兩所歌等のことが出てゐる。

**わかていきん 和歌庭訓 (毎月抄定家卿**

消息)

ていか「藤原定家」を見よ

**わかどころ 和歌所**

和歌勅撰の事務を執る爲め宮中に設けられたもので、村上天皇の御代後撰集を撰ばせられるについて置かれたのが始めて、その後次第にすたつてゐたが後鳥羽院が又之を復活せられた。その長官を別當といひ外に開闢・寄人等の役員をおかれた。

**わかなしふ 若菜集 五十一篇**

鳥崎藤村がその日頃文學界や帝國文學に寄せられた新體詩を集めて三十年に出したものである。

この頃の著者は全く藝術至上主義、就中詩至上主義に活き、本書の巻頭にも、

……青唇の命はかれらの口唇にあふれ、感激の涙はわれらの頬をつたひしなり。こゝろみに思へ、清新横溢なる思潮は幾多の青年をして殆ど寢食を忘れしめたるを。また思へ、近代の悲哀と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるを。われも拙き身を忘れてこの新しきうたびとの聲に和しぬ……

生命は力なり。力は聲なり。聲は言葉なり。新しき言葉すなはち新しき生涯なり……

われは今青春の記念としてかゝるおもひでの歌ぐさかきあつめ、友とする人々のまへに捧げむとはする

なり。

さ云つてある。無上に詩道に躋進しつゝあつた著者の姿見るやうである。そしてこの一篇を貫く基調は熱烈なる戀さ夢多き情熱高き青春の内生活表現にある。

狐のわざ

庭にかぐるゝ小狐の

人なきときに夜いで、

秋の葡萄の樹の影に

しのびてぬすむつゆのふさ

戀は狐にあられども

君は葡萄にあられども

入しれすこそ忍びいで

君をぬすめる吾心

などは戀を狐に象徴化して簡勁なもの、

秋風を歌つて、

道を傳ふる婆羅門の

西に東に散ることく

吹き漂蕩す秋風に

織り行く木の葉かな

と些細な自然にも深き人事を比照し「別離」と題して人

妻を慕ふ男の遺る瀬なさを歌つては、

人妻戀ふる悲しさな

君がなさげに知りもせば

せめてはわれを妻人と

呼びたまふこそうれしけれ

「六人の處女」は一篇の絶唱と云はれたもので、その

一は「おえふ」

處女ぞ經ぬるおほかたの

われは夢路を越えてけり

といひ、生れをあかしては、

水靜かなる江戸川の

ながれの岸にうまれいで

岸の櫻の花影に

われは處女となりけり

といひ、それより若き女性の誇りのあらゆる花やかさを賦し、末段追憶の寂しさをのべて、

櫻の霜葉黄に落ちて

ゆきてかへらぬ江戸川や

流れゆく水靜にて

あゆみは遅きわがおもひ

といふ。その二は「おきぬ」で、

芙蓉を前の身とすれば

泪は秋の花の露

小琴を前の身とすれば

愁は細き糸の音

いま前の世は鶯の身の

處女にあまる羽翼かな

その三は「おさよ」

潮さみしき荒磯の

巖陰われは生れけり

とて悲戀を一管の吹奏に奏で、情熱しては黒髪亂れさし櫛落つさいふ。その四は「おくめ」親をすて家をすて

て戀人の許に走る兒、

こひしきまゝに家を出で

こゝの岸よりかの岸へ

越えましものと來て見れば

千鳥なくなり夕まぐれ……

戀は吾身の社にて

君は社の神なれば

君の祭壇の上ならで

なにに命を捧げまし

その五は「おつた」早くより父母に訣れた不幸の孤兒、

ために果つ

かなしからすや

清姫は

蛇となれるも戀故に

やさしからすや

佐夜姫は

石さなれるも

こひゆゑに

なまここのこひの

たはふれば

たびにすてゆく

なさけのみ

こひするなかれ

をとめごよ

かなしむなかれ

わがともよ

こひするときと

年頃となつて若き聖に慕はれ、聖は道心と情火にはさまつていつも「おつた」の美に轟惑さるゝことを「柿の實」「酒」「迷の歌」「情」「白き小石」と五段に歌ひ、その六は「おきく」古往近來の女性の悲戀を一人で吞負つて悲歌する女で、古來何れの男子か戀の爲めに身を捨てたる、名の爲め國の爲めに斃れた男はさらにあるが戀の爲めに犠牲になつた男は一人もない。治兵衛といふな、忠兵衛といふな、みんな名譽の奴隷に過ぎぬ。

をんなごころは

いやさらに

ふかきなさけの

こもるかな

小春はこひに

ちをながし

梅川こひの

ために死ぬ

お七はこひの

ために焼け

高尾はこひの

ために焼け

かなしみと  
いづれかながき

いづれみじかき。

この六人の中では「おくめ」が讃へられた。蓋しそのひたぶるに殉情なるが爲めであらう。最後の「おきく」は少し男性に盾つく所理窟に墮して居るが、それだけ近代的な女性とも見られる。

その他「生のあけほの」を題しては、

うれしや物の音を弾きて

野末をかよふ人の子よ

聲調ひく手も凍りはて

なに門づけの身ぞ……

磯邊に高き大巖の

うへにのぼりてながむれば

春やきぬらん東雲の

潮の音遠き朝ぼらけ

といひ、春のあけほの一節には、

鳩に履まれてやはらかき

草とならばやあけほの

草とならばや

「うてや鼓」「二つの聲」「林の歌」は教科書などに引用せられ「かもめ」と題しては、

波に生れて波に死ぬ

情の海のかもめどり

戀の激波たちさわぎ

夢むすぶべきひまもなし

「四つの袖」と題してお夏清十郎を弔ひ「天馬」「鷄」は想奔放にして雄大、ともかくこの時代にあつては眞に空谷の梵音さも謂ふべき好詩集で、我が詩史の上第一期を劃し爾來作者は詩壇の主流を代表するやうになつた。この集について、作者自身は次のやうにいつて居る。

明治二十九年の秋私は仙臺へ行つた。あの東北の古い静かな都會で、私は一年ばかりを送つた。私の生涯はそこへ行つて初めて夜が明けたやうな気がした。

私は仙臺名影町の客舎で書いた詩稿を、毎月東京へ送つて、その以前から友人同志で出して居た雑誌「文學界」に載せた。それを一冊に集めて「若菜集」として公にしたのが私の最初の詩集だ。あれは私の文學生涯に取つての處女作とも言ふべきものであつた。その頃の詩の領分は非常に狭い不自由なもの

で、自分等の思ふやうな詩はまだ遠い先の方に待つて居るやうな気がしたが、兎も角も先蹤を離れよう、詩といふものをもつと自分等の心に近づけようと試みた。勝な私の唇はほどけて來た。

さてこの集は作者が英詩中ラファエロ前派の諸家スピンバアン、ロセツチなどの詩集に親しんでそれを酵母の一つとして居ること、漢文國文の教養深く詞藻の豊富にして且つ織巧、且つ絢爛の美を發揮してゐること、詩形の整然として居ること。青年子女の高き感激の滲出してゐることなどが衆評の認めて一致した讃辭で、要するに作者が詩の天分に恵まれたる第一人者であることを遺憾なく示して居る（藤村全集第一巻、一―二五七）

わがはいはねこである 吾輩ハ猫デアル

三編 十一回

夏目漱石出世作の小説で、三十八年一月一日より三十九年八月一日まで雑誌ホトトギスに連載し、その後單行本として大倉書店で發行し後更に漱石全集に收められた。猫を擬人しての人生寫實若くは文明批評を書いたもの。餘裕派小説の傑作として一時洛陽の紙價を高からしめた。篇中にあらはれる人物は猫の主人の苦沙

彌先生―此は文明中學の英語の教師で、篤學ではあるが變窟で沒常識で頑直で頑固で一べん宛鉛で押へたやうな警句を吐く。先生の細君―此は割合世間的だが似た者夫婦で何處かに超然たる處がある。三人の兒女、下女のお三、苦沙彌の親友の迷亭先生―美學者で飄輕で才氣奔放で滑稽機智を喰物にして法螺と茶目とを無上の娛樂にして居るのん氣もの。苦沙彌の舊の生徒の水鳥寒月、理學士で好男子で學問三昧に耽つてゐる。同越智東風―文學士で新體詩人で、戀の讚美者で美文朗讀會などに力瘤を入れて居る。多々羅三平―法學士で常識的で貨殖の道に長けて居てお人よし。其他獨仙と云ふ超人肌。古井武右衛門と云ふ間拔けた滑稽な書生。金田に鈴木と云ふ拜金宗。天障院様の御祐筆の妹の嫁に行つた先の阿母さんの甥の娘に當るさか云ふ二絃琴の師匠。苦沙彌の姪の雪江、迷亭の伯父、狂人の天道公平、天然居士、刑事、巡查などで組織結構發展收結と云ふ風の用意は捨て、毎篇滑稽の山がうまく按配されてゐる。

(一)「吾輩は猫である。名前はまだ無い(一)」が始めて此が本の題目にしてある。それから猫の經歷ををかしく挿んでやがて批評的の述懐。

「第一毛を以て裝飾されべき筈の顔がつる／＼して丸で藥罐だ(一)

「吾輩は人間と同居して彼等を觀察すればする程彼等は我儘なものださ斷言せざるを得ない様になつた(六)」「元來此主人は何さいつて人に勝れて出来る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやつてほま、ぎすへ投書を書いたり、新體詩を明星へ出したり、間違ひだらけの英文を書いたり時によるとらに凝つたり謠を習つたり、又あるときはワイオリン杯をブー／＼鳴らしたりするが、氣の毒な事にはこれもこれも物になつて居らん。其癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。後架の中で謠をうたつて近所で後架先生と渾名をつけられて居るにも關せず、一向平氣なもので矢張り是は平の宗盛にて候を繰り返して居る(七)其主人が近頃水彩畫を稽古しかけて吾輩を寫生したが無論其の拙さつたら無い。併し主人は決して失望しない。迷亭から教はつた通り「昔以太利の大家アンドレア・デル・サルトが先づ自然を描けと云つた原則に適つて居る」さ澄ましたもの。

(二) 苦沙彌の處へ年賀狀の舞ひ込む光景。  
寒月が訪問して此間の合奏會の面白かつたことを話

す。

主人の留守中お三や小供の間食。  
主人の胃弱とタカチアスターゼ。  
主人の日記並に日記論(主人の様に裏表のある人間は日記でも書いて世間に出されぬ。自己の面目を暗室内に發揮する必要があるかも知れない(三三))  
雜煮を喰つた失敗。  
迷亭東風をかついでトチメンボーを注文すること(四九一五三)  
迷亭手紙で御無沙汰わび(大げさに多忙をふく)(五八一六二)  
苦沙彌「巨人引力」の妙文(六七一六八)  
迷亭「首懸の松」の奇話(七一七五)  
寒月「身投げの仕損ひ」の話(七五七九)  
苦沙彌「攝津大掾を聞損れ」の話(七九一八五)  
三毛子(隣の猫)の葬式(八七一九〇)など。  
三、苦沙彌先生宅の月末勘定、鼻毛の植付(九三一九五)  
天然居士の墓碑銘(九六)  
苦沙彌不在細君と迷亭との苦沙彌評。  
どこへ參るにも斷つて行つた事の無い男ですから(九

八)

此間は赤ん坊に迄(大根卸し)を管めさせまして(九九)三日前には中の娘を抱いて簞笥の上へ上げましてね……(九九)

樽金とタークキン・セ・アラウドとの語呂(一〇一)  
机へ腰を掛けて御飯を食べるのです。御膳を炬燵櫓の上へ乗せまして(一〇二)……ハイカラ首實檢の様ですな。

中學校の生徒に白木屋の番頭を加へて二で割ると立派な月並が出来あがります(一〇四)  
寒月「首懸りの力學」の講演の下稽古迷亭ませつかへす(一〇四一〇)

東風獨逸語の失敗(一一〇一一三)  
金田鼻子苦沙彌の宅へ寒月の閉合に来る主客變妙の應答振迷亭の茶目振(鐵拐仙人が軍鶏の蹴合ひを見る様な顔をして)(一一三一一二五)  
鼻子が歸つてからの苦沙彌・細君・迷亭の批評(一二五一一三〇)

金田邸内の探險(一三〇一一三九)  
迷亭の鼻哲學、苦沙彌の鼻の俳體詩(一三九一一四八)  
四、冒頭は抽象論めいては居るが面白い語に富んで居

る。

「例によつて」さは屢を自乗した程の度合を示す語である(一四九)  
凡そ世の中に何が賤しい家業だと云つて探偵と高利貸程下等な職はないと思つて居る(一五〇)  
理は此方にあるが権力は向ふにあると云ふ場合に理を曲げて一も二もなく屈從するか又は権力の目を掠めて我理を貫くか云へば吾輩は無論後者を擇ぶ(一五一)  
それから金田と鈴木との對話。鈴木の鼻の低いのを、春風もあゝ云ふ滑らかな顔計り吹いて居たら定めて樂だらう(一五三)  
鼻子が苦沙彌の家を教へて、  
標札はあるときさなきとありますよ名詞を御饌粒で門へ貼りつけるのでせう、雨が降ると剥がれて仕舞ひませう……何でも屋根に草が生えたらうちを探して行けば間違ひつこありませんよ(一六一)  
苦沙彌の細君の禿の話(一六二一一六七)  
苦沙彌の舊友鈴木藤十郎は金田の配下で已に物質的には成功して居る。今日は金田の命を受けて令嬢富子が寒月に戀して居るので閉合の上相當な事なら纏めたいから寒月について腹藏なく聞かしてくれいとこの意を如

才なく切り出すと主人は不相變ブツキラボーに受け流す、鈴木が、

金を作るにも三角術を使はなくちやいけないと云ふのさ——義理をかく、人情をかく、恥をかく、是で三角になるさうだ、面白いぢやないかアハ、ハ、ハ、(七一)

と云ふと、

佛體詩を知らないのか、君も随分時勢に暗いな(七三)

とやる。其處へ迷亭が飛び込んで番狂はせさなり談は各自の學生時代に返る(一七九—一九三)

「此菓子はいつよりもより上等ぢやないか」と藤村の羊羹を無造作に頬張る……主人も迷亭の食ひ氣が傳染して自ら菓子皿の方へ手が出る。世の中では萬事積極的のものが人から真似らるゝ、權利を有して居る(一八一)

迷亭は寒月の近況を報じて「彼は博士論文の起稿中だ題は「團栗のスタビリチーを論じて首縊りの力學に及ぶ」と云ふのだ。云はば活動圖書館のやうな男だ。金田なんか活動紙幣や活動切手の輩の配偶し行べきでない(一八六)などと吹く。

五、「花曇りに暮を急いだ日は疾く落ちて表を通る駒

下駄の音さへ手に取る様に茶の間へ響く。隣町の下宿で明笛を吹くのが絶えたり續いたりして眠い耳底に折鈍い刺戟を與へる外面は大方朧であらう(一九四)

と詩的な叙景があつて苦沙彌一家の寢行儀の悪い事(一九六)

泥坊の闖入(二〇〇)泥坊哲學(二〇一)泥坊活動の叙事(二〇五—二〇八)泥坊闖入の翌日の滑稽な光景(二〇八—二一四)取られた品は、

黒縞子と縮緬の腹合の帯一筋  
絲織の羽織一枚  
黒足袋一足

山の芋一箱(此は多々良三平の贈つたもので、細君が風呂敷に包んで枕元においたものを千兩箱と間違へられたもの)

そこへ贈主の多々良が来て山の芋一件を聞いてをかし氣の毒がる。細君は此を機會に平素夫が自分を罵つて「オタンチンバレオロガス」と云ふ。あれは何のことかと質問をする(二一六)。多々良自分の奉職(六井

物産の現況を語り先生なんか實業界にお這入になればよいと勧める。  
主人と多々良と上野へ散歩、休養論(二二七—二三〇)

鼠への初陣美事失敗(二三〇—二三八)

六、人間は多忙だ——と言ひながら随分のんきな閉つぶしをする自家撞着の動物だ(二三九—二四一)

留守中迷亭の訪問。屋根の上で卵のフライだのハークユリスの牛だのと奇妙な事を云ふ。

「夫でもあなた、どうせ御口に合ふ様なものは御座いませんが」と細君少々厭味を並べる。迷亭は悟つたもので、

「いえ御茶漬でも御湯漬でも御免蒙るんです。今途中で御馳走を誂へて來ましたからそいつを一つこゝで頂きますよ」と到底素人には出來さうもない事を並べる。細君はたつた一言「まあ？」と云つたが其のまゝの中には驚いたまゝと氣を悪くしたまゝと手数が省けて難有いと云ふまゝとが合併して居る(二四六)

主人が眼をさますと迷亭は折かどみ自在のパナマの帽を出して得意に見せる。その紹介が終るとケース入りの鏡を取出して見せる。此は十四通りの用を爲すもので葉巻切・針金切・定規・物指・鍮(爪磨)・金錠・錐・字消し・ナイフ・寫眞挿さ一々効能を列擧する。

迷亭自辨の御馳走策そば二個を迷亭自身手器用に喰ふ(二五〇—二五二)

寒月來訪此頃は博士論文「蛙の眼球の電動作用に對する紫外光線の影響」を起稿中、それが爲に實驗用の球すりに没頭してあること(二五三—二五五)

迷亭の失戀談、山の中の宿で蛇の骨抜きを馳走になつて高島田の美人に侍かれたと思つたら翌朝それは蓋を被つて居たので實は赤禿の藥罐頭であつたと落す(二五七—二六二)

迷亭、友人老梅君の失戀譚を紹介する——静岡に泊つてお夏さんと云ふ美人の女中に結婚を申込んで、其諾否を聞かない中に西瓜が食ひたくなつて、どつきり喰つて腹が痛くなつて、天地玄黃と云ふ千字文を盗んだやうなドクトルに診て貰つて翌朝出立間際にお夏さんに返事を促すと「静岡には西瓜もあります、御醫者もありませんが、一夜作りの御嫁はありませんよ」とやられた。それ以來失戀して彼は圖書館へは小便をする外來になつた(二六二—二六三)

と云ふと主人はミュッセの脚本の語を引いて、  
羽より軽い者は塵である。塵より軽い者は風である。風より軽い者は女である。女より軽い者は無である(二六四)

と云ふ(此處の對話の想前後相應して居ない)

迷亭自分の幼い頃伊勢源が女の兒をかついで賣りに来た  
たと云ふ(二六四―二六七)

寒月、今日の子女は人に賣つて貰はなくとも自分で自  
分を賣りに歩いて居る(二六七)と云ふ。迷亭古代希臘  
の Agnoice の産婆志願の話(二六八―二七〇)

東風來訪、春の朗讀會の話が出て東風の「お宮」が振つ  
てたなど云ふ、

主人は余に俳劇一篇の趣向があるとして、  
行水の女に惚れる鳥かな

と云ふ筋を語る(こゝは紅葉の「むき玉子」のモデルの  
女お喜代の行水とよく似てゐる) 上田敏氏の俳評や今  
の俳句についての評論(二七二―二七五)

東風は自作の詩集を見せる。巻頭には、  
世の人に似ずあえかに見え給ふ

富子嬢に捧ぐ  
として第一章には、

倦んじて薫する香裏に君の  
靈が相思の烟のたなびき

お、我、あ、我、辛き此世に  
あまく得てしか熱き口づけ

東風近頃の新體詩につきインスピレーションを提出す

友人の一夜などを引合にして(二七五―二七八)  
主人も近作の短篇を朗讀して聞かす。珍妙な詩であ  
る。題は「大和魂」で、

大和魂！ と新聞屋が云ふ。大和魂！ と掏摸が云  
ふ。大和魂が一躍して海を渡つた。英國で大和魂の  
演説をする。獨逸で大和魂の芝居をする。

東郷大將が大和魂を有つて居る。着屋の銀さんも大  
和魂を有つて居る。詐偽師・山師・人殺しも大和魂を  
有つて居る。

大和魂はどんなものかと聞いたら大和魂さと答へて  
行き過ぎた。五六間行つてからエヘンと云ふ聲が  
聞えた。

三角なものが大和魂か、四角なものが大和魂か、大  
和魂大和魂は名前の示す如く魂である。魂であるか  
ら常にふら／＼して居る。

誰も口にせぬ者はないが、誰も見たものはない。魂  
も聞いた事はあるが、誰も遇つた者が無い。大和魂  
はそれ天狗の類か(二七八―二七九)

七、(此篇中は稍見劣りがする記事ゴタ／＼として發  
展流暢ならず)

猫の運動を説いて海水浴をあげ一七五〇年にドクトル

リチャード・ラッセルがブライトンの海水の療養に功  
あることを説いた、と(二八四)

蟪蛄狩り(二八七―二八九)  
蟬取り(二八九―二九二)  
松滑り(二九二―二九四)

垣巡り並に鳥との喧嘩(二九四―二九七)  
蚤の話、愛の話(二九七―三〇〇)

銭湯の觀察(三〇〇―三〇三)  
裸體畫問題邦人の西洋カブレを冷かす(三〇三―三〇  
五)

服装論(三〇五―三〇七)

當世浮世風呂とも謂ふべき觀察(三〇八―三一三)  
脱衣場の觀察(三一三―三一四)

湯屋に於ける苦沙彌先生(三一四―三一七)  
湯屋から歸つて来た主人は細君に猫を叩かせて「ニヤ  
ン」と謂はせて「そのニヤンは感投詞か副詞か」と語  
學的奇問を發する(三二一―三二二)

一番長ゝ詞は Archaiomelesidonophruchera とい  
ふ希臘語で、長くすると六寸三分位に書ける(三二四)

など云ひ大町桂月が飲めと云つたとて珍らしく酒をあ  
ふる(三二五)

八、私立中學落雲館と云つて苦沙彌の宅の直ぐ隣の生  
徒が苦沙彌にからかふ所、

全體人からかふのは面白いものである……第一から  
かはれる當人が平氣で澄まして居てはならん。第二か  
らかふ者が勢力に於て人数に於て相手より弱くてはい  
かん(三三二)……怒ることは怒るがこつちをどうする  
事も出来ないといふ安心のある時に愉快は非常に多い  
ものである(三三三)

吾輩の考へでは奥山の猿と學校の教師がからかふには  
一番手頃である(三三五)

臍臍がひなたぼっこをして居る所へ密獵船が向かつ  
た様な者だ(三三七)

主人は裏へ廻つて見たり後架から覗いて見たり、後架  
から覗いて見たり裡へ廻つて見たり何度云つても同じ  
事だが何度云つても同じ事を繰り返して居る(三三八)

人間の體内には怒・鈍・憂・血の四液が約五升五合ある  
こと(三三九)

インスピレーションは神聖なる狂氣(三四一)

落雲館生徒のダムダム弾ベースボール(三四三)

甘木先生の催眠術不成功に終る(三七四)

哲學者獨仙の來訪(三七四―三八〇)

ナボレオンでもアレキサンダーでも勝つて満足したものは一人もないんだよ(三七八)  
山があつて隣國へ行かれなければ山を崩す云ふ考へを起す代りに隣國へ行かんでも困らないと云ふ工夫をする(三七九)

九・主人の痘痕あはたに就いて(三八一—三八五)  
主人鏡を見る(三八五)

主人は見性自覺の方便として斯様に鏡を相手に色々な仕草を演じて居るのかも知れない(三九〇—三九一)  
鏡は己惚の醸造器である如く同時に自慢の消毒器である(三九一)

慢性結膜炎(三九二)

混沌として黒眼と白眼が判別しない位漠然として居る(三九三)元來から行儀のよくない髻でみんな思ひくの姿勢をとつて生えて居る(三九三)

三通の郵書(三九四—四〇一)

1 日露戦勝祝賀會の發起

2 大日本女子裁縫最高等大學校長縫田針作から裁縫秘術綱要の購求方勸誘

3 巢鴨の氣違の天道公平の哲學とも何とも得體の知れぬ手紙——主人は何でも別らぬものを崇拜する

癖があるのでひどく此手紙に敬意を表してゐる。

迷亭靜岡の伯父を連れて来る(四〇一—四二一)  
鐵扇を携帶で孟子の求放心、鄒康節の必要放、中峯和尚の具不退轉、澤庵禪師の不動智神妙錄などを説いて而も新調のフロックコートを着て居る。

迷亭八木獨仙の噂、鼠に鼻を噛られたこと(四一四)  
同理野陶然の噂、レールの上で坐禪(四一七)

同立野老梅(天道公平のこと)の噂——君あの松の木へカッレッが飛んできやしませんかの僕の國では蒲鉾が板へ乗つて泳いで居ますのつて……君表のドブへ金とんを掘りに行きませう(四一八)

刑事巡查吉田虎藏來訪泥坊が知れたと云つて警察へ出頭するやうにと云つて去る(四二二—四二八)

主人の人生觀照(四二八—四三三)ことによると社會はみんな氣狂の寄り合ひかも知れない(四三二)

十、三兒の朝手水をつかふところ(四三八)  
元祿と双六とを間違へ(四三九)

火事きりで葎わらが飛んだり、御茶の味噌の女學校へ行つたり(四三九)

恵比壽臺所と並べたり……わたしや藥店わらだの子ぢやないわ(四四〇)

主人朝起きの騒ぎ——細君が起しても容易に起きない(四四二—四四八)

子供の朝飯(四四九—四五三)坊ばの活躍

主人外出(四五三)

主人の姪の雪江來訪(四五四)

保險會社の話(四五七—四五九)

坊ばのお話し(四六一—四六二)

八木先生の女學校に於ける演説「石地藏」の話、子供のまぜつへつし(四六二—四七四)

主人歸宅姪との對話(四七四—四七九)

文明中學第三年生武右衛門來訪(四七九—五〇二)金田令嬢がハイカラだから相談して「文章は濱田が書いたんです僕が名前を貸して遠藤が夜あすこのうち迄行つて投函して来たんです」とレター事件の善後策につき相談に来る。

寒月が来て動物園の虎(四九七—四九九)や障子の超絶的曲線(五〇一)の話をする、武右衛門悄然として去る。寒月主人を上野公園へ散歩に誘ひ出す(五〇二—五〇七)

十一、迷亭・獨仙・苦沙彌・寒月・東風が一座して奇抜で滑稽で高級な文明批評をする(五〇八—五九九)

迷亭と獨仙との對局(五〇八—五一三)

寒月のお土産纏節三本(五一三—五一六)

寒月がアイオリンの話で皆をぢらす(五一七)——

十一月の天長節の前の晩に鞍懸村の下宿を出て蒲鉾町の金子善兵衛店で五圓二十錢で件の樂器を買つて深夜庚申山まで持ち出した云々。

寒月國の方で結婚(五五九—五六三)  
探偵と刑事について(五六四)

自己意識の強い現代人(五六七)、この引例少し不適當、寧ろ模倣は社會生活の基礎だと云ふ例にふさはしい)

喧嘩の話(五六八)

借金の話(五七〇—五七一)

死の話(五七二)

自殺の話(五七三)

他殺の話(五七四)

眼前の習慣に迷はされる人々、スマイン、ゴルドヴァの女(五七五—五七六)

書畫骨董店(五七七—五七八)タイムスの百科全書の月賦(五七八—五七九)

結婚論(五八一—五八四)



夫婦と藝術は永久に存在するものだとの論（五八五―五八八）  
 女性観（五八八―五九一）  
 三平の來訪（五九二―六〇〇）  
 猫の終焉（六〇〇―六〇五）  
 （漱石全集第一卷全部六〇六頁・敬文館名著評論文集ノ二（我輩は猫である其他）三四郎、それから漱石の猫、日本書院）

**わかふるのやまぶみ 和歌布留の山ふみ**  
 四卷

城戸千楯が和歌初心者の爲めに書いたもの。題の下に多くの歌句（五七言句）を集め次に作例を示してある。文政七年（二四八四）大江廣海の序及び曙廼舎の自跋がついてゐるが、明治に入つてからも版行された。

**わかんこんかうぶん 和漢混淆文**  
 「和漢混合文」を見よ。

**わかんこんがふぶん 和漢混合文**  
 文體の一種。漢語と和語とを混用し措辭・文脈に於ても漢文・和文を折衷して渾然たる文の一體を爲せるものをいふ。語彙のみの和漢混合ならば萬葉集時代にも見られるが上述の意義に於てのそれは鎌倉期東關紀行・

海道記等の紀行や、隨筆方丈記や軍記物に至つて見られ、室町期の謡曲も略同一程度の混合文で別に進展を見ず、徳川期に入つて長足の進歩をなし、新井白石の藩翰譜・折りたく柴の記・中井竹山の草茅危言・荻生徂徠の政談・南留別志・雨森芳洲のたはれ草・柳澤淇園の雲萍雜誌・貝原益軒の多くの著書など殊に名高く現代普通文の前驅となつた（古類文學部一、二四〇―二四九）

**わかんらうえいしふ 和漢朗詠集** 二卷  
 藤原公任が長和二年（一六七三）息女おほい君が道長の子敦通と結婚につき婿引出として撰んだもの。ださいふ（十訓抄第六・榮花物語・日蔭のかつら・小右記長和二年古事談第二・玄惠法師朗詠集抄緒言・今井似閑萬葉緯・淺香久敬徒然草諸抄大成）之を撰ぶには長谷と岩倉との間の今朗詠谷といふ處にこもつてゐたともいふ（京師巡覽集雍州府志）後の公任が北山長谷の山莊から想ひついた臆説だが婿引出云々は通説とみてよろしからう。當時朗詠せられた漢詩と和歌とを集めたもので、その中和歌は始めから入れてあつたか、後人の追加かといふについては二説ある。

始めからあつたといふもの、倭漢朗詠集私註序・和漢朗詠集註卷一・安齊隨筆後編十五・不忍叢書九ノ内朗詠

集私註作者考・和漢朗詠集註解卷一、十・朗詠考卷上。

後世添加したといふもの、萬葉緯第十四・和漢朗詠集抄序・弘識錄・四方の硯卷一・好古小錄乾

金子元臣・江見清風二氏合著。和漢朗詠集新釋は一番後に出た註釋で、卷末の雜考には上述の諸項をもつと詳細に記述し、この兩説については可否何れとも決しかれるが比較的論據のたしかな第一説（始めからあつたさいふ）に従ふべきだと結んである（國華三二六號九、一一、岩崎家所藏、傳公任筆、和漢朗詠集、二〇一號五八一、伊行卿筆和漢朗詠抄拔萃三二七號四七、傳藤原公任筆和漢朗詠抄拔萃）。

尙明治以後の刊行には、

袖珍名著文庫第卅一編、和漢朗詠集、富山房

大畑匡山氏、和漢朗詠集、盛花堂

今村勝一、和漢朗詠集講話、文榮閣

公民文庫第十二、和漢朗詠集曲譜付、共同出版株式會社編輯局

井口紫濤、美文和漢朗詠集評釋、大學館

高井蘭山、和漢朗詠集詳解、崇山房、尙柿村重松氏和漢朗詠集考證は日本漢文要覽第四編として出されたもので凡ての點に於て刊本に優れ卷頭四十四頁には由來・

内容・流行・研究の四項について概説してある。

**わかんれんく 和漢聯句**

和句を以て始まり、中間にあつては必ずしも交るゝ和漢の句を隣接せしめる必要はないが、最後は必ず漢句を以て結ぶもの。つまり連歌の方式を以て和句・漢句を連れたもの。その規程を書いたものに漢和法式（群二一〇六、一〇、一一二二―一一二七）がある。

**わき 脇**

能樂に於て主人公のシテに對する客をいふ。之に大臣脇・男子・脇僧脇等の區別があつて、諸ひ方演じ方にはそれと心得がある。又脇は大抵初めに出て自己の閱歷心懷を表す。

例・羽衣の漁夫・鉢木の旅僧（最明寺殿）・兼平の旅僧・張良の張良。

**わきつれ 脇連**

「助客」とも譯すべく、能樂に於て客たる脇に附隨し脇を引きた、す役をいふ。

例、切兼曾我の梶原の從者・安達ヶ原の東光坊・祐慶の同行山伏・熊野の宗盛の從者。

**わくせつ 或説**

神樂歌の用語で、時によつて歌ふ曲の意。

**わくもん 惑問**

るあん「小澤蘆庵」を見よ。

**わくんのしをり 和訓栞 九十三卷**

谷川士清の著、我が國語を五十音順に排列し各語の原義・轉義・用例などを詳解し、我國辭典史上特筆すべき好著で、明治以後に於ても復刻せられて居る。

**わじ 倭字**

天武天皇境部石積をして新字四十四卷を作らしめられた。これ即倭字の始めであるが、それがどんなものであつたか文献の徵すべきがない。けれども現存の釋・鞆・峠・嶺・柳など約百五十字内外ある和製の漢字(漢學者は「作り字」といふ)はこの頃から代々に作られたものであらう。明治に入つて傳・料・厩など大分倭字が増した。漢字の日本化として國字學史上注意すべきであらう(倭字に關しては跡部良顯の和字傳來考一卷・伴部安崇の和字傳來攷附録一卷などあるが率強附會であり價値はない)。

**わじせいらんせう 和字正濫抄 五卷**

契沖元祿六年(二三五三)の著で、歴史的假名遣を統整し、古事記や萬葉集を引證して後世假名遣の混亂してゐることを指摘したもの(契沖全集七、卷頭三、六四―)

一九九、尙契沖は元祿十年八月「和字通妨抄五卷」を著し他説(和字古今通例全書)を批評すると共に此説を主張した。

**わせだししや 早稻田詩社**

明治四十年早稻田の新人によつて組織せられた詩社で、口語詩運動はその主なる業績である。相馬御風・人見東明・野口雨情・三木露風などはその主なるものであつた。

**わせだぶんがく 早稻田文學**

明治廿四年九月卅日創刊の文學雜誌で、今の早稻田大學の前身たる東京專門學校の坪内逍遙博士を中心として創作・評論の兩方面の記事を載せ、爾後一盛一衰はあつたが、とにかく大正・昭和の今日に至るまで續刊して斯境に貢献する所の實的に優れて量的に多大なる恐らく他に匹敵がなからう。

評註	丹波與作	嬰庭篁村
釋義	莊子	三島中洲
講述	萬葉集	畠山健
	徳川文學	關根正直
	論理學	大西祝
	丹波與作	嬰庭篁村

**わみやうせう 和名抄**

「和名類聚抄」を見よ。

**わみやうるのじゆせう 和名類聚抄 (和名抄) 二十卷**

源順が延長年中(一五八三―一五九〇)さる上つ方(慶子内親王とも勤子内親王ともいふ)に撰進した全編漢字(萬葉假名)の辭書。事名の和名を二十四部百二十八門に類聚し、博く群書に照して一々文字の出所等を考記註釋した書で、我邦辭書のはじめであり、且つこの時代としてよく整つてゐるので、今日でも訓詁上參考にする有益なる良編である。代々の板行ある中文化年中狩谷掖齋の「箋註和名類聚抄」が廣く流布して居る。明治十六年内閣印刷局の版行もある。

**われから**

樋口一葉、廿八年十一月作の小説。

「赤鬼の與四郎(姓は金村)といふは十年前まで大藏省の等外で月俸八圓、愛妻お美尾は藝者といつてもよいやうな美形、その中に一女兒「お町」を儲けたがお美尾は人が我が纏綴をほめてくれるにつれていつまでも掃溜めに鶴でもあるまいと或日多くの紙幣に書置を添へて行方をくらました。與四郎は一時は失望もしたが「金

マクベス 坪内逍遙

時文評論

文體の紛亂・文體の成行・講義録・史學の風潮・漢詩のおとづれ・文科大學・東京專門學

校・早稻田文學會・英語と英文學・しかりと雖も・

文壇博覽會・現代小説家・文學會・やたら附・新刊

さて本誌は三十一年七月までつゞいて一時廢刊し(坪内逍遙の廢刊の辭がある)三十九年島村抱月の歸朝と共に復活し、抱月と共に相馬御風が副將格で之を助け、片上天弦が椽大の筆をふるひ、今日では本間久雄氏が編輯主任をして居る。

**わに 王仁 ?**

百濟の學者、應神天皇の時、阿直岐の推薦によつて來朝し、論語及び千字文を獻じ、菟稚郎子に漢籍を教へた。

**わひせう 倭秘抄 (無名抄、山木髓腦、莫傳抄)**

むみやうせう「無名抄」を見よ。

**わぶん 和文**

中古の物語・日記・隨筆等に書かれた文若くは後世これに似せて作つた文をいふ。雅文・擬古文・中古文など皆略同一内容の語である。

が仇の世の中」と奮勵一番、一心に貨殖の道を勵んで今では押しも押されぬ一富豪の身の惜しや、積る苦勞の嵩じてか五十足らずに腦充血で死んで、繼目はお町の御養子恭助、妻は美しい家は豊かで何一つ不自由なき身ながら内娘の手前を憚つて別にお波といふ妾を構ふとその間に一人の男の子が出来て……今年は十一歳それをうすく聞き込んだお町は段々ヒステリックになつて時々發作をおこす。それをいたはるものは家の書生で千葉といふ親も親類も友だちもない一人ぼつち、正氣づいてからお町が氣の毒がつて千葉をいはりも出来、お古の羽織などをやるとそのお下りを豫てやらつて居た下女のお福があらぬことを且那に耳うちして「どうも奥様は千葉と變なやうです……」と讒言する「まさか」と思ふが浸潤の毀膚受の訴へでしまひにはそれを眞事と信ぜないわけにはゆかね破目となり、又世間の手前その儘にはしておくわけにはゆかなくなつてとうとう成らずわかれをする」

梗概は右のやうなもので、無意識ながら作者は後來自然主義がやかましくいふ遺傳や性欲の描寫にまで切り込んで居る。この點が新しい上にお町とお町の母のお

美尾の描寫がいかにも精緻であり、お町の父の性格閑歴なども讀者に「尤も」とうなづかせるものがある（一葉全集後編四一―八五）

中 の 部

あしう 維舟

しげより「松江重頼」を見よ。

あちう 西岡惟中 二二九九―二三五二、寛永一六一元祿五、五十四歳

近世初期檀林派の俳人、因幡に生まれ大阪に移り住んで西山宗因に師事し、この派有数の俳人として又國文學者として一家をなした。その著俳諧蒙求は斯派必讀の良書と謂はれた。

いかのぼりかみはのぼらせ給ひけり  
候らむ見えわたりたる山櫻  
小歌淨瑠璃にてもなし時鳥

あなかげんじ 田舎源氏

にせむらさきあなかげんじ「愼紫田舎源氏」を見よ。

あねんぼう 惟然坊 ?―二三七五、?―正徳五、

近世の俳人で美濃の産、廣瀬氏、藤本屋清右衛門と稱し、家は富裕な酒屋であつたが一度蕉風の雅道に志してから飄然妻子を棄て、俳行脚に出で、古瓢を叩いて市井を徘徊するので時の人彼を俳狂と字した。奇行多し中にも有名なのは彼が尾州行脚の途次某富家へ嫁いである娘に遭つて「久ぶりにその見苦しいお姿は？」と泣く彼女に對し、

兩袖に唯何となく時雨かな  
と云ひ、平氣で行つてしまはふとするのを、無理に後を慕ふと、

重たさの雪はらへごも〜  
と吟じたと云ふ逸話である。

惟然坊句集二卷あり、句々飄逸にして酒脱よくその人を表してゐる。

長いぞや曾根の松風長いぞや  
時雨れけり走入りけり晴れにけり  
風呂敷へ落ちよ包まむ舞雲雀  
別るゝや柿くひながら坂の上  
水鳥や向ふの岸へつうい〜

あん 韻  
一音を發して音尾の名残を韻といふが、文學でいふの

は律語に於て各句の頭中尾に同様の韻ある音を配置すること即ち押韻することといふ。

漢詩の絶句の起承結の三句や英詩の脚韻などは終に押韻があるが中には頭韻中韻もある（大町桂月氏詩及散文二七―三四）

エ の 部

あけいほふし 惠慶法師

播磨の講師圓融・花山の朝、拾遺・後拾遺歌人として重きをおかれた人だが生歿の年は未詳。歌は惠慶法師集（群二六七、一〇、二八―三四・續國六八四―六八九）の外、前記拾遺集に十八首・後拾遺集に十四首採られてゐる。

あほんたいこふき 繪本太功記

寛政十一年（二四五九）七月大阪豊竹座上場、近松柳・近松湖水軒・近松千葉軒の合作。

「武智光秀主君小田春永に妙國寺の蘇鐵のことについて諫言したので主君の旨に違ひ、所領を沒收せられ遂

に反逆の心を起して本能寺を夜襲し弑逆の本懐をとげ  
たが、母の阜月妻の操は之に不同意で二人は尼ヶ崎の  
閑居に佛事三昧に明かし暮らして居る。折柄高松城攻  
めに出征の久吉は毛利氏と和睦して復讐戦の爲めに都  
にさつて返し、久吉自身は一行脚僧と身をやつして阜  
月の庵室に一夜の宿を乞ふ。それを見てとつた光秀は  
竹槍を提げて唯一突と唐紙越しに突くとたしかに手ご  
たへ——だがそれは久吉ではなくて母阜月であつた。  
母はいまはの際に血涙を絞つて我子の不心得を戒め  
る。やがて久吉も来てこの場は兩人一旦きれいに物別  
れとし、やがて山崎の合戦に光秀大敗小栗栖の露と消  
えた。

といふ筋で、これより前に出た通俗物「繪本太功記」  
によつて脚色し、十段目尼ヶ崎の段は前述阜月の諫言  
や光秀の子十次郎初陣のことや初菊が名残を惜しむこ  
となどがあつて有名で「太十」といつて今日も切狂言に  
演ぜられる。

**あみのおしかつ 惠美押勝**

なかもろ「藤原朝臣仲麻呂」を見よ。

**えんじゅあん 圓珠庵**

契沖の庵號である（この庵は今大阪東區餌差町といふ

に在つて裏は府立清水谷高等女學校の敷地につゞいて  
居る。さ、やかながら瀟洒な構へで裏に「契沖阿闍梨  
之墓」と記した碑がある。契沖讀書の座敷も立派に保  
存され、近くその境内に彼の遺稿を保存するのに記念  
館建築の計畫もある）

ヲの部

**をうから 川田蕨江 二四八〇—二五五六、文**

政三—明治二九、二、一、七十七歳

備中玉島の人、幼より穎悟和歌を隣村小野務に習ひ、  
稍長じて漢學を松山藩の鴻儒山田方谷に學び、經史百  
家殆ど通ぜざるは無く、後更に昌平學に學び又藤森天  
山にも學んだ。後大に藩政を助け、ついで牛込に帷を  
垂れて門下を教へ有力な後輩を澤山出した。更に宮内  
省に出仕し大學博士・貴族院議員・文學博士・從三位勳  
四等、宮中顧問官といふやうな名譽を荷うて平和裡に  
薨去。歌人で法學士で住友銀行員たる川田順氏は實に  
その令息である。

**をうぎせう 奥儀抄**

藤原清輔の歌學の書で後世四家、若くは五家髓の一

つに數へられてゐる。今歌學文庫第一編に入る。

**をかし (あひ)**

能にはさめて演ぜられる狂言又は狂言師のこと。又「あ  
ひ」ともいふ。

**をかぜ 清原雄風 二四〇一—二四六九、寛保元**

—文化六、六十九歳（一説二四〇七—二四七〇、延

享四—文化七、八、二〇、六十四歳）

豊後、岡藩に仕へたが後江戸に出て専ら歌文に身を委  
した。名は藏、字は伯高、崑岡と號し（いつも膝節を  
ゆすぶる癖があつたから人は頗々先生とも呼んだ）。龜  
井道載・橋千蔭・村田春海などと交つて、殊に和歌を以  
て聞えた。奇行と狂態とに色々の逸話のある人で、僧  
坊の飯焚や里正の下僕なども平氣でしてゐたが、江戸  
出府後有名となり諸侯の尊敬を受けた。性粗落にして  
榮利に淡泊で、専ら月花と親しみ又酒を好み大伴旅人  
の讃酒歌十三首を自ら壁間にしてはりつけてゐた。  
その著には古人贈答歌抄三卷・伶野集十二卷・掌中伶  
野集一卷・新撰六帖・雄風家集二卷などがある。

**をぐらのみこ 小倉親王**

「兼明親王」を見よ。

**をぐらひやくにんいつしゆ 小倉百人一首**

「百人一首」を見よ。

**をつじん、越智越人？—二三六二、？—元祿**

一五、三、一四、

名は氏恒、尾張名古屋の産、後、熊本藩士佐分利家の  
養子となる。蕉門十哲の一人で、芭蕉の弟子の中では  
古顔だ。貞享元年冬「春の日」（七部集の一つ）を撰み、  
師翁歿後、美濃の支考が先師を誤つた妄説を唱へたの  
を攻撃して「不猫蛇」を著した。その俳風はさまで深味  
はないが即吟に長じて居た。

美まし思ひ切る時猫の戀

陽炎の抱きつけば我が衣かな

山寺に米搗くほどの月夜かな

行燈の煤けて寒き雪のくれ

電や越人と二字書く間なき

**をにたけ 感和亭鬼武？**

元、名橋氏、後、一橋家の臣前野某の名跡をつぎ御勘  
定役となり、淺草寺裏姥ヶ池の邊に住み後新寺町に移  
つたが家督は早くその聲に譲り、山東京傳に入門して  
戲作道に入り、文化年間馬琴の紹介で草双紙を出し、  
爾後毎春新作を發表した。自來也物語十卷は彼の出世  
作で、又唯一世に行はれた作である（大阪では之を歌